迷子なのに行き当たりばったり

くろいーぬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
迷子なのに行き当たりばったり

【Ｎコード】
Ｎ２９９１Ｎ

【作者名】
くろいーぬ

【あらすじ】
基本のんきでマイペースな姉弟が、森で迷って異世界トリップ。綺麗系でおとなしそうだが暴力的な姉と、腹黒天使だが姉には絶対服従な弟が、運と出会った人々のご好意によって何とか生き延びるお話。たまに命を狙われたり、恋をしたり。

1・初迷子（前書き）

弟視点

1・初迷子

皆さん、こんにちは。
僕はリョウタ・アーロン１４歳です。
姉のトモ・アーロン１７歳と一緒に夏休みに祖父の家（アメリカの北部の田舎）に遊びに来ています。
今日は近所の森で、

「これ一杯にベリーを摘んでこい」

と父にバスケットを渡されてせっせと採取していました。

が？

「リョータ、なんか寒くない？」

初のベリー狩り～と機嫌よく作業していた姉が僕のシャツをひっぱります。

「急に暗くなったし、奥に来ちゃったかな」

言われてみれば、霧が出て冷気が漂っていて、風邪を引きそうな気温になっています。このままでは姉からの八つ当り確定です！

「沢山とれたし、もう帰ろうか、トモ」

もちろん結構な重さのバスケットは僕が持っていますから、姉はサクサク進んで行ってしまいます。年長者として心配とか保護欲とか

そういうのはないんですかね？

「なにこれーっ！！」

僕が心の中だけで愚痴をこぼしていると、普段はテンションが低くて冷静なはずの、姉の絶叫がきこえました。

バスケットを抱えなおして姉のそばまで行くと、僕もさすがに驚きました。

「どこ、ここは」

森を抜けると、なんということでしょう、そこには石造りのお城のような、砦のような、どでかい建築物がそびえていたのです！

・・・道を間違えたんだ、きっと。そうに違いない。

2・第一村人（前書き）

姉視点

2・第一村人

弟と森でベリー狩りをしてたら、寒いし暗いし飽きてきたんで霧の中をなんとか戻った、と思ったのに。

知らない道、見たこともない石垣、視線をあげるとヨーロッパ城物語、みたいな建物。
アメリカだよね？

たまにはかわいい弟の意見も聞いてあげようかな。勉強はできるし、おじいちゃん達から情報を仕入れているかもしれないしね！

「リョータ、私達迷ったかな？ここ何かのテーマパークとかホテルとかかな？」

あくまで優しく、聞いてやったのに。
ため息をついて、美少年顔に憂いをにじませて奴は言った。

「どうみても違うでしょ。土の色も。木の葉の色からすると季節も違う気がするよ。さっき寒いって言ってたよね・・・」

あ～あ～まだなにかぶつぶつ言ってるけど聞こえません。認めませーん。
道の向こうに馬？にのった人が見えてきたけどあれはそう、きっとコスプレ。

耳をふさいでイヤイヤしていると、弟も馬の人に気付いて、横に立って眺めている。
弟のくせに、私より背が高い。私は１６８センチで奴は１７２セン

チだ。父方はバカでかい家系なのでもっとのびるだろう。
そ・し・て顔もかわいい。学校ではもてまくり、道を歩けばナンパ、スカウト。くせのある明るい茶髪に、ぱっちりしてまつげバシバシの目。色は微妙に色が混ざった灰色。この不思議色はおじいちゃんゆずりだと判明した。
対して私はというと、まっすぐなコーヒー色の髪、切れ長で紅茶色の目。はっきり言ってきつそうに見えるだろう、うん。冷静な自己分析。
対応は弟に任せよう。

ゆっくり進んできた馬の人は、まだ若い、２０代前半の男の人。そしてもう１人？一騎？後ろからは３０代くらいの人。
うーん、白人、金髪を短くして健康的に日焼けしていて、たまに周囲に目をやっている。白っぽいプルオーバーの上からお揃いの短めの青い上着を着て茶色のパンツに黒のブーツ。そして腰には剣。ソード。ロングな。あぶねぇな、おい。

「リョータ、彼らはスポーツ選手で休日に騎士のコスプレをたしなんでいるのかしら」

「違うってば。いい加減受け入れようよ、トモ。異世界だよ、ファンタジーだよトリップだよ。それにしても、第１村人はもっと一般的な、優しそうな老人がよかったなあ。あんなんじゃ怖すぎ。下手な事言えないよね。頼むから喧嘩売らないでね。黙ってたら安全に見えるから」

いつもより弟がきつい気がする。そしてさらっと失礼な事を言われた気がする！
姉としてちょっとたしなめようと拳を握った時、いつの間にか近づ

いていた馬の二人が目の前で止まった。

「やあ、君たち変わった服を着ているね。子供だけで旅をしているの？」

若いほうの人が、優しげに話し掛けてきた。

ん？日本語？英語？どちらでもないような気がするのに、意味はわかる。

異世界トリップの親切補正か？

3・親切（前書き）

弟視点

3・親切

見たことのない砦。色の違う地面。わさわさしていたはずの木々は冷たい風に吹かれて木の葉を落としていく・・・

あぁ、ここは違うんだ。

ただ森を歩いていただけなのに。気が付いたら異世界にいました、なんて。もっとこう、光に包まれて、とか車に撥ねられて、とか、出迎えの人たちが『勇者様！』と興奮してるとか！何かないんですかね？

日常の延長すぎて意味がわかりません。
姉もうなっています。表情があまり変わらないから、ショックなのか喜んでるのかわかってないのか・・・

姉の視線の先に現実がやってくるのが見えました。
二騎の騎士。鎧は着ていないけど、近付くにつれて、帯剣しているのが見えました。馬には小さい盾がさげてあって、小型の弓矢も見えます。道をゆっくり進みながら警戒しているので、巡回の人でしょうか。

第一村人という記念すべき出会いなのに、恐怖のほうが勝っています。姉は彼らをコスプレというけど、あの完成度でコスプレだったら逆に怖いです。頼むからしばらく黙ってて下さい姉よ。
あ　なんだか姉から殺気が漂ってきたような～

「やあ、君たち変わった服を着ているね。子供だけで旅をしているの？」

あ、英語？まじでコスプレですか？

「こんにちは？・・僕達は旅人ではないんです。森でベリーを摘んでたら迷ったというか・・・こ、ここはどこですか？アメリカではないんでしょうねぇ？」

お兄さんが優しそうなので思い切って聞いてみましたよ！聞き方がストレートすぎたか、姉の握りこぶしが震えているのは気のせいでしょう。

「ん？迷子？アメリカというのは聞いたことがないけど。町の名前かな。そこに行きたいの？
先輩知ってますか？」
「いや、知らんな。だが今日はもう遅い、街道には野盗も出るし、森の獣も危険だ。明日にしたらどうだ」

うーん、おじさんも優しいですね。

言葉は通じるけど、やはりここは世界が違う。
世界が違うからアメリカは探せません。召喚された感じもないから帰り方も探しようがない・・・それに野盗に獣って・・所持金０、持っているのはハンカチとバスケットにつまったベリーと、姉のサバイバルナイフ。

あれ?どうしよう。なんか血の気が引いてきました。

「・・リョータ、大丈夫?顔色悪いよ」

珍しく姉が心配してくれました。でもなんと言ったらいいのか、この状況は。

僕達は無言で見つめあいました。

「あ、そうか!迷子だもんね、君たち。行くところがないんだ。んー、じゃあ僕達と来なさいよ」

何事か話し合っていたお兄さんが、にっこにこしながらそう言ってくれました。あぁやっぱりいい人だ。子供が困ってたら助けますよね、あなたみたいな人は。姉が黙っててくれたのもよかったですね。

口を開くとろくなことを言わない人だけど、黙って震える（怒りに）姿は、困惑する繊細な知的美人って感じで受けがよいのです。

今日のお宿はどうやら確保できたようです。

しかし、安全に暮らせて、姉に変な虫がつかないようにするにはじっくり考えなくてはいけませんね。まだまだ不安です。

3・親切（後書き）

読んで下さってありがとうございます。
もう少し人が増えたら登場人物紹介をつくろうと思います。

４・お人好し（改）（前書き）

書きなおしたらずっとパイク視点になりました

4・お人好し（改）

今日の巡回は、尊敬するボッシュ先輩との組。
隊長を抜かすと一番の剣の腕、でもそれを鼻にかけない謙虚な姿勢、というか、面倒くさがり。噂では、通常通り１５歳で見習い騎士になった後数年で特別任務を果たして、１０代で小隊長になったとか。異国の魔導士の知り合いがいるとか。魔導士って何かよく知らないけど。

この田舎の砦にはもったいない人材だと思う。僕らを統括する隊長にしたって。
都で、砦は『人材の墓場』と呼ばれている。先輩によると、戦争中とか内乱とかの緊急時に役立つような人が集まっているらしい。というか、普段はやる気が見えないんだよねぇ。だから上の人に睨まれて、ここに来てるんだ。

僕はちょっと違うけど。
風が涼しくなってきて、巡回も楽なのでつい物思いに耽ってしまう。

「見ろ、あそこの二人、話聞いとくか」

ぼんやりして気が付くのが遅れたけど、森の方から子供らしき二人連れが歩いて来て、開けた街道で立ち止まったのが見えた。

森から出てきた！

綺麗な顔の二人で、おそらく血縁者。二人とも10代半ばに見えるけど、この辺りの子供に比べると随分痩せている。だけど着ているものはきちんとしているし、清潔、どちらかというと上流階級の子供のように、背筋を伸ばして静かに立っていた。

「やあ、君たち変わった服を着ているね。子供だけで旅をしているの？」

二人は困ったような不安げな顔になっていた。

陽が落ちてきた薄暗い中でもわかる、不思議な服と模様。

艶やかな長い髪の少女は、上下ともやや大きめの男物の服を着て、上着の下には黒い柔らかそうな…下着？丸や妙な形の模様が鮮やかな色で染めてある。

一瞬、綺麗な、とろけるような飴色の目と目が合ってしまって、胸元をじっと見ていたのに気付いた。全然そんないやらしい気持ちではないんだよ？あ、履物も変わっている。

先は丸く、くるぶしよりもやや上までの長さで、真ん中を紐で編むように縛ってある。材質は固そうで、深い暗めの赤に見えた。

もう一人は彼女より少し背が高い。柔らかそうな茶色の髪はふわりと顔のまわりにかかっていて、鉱石のような、色の混ざった灰色っぽい目。可愛らしい顔だけど少年のようだ。

似たような深緑の上着に、濃紺のややぴったりしたズボン、この子も黒い下着を着ていて、白や銀の四角を組み合わせた模様――見てると絵が動くような不思議な模様が描かれていた。

この子の履物は黒で、ふくらはぎ辺りの長さで金属の飾りが付いている。大きな籠を持っていて、中には小さな赤や紫の木の実がたくさん入っていた。

どこをどう見てもこの辺の子じゃないし、僕が知る近隣国でもこんな服はない。

少し話したかぎりでは、ここがどこかも解っていないようだった。

僕が話している間、いつでも剣を抜けるように離れて見ていた先輩が目配せしてきた。

「これでは埒があかない。あいつらを連れて行くぞ」

「え、いいんですか」

「もう日が暮れる。あいつらの素性が何にせよ、置いとくわけにいかんだろう」

先輩は基本的に他人には構わないけど、親切なんだよね。照れるから言わないけど。

寄り添うように、疲れた顔で不安そうに立つ二人。

簡単に自己紹介をして、恐がらせないように誘う。

事情は解らないけど『森』から出てきてこの地に立った以上、僕らは君たちを保護する。まぁ、普通か。迷子の子供は可哀相だもの。

初めての仕事らしい仕事じゃないかな？

5・現実　あれこれ（前書き）

弟　姉　弟　と視点がかわります

5・現実　あれこれ

パイクさん達のお世話になることを決めた僕達は、見回りの続きをする二人の馬の後をついて歩き、砦方面に向かいました。

外から見たところ、森に面した砦はヨーロッパの古い城の様に塀で囲まれた中にいくつかの低い建物が点在し、その奥にどっしりと存在感たっぷりに建っています。
お城、というよりはやはり武骨な砦、でっかい四角い石をがんがん積み重ねてつくっているようです。まわりの建物はドイツ風で統一感があってかわいく見えます。

まぁ僕が好きなのは日本のお城ですけど！父と語ってたら止まらなくて、姉の手によって強制終了を食らったことがあります！

そんな事を考えながら歩いていると、

パイクさんが時々振り返って

「大丈夫？疲れてない？」

などと申し訳なさそうに聞いてくれます。

任務中だから僕達を乗せてはいけないということらしいのですね。

当然ですね。何かあったら駆け付けなくてはいけないですもんね。
というか僕達こそがその
『何か』じゃないのですか？
やっぱこのお兄さん人が好すぎて心配だなぁ～。抜け目なさそうなボッシュ先輩も任務に戻ったら僕達に興味なんですもん。
そういうお国柄なのかな？

なんて、いい気になってまったり馬のしっぽを見つめていて

不意に背筋が凍るような気がしました。

いきなり捕まったり殺されたりするような、理不尽なこと。僕達の世界の現実でも少なくなくあったこと。

油断してはいけない。忘れてもいけない。識らなくてはならない。

僕達の常識は他者の常識とは限らないのだから。

僕達は何も持たないただの子供。

なんだかちょっと泣きそうになりました。

○　○　○　○

騎士二人組が私達に寝床を提供してくれるということで、付いていくことになった。

近くで見ると馬でけーっ！
長いしっぽをばさばさ振りながら、カポカポ進んでいく。二人は見回り中だから乗せられない、と謝られたけど、いいのよそんな事。

嬉し恥ずかしイケメン騎士と相乗り、どこを掴めばいいのかしら？
体温感じちゃってドキドキ！

などというお約束展開はまだ早いし、そもそも馬がでかすぎて怖い。
あんまり動物好きじゃないし。
弟は犬とか猫とか好きだし好かれるけど、私は敬遠されるんだなー。
一定の距離を置いて観察される感じになって、間合いに入ると逃げちゃう。私の繊細な心はそのたびに傷つくのよ！しっぽとか引っ張ってやろうか・・・。

揺れるしっぽを睨みながら歩いていると、自然に道が目に入る。舗装されていないし石も敷いていないけど、しっかり乾いて踏み固められた道。人や馬、幅からすると馬車なんかも通ってるみたいだ。
へこんだ平行の跡がいくつかある。ワダチ、だっけ。

森のそばでド田舎に見えるけど往来は絶えずあり、二人の話では宿

屋も営業している。けど街という規模ではない。

小説とかだとー・・・近くにダンジョンがあるとか、戦時には重要なポイントだとか、地方領主への牽制だとか、色々考えられるわよね。

なんなんだろ、ここ。

疲れてるし、考えてると暗くなっちゃうな。下手の考え休むに似たりというし。

ちらっと弟を見たら、夕暮れの薄暗い中でもわかる、眉間のしわ。

わあ！そんな顔したら離婚直前の父上そっくりじゃん。

なんだか、なんだか胸が痛い。情緒にとぼしい私だけど、弟にこんな顔して欲しくはない。

・・・訳の解らない状況に、一人で放り込まれなくて良かった、と思ったの。弟が一緒で良かったと、思ってしまった。

いいお姉さんなら、自分だけならよかったと思うべきなのに。

弟にこんな顔させるなんて

姉失格かなぁ

申し訳なくて、何も言えなくて、少しだけ高い位置にある頭に手を伸ばして

久しぶりに弟の頭をなでた

○　○　○　○

涙が出ないように強く瞬きしていると、突然姉が手を伸ばして僕の頭をなでました。

うわ。もしかしてばれた?恥ずかし・・・

「な、に。トモ。急に」

「うん、なんでかリョウタにヨシヨシしなくちゃと思って」

姉は相変わらず解りづらい単調な喋り方で、でも久しぶりに僕の名前を正式に発音したのです。

ホッとして、それからむず痒いような恥ずかしさが出てきて・・・騎士さんに見られなくて良かったです・・・子供扱いはやめて欲しいなぁ、とか姉がいてくれてよかったなぁとか矛盾する思いで溢れそうになってしまって、笑ってごまかしました。

5・現実　あれこれ（後書き）

もっと早くから考えたんですが、天谷すげーっっ！と頭からスコーンと消え去りました。
自分は真ん中なんで微妙に両方の気持ちがわかり、完全には理解できません。
兄弟の真ん中はまた少し立場が違うようで。

次の更新は数日あきます

見てくださってありがとうございました。

6・かわいいのはもふもふ？それともお姉さん？（前書き）

弟→姉　視点変更

6・かわいいのはもふもふ？それともお姉さん？

何となく話す気が失せて、僕達は砦の中まで無言で歩きました。

騎士の二人は僕らが疲れ切っていると思ったようで、ボッシュさんが報告に行って、パイクさんが部屋に案内してくれることになりました。

「まぁ、野宿するよりは幾らかましだろう。君達の事情は明日聞くことにする。ゆっくりできるとよいな」

別れ際にボッシュさんが渋い声と味のある表情で言ったのが気になります。

ゆっくり休め、じゃなく、できるとよいな？

希望的観測。そんなにぼろい部屋なんでしょうか。こちらの生活水準や衛生状態がどうなっているのかわからないので、不安です。

ぱっと見は中世ヨーロッパ的なんですが・・・だったら一週間生きられる自信はないですね！除菌大国でトイレ先進国の日本で育ったんですから・・・

病気になるか、キレた姉にどうにかされて異世界に骨を埋めることになりそうです。

「さあ、ここだよ～。寒かっただろう、入って。」

砦の一階部分をしばらく歩いて、等間隔にドアの並ぶ一角にたどり

着きました。
パイクさんはその中でも一番端の部屋へ僕らを招き入れてくれます。

「寝台は二つあるからね、遠慮なく使って。こっちの物入れに上掛けがあるから寒かったら重ねてね。後で水を汲んでくるから手足を洗うといいよ。それから軽く食べるものをもらって来るから待っててね。
う～ん・・・そんなところかな？あ、こいつらは構わなくていいからね」

パイクさんはものすごく世話をし慣れてる様子で、窓を少しあけて換気したりベッドのシーツをピンと伸ばしたり横にあるベンチチェストのようなものを開けて薄い布団を引っ張って見せたり部屋の真ん中にあった小さなテーブルと椅子を隅に移動させたりとテキパキ動きながら説明してくれました。
腰にカチャカチャいう長剣がなければ、高級ホテルの従業員のようですよ。職業間違えていませんか、パイクさん。

「・・・あの、こいつらとおっしゃるこれらは何ですか？」

ずっと黙って説明を聞いていた姉が、部屋の中に居た何かをちらちら見ながら言いました。

テーブルの上にある木の籠に入った鳥はわかるとして
大形犬の大きさをした何かは、灰色の長い毛で覆われていて、毛の間からすっとした鼻面が見えてます。耳？はウサギのロップイヤー

とかいう種に似て長く下向き。四肢は爪があって指は四本にわかれているようです。後ろが見えないけどきっとしっぽもあるはず。さらさらでもふもふで、かわいい・・・！誰もいなかったら飛び付いてぎゅーっとしたいですよ！

もう一匹は・・・形はトカゲとかイグアナとかのように胴が長細くて足は短く、胴部分よりも長いしっぽ。顔も爬虫類系。なのにその体はふわっふわの黄色い毛で覆われています！ナニコレ！全体的に短い毛で背中だけ長くなっています。

ここは天国でしょうか？

にやけるの抑えるのに一苦労です。

「こいつらはねぇ、あの森で拾ってきたんだよ。変わってるでしょう？おとなしくて噛んだりしないから、仲良くしてやってね」

おや、変わっている、ということはこの辺の生きものじゃないのでしょうか？

パイクさんと語り合いたいところですが、彼は軽く片手をあげて出ていってしまいました。

後に残された僕達。姉は灰色のもふもふと睨み合うように立ち尽くし、僕はずっと持っていたバスケットをテーブルに置きました。涼しいから腐らせずにすんで良かったけど、どう始末を付けましょう？宿代代わりにパイクさんに進呈しましょうか。

「トモ、ちょっと楽にしたら？ブーツ履きっぱなしで足痛くない？」
「や、この灰色の毛玉が・・・何でこれこっち見てるの？」

あまり動物相手が得意ではない姉は、どうしていいかわからない様子で動きません。

「じっと見てるからだよ。気にしないでベッドの上にでも座ったら？緊張が伝わってる。多分知らんぷりしてたら向こうも自然にするよ。パイクさんも構わないでいいって言ってたし」

「そういえばそうね」

姉はようやく頷くと、そっと移動してベッドに腰掛けました。ため息をついてブーツを脱いで、ついでに靴下も脱ぎ、マッサージをはじめます。

灰色のもふもふはその辺りで姉の観察を中止して、壁ぎわにそって横たわりました。動作は犬っぽいです。
黄色のふわふわは僕達には全く興味を示さず、窓脇にべったりと腹ばいになって微動だにしません。寝てるのかも？

僕ももう一つのベッドに座ってブーツを脱いでいるとドアがノックされ、すぐに開きました。

「よお、どうだ」

パイクさんかと思いきや、入ってきたのはボッシュさんと、女の人でした。

ボッシュさんは部屋の隅から大きなたらいのようなものを引っ張りだして、片手に持っていた巨大なピッチャーから水を注ぎ入れ、肩に掛けていた大きなタオルを一枚ずつ僕達に投げ渡してくれました。

「これで、顔洗うなり体拭くなりしてくれ」

タオルは使いふるされてはいるものの、きちんと洗濯して畳まれていたようで、清潔感があります。ああよかった。

「こんなものしかないけれど、暖まるから食べてね」

女の人はにっこりと微笑みながら僕達を交互に見て、お盆を姉に渡しました。お盆にはパンが二つと、湯気のたつスープのお皿がのっていました。

おいしそう！

女の人は　長い赤褐色の髪を緩い三つ編みにして背中に垂らしていて、ぱっちりした青い目の癒し系美人さんです。年は２０代後半でしょうか。ちょっとぽっちゃりしてシンプルなワンピース姿がかわいいです。

保健室の先生っぽいかな～などと思いながらぼんやり見ていると、ボッシュさんが咳払いをしました。

おや？

○　○　○　○

パイクさんに案内してもらった部屋は、シンプルで物があまり置いてない部屋だった。
妙な生きものが居なければ最高なんだけど。
鳥は籠に入ってるからいいとして、大きな灰色の犬っぽい毛玉と、３０センチくらいの黄色い毛の掃除用品みたいな生きものはどうしたらいいの？

パイクさんは爽やかに去ってしまった。
弟が無視したらよいというので、考えないことにしよう。どうせ奴は『もふもふしたい！』とか思っているに違いない。

しばらく足のツボ押しなどをしていると、ボッシュさんと女の人が入ってきた。
たらいに水を入れてくれたので、少しはさっぱりできるかな！
女の人は食べ物を運んでくれた。メイドさんかな～かわいい～。もてそうな人だわ。

弟がでれっとして見ているので、ボッシュさんが咳払いをした？
おやおや？

「ボッシュさん水をありがとうございます。お姉さん、お食事ありがたくいただきますね。私はトモで、こっちは弟のリョータです」
「はじめまして、トモ、リョータ。私はジルよ。パイクは報告をしてから来るそうよ」

ジルさんはしっとりした声でそう言った。ボッシュさんは弟を見ていてちょっと反応にぶし。

なんとなく当たり障りのない話をしながらパンとスープを食べていると、パイクさんが戻ってきた。

「先輩、ジルさん、手伝わせてしまってすいませんでした！隊長にまた拾ってきたのかって言われちゃって・・・」
「いつものことだからな」「慣れてるから平気よ」

お人好しパイクさんはよく生きものを拾うらしい。この部屋の先住民や私達以外にも拾ったのかも。この人達にとって私達って犬や猫を拾う感覚なわけ？

私がちょっと微妙な感慨に耽っていると、食事を終えた弟が立ち上がってテーブルからバスケットを三人に向かって差し出した。

「これ良かったら皆さんで食べてください。お世話になりっぱなしで、申し訳ありません」

バスケットに詰まったベリーを見て、ジルさんが嬉しそうに受け取った。

「甘くておいしいし、女性の美容にもいいんですよ」「まあ、本当？」

にこにこ。にこにこ。

弟とジルさんが微笑みあっているのを見て、ボッシュさんは窓辺の黄色い化学モップ的な何かを握って奇妙な鳴き声を響かせ、パイクさんはちょっとわざとらしく大きな声で

「うわぁ、全部いいの？おいしそうだねぇ！ジルさん重いから僕が持ちますよ」

と　言ってジルさんからバスケットを取り上げた。

やばい。これはジルさんを囲む逆ハーレムか！？

ちょっと面白い・・・

二人きりになって、顔や体を拭いてからベッドに横になった時に、弟に聞いてみた。

「ジルさんかわいいね」

「そうだね。保健室の先生って感じがしない？」

「音楽だと思うよ私は。保健の先生はもっとこうエロいのがいい」

「・・・まぁいいけど。それより二人の反応が面白かったね」
「あんたもしかしてわざとやってたの？」
「ジルさんてニブくて絶対気が付いてないよね」
「大人をからかっちゃダメよ。武器持ってるし」
「年上は対象外。頭が上がらないのはトモだけで精一杯だよ。焚き付けといたからあの二人がトモにちょっかい掛けてくるのはなさそうだよね。安心安心」

後半むにゃむにゃと何言ったか聞きとれなかったので弟を見たら、仰向けに寝たお腹の上に黄色いやつをのっけていたので、光の速さで見なかったことにした。
構うなって言ったくせに。
さっきボッシュさんに握られてギュエェーとか鳴いてたから、自分も触りたくなったんだろうか？

かわいいお姉さんよりも毛玉か。

ちょっと弟の将来に不安を覚えつつ、いつのまにか眠ってしまった。

6・かわいいのはもふもふ？それともお姉さん？（後書き）

ちょっとぐだぐだと長くなりました

読んでくださってありがとうございました

登場人物紹介（前書き）

まとめてみました

登場人物紹介

□トモ・アーロン（姉）
１７歳。
コーヒー色の髪、紅茶色の目（本人談）１６８センチ４７キロの痩せ形で知的美人（弟談）
基本的に他人と距離を置くタイプで、マイペースを意図的に貫く。
人を観察してあれこれ想像するのが好き
１０年合気道を習っているが素人より強い程度。弟には鉄拳制裁。
動物が苦手。

△リョウタ・アーロン（弟）　１４歳
明るい茶色の髪、灰色のなかに緑や茶色の混ざった目１７２センチ５１キロ
表向き人当たりがよい。たまに女の子に間違えられるので自分の顔は好きではないが、利用する。
姉がちょっと変わっているので自分がしっかりしないといけない、と思っているが、逆らえない。年上女性には弱い反面、男には容赦ない。
勉強はできるが運動はそこそこ。動物が大好き。猫布団で寝たいとか本気で思っている。

◇パイク　２２歳
明るい金髪　若草色の目
１８０センチ　ひょろい
姉弟を拾った人。お人好しと単純さをリョウタに見込まれた。動物

大好き　男女問わず年下を見ると面倒見たくなる
いいとこの出らしく、色々拾ってきても許されている様子。砦の中では新人。
ジルに惚れているのがバレバレ。

◎ボッシュ　３２歳
くすんだ金髪　黒い目
顎だけに不精ヒゲ
１８８センチ　細マッチョ
パイクと一緒に姉弟を見つけた人。任務と訓練は真面目にこなすがそれ以外は無頓着。砦ではベテランで、とても強い。照れ屋さん。
ジルがちょっと気になっている。

☆ジル　２６歳
１６０センチ　ぽっちゃり
赤褐色の髪　青い目
みんなのアイドル。　砦の食堂に勤めている。この年まで独身なので色々な噂があると同時に独身野郎達が日々狙っている。本人は意に介さず働くのが楽しい。おっとりした性格。

7・はじめての朝（前書き）

姉　ジル　弟　の順です

7・はじめての朝

明け方だ。ピルピルと響く鳥のこえ。
窓からうっすら陽が差し込んでくる。なんだか寒い。
私の部屋にこんな大きな窓あったっけ？
ベッドも硬いし、枕も日本から持ってきたお気に入りと違う・・・。
陽を避けてごろん、と寝返りをうつと、目を閉じたままの顔にフサフサした毛があたった。
びっくりして目をあけても視界は一面毛で覆われていて、何が何だか・・・？

べろんっ

ぼんやり見ていると、毛玉が動いて、舌が出てきて私の顔を、舐めた？！

「にゃ、なめっ！」

とっさには人間まともに喋れないのね。
仰け反って逃げようとするも、敵は立ち上がってベッドに前脚をかけ、フンフンいいながらベロベロと舐めてくる。家の中になんで獣がいるのっ・・・？

そういえばここは異世界で好青年に拾われて弟と一緒に獣部屋に泊めてもらったんだった！！

一気に覚醒した私は硬い枕を掴んで、弟の方へぶん投げた。

「起きろっ、リョータ、お姉様の危機にのんきに寝てんじゃねぇ！！」

早く起きないと食べられたらどうすんのよ?!すっごい勢いで味見されてるじゃないか〜。

「う〜まだ寝かして・・・寒い・・トモ！大丈夫?」

寝呆けながらもようやく気付いた弟が、灰色の毛玉を引き剥がしてくれた。

なんてひどい朝。もうちょっとで動物虐待するところだった。

私の気持ちも知らずに、今度は弟にロックオンした毛玉はワシワシ撫でてもらいながら喜んでいるようだった。弟のベッドの上には、じゃれる一人と一匹を見ながら欠伸する黄色い化学モップ。テーブルの鳥籠からはピルピルと歌声が響いている。

カオス。

誰でもいいからこの状況なんとかしてくれ。

○　○　○　○

今朝はなんだか気分がいいわ。いつも仕事は楽しいけど、単調だから・・・。

騎士のパイクさんが、巡回中に何か拾ってくるのはよくあることだったけど、今回はなんと、かわいい姉弟を拾ってきちゃったのだ！あんまりかわいくて、二人とも女の子かと思ったわ！砦にはむさくるしい男性が多いから、安らぐわ～。

一晩で噂になってるし！

オバサマ方も騎士団も、パイクさんの拾ってきた子供たちが見たくてそわそわしてる。ここは娯楽もないからなぁ・・・仕方ないか。

私はパイクさんとボッシュさんに偶然会って頼まれたから、一番に会えて運がよかったよね！

それにしても人間拾うっておかしいわね。落ちてるようなものじゃないし。変わった服装だから他国の出だろうし・・・捨て子かしら？家出かしら？まさかパイクさんが攫ってきた？そんな訳ないか。

それともあの森の噂通り？

「おはよーう！二人とも起きてる？」

ちょっと考え込んじゃったけど、意味の無いことはやめよう。二人

に朝食を食べさせないとね。

ドアをノックしてからそっと開くと、何とも言えないことになっていた。

姉のトモはベッドの上で一生懸命顔を拭っていて、弟のリョータはパイクさんの拾った動物と一緒になって床を転げ回っている・・・食べられてるんじゃないわよね?巨大な獣に襲われているようにしか見えないんだけど。

「あの～、リョータは大丈夫?二人とも、朝食は食堂で出すから呼びに来たのよ。それと着替えも。それじゃ寒いでしょう」

「ジルさんおはようございます。これは大丈夫です、じゃれているだけだから」

トモが淡々と挨拶して、少し頭を下げる仕草をした。服を渡しながらそっと彼女を観察してみる。

とっても綺麗な子。ちょっと痩せすぎだから、うんとたくさん食べささねば!!

部屋の隅でささっと着替えて、ぶかぶかな服の袖を折って調整している様子は何だか見てはいけないものを見ているような気がして、どきどきするじゃないの!・・・砦の男どもから隠したほうがいいんじゃないかしら～。

「あ～ジルさんおはようございます!」

転がっていたリョータも、ようやく遊ぶのに?飽きて起き上がったから服を渡した。子供は朝から元気ね。

「この食堂、広いけどあんまり人いないですね」

「それは時間が早いのと、交代制で食事にくるから。作るほうも大変だからよ」

二人を案内して食堂に着くと、リョータが楽しそうに辺りを見渡して言った。さっきケラケラ笑って転がっていた子には見えない。年の割りには落ち着いているように見える。

トモの方は黙って居心地悪そうにして、眠そうに目をこすっている。あんまり周りに興味が無いのか人見知りなのか、めったに口を開くことが無い。

「二人とも、食事が済んだらパイクさんが迎えに来るから、それから隊長さんに会ってお話をするそうよ。だから、しっかり食べなさいね!」

トモはますます不機嫌そうな顔になり、反対にリョータは面白そうな顔をして頷いた。

○　○　○　○

今朝の目覚めはエキサイティングでした。

姉の怒号とともに硬い枕をぶつけられて、ちょっと寝呆けながらそっちを見ると灰色もふもふに姉が襲われていました。

犬に起こしてもらうとか、とても幸せだと思うのに本気の殺意を感じたので慌てて引き離して、かわいそうだからガシガシ掻いて僕が相手をしてあげました。

遊んでたら知らないうちにジルさんが来ていて、長袖のプルオーバーを貸してくれたので、ありがたく着替えさせてもらいました。
綿みたいだけどちょっとごわごわした生地の朱色のような服です。
柔軟剤を使わずに洗った感じです。
姉も同じ服で、僕達にはちょっと大きいようです。上から見たら見えるんじゃないだろうか・・・？

砦外の食堂に連れて行かれて、意外にたっぷりとした朝食を出されました。
丸いパンに野菜スープ、薫製のハムなどなど。
僕達、とくに姉は朝あまり食べないので辛そうでしたが、ジルさんは食べなきゃどこへも行かさん、という風情で許してもらえませんでした。
食堂で働いてるらしいから食事を大事にしているのでしょうか。食育とか。

「やあおはよう！よく眠れたかい？ジルさんも、お世話になっています！」

食べ終えてしばらくするとパイクさんがやってきました。相変わらずにこにこ顔で、目線はジルさんに集中しています。よし。

「・・・よく眠れはしましたが、早朝に巨大な毛玉の襲撃をうけました」

機嫌の悪い姉がボソッと呟きましたがパイクさんには聞こえなかったようです。

「やっぱりな。別の部屋がもらえるといいがな」

いつのまにか後ろにボッシュさんが立っていて、僕の頭をポンと叩きながら言いました。昨日の『ゆっくりできるといいな』発言からして予測していたんでしょうねこの人は。

「じゃあ行きましょうか。そろそろいい時間です」

パイクさんに促され、ジルさんに見送られて僕達は改めて砦へ向かいました。

おそらく砦で一番偉いと思われる隊長さんに面会するために。

7・はじめての朝（後書き）

犬に舐められて起きるのはわりとドッキリしました。

読んでくださってありがとうございます。

お気に入りにしていただいてとても嬉しいです。あと恥ずかしい・・・

8・なんて素敵な筋肉（前書き）

弟　姉　弟の順で視点変更です

8・なんて素敵な筋肉

偉い人だから砦の上の方に部屋があると思ったら、中途半端な3階にいらっしゃいました。
最上階とみせかけていきなりボス戦、というフェイントでしょうか。

階段を続けて4階へあがろうとしていた僕達を見て、パイクさんが吹き出しました。

「ふっ、やっぱり、隊長だったら上の階にいると思うよねぇ?隊長は、緊急時に飛び出せるようにって執務室をおろしたんだよ」

緊急時に飛び出す?って、それはつまり・・・

「窓から飛び降りるということですか?」
「どんだけ臨戦態勢なの」

おもわず僕達は顔を見合わせました。そんな恐ろしげな人は遠くから応援するくらいにしたいものです。
普通3階は安全に飛び降りられる階ではありません!足折れますよ!

しかし、これからその人に会って信頼を得なくてはなりません。
戦え!とか言われたらどうしましょう?
ここは砦だから、力仕事とか戦闘とかの物騒なスキルが求められそうですが、はっきり言って皆無です。簡単な護身術程度を教わったくらいですね・・・。
掃除くらいならできるかな

暗澹たる気分で歩いていると、扉の前に騎士が立っている部屋へた

どり着きました。階段には近くないってことは飛び降りる気満々なんですね。
表の騎士さんは上着の色だけが違って緑色。役職などで違えているようですね。
赤褐色の肌に黒っぽい髪と目のラテン系、と表現したくなる、陽気そうな雰囲気の人です。
姉と僕を興味深そうに見てからパイクさんたちに笑いかけて、扉をゴンゴンゴンと叩いて、そのまま開きます。あれ、返事待たないんですか～心の準備が！
部屋の中はシンプルで、本棚二つに重厚な机が一つ、その横には使い込まれた武具がいくつか。
机の真後ろが、例の窓兼緊急出口。

僕達を見て、書類を見ていたその人は立ち上がって机の前に回ってきました。

イメージ通り！

ボッシュさんより少し大きく見えるから１９０センチくらいあるんじゃないでしょうか。
厚い胸板、袖を捲ったぶっとい腕とがっしりした首から上は陽に焼けて、いかにも働き者な様子。白っぽい金髪は短くてピンピン立っていて、水色の目は厳しく透き通って容赦なく睨んで・・・見つめてきます。

居心地悪ぅ・・・

○　○　○　○

パイクさん達に連れられて隊長の執務室に来た。

騎士団の砦警備隊隊長、らしい。

ジルさんによると職務に忠実で部下には気を配るいい上司らしい。
でも窓から飛び出すって。前線の戦士タイプなんだろうか？隊長とかお偉いさんは後方から指示を出すんじゃない？
それともこの砦はそんなに危ない所なのか。

ちょっと不安になりつつ弟を伺うと、あっちも暗い表情になっていた。・・・友達に体育会系が一人もいなかったから、ちゃんと応対できるかな。大丈夫かな。

ちょっと不安になりつつ部屋に通されて、目的の隊長に会った時、私の頭は変な台詞でいっぱいになった。

気を付け！歯を食い縛れ！返事の前後にはサーをつけろ！
男のなかの男
漢とかいておとこと読む。
そんな感じ。

両腕に一人ずつ綺麗なお姉さんをぶら下がらせるのができそうな、そんな腕を組んでこっちをじっと見ている。
あれ？パイクさんたちも見ている？

サー！ちょっと自分の世界に突入してました、サー！

「・・・で？お前達はどこから来たと？」

曖昧に表情をつくって隊長さんを見返すと、ため息混じりにしぶーい声で言われた。

「私達はこの国に来たという覚えはありません。祖父の家の近所の森にいて、歩いていたら、いつの間にかパイクさん達にお会いした場所に出ていたんです」

この国がなんて国か、名前だって知らないけどさ。
これだけはわかる。

「元居たところとは、国どころか世界が違うとしか、申し上げられません」

思わず自信たっぷりに言っちゃったよ。

○　○　○　○

隊長の尋問？が始まって、なぜだか放心していたトモが珍しくまともな対応をしています。

多分、筋肉について考えていたんだと思いますが。

「ふむ、やはりあの森か。パイクのところの妙な獣、あれらも森から現れたな」
「あの生きものは、どれも僕達が居た世界のものでは・・・」

思わず口を出してしまうと隊長がギョロリとこっちを見たので、語尾がフェードアウトしてしまいます。
この人怖いです・・・。

しかし僕の無礼を怒りはせずに、重々しく頷いてくれました。

「どうやらあの森からは、稀に別世界の生物、としか思えない生きものが出るのだ。昔に人も来たという。そして森に入った者が行方知れずになったという記録もある」

えーとそれはつまり不思議な森ですね！
異次元空間なんかがあるんでしょうか？

「じゃあ森に入ったら私達帰れるかもしれない？」

ちょっとだけ嬉しそうに姉が言うと、騎士3人は顔を見合わせました。あれ？

「えっと、さっきリョータが言ったよね?うちの子達は見たことない生きものだって。森に入ればもしかしたら家に帰れるかもしれないけど・・・」

あぁそういうことですね。

「運が悪けりゃ違う世界にご案内されるということだな」

ボッシュさんなんで嬉しそうなんでしょ。他人事だと思って~~ジルさんに振られてしまえばいいんです!

隊長さんは、僕達を元気づけるようにでっかい手で肩を抱いてくれました。

「お前たちは我々が面倒を見る。砦はそのために造られたようなものなのだ。
民が森に入らぬよう。森から来たものを守るよう。・・・街道警備はついでのようなものだ。めったに何も起こらぬのでとても暇だ」

なんか最後にぶっちゃけてるけど、肩にのるごつい手と真剣な眼差しからは、労りとか真心とか、なにか暖かいものを強く感じます。
帰れないのが決定的なってしまったけれど、こんなに無条件に受け入れられるとは思っていませんでした。
この人の目がこんなに優しいとは。父を思い出してほんの少し、泣きました。

8・なんて素敵な筋肉（後書き）

筋肉いいよね細マッチョが好き

隊長の名前出してなかったあぁぁ

番外編・砦の夜（前書き）

ずっとパイク視点です

姉弟が保護された日の夜のことです。

番外編・砦の夜

「森から出た二人組を保護したと聞いたが」

「はい。まだ詳しく調べてはおりませんが、森で迷ってた、と言っております。服装も、形は似ていますが見たことのない素材で。それと、『アメリカ』という地名らしき言葉も」

「ふむ。・・・明日、朝食後に連れてこい。二人はまだ子供らしいが、大丈夫なのか？」

「はい。姉弟ということで１０代半ばから後半、といったところでしょうか・・・とても落ち着いていて礼儀正しく、教育をきちんとうけている様子です。今夜は私の空き部屋に泊めています。動物がいると子供の相手をしてくれるので、安らぐんではないかと。今はボッシュ先輩と食堂のジル嬢が相手をしてくれています」

「・・・あそこか。それは大丈夫なのか・・・？まぁいい、報告ご苦労」

「はい。失礼します」

ああ緊張した。

ラーソン隊長相手はいつも萎縮してしまう。多分本人は普通にしてるだけなんだろうけど。

ボッシュ先輩は僕の目標で憧れてるけど、隊長はなんだか格が違いすぎる。都から来た騎士は、王様よりも王様っぽい、なんて冗談を言っていた。
確かに。

骨身を惜しまず働き、武芸を極め、部下や民、他国の旅人にも気を配る。
王様だったら完璧じゃないか。顔が怖いけど。

砦のある場所は、もとは僕の家の領地だった。ほとんどが森という貧乏な家だけど、おかげで砦にはすんなり着任できた。
七光り万歳。

先祖が残した資料や、証拠品もとい生物。それらによってあの森が監視すべき対象として砦が建てられた。
ほとんどの人は本気にしていなかったし、一般的には事情を明かしてないので、この砦勤務は閑職だった。２０年前に灰色の獣が発見され、僕が８年前に黄色の獣を見つけたことにより、５年前にラーソン隊長が赴任してきた。
僕が正式に砦勤務になったのは２年前で、すぐに森からでてきた鳥を保護した。

まさか人まで出てくるとは思わなかった。ご先祖様疑ってすいませんでした～。

あ、早く行かなきゃ。
姉弟の様子も気になるけどジルさんがいるんだ。

ボッシュ先輩と近づいて欲しくないし、リョータはかわいい顔をしていた。年が離れているから大丈夫だと思うけど、ジルさんは美人な上に優しいからな・・・走っていこう。

番外編・砦の夜（後書き）

無意識に威圧感を醸し出す人いますね。
ラーソン隊長はそんな人です。ちょっとお気の毒。

9・ジルさんのハーレム（前書き）

姉　弟　の順に視点変更です

9・ジルさんのハーレム

すばらしい筋・・いえ、ラーソン隊長との対面からしばらくして、私達は少しだけどお手伝いをするようになっていた。

パイクさんは「予算があるから大丈夫だよ～」といつもの笑顔で言ったけど。

服とか日用品だとか細々したものを揃えてもらって、ただ世話になるというのも居たたまれない。ぶっちゃけ暇だし。

暇があると両親のこととかいいところだったドラマとかやりかけのゲームとか諸々を思い出してしまい、柄にもなくイライラしてしまって。

「トモ、食堂で一緒に働いて欲しいんだけど」

弟が頼んだのか、パイクさんが見るに見兼ねたのか、ある朝ジルさんに言われて食堂に連行された。

エプロンを着せられ、スカーフのような布で髪をまとめられ、くるっと体をまわされた。ちなみに私はパンツスタイル。この辺りでは女性もはかないことはないけど、ワンピース姿が主流だ。私は動きにくいので好きじゃない。

「よし！」
「私は何をすればいいんでしょうか」
よく解らないが勝ち誇ったようなジルさんと、他の職員に囲まれている。

「トモにやってほしいのは奥から出る料理を、カウンターに来る人に渡すこと」
なるほど。それなら簡単。キッチンとカウンターに距離があり、フアーストフード店のようだな、と思っていたシステム。たまにキッチンに手伝いに入ったりしてカウンターの人が不在のことがあったから、その補充なんだね。
やったことないけど。スマイルいるのか？

「経験ないけど、頑張ります」
「一度に来たりして大変な時もあるけど、何かあったらすぐ呼んでね」

ジルさんは皆に飲み物を配ったりテーブルを拭いたりする係。食べに来るのが男ばっかりで大変忙しい。
騎士の人たちは乱暴ではないけど、夜はお酒が許可されてるのでそれなりにはじける。

「あれ、君初めてだね」
「新人さんがいる！」
「どこの子？隠し子？」

誰のだよ。

来る人ほとんどに興味津々の目で見られて疲れる。愛想笑いも引きつった頃、弟とパイクさんが来た。

「トモ、大丈夫？変なことされてない？」

何言ってんのこの子。食堂で何をされるというのか。ここ最近心配させすぎた？

「大丈夫。そっちは」
「楽しいよ～」

弟はパイクさんの助手として、例のペット達の世話や観察をしている。今まではパイクさんの仕事中放置だったらしいので喜んでいるらしい。ちなみにまだ同じ部屋だ。
躾けたので朝のベロベロはなくなった。

「じゃあ、食べてくるね」
パイクさんは挨拶もそこそこに、ジルさんを見つけてふわふわ近寄っていった。

なぜかニヤリとして弟も続く。

客?が途切れたので観察していると、そこのテーブルにはだいたいいつも見掛ける顔が揃っていた。

ボッシュさん（いつの間に?）、パイクさん、隊長室の警備をしているラテン系のレオさん、そして赤毛の長髪（珍しい）で私と似たような紅茶色の目のケラーさん。この人は騎士じゃなく、事務関係の仕事らしい。上着がチュニックみたいな長めので、腰のベルトには剣ではなく筆記用具やポキポキ折れて小さくなる定規等が入った筒をぶら下げている。

これでジルさんのハーレム完成。なんで弟が笑ったかわかった。

他にもジルさん目当てはいるけど、この人達に対抗する覚悟はないらしい。

なかなか強烈なメンバーだわ。

弟は同じテーブルの少し離れた席で食べていた。将来の参考にするんだろうか?勘違いされていじめられなきゃいいけど。

食事をしながらジルさんに話し掛けたり無言の牽制したりと、離れてみてると面白いけど、まわりからは人がいなくなっている。

ジルさんは誰がいいんだろう?どの人にも笑顔で優しい。

もっと仲良くなったら教えてもらおう。

○　○　○　○

帰ることが（多分）出来ないとわかって、姉の機嫌は悪くなる一方でした。僕にしても、強制的に進路変更させられた現状はとても不愉快で不安で、この年で胃痛に悩まされることになってしまいました。

僕にとってはかわいいもふもふ達に囲まれているのは癒しであったのが、姉にとっては苦痛でしかなく、このままだと何かされるんじゃないかという予感がしてきたのです。ゾクっと。

そこで動物の様子を見に来たパイクさんに、どこかで働かせてもらえるように頼んでみることにしました。

「パイクさん、お願いがあるんです。僕達をどこかで働かせていただけないでしょうか？」

「うーん、そうは言っても丁重に扱うようにって言われてるし、予算が組まれてるから君らにもっと贅沢だってさせてあげられるよ」

なにげにすごい事聞きましたけど、僕達はどちらかというと貧しいのに慣れているから、至れり尽くせりは逆に嫌なんですよ。

「そういう事ではなく、僕達は受けた恩はきっちり返すように躾けられまして、今の状態は心苦しいのですよ。非力で世間知らずなので大したことは出来ませんが・・・。それに、じっとしていると故郷が思い出されて」

ここで俯いてため息～。

「あ、あぁそうだね、ごめんよ。立派なご家庭だったんだね」

そうでもないです。

「あ、そう言えば、ジルさんが食堂の手が足りないとおっしゃってましたね。彼女がいれば姉も働きやすいかもしれません」

「ジルさん・・・」

パイクさんは僕の顔を見ながら長考に入りました。

「そうだね、トモは食堂にお願いしようかな。リョータには、別の仕事を頼みたい」

チッ。どんだけベタ惚れなんですか。興味無いんだけどな～。姉を見張れないじゃないですか。

「僕の仕事というのは？」

「うちの子達の世話と観察をして欲しい。僕は警備の仕事があるから殆ど時間がとれないんだ」

うわーうわー！トモごめん僕はこっちに行かずにはいられない！！

「じゃあ明日からね」

翌朝、姉はジルさんに連れていかれました。
僕はもふもふの採寸をしたり撫でたりして楽しみました！

「よく懐いたねぇ！頼りにしてるよリョータ。
じゃ、食堂にいこう」

「これが今日のメニュー。おいしいよ」

姉は疲れてはいるものの、上手くやっているようでした。やっぱり若い男が多いので心配です。

パイクさんがいつものようにジルさん狙い御一行様のテーブルに向かったので、僕もついていきます。

「みなさんお疲れさまです・・・ジルさん、今日のワンピースも素敵ですね」

一番若いパイクさんは丁寧に挨拶してから座ります。ジルさんの前だとキラキラ度がアップして、見えないしっぽが振られている気がします。

ボッシュさんは軽く頷き、僕に視線を移してニヤっとしました。

「リョータも働きだしたらしいな。しっかりやれよ」
大人の対応です。少し離れて座ったのがよかったのでしょうか。いつもながらすかしてますね。

「あぁ、新顔な、この前隊長室で会った。姉ちゃんはしっかり者のジルが面倒みるから安心だな」

さり気なくジルさんを誉めるレオさん。この人はシャープな雰囲気がボッシュさんに似ているけど、陽気な色気がダダもれでとてもももてるらしい。男くさい人がもてる国だそうですよ！僕だって年をとればきっと・・・。

「ジルは只でさえ忙しいのに、あまり世話をかけるなよ」

ちょっとパイクさんに釘をさすのはケラーさん。文官で、僕達に関する書類を整えたり戸籍のようなものを申請してくれた人です。やせ形で眼鏡がきっと似合う、日本だと人気に違いない美形です。目の色や表情が姉に似てます・・・きっとツンデレですね。

ジルさんは誰を選ぶんだろう。
それぞれに優しく丁寧に返事をしたり微笑みかけたりするこれが、計算だったら目茶苦茶怖いですよね。

「トモはよくやってくれてるわ。リョータも無理しないで？あと、もっと食べないと大きくなれないわよ」

あんまり構わないで～視線が四方から刺さります！

ちらっとカウンターの姉を見ると、こっちを心配そうに見てたんで手を振りました。

「おぉ、笑った」

珍しくにっこり笑うのでざわめきが！しまったまだ残ってる奴いたんですね！
このテーブルから発生したブリザードで粗方退散してたのに。

ああ、胃が痛い。これから毎日食事時も気を抜けません。

9・ジルさんのハーレム（後書き）

私のお気に入りはボッシュさんですよ！

読んでくださってありがとうございます。

１０・痴漢退治は正義です（前書き）

弟　ジル　姉　弟の順に視点変更です

１０・痴漢退治は正義です

昼食前の穏やかな時間。
仕事にも慣れて、今日のメニューは何かな～とか、今日のジルさん狙い御一行様は誰がどう出てくるかな、とか予測しながら井戸で水を汲みます。もふ達の飲み水１日２回。

初めはツルベ？がうまく扱えずに少しずつしか汲めなかったのが、大分上達しました。が、面倒なのでポンプについてケラーさんに構造を解るところだけ説明しておいたので、いつかきっと実現するでしょう。鍛冶屋さんが頑張れば。

冬に近付き水が冷たいのでこぼさないように気を付けて大きなボウルに移していると、なんだか砦が騒つき始めました。

「リョータ！それは置いといて、食堂に行け」

少し慌てたようにボッシュさんが早足で通り過ぎながら言いました。他にも３人の騎士。この人が慌てるなんてヤバい事態に違いないです！

「何があったんですか？」
「囚人が２人逃げた。食堂の奴らと中で待機！」

振り向かずに、最後は怒鳴るようにして行ってしまいました。囚人

て。そんなのいたんだ。凶悪犯？
とりあえず走ります！

「トモ！居ますかっ？！」

ぜぇぜぇしながら着くと、奥からコックのおじさんが出てきました。
何のんびりしてるんですか？

「どうかしたのか？ジルと裏で卵回収してるよ」

あ～もう間が悪いなぁ。
囚人のことを伝えようとしたら、緑ジャケットの騎士が走り込んできました。
この人に説明は任せましょう。裏に急ぎます。

○　○　○　○

今日も寒いけど、天気がよいので鳥も元気。籠を持ってトモと一緒にあちこちの卵を回収中！
砦全員分はないので、卵は療養食に使われる。元気な人は肉食べりゃいいもの。
トモは弟と違って生きものが苦手らしく、いつもびくびくしながら集めている。その姿はなんかこぅかわいくて、普段より格段に弱々しくて、男共がいつも嫌がっていた卵集めに行きたがる。

でも。
リョータに頼まれてるので阻止。色んな情報と交換でね。どうしてあの子は騎士さん達の恋愛事情に詳しいのかな。おかげで数少ない女性陣は話のネタに事欠かない。

ちょっと思い出し笑いなぞしていると、リョータの姿が目に入った。

「あら、どうしたの?心配で見に来た?」

「違います!砦から、囚人が逃げ出したので、取りあえず、食堂内で、待機しろって」

走って来てくれたのか、肩で息をしながら言う。
なんてこと。

私達はすぐに戻ることにした。

「女ぁっ!止まれ!」
「ぅわ?!」

低い声と小さな悲鳴、続いて何かが倒れる音。
ぎょっとして後ろを振り向くと、息も絶え絶えで後ろから来ていたはずのリョータが地面に倒され、彼の背をまたいで立ち、首に手を掛けた状態のみすぼらしい男。
ぼさぼさの髪、伸びた髭、簡素な茶色いシャツとズボン、裸足・・・

囚人!!

どうしようどうしようどうしよう??というかリョータよ?男の子よねぇ?どうしよう!

「動くなよ、お前等は人質だ。・・・お楽しみもな」

そう言って気持ち悪い笑い声をあげて、倒れているリョータを引き起こそうとする男。それを、地を這うような恐ろしい声が遮った。

「リョータを離せこの変態野郎」

抑揚のないその声がトモから聞こえた、と思った時には彼女はすごい勢いで走っていて、その勢いのまま男を蹴った。
弧を描いたトモの細い足はきれいにその爪先が男のおしりの、そうね、ちょうど真ん中にめり込んだわ!

男は何かまた気持ち悪い声をあげて飛び上がり、その隙にリョータが転がって逃げたので、私は駆け寄って抱き起こした。

「しっかりして、もう大丈夫よ」

どこか殴られたのか、顔をしかめてひどく青ざめている。

「僕、は平気。それよりトモを・・・」

そうだ!勇気ある行動でリョータは助かったけど、今度はトモが危

険じゃない？

「だ、誰かーっ！囚人がいましたよー！」

とりあえず大声をあげてみる。早く誰か来て！

リョータが何か呟いたのと男が罵声をあげたのはほぼ同時だった。
聞くに堪えない台詞を言って、トモに掴み掛かる男。あぁもう間に合わない、と思った。

「ぐえっ」

男が伸ばした手をなぜかトモが掴んで動いたと思ったら、男の体は地面に叩きつけられた！
はい？

○　○　○　○

ジルさんと卵集めをしてたら弟がやって来て、囚人が逃げたから、と避難していたら。
弟が捕まった。
地面に押し倒されている？ド変態か！ゲイに偏見はないけどそれは合意の上の場合だっ！いきなり襲うやつがあるか！

とりあえずスチール入りのトゥーキックをかましてみた。サッカーの要領で。

「この、小娘が・・・」

しぶとく立ち上がって今度は私に襲い掛かってきた。

腕をのばして走ってきたその姿はゾンビか。

変な突っ込みが浮かんだけど、とっさに手首をつかめた。

「ぐえっ」

小手返し。うわー当然だけど初めて実戦で決まった。試合でもこんなに綺麗にできたことない。

「ぐ、このぉ」

受け身もしてないのにまだ動く。怖い。というか不愉快。弟とジルさんを守らねば。

ダメージの残ってるうちにね。

○　○　○　○

息苦しくて何が何だか解らないうちに、横からすごい力で突き倒され、どうやら女に間違えられて襲われたようだ、と理解した時には

解放されてました。

「しっかり！」

ジルさんの必死な声。

助けを呼ぶ声。

いや、それよりも、そろそろトモを止めたほうがいいんですけど、

と言いたいのに声が出ませんでした。

首を絞めたからですよ。

あなたがひどい目にあうのは自業自得です。

さっきまで不愉快なほど強気で邪悪だった囚人は、今や姉の足元で

哀れな悲鳴をあげています。

確かこんな仏像？見たことあります。

「これは・・・一体」

ガチャッという音で、いつの間にか騎士が駆け付けていたのに気付

きました。

いつから見てたのかな？

ボッシュさんが傍に跪いて僕に手を伸ばして起こしてくれます。ジ

ルさんから離したいだけかもしれませんが。

「怪我したのか？」

「頭打っただけです」

囚人を騎士に引き渡してこっちに来た姉を、ジルさんはうっとりと見つめ、ボッシュさんはこれまた珍しく真面目な顔で見ています。

「トモ、俺にはあいつをお前が投げ飛ばしたように見えたんだが」
「そうよ、すごく格好よかったわ！」

「あ、はい。うまくいきました」

しれっとした表情で返す姉に、ボッシュさんは苦笑しました。

ちょっとボッシュさん姉に鞍替えするんじゃないでしょうね？

「あ～、あんまりやり過ぎるな。お前まで怪我したらどうする」

「痴漢は退治しなきゃ。あぁいうのは再犯するっていうし」

真顔で言う姉にボッシュさんは黙り、ジルさんは激しく頷きます。

「そうよね！ちょんぎってやればよかったわね！破廉恥な上にリョータを女の子と勘違いしたんですよ！」

ジルさんは言わなくていいことまで言ってしまいました。ちらりとボッシュさんの視線が刺さります。あ～やだやだ。

「女って・・・」

周りの騎士から、僕の心情とシンクロしたかのような呟きがもれ、姉はしゃがんで僕の頭にぽん、と手をのせました。

手当てを受けて、いつもより遅くなった食事中に、もう一人の囚人は逃げてすぐあっさり捕まっていたと聞きました。

あの事件のせいで姉が益々目立ってしまいました。

どうしましょう。

１０・痴漢退治は正義です（後書き）

ぐだぐだになりました。

姉が蹴を入れるシーンが浮かんだのでできた話です。

二人ともドクターマーチンのブーツです。硬いです。リョータは鉄板無し。

番外編・ボッシュの日記（前書き）

ずっとボッシュ

番外編・ボッシュの日記

巡回警備の時に子供を2人拾った。
ひどく痩せているが着ているものはいい生地を使っている。捨て子や放浪者ではないようだった。

森から迷い出た初めての人間かもしれない。
正体が何にせよ、悪いものではないだろう。
哀れな子供達だ。

拾ってきた子供はトモとリョータという姉弟だった。トモは少し発音しにくい。

リョータは隊長の前では固まっていた。まぁ大抵初対面の子供は泣くので仕方がない。隊長は実は子供好きなのに。
トモは反対に目が輝いていた。よくわからん。

賢しい弟が姉を守っているようだが、本質的な部分は逆なのかもしれない。

窓を開けて寝たら朝寒かった。

訓練でパイクが失神した。レオがやりすぎた気もするが、それにしても腑甲斐ない。
レオがいい気になるのも癪なので強めにやっといた。最後は外騎士と内騎士で乱闘になった。

いつのまにかトモは食堂で働くようになっていた。無愛想なあの子でやっていけるのか？
リョータはパイクのアレ達の世話らしい。パイクと2人気が合う様で、よく一緒に獣をいじっている。
これでパイクは訓練に時間がとれる。リョータはやたらジルに懐くのでよしとしよう。

トモは若い騎士に人気らしい。
普段無愛想なのに仕事中は頑張って笑うとか
リョータがいると本当の笑顔が見られるとか
華奢なところがいいとか
ジルにちょっかいだすのが減ったのはいいが、アレはまだ子供だぞ？

食堂でジルとリョータと女騎士達で固まって何か騒いでいた。料理を待っている間に眺めていたら、珍しくトモが話し掛けてきた。

リョータは昔から年上女性にもてると。

ただジルに関しては母親のように感じているのかもしれないと。確かに、ジル本人も2人に対して過保護とも言える接し方だ。

年齢的にジルのためには姉にしてやってほしいと思っていると、実の母がらしくなかったからですかね

といつものように表情も変えずに呟くので、思わず頭を撫でてやった。

くすぐったそうな顔で笑う顔は猫のようだった。

後で他の奴らにずるいなどと文句を言われた。なんでだ?

今日は囚人が2人脱走して肝が冷えた。

地方から都へ護送中の罪人で、役人が警備をこっちに任せずに意地を張るからあんな事になった。

愚かな罪人は、あろうことかジル達を襲って人質にとろうとしたらしい。そこでリョータに手を出したところで、トモに逆襲された。

ジルの悲鳴が聞こえて俺達が駆け付けた時、ちょうどトモが男を投

げ飛ばすところだった。手首を掴んだだけでなぜああなるのか？
そしてトモは更に男の股間を踏み躙っていた。あれはもう使い物にならないかもしれない。

リョータは首もとにアザとこめかみ辺りを地面で打って擦り切れていたが、たいしたことはなかった。
会った時に一緒に行ってやればよかった。
ジルによると女に間違えられたらしい。リョータの憮然とした顔を初めて見た。

トモはいたって普段通りだったので、なんとも心配になった。自分も危なかったとわかっているのか？

もう1人のやつは反対方向に逃げていたらしいが、すぐ隊長に捕まったらしい。どちらが不運だったのか？

番外編・ボッシュの日記（後書き）

フラグがたったのか

まだ本人も自覚無し…

気になるのは女性としてか父性のようなものか

番外編・小さな呟き

我がこの国へ来て8年になる。

故郷の森にて木の実を集めていたはずが、いつの間にやら見たこともない森にいた。
食物を探して彷徨っていたところ、森が途絶えて拓けた道に出ていた。

「あっ！ちょっと待って」

適当に歩いていると、背後から声をかけられた。

振り向けば見たこともない生きもの。

後足で立ち、体には毛ではなく別の素材を複雑に纏いわずかな金色の毛は頭部にのみ生えている。
それは瑞々しい草の新芽のような色の目を大きく見開いて、我を見ていた。

「森から出て来たね！うわ本物だ！変わった生きものだなぁ。初めて見たよ！」

無遠慮に前足を伸ばして触れながら、我が思ったのと同じようなこ

とを言う。

我らの出会いはそのようなものだった。

あのパイクという生きものは大きさが変わって長くなった。
我はあれの言うことはわかっているが、我は言葉を発することはできないので、意思の疎通はかなわない。
しかしあれの我を見る目は変わらない。好奇心と喜びに満ちている。

同居している大型の獣とはお互いに意志が通じないが、おとなしいので問題はなかった。

最近、我らの部屋に二足の生きものが二匹来た。
パイクは我らに触れて、

「この子たちを頼むよ」

と言って笑った。

二匹ともおとなしいが、毛の長いほうは視線が危うい気がする。
我を見ては「モップ」というのは、名付けたつもりであろうか？
もう一匹はパイクと似て、我に触れたがる。
親元を離れて不安な子供等のようだ。
髪の短いほうは、我を腹の上へ乗せて眠る。
いつしか我もそれに慣れ、いつも心地よく眠れるようになった。

番外編・小さな呟き（後書き）

パイクにとっては、現代の人が遺蹟でお宝を発掘したような気分だったので、大事にはしているけど名前を付けてかわいがる、という感じではなかったのです。

11・お稽古を始めるのは秋が涼しくていいね（前書き）

弟　姉　で視点変更です

11・お稽古を始めるのは秋が涼しくていいね

不愉快な事件からしばらくの間、居たたまれない日が続きました。

あの後、巡回から戻ったパイクさんは真っ青になって飛んでくるし、ジルさんは仕事の後に寄っておやつを持ってきてくれるし、知らない騎士に声をかけられるし、なんとラーソン隊長まで見舞いに来てくれたのです！

トモは誉められてとても嬉しそうでした。

こんなに、身近な人にストレートに心配されたり誉められたりしたことがなかったんですよ僕達。

嬉しかったのと、事件で興奮していたせいか、あの日はなかなか寝付けませんでした。

「リョータはもっと鍛えたほうがいいわね！」

ある日の昼食時、ジルさんが僕の皿にハムを追加しながら言いました。

頼んでませんけど？

手掴みで持ってきませんでしたか？

ジルさん狙いの視線が強さとか嫉妬とか色々混ざって飛んできますし！！

満腹感と緊張で苦しい中もなんとか食べます。残すのはよくないし絶対文句言われますから。

「あの、まぁ僕弱いですけど。それと肉の追加に何の関係があるんですか」

「あんたは食べなさすぎだからね～！しゃんと食べてあたしらに混ざって訓練しろってこと！」

後ろを振り向くと、身長は僕より5センチくらい高くて、パイクさんよりはるかにゴツ…立派な鍛え上げられた体の、女性騎士のアガサさんが立っていました。

金髪の巻き毛で琥珀色の目お肌も綺麗で、パーツがそれぞれ大きいので派手な顔立ち。砦内警備の緑ジャケットがよくお似合いです。

頼りがいがあって腕もたつ皆の姐さん・年齢非公開・は、僕にとっては苦手な人です。

最近気付いたんですけど、僕が砦で最年少なんです。だから皆が構いたくなるらしいですね・・・。

「僕暴力反対ですから。できたらケラーさんの弟子になりたいな～」

アガサさんもジルさんも立っているので自然と上目遣いになったんですが、二人は顔を赤らめながらもほだされてくれません。

「もぅそんな顔しちゃダメでしょ！また襲われちゃうわ！」
「自分を守れなきゃ一人前になれないよ！」
なんか話が不愉快な方向に行きますね。
どうやって断ろうかと思っていると、ジルさんに引き寄せられたお邪魔虫がやって来てしまいました。
「楽しそうだな、何の話」「リョータ、元気になってよかったね～」
レオさんとパイクさんが明らかに牽制しあってジルさんに近寄ります。
「リョータを鍛える話をしていたんですよ。あんな事があったし、少し教えてあげられませんか？」
ジルさんがにこにこしながら言ってしまいました。
何という事を！！
男二人は顔を見合わせて、はっとしたように今度は僕に詰め寄ってきました。
「そんなことならお安い御用だよ！君には世話になっているし、一

緒に訓練しよう！ボッシュ先輩の指導を一緒に！」

「バカ言え、お前等は外回りで忙しいだろ。訓練するなら俺等とやろうぜ。なあアガサ」

どうも青い外担当と緑の中担当の騎士はライバル関係にあるようですね。

しかもこの二人はいいところを見せようとやたら張り切っているので、とてもじゃないけどお願いしたくありません。

「何を騒いでいる」

大きな人達に囲まれて、どう逃げようかと悩んでいると、今度はボッシュさんまで追加されました。

「「リョータを鍛える話です」」

おぉ何人かハモッた。

ボッシュさんはちょっと片眉をあげて微妙な表情をしました。今度は何です？！

「ちょうどいい、トモも訓練に付き合う事になった。２人で午後か

ら来い」

そう言うとさっさと出ていってしまいました。うぇ？いつの間に姉とそんな話をしたんですか？姉が承知したのも珍しい。

うーん。驚いたのと、人の話を聞かない人が揃っていたのでなし崩し的に決まってしまいました。

○　○　○　○

食堂の仕事が一区切りして軽く掃除をしているとボッシュさんがやって来た。

私を見ると手を挙げて寄ってくる。珍しい。いつもは食堂に来たらさっさと食事を受け取って、ジルさんのハーレムがあればそこに直行するのに。ちなみにハーレムがない時は一人で食べていた。友達、いないのかな？

「よお。今日は寒いな」

紳士の会話は天候の話題から。と思ったら返事も聞かずに腕を掴まれた。
特に乱暴でもなく、握手をする時みたいだったので振り払うことも失礼かな～と思っていると、掴んだ私の腕をゆらゆら動かす。
えー何がしたいの？
こっちは力を入れてないので動かされるままゆらゆらゆらゆら。

「ボッシュさん、人の腕で遊ばないでください」

遠慮がちに申し上げてみたら、なぜだか不満そうな顔で見られた。
なんでさ。

「前のはやらないのか」

ん～？あ、投げた時の話かな？

とりあえず掴まれた腕を離してもらう。えい。
ボッシュさんは軽く掴んでいただけだったので、いわば教本通りに外れる。ちょっと驚いていたけどよろめきもしない。

「この前のは私が掴んで、相手の勢いと力を利用して投げたんです。掴まれた時は、今みたいに振りほどくというか」

何て言ったらいいのか。私のは合気道とはいっても、どちらかというと女子供の護身術教室だったから微妙だ。

「トモ、今のような技を教えてもらいたいんだが」

ボッシュさんが真剣な顔をしている。初めて見た。いや、2回目か。この前の騒ぎの時、私に説教をした時もこんな顔だったね。心配性なのかな。

「あのー、私は達人というわけではなくって、前回は偶々うまくいっただけなんですよ。戦い向けな技も知りませんし」

目立つの嫌だし。

ボッシュさんはまた手を伸ばしたから、今度は何かと思っていたら、ふわふわと頭を撫でられた。

撫でられるのも二回目だ。この人に撫でられるのは気持ちいいなぁ。幸せな気分だ。私はリョータを撫でるけど、私を撫でる人はいなかった。

誉めてもらえるならお手伝いしてもいいかなぁ。面倒だけど。

「ちょっとなら、いいですよ。私がわかる程度」

そう言うと、ボッシュさんはいつものニヤリじゃない笑い方をした。

「それは助かる。午後の訓練に来てくれ。・・・お前猫みたいだな」

猫？なんですと？リョータにも言われたなぁ。
思わず眉間に力が入ると、今度はニヤリと笑って食堂の中に入っていった。

私はあんなにふにゃふにゃしてないし寝るとき丸まったりしないよ！

11・お稽古を始めるのは秋が涼しくていいね（後書き）

リョータ君
お姉ちゃん取られそう？

12・ほどよく鍛えましょう（前書き）

弟　姉　で視点変更です

12・ほどよく鍛えましょう

午後になり、僕は訓練場へ向かいました。体育館のようなだだっ広い建物で、壁ぎわに武具が並べられ、床は土になっています。
簡単な木製の観覧席のような一角もあり、そこで順番待ちをしたり見学をするようです。
僕が着いた時にはもう姉とボッシュさんが来ており、受け身を練習していたようです。なんとなく見ているとボッシュさんはもともと体術も経験があるのか、筋がいいように思えます。
たまに居ますよね、さらっと何でもできちゃう人。

「いたいた、さぁ走ろう」
「素振りが先だろ」

いつのまにかパイクさんとレオさんに挟まれていました！

「いきなりだとどこかつりそうなんで、ちょっと体を解してからやろうかな～」
僕は二人から少し離れて柔軟体操をします。
動物の世話を始めてからそれなりに動いてはいるんですが、元々の体力に自身無いんですよね～。

ちょっと間を取りたかったのに、一区切りついたと見たパイクさんがいつもの笑顔で寄ってきました。

「さあ走ろう！」

タッタッタッタッ・・・

「何周、走るん、ですか」

１０周くらい走ったところで恐る恐る聞いてみると、余裕の笑顔で振り向きます。

「ん～、リョータ初めてだから５０くらいにしとく？」

パイクさん・・・！ヘタレだと思ってたら結構ちゃんとしてたんですね！あと１０周で僕の心臓爆発すると思いますっ！

なんとか5周走ったんですが、

過呼吸になりかけたので自主的に切り上げましたよ。

パイクさんや他の騎士さん達はこちらを気にしながらもきっちり走りきっていました。

「いきなりお前等と同じことをさせてどうする。１日で潰れるぞ」

へたりこんで呼吸を整えていると、ボッシュさんと姉が傍にやってきました。もっと言ってやって下さい。舞い上がって加減を忘れているお兄さんたちに。

「リョータは基本的な体力ないから、ね。走り込みから始めたらいいと思う」

横にしゃがんだ姉が言います。助けに入ってくれたのでしょうか。
と思ったら、僕の腕を引っ張り、立ち上がらせようとしてきます。
え、なに。立てないんだけど。まだ喋るのも辛いんだけど？
なんとか解ってもらおうと姉の目を見ると、ニッと笑いました。

「技とかね、やっぱ実演見たら解りやすいでしょ」

それはつまり僕を実験台にするという・・・無理無理無理無理！昔からどれだけやられたか！
必死で首を振っても、姉はずりずりと僕を引きずって行こうとします。
重心を低くして抵抗していると、いきなり脇腹辺りをつかまれ、持ち上げられました。

「お前、軽すぎだ。まだ立てないなら持って行ってやる」

ボッシュさん？？
小さい子に高い高いをする時のように、ひょいっと僕を後ろから無造作に持ち上げてすたすたと移動しやがります。
これって姉のポジションじゃないんですかね。先日といい・・周りの視線が微笑ましいものを見守るようなのもなんか嫌です。

くっそーいつか隊長みたいなムキムキになってやる。

実演は思った通りヘロヘロになりましたが、ボッシュさん以外にも興味を持った人が居て、真面目に取り組みました。
姉にべたべたしたがるのを防げたので結果的にはよかったですね。

パイクさんとレオさんも途中から参加して、元気よくじゃれあっていましたね。年齢を考えると、レオさんて子供っぽいか相当な負けず嫌いですね！パイクさんにできて自分ができないことはない！と練習してました。観察メモに新たな書き込みができました。食堂で報告しないといけません。

○　○　○　○

ボッシュさんに合気道を教えることになったので、その日の午後、迎えをまっているところ。

仕事で程よく疲れて、食堂裏の大きな切り株に寄り掛かって陽なたぼっこをしてたらうとうととして目が開けられない。でも眠ってはいない、なんともいえない至福の時・・・。

葉っぱを踏む音がして隣に誰か来たかな～、と思っていたら、その人は深いため息を吐いた。誰だ？

「お疲れですか・・・」

半目くらいでぼんやり見ながら一応声をかけてみる。その人は私の横で、こちらに向いて座った。
あ、青ジャケットだ。あ、ボッシュさんだった。
陽が当たっているのでいつもより髪の色がキラキラして見える。キラキラだなんてパイクさんみたいだ。ちょっと笑える。

「こんな所で寝るな。お前は危機感が足りない。ここは雄ばっかりなんだぞ」

雄って。そういえば圧倒的に男ばっかりだな～。騎士以外はコックに鍛冶屋、馬の飼育係、医者、農夫、なんかの職人…ムサイな。
女性はジルさんみたいに食堂や医務室の助手、女性騎士、文官…と１０数人かな。

ふむふむと半分寝ながら考えていると、ボッシュさんが私のデコに手を当てた。あ～忘れてたわ。せっかく迎えに来てくれたのに。
ごそごそと立ち上がろうとすると、手を添えて立たせてくれた。今のすごく騎士っぽい！『お手をどうぞ』とか言わないのがボッシュさんらしいけど。

「疲れているならまたにするが？」

「気持ち良かったのでうとうとしちゃっただけです、すいませんでした」

ボッシュさんはそうか、とだけ言って訓練所に向かった。

訓練は体育の時間と違って来た人が一人で筋トレみたいなことをしたり、パートナーと連れ立って手合せしたりと、自主的にやっていた。合同でやる時は揃って走ってから勝ち抜き戦のパターンが多いらしい。
たまに隊長も来てるとか。見たいな～。

とりあえず柔軟をやりつつどう進めるか考える。
私は初めに受け身を教わったな。きちんと受け身ができれば投げられても怪我しない。うん。まあ、私の腕は微妙だけど。

「ボッシュさん、まずは倒れ方です。倒れた時に怪我をしないように衝撃を分散させるんです」

「ふむ。道理だな」

どうやら生徒は素直なようです。

土のうえではちょっと嫌だけど、思い切りが肝心。ボッシュさんは私がやるのを見たらすぐに真似して実践する。普段はやる気なさそうだけど、こういう時はすごく真剣なんだね。

「リョータが死にかけているぞ」

ふと場内の片隅を見ていたボッシュさんが呟いた。視線を辿ったその先には、燃え尽きて真っ白になった人みたいなリョータがいる。
あらら。
パイクさん達にしごかれているんだろうか？

「リョータもこっちがいいんじゃないか？剣をやるわけでもないんだろう」

そういえばそうだ。
いいこと思いついた。足腰ぐだぐだの今のリョータなら投げもかけやすい。

「じゃあボッシュさん、リョータを保護しに行きましょう。そんで、どういう時にどう受け身をとるかを実演でみてもらいます」

そしてリョータを引っ張ってきて練習してたら、どんどん人が増えてとても盛り上がった。暑苦しいノリは苦手だけど、こういうのもたまにはいいのかもしれない。自己紹介とかして。けっこうイケメンが多い。

ボッシュさんは人が増えるとまたもとのかったるい感じに戻っていた。ちょっと不機嫌？自分だけ技を覚えたかったんだろうか。

男の人はやっぱり一番強くありたいとかそういうのかな？でもきっと最強は隊長だよね～。

その夜はお風呂（なんと温泉）に入らせてもらって寝た。リョータはぶつぶつ足が痛いとか言ってて、ちょっと反省。いきなり初日でやりすぎたな～と。私も明日筋肉痛だわ。

モップ（黄色い毛トカゲ）とロボ（灰色たれ耳狼？弟命名）をベッドにあげてぬくぬくしながら寝てたんで反省はすぐやめたけど。毛がつくから洗濯係に怒られるのに。

おやすみなさい。

12・ほどよく鍛えましょう（後書き）

今更ですが合気道のことは全然知りません…
やせてて体力のない女子がちょっとかじった護身術という設定上、無理がないのが合気道でした。護身と健康のため親が慣わせたという隠れた設定が！

初心者向けの解説を参考にぼかして書いてあるので、経験者の皆様はそっと見逃してください。

13・できちゃった?!（前書き）

姉　弟　で視点変更です

13・できちゃった?!

訓練の翌日はやっぱり筋肉痛だった!リョータは三日間くらいお爺さんみたいな動きになってて笑えた。ちょっとずつでも体力がつけばいいけど。
継続は力なり。いい言葉だよね。

今日の仕事は昼と夜の当番だ。珍しいことに。なんでもいつもの人が風邪引いたらしい。ジルさん達にも仕事のローテでしわ寄せがいってて大変だから断るわけにはいかない。仕事にも随分慣れたしね。夜の部は二つに分かれていて、多分6時くらいと9時くらい。夜に仕事がない人はずーっと居座る人もいる。私の当番は6時からの第一部。

「トモ、最近ボッシュさんと仲いいよね」

弟がぼそりと呟いた。ベッドの上で体育座りして、膝の上にのせたモップと一緒にじーっとこちらを見ている。
仲いいのかなぁ?別に毎日会ってもないし。

「それを言うならあんたはお姉様方に人気だし、パイクさんとは何かもう兄弟みたいじゃない」

そういうと弟はなぜかウゲェ、と不気味な声を出す。

「遊ばれてるだけだし。パイクさんは同志なの！そうじゃなくて、トモは、そのボッシュさんのこと好きなんじゃないかって」

「あぁ。ボッシュさん好きだよ」

弟はなぜか口を半開きのままで固まった。よくワカラン奴。かわいい顔が台無しだよ～？

弟が無言になってしまったので、部屋の中には鳥の声が響いた。ピルピルピル。あ、そろそろ食堂へ行かねば。夜の当番その１の準備しないと。

「今日私食堂の夜その１の当番だから、行ってくる。部屋片付けてから来てね」

ロボが散らかした毛布や布を丸めてつくった弾まないボールなどを指差して言い付ける。言わなきゃやらないんだから。

○　○　○　○

「ボッシュさんのこと好きなんじゃないか」

思わず聞いてしまい、どうごまかそうか慌てたら・・

「ボッシュさん好きだよ」

は?え?

普通のトーンで言われたので、頭にすぐ入ってきませんでした。
だってあまりにもいつも通りで読めないんですよ!
『苺好き?』『うん、好きだよ』って友達と言ってたのと同じ調子で・・・。
女子はもっとこう顔を赤らめて恥じらったりキャーキャー言ってましたよ、コイバナする時は!

はっ!姉は普通ではありませんでした。

じゃあ本当に?

これは要観察です。

ボッシュさんがダメなわけじゃないけど。相応しくないとか言うつもりもなく…むしろあれ位大人の方が安心かな~とか。だいたいジルさん狙ってたんじゃなかったんですかね。

うぅ。決して姉を渡したくないとかそんなんじゃないですから！たった1人の家族として当然のことです！

部屋を片付けて、2匹と1羽の水をかえてから、食堂に向かうことにしました。夜はちょっと雰囲気が違って、早い時間帯でもテーブルにはお酒がおかれています。ワインぽいのとブランデーぽいのが主流のようです。

今日のハーレムはパイクさんレオさんボッシュさん。
観察のためにつかず離れずの席に着きました。

「この前のトモの訓練、面白かったぜー。またやるんだろ？」
「今度は私もやりたいですね。あの体格で大人を投げ飛ばすんでしょう？痛快だわ」
「あ～、か細くて綺麗だよな。お守りしたいです！」

む。なんかできあがっちゃった人達に囲まれていました。２０歳そこそこの若い騎士連中です。
お前ら人の姉に発情すんなよ。

「でもあの子、ボッシュ先輩とできてるんだよね」

はい？

「さり気なく近寄れないように守ってなかったか？」

「この前2人で見つめ合って、先輩がなでなでと…」

不意にぼそぼそと声を低めてそんなことを言うから、むせてしまいました。

隣のごつい人が、慌てて背中をさすってくれました、が。

「姉ちゃん獲られると辛いよな～。でも先輩なら大丈夫だぜ」

「そうそう！ちょっとやる気ないけど、あの強さは出世間違いなし！憧れてる人多いんですよ！」

「今まで浮いた噂もなし。ジルさんにだって本気かわからないしな」

「トモならお似合いだぜ」

何この人達勝手に盛り上がってんデスか？こんなむさい人達の女子高生並みのコイバナを聞くはめになろうとは。

じっとりと噂の先輩を見ると、ジルさんのハーレムにいるくせに視線は遠くを見ていて・・・なんだよ。

すごく優しい顔をしてました。

もしかして。

「できたぞ！！」

すごいタイミングで食堂に駆け込んできたケラーさんが大声で叫んだので、頭が真っ白になりました。

え、やっぱりトモとボッシュさんが？

いつもきちんとした印象のケラーさんなのに、髪は無造作に結んでちょっと歪んでるし、黒いパンツに白いプルオーバー1枚で、しかも腕まくりしていて寒そうな格好です。

僕と目が合うとどかどかと近づいて来て、腕を掴まれました。

「リョータ、できたんだ、だから早く見てくれ」

え？違うの？何のこと？

何が何だかわからない内にケラーさんに拉致されるのでした。

どうにでもして下さい。

13・できちゃった?!（後書き）

姉と弟に微妙な温度差があるんですよね

外堀から埋まっていってるお二人さん。
どうなんでしょうか。
ジルさんのハーレムも。

唯一リョータには対象者がいないのでかわいそうだこと。　皆さん母親並みの年なんです。

１４・天才がデレた？（前書き）

ずっと弟視点です

１４・天才がデレた？

滅多に無い興奮状態のケラーさんに引きずる様にして連れてこられたのは、鍛冶屋さんや武器職人さんのいる区画でした。
危ないのとうるさいので、砦の本棟や食堂など生活区域からは離れた位置に建っています。暗い道程を迷うことなく突き進んで、ようやく手を離してもらえました。

「見てくれ、リョータ」

なにやらごついおじさんやお爺さん達がしゃがみこんでる中心を指差して、ケラーさんは誇らしげな顔をしました。いやほんとこんなに感情をだしたのは初めて見ました！子供みたいですよ？

ケラーさんに急かされて、おじさんの固まりを掻き分けて進むと目に入ったそれは、

「ポンプだぁ・・・」

まさしくポンプでした。にょろっとした把手を何回か上下さすと、ややぎこちなくですがシュコシュコとポンプっぽい音がします。
おじさんが本体を持ち上げて桶に張った水に下部をつけ、促されてまた手押しをすると、吸い上げられた水がちゃんと出てきました！

すごすぎます。去年僕が自由研究で昔の道具を調べた時に、たまたま見た手押しポンプの構造。シンプルだから今もまだ使われているけど、設計図を覚えていただけで、細かいところや造り方は当然わからなかったのに。

「これはまだ試作品だからな。改良をしていくんだ」

ちょっと落ち着いたケラーさんが、ポンプ第一号を撫でながらそう言いました。

「ケラー様は流石だねぇ！仕事がお忙しいのにこんなもんまで造っちまうんだから」

おじさん達が頷くのに僕も当然同意です。ダメ元で頼んだのに、やつれるくらい真剣に取り組んで、実現させたケラーさん。かっこいいですね。人知れず働く大人の男って感じです。

「ジルさんも喜びますね」

そう言ってみたら、顔色が悪かったケラーさんはみるみるうちに赤面して黙ってしまった。デレ？うわ～。からかってごめんなさい。

１４・天才がデレた？（後書き）

短いですがキリのいいところで

15・大事なのはあのこの気持ち（前書き）

姉　ボッシュ視点です

１５・大事なのはあのこの気持ち

今日はパイクさんはお休みらしい。朝早くからきて弟と獣達と遊んでいる。
本人達は遊びじゃなくて調査だとか言ってたけど。
最近はモップには触れるようになった。肉食じゃないというのもあるけど、たまに何か言いたげに見てるんだよね～。ロボは隙を見せるとじゃれようとするからだめ。

部屋が狭いから散歩でもしようかな。

今日はもうずいぶん寒い。もう一枚くらい着たほうがよかったかな。
そういえば、騎士にはマント、て思ってたけど、この国では使わないらしい。ボッシュさんに聞いてみたら『そんなひらひらしたものつけて戦えるか』と言われてしまった。確かに。風の抵抗強そうだ。
王様とか、王宮で身分の高い人が儀礼服として使うんだって。

実戦重視なのは、２０年くらい前まで頻繁に隣の国と戦争をしてたからしい。

わりと最近だよね。戦争があったらパイクさんやボッシュさんも戦いに行くんだろうか？すごく、いやだ。

気分転換の散歩で暗くなってしまった。何やってんだろ。こんなだから弟に妄想するな～とか言われるんだね。はぁ。

「ため息ついてどうしたのトモ」

急に話し掛けられて飛び上がりそうになったよ、ジルさん！

お茶に誘われたので有り難く押し掛ける私。だって寒かったから。

初めて入るジルさんの部屋は、物は少ないけど清潔で花柄でかわいくて、イメージ通りだった。窓辺に小さな一輪挿しがあって、綺麗な朱色の花が生けてある。

「この花って」

「パイクさんが下さったのよ。この季節にしか咲かない花」

やっぱり。パイクさんが浮かれて花持ってるのを見たんだよ。それにしても。

聞いていいよね。誰もいないし。ガールズトーク！

「あの、さぁ。ジルさんは誰が好きなの？」

直球過ぎたかな？ちょっとびっくりした顔のジルさんかわいいんだけど。

「誰って」

「ジルさんなんで誰も選ばないのかな、て。なんか陰でこっそり賭けの対象になってるの、知ってる？」

ジルさんはなんでか困った顔をしている。まさか気付いてない訳じゃないよね？あれだけアプローチされてて。

「パイクさんと、レオさんと、ケラーさんと、」

指折りながら言っていくとジルさんが笑った。

「ボッシュさんね」

・・・なんでだろう今ちょっとイラッときた。
ジルさんが続けて何か言うのかと思ってお茶を啜ってカップ越しにじーっと見ると、悩むように首を傾げていた。

「選ぶなんていうのは、皆さんに失礼だわ。身分が違うもの」

悩んだ挙げ句それですか？他に好きな人が…とかじゃなくて？

「本気の人にはそっちのほうが失礼だと思うけど。好きじゃないと

か嫌いとか、ジルさんの気持ちが知りたいと思うよ」

あの中で少なくともパイクさんは本気だ。純粋に高校生みたいに。身分というなら無理矢理ジルさんを手に入れられるのに、それをしないじゃないか。パイクさんは恩人だから、できるなら幸せになって欲しいんだけど。

ボッシュさんもだけど。ボッシュさんかぁ。うーむ。

「本当はね、今仕事してて楽しいの。誰か一人の手を取って、それが壊れるのが嫌なのよね」

ため息混じりにジルさんは言う。でもそれって。

「すっごいヤな感じ。もてない女のひがみだけど。かわいそうだよ」

ジルさんは笑って、『そうね』って言った。大人の余裕？というか、私はなんでこんなに余裕無いかな。

我に返るととっても恥ずかしくなって、ジルさんに謝って部屋を出た。

ちょっと反省などしつつ散歩を再開。

他人の色恋でむきになるなんて、初めてだわ。恥ずかしい。生意気

なこと言っちゃったし。あぁ。

「今晩パイクはどうする」
「あいつなぁ、来るか？誘うだけしてみるか」
「リョータと一緒だった。あいつも誘うか」

若い騎士が木の柵に座って話してる。なんだろ。あ、この二人も休暇の人ね。弟も一緒に遊んでくれるの？

「どこに行くんですか」

後ろから声をかけると、二人はビクッとした。

「あ、トモさん？いや、ちょっと男同士親睦を深めようかと。な？」
「そうそう！ここじゃリョータは恋人もできないし」

へー　ほー　ふーん…なにやらイカガワシイ所にパイクさんと弟を連れていこうということなんだ。

「リョータは子供だから夜の外出はダメです。代わりに私を連れていってくれます？」

仕事で鍛えた胡散臭い笑顔で言ってやると、二人は真っ赤になって口をぱくぱくさせてから、手と首を振った。フン！やらしい！

○　○　○　○

午前中の巡回から戻ると、トモがやけに赤い顔で歩いているのを見かけた。やけに薄着だし、風邪ひいたらどうするんだ？
馬を小屋に返してから、トモの歩いていたほうへ行ってみた。

あまり人の来ない所、建設時の資材がそのまま置かれた場所で、トモは大きな石に腰掛けていた。
考え事をしているのか、ぼんやりと空を見上げている様子はひどく小さく、無防備に見えた。

「風邪ひくぞ」

驚かさないように近づいて声をかけると、振り返った顔が赤い。やはり熱でもあるんじゃないか？
無いよりはましだろう、俺の上着でも着せておこう。トモは無言のままだが肩から羽織らせた。

「すいません。…私に優しくしなくていいです。今日の私は嫌なやつです」

俯いたまま、そんなことを言うので困る。随分弱っているようだ。

突然見知らぬ世界にやってきて、帰ることもできない子供だ。不安にもなるだろう。いつも淡々と仕事をして過ごしているから、気遣うことも忘れていた。

手を伸ばして頭を撫でる。いつものように笑うかと思えば、さらに泣きそうな顔になってしまった。

もうどうしていいかわからない。

とっさにもう一方の手も伸ばして、小さな体を両手の中に閉じ込めていた。宥めるように背中を優しくさする。昔に親からそうされたように。

この気持ちはきっとそう、そういうことだ。

15・大事なのはあのこの気持ち（後書き）

気持ちも色々ありますね

ジルさんはほんとに選べないんです。嫌われそうですけど。そういう人いるんですよね。自分を偽れないある意味正直なのかな？

トモとボッシュは甘いんだかなんだか…

16・いっぽうそのころ（前書き）

弟　ジル　視点です

16・いっぽうそのころ

今朝はパイクさんがお休みなので、朝食後に僕達の部屋へ来てくれました。
取り敢えず、もふもふ達のデータを報告です！

「モップは体長に変化なしです。見つかった時からずっとですね。やっぱりこれで成体なんですね～」

「うん。食事量も一定だ。ロボはいつも寒くなると食事が増えるんだ」

もしかして元は冬眠してたんでしょうか？
ロボがあくびをした隙に舌や歯をチェックするパイクさん。慣れてますね。獣医さんみたい。この世界には獣医はいないらしいけど。騎士とか農耕に家畜を使うんだから、いて当然だと思ったんですけどね。

「どうしてパイクさんは騎士になったんですか？」

「うーん、兄がいるから家を継がなくてよかったからね、好きなことしたかったんだけど。家の体面を保つ必要もあってね。なんとか騎士団に入って、それからこの砦に配属されるように頑張ったんだ」

にこにこと教えてくれました。そこまで細かく言わなくたって・・・

やはり根が正直者なんだなぁ。
この人なら、宮廷で陰険な人たちに囲まれて過ごすより、多少弱くても騎士として真面目に働くのが似合ってますね～体力は人並み以上あるとわかったし。周りに子供がいたらきっと人気者でしょう。

話していると、いつのまにかトモがいなくなっていました。あれ？

「トモ知りません？」

「さっき、散歩に行くって出ていったよ」

ちょっと首を傾げてパイクさんが言いました。気付かなかった。恥ずかしい。もふもふに夢中でしたよ。

「そう言えば…あの、トモが、ボッシュさんのこと好きらしいんですよね」

恐る恐る聞いてみます。一番あの人と仲がいい？のはパイクさんなんですよね。

「あっ！そーやっぱり、ちょっと噂になってたんだ」

パイクさんはちょっと赤くなって頷きました。誰もいないのに声のトーンもさがっています。

「ちょっと前から、先輩がすごくトモのことを気に掛けてて、見守ってる感じなんだよね」

「でも、ボッシュさんてジルさん狙ってて、レオさんとかといつも一緒でしたよね？」

そこがやっぱり気になるんですよ。

パイクさんは『狙ってるって生々しい…』と呟いて苦笑しながら、首を横に振りました。

「何ていったらいいんだろう。確かにいつも僕達と一緒になってたけどね。今思うと、ジルさんに対する態度と僕達への態度は同じだったんだ」

ん～？どういうことでしょうか？

首を傾げた僕に、パイクさんはまたにこにこして言いました。

「先輩はいつも人から一歩引いて接してたんだ。ジルさん相手でも。最近トモには踏み込んでるんだよ」

それはやっぱり本気ってことでしょうか？うわぁー。

何だか赤面してしまいました。同級生と放課後に噂話をしてたノリです！パイクさんも赤いし！

「じゃ、じゃあパイクさん恋敵が減ってよかったですね！」

僕としてはケラーさんにも頑張ってほしいんですけどね。

ちょっと茶化そうと思って言ったのに、パイクさんは悲しそうにため息をつきました。

「全然相手にされてないんだよね。ちょっと調べさせたら、昔好きだった人を今も想ってるとか…」

調べさせたって何ですか？スパイでもいるの？！

「そ、そんなの解らないじゃないですか！まだまだこれからですよ！」

ロボのお腹に顔をぐりぐりして嘆くパイクさんを慰めるのに、結構な時間がかかりました。

○　○　○　○

あぁぁ～どうしましょう？トモに嫌われちゃった？！男の人を弄ぶひどい女だと思われちゃったんじゃない私？！

あの年頃は難しいし、トモはすごく純粋だし。かわいくて思わずからかっちゃったし。

うわあ。

でもそうね。嫌われてもしょうがないよね。

大事にされて想われてるのが気持ち良くて、態度を決めかねて。昔、憧れたあの人に想いを告げる前に振られてしまってから、段々臆病になっていってしまった。

奥さんいるって知らなかったし。愛妻家で目の前で惚気られて死にたくなった。あ、でも今はもう平気ね。冷静に思い出せる。

もう何年も経ったから。私もいい年よね。子供の一人や二人いてもおかしくない年齢だわ。

・・・これはまずいわね。気が付いたら周りから誰も居なくなってたら洒落にならないわ。

トモの言う様に真面目に本気で考えたほうがいいんじゃない、私？

あぁトモ。ありがとう。やっぱりあなたは素晴らしい子だわ。明日謝らなきゃ。

16・いっぽうそのころ（後書き）

ジルは覚醒した！

男を見る目がかわった

色気が増えた

狩人にジョブチェンジした

17・知らないおじさんについて行ってはいけません（前書き）

姉　ボッシュ　視点です

17・知らないおじさんについて行ってはいけません

最低な日だった一昨日は、最終的になぜかボッシュさんに慰めてもらって部屋に帰って、ご飯抜きで爆睡した。

変な時間に起きたら、獣共に取られないところに、弟が作ったなサンドイッチが置いてあったので有り難くいただいた。野菜たっぷりにチーズっぽいのを挟んだやつ。おいしかったな～。
ちなみにサンドイッチは通常メニューとして正式採用されているよ。

ここ2、3日はなんとなく話し掛けにくくて、しかも忙しくてジルさんはちっともじっとしていなかった。
よくみたらハーレム人口増えてない？

「よぉ。今日は元気か」

ボッシュさん。・・・ハーレム増えて倍率上がって大変ですね、とか言おうと思ったけど。

すぐにあっちに行って欲しくなくて、頭をフル回転させて話題を話題を話題を～

考え込んでたら、眉間をびし！と指で突かれた。秘孔か？！すんごい痛いんだけど！
思わず涙目でボッシュさんを見上げると、片手で口を押さえて顔を逸らせた。
笑ってやがるのか？！顔赤くなってるし！

「何すんですかあなたは」

「・・・すまん」

その一言で、出てきた食事のプレートを持ってテーブルへ行ってしまった。なんだったのさ。

「今、何話してたの！」

「ボッシュさんて意外にかわいいくねぇ？」

「おでこツーン☆だってギャハハハハ」

次に並んでた若い騎士３人組が、内緒話をするみたいにこっち向いて屈みこんできた。無駄にテンション高い。さっきとの差がすごいわ～。ボッシュさんは意外にまったりなんだよね。思わずため息ついちゃった。

「あんまりお話できなかったし」

つい思考が口をついて出てきてしまった。そんな私を見て、３人組は気持ち悪く悶えながら『かわいいー』とか『羨ましい』とか叫んだ。いい男はこういう時はさり気なく聞かなかったフリとかするんだよっ！

不本意ながらジルさんとはお話できなかったけど、元気そうだったし、いつもより真剣にパイクさん達と話すのが見えて、もしかしたら私の言ったことを考えてくれたのかも、て思う。

パイクさんにはジルさんみたいなしっかりした姉さん女房がぴったりだと思うんだよね～。きっと子供はすっごくかわいいよ！

仕事帰りに楽しい想像を巡らせていると、視界にでかい箱型の何かが入ってきた――あれは馬車か。テレビでみたキラキラで可愛いやつじゃなくて、頑丈そうな雨風どんと来い、みたいなやつだ。ガチャリと勢い良くドアが開いて、中からは杖をついたお爺さんが降りてきた。映画なんかでは、踏み台とか執事がお手をどうぞ、というところだけど、馬車には一人で乗ってたみたいだし、御者の人は誰かと話している。

おっと！

「大丈夫ですか？」

見てると予想通りよろけたので駆け寄って、自由な方の手と背中を支えた。て、かなりごっついお爺さんだわ。

「お、気が利くなぁ、嬢ちゃん」

ごついお爺さんは笑って杖で地面をゴン、と突く。すごい響いたんだけど何か仕込んでる？

ライオンのたてがみみたいな白髪、ん・教科書のベートーヴェンぽいかも。顔や手に古傷があるから若い時は騎士だったのかな～。目は綺麗な菫色。口元には笑い皺があって、すごくかっこいいお爺さんだな。

「どちらにご用ですか？誰か呼んで来ましょうか？」

私がそう聞くと、お爺さんは杖で砦を指した。

「隊長に会うだけだからなぁ。嬢ちゃんが構わんならこのまま手を引いてくれんかね」

お爺さんはそう言ってウィンクした。

ふわ！私でよければ喜んでお供します！お爺さんのために平らな道を選んで砦に入る。

ここに来たのは初めてらしく、時々立ち止まっては楽しそうに見ていた。

よく考えたらこの人知らないなぁ。今更だけど。悪い人じゃなさそうだからいいかな。隊長強いもんね。

こんな時に限って知ってる人に会わないんだから。

ちょっとどきどきしてる間に着いてしまった。

「あっ！先生！」

扉の前のレオさんが素で驚いた。慌てて扉を叩いて中に入って隊長になにか言ってる声がした。よかった。知ってる人だったんだ。ほっとしたよ。

「助かったよありがとな」

お爺さんはそう言って私の頭をガシガシ撫で回した。強いけど優しい。誰かと重なった。

「先生どうぞお入りください。トモ、ご苦労だった」

中から隊長が出迎えて、二人は入っていった。誉められちゃった〜フフ。

部屋に戻ってしばらく休んで、今日は訓練場に行く。知ってる人来てるかなぁ〜と覗くと、隊長とさっきのお爺さんがいる！先生って、剣術のだったのかな？

「こんにちはさっきは…」

話し掛けたら満面の笑顔で両肩を掴まれた。

「おぉ、嬢ちゃん！お前さんが『トモ』だったか！」

なにゆえ私の名前を?隊長に『説明を求む』視線を送っても無言で撃墜された。

「こんなに美人で親切な娘だったとはのぅ。弟の方もいい子なんだろうなぁ。誰かさんがぜーんぜん会わせてくれんから、老体に鞭打って来たんだよ」

そう言いながら、ちらりと隊長を見る。隊長はお爺さんの視線も撃墜。

「あ、お褒めいただいて恐縮です。長旅は、大変でしたでしょうね?」

よく事情は解らないけどこの体での旅はきつかっただろうなぁ、と思って答えると、お爺さんにぐわばっ!とハグされた。くるしぃ。やっぱ力強いし!

「離せクソジジィ」

お下品な声がしたと思ったら、急にお腹を圧迫されて後ろに引っ張られた。

誰かの腕がお腹に回されて私の足は宙に浮いてる。びっくりして体

がガチガチに強ばってるけど、勇気を出して顔を後ろに向けた。
いつもより近く、目線がほぼ同じ高さに彼の顔が見えた。無理にひねったので体が仰け反りそうになり、咄嗟に肩にすがった。

私が掴んで驚いたのか、こっちを向いたので正面から目が合った。
黒い目に私の顔が映っている。案外睫毛長いんだ。というか近い近い近い！！！

固まったままの私を抱えてボッシュさんは隊長に一礼して、訓練場を大股で出ていく。何も言わない。何も言えない。

しばらく歩いて、お気に入りの切り株のところへ私をそっと下ろしてくれた。それから前にしゃがんでため息のようなうなり声？みたいな声を出す。どうしちゃったのかな？聞きたいけど私はまだ声が出ない。
家族以外であんなにくっついて抱っこされたのは初めてだったから。

私の心臓と、ボッシュさんの心臓の音が共鳴したような気がした。
あのままずっとくっついてたら、ずっと揃って鼓動してたのかな。

○　○　○　○

午後の訓練の前、嫌な名前が聞こえてきた。

「マルキン先生がいらっしゃったそうですよ！」

パイクの嬉しげな声。あんな爺さんが来てなぜ嬉しがる。泣くほどしごかれたくせに。

「爺さんは何しに来たのか知ってるか」

「ん～多分ですけど、トモとリョータを見に来たんじゃないでしょうか。あちらでも話題になったようですし」

「人が出てきたのは隠してるんじゃなかったのか」

思わず強い口調になっていたのか、パイクが青ざめて首を振った。

「基本的にはそうなんですけど、宮廷の一部、上層部には報告が…予算のこともあるわけですし」

しどろもどろのパイクに、ため息をつく。そう言えば昔、ため息が多いとからかわれた事があった。

そんな事を考えながら訓練場に着くと、珍しく隊長がいた。これはついている。実のある訓練ができそうじゃないか――？！

隊長の影に奴がいた。

杖をつくほど足が悪いなら老人らしく家でじっとしてればいいもの

を。
隊長に挨拶しない訳にはいかないので、そちらへ向かうと、爺さんがいきなり何かを抱き締めた。トモ？見えてなかった。じゃなくて

「離せクソジジィ」

奴が血迷わない内にトモを取り返しておく。ちょっと気に入ったら後添えに、と言いだすので始末に終えない。
不意に両肩に力がかかったので横を向くと、目の前にトモの顔があった。
小さな顔は今までで一番近くにあり、赤みを帯びた美しい茶色の目がこちらをじっと見ていた。

一瞬頭が真っ白になった。
隊長に目礼して、取り敢えずこの場を去る。ジジィの始末は後回しだ。

トモがよく座っている切り株の上へ、彼女をそっと座らせた。突然抱き上げたので恐ろしかったのか、子猫のようにさっきから黙って固まったままだった。
恐がらせるつもりはなかったんだが。思わずしゃがみこんで、またまたため息がでた。頭の中に、腐れ縁のおかしな旅人の声がしたような気がする。

「すまなかった。あの爺さんは俺の身内でな。やたら女好きなどうしようもないジジィだ。今度触られたら投げ飛ばして構わない」

膝立ちでトモと視線が合うように言うと、ようやく表情が緩んだ。

「なんだ、ボッシュさんの身内の方ですか。うん、道理で。頭撫でてくれたんです。血が繋がってると、やること似るのかな」

あのジジィ。

無性に、自分以外がこの子を撫でたかと思うと腹が立つ。自分以外に撫でられて喜んでいるトモにも。

両手をのばして、小さな顔を包むようにして挟んでやった。柔らかくて、恐ろしく肌理の細かい気持ちのいい手触り。頬の辺りに親指をすべらすと、トモの肩がはねた。

「さっきのは訂正する。ジジィ以外でも男は全員触られるの禁止。投げ飛ばせ」

真剣に言っているのに、トモは何度か瞬きをしてから吹き出した。

「真面目な顔して、言ってることすごいよボッシュさん！メチャクチャだぁ」

～このガキは。なんでわからないんだ？のんきに野外で昼寝したり、男ばかりいる場所を薄着でふらふら歩いたり。
俺がどれだけ心配しているか。

不意に、顔を挟んでいる手にトモの冷たい手が触れたので息を呑んだ。
また、さっきのように顔が近い。震える長い睫毛。薄い唇。薄紅色の唇が、ゆるゆると言葉を紡いだ。

「さっき、私の心臓とボッシュさんの心臓の音がね、一緒になって聞こえたの。別々の人なのにね。すごいドキドキした。ボッシュさんも…」

真っ赤な顔でゴニョゴニョと恥ずかしいことをトモが言うので、顔に触れた手を伝ってこっちまで顔に血が集中するような気がして、トモの口を塞いだ。
両手が使えないので、口を使って。

柔らかい唇に重ねるだけの口付け。自分に嘘はつけない。嫌がらないのを確認して、もう一度口付けた。

「な～んだトモはお前さんのもんだったか！じゃあ早く可愛い孫寄越せよ！」

後ろから突然馬鹿みたいな声がして、俺とトモは固まった。

「ボッシュさん・・・？」

トモの小さい声がする。俺はトモにほほ笑みかけて可愛い頭に手を伸ばして撫で回す。

「ボッシュさんその笑顔怖いよ？」

「部屋に送っていくから、ちょっと待ってろ」

ジジィを埋めるから。やはり先に始末しておくべきだった。これと血が繋がっているなど悪夢だ。他の兄弟もまともなのに。

立ち上がってジジィのにやけた顔と向き直った。子供のように目を輝かせているのを見て、またしても、ため息がでた。

17・知らないおじさんについて行ってはいけません（後書き）

ボッシュは
ふ っ き れ た

ボッシュが言う腐れ縁の旅人は、私のもう一つのお話「世界の目」の主人公のことです。あっちは話の進行が遅いので、お暇なとき、気が向いたら御覧になってください。

18・迷子その2（前書き）

弟視点です

前話の裏で弟くんはこんなことしてました

18・迷子その2

いつものように朝が来て、僕はもふもふ達の世話を始めます。
水と食事を用意して、綺麗な毛並みを保つためにブラシをかけて。
毛が飛び散るので寒いけど外でやるんですよね～。

まずは大変なロボから。この子は犬で言うところのダブルコート。
柔らかな短い毛とサラサラの長い毛の二重構造です。抜けた毛は集めてクッションにしたいくらいぽわぽわで、気を抜くと風に飛ばされるので要注意なんですよ。
ロボはやっぱり犬っぽく、目を細めてうっとりと伏せていました。
垂れた耳がたまに動いて、なんだかとっても癒されます。
ようやく終わって、モップに取り掛かろうと思ったら
あれ？いない・・・？

普段はほとんど動かない置物みたいな良い子なのに！鳥籠と並んで日向に寝てたのに！
探さねば！ヤバいでしょうこれは。誰かに踏み潰されたらどうしよう！

僕は急いで鳥籠を持ってロボを急かして部屋に戻り、戸締まりをしてから探しに出かけました。

トカゲっぽいから、物陰とかに隠れてるんじゃないかと思って、岩影や薪の積まれた辺りを必死で探しました。

「リョータ何やってるんだい？」

ほとんど腹ばい状態になっていた僕に声を掛けてきたのはパイクさんでした。会いたかったような会いたくなかったような。

恐る恐る振り向くと、片膝をついて不思議そうにこっちを見ているパイクさんが目に入りました。今日もキラキラしてますねむかつく

「じゃなくて、あの、申し訳ありません、モップがどこかへ行っちゃいました」

貴重な生物を逃がすなんてしかもこの人が子供の頃から大事にしていた不思議な生きもの。

怒られるのは当然、これまでの無条件での保護がなくなったらどうしようとか、一瞬で最悪な未来を想像してしまい、もうパイクさんの顔を見てられなくなりました。

「あぁ、ずっと閉じ込めてるからなぁ。退屈だったかなぁ？それじゃあ、探そうか」

パイクさんはいつもと変わらない調子で言うと、膝をバシバシ払って立ち上がりました。僕に笑いかけて。いつもは頼りないのに、この時ばかりはかっこよく年相応に見えました。

「すみません、モップ見ませんでしたか」

通りすがる騎士に声を掛けたのは何回目か。もう陽は高く、僕の真上に来ていました。

「モップ…かわからないがさっき黄色い毛がその辺りに落ちてたよ」

そう言って髭面の騎士が指差したのは、厩舎の方角でした。僕はパイクさんと一緒に急ぎます。モップは馬の見物でもしてるんでしょうか？

騎士が教えてくれた地面には、確かに黄色い羽毛が散っていました。まさか何かにむしられたんじゃ…？馬に蹴られてたり？

血の気がひくような気分で呆然としていると、パイクさんに腕を引っ張られました。

「リョータ！ほら、あれ」

厩舎の中、僕の世界の牧場のように整然と区分けされた通路の真ん中に、捜し求めていた姿がありました。時々長い首を伸ばした馬に突かれながら、挨拶をするように顔を合わせていました。

「何やってんのーもぅ」

力が抜けて、引っ繰り返った変な声がでてしまいましたよ！
走り寄ってそっと抱き上げると、じっと僕の顔を見上げてきます。
くぁ～かわいいけど！心配したのに！

「はぁ、よかったね。馬が好きなのかな？昔は時々巡回にこっそり連れて行ってたんだ」

じゃあもしかしてパイクさんの馬に会いに来てたのかな？やっぱりモップは知能が高いような気がします。偶然来たのでなければ、自分で厩舎まで辿り着いたわけだし。

モップを連れ戻したらもうお昼で、そのままパイクさんと食堂へ向かいました。さんざん変なところを捜し回ったので、お腹は空きすぎて痛いくらいです。

「ハハ、リョータよく食べるようになったね！背も少し伸びてるし、段々男らしくなってきた」

お気付きでしたかパイクさん！多分、2、3センチは伸びてますよ！発言の後半が微妙に引っ掛かりますがね。

「食べて、訓練してるからだと思います。パイクさん達のお陰ですね」

めざせ隊長！ですからね。

「そっかー。訓練といえば僕の入隊の時の先生が、今日ここにいらっしゃる予定なんだ。多分リョータとトモに会いにくるよ。鍛えてもらう？」

人のよさそうな顔で言うパイクさん。鍛えられるのは嫌いですよ。なんで嬉しそうなんだろう。いつもボッシュさんやレオさんにのされてるのに。

それに、僕には目標ができたんですよ。だから必要なのは知識なんです。

「パイクさん、僕はロボやモップだけじゃなくて、馬なんかの医者になりたいんです。僕の世界には獣医といって、動物専門の医者がいたんですよ。騎士にとって馬は大事でしょう？他にも農耕に使う牛だとか鳥だとか・・・」

厳密には馬とか牛とか微妙に違う気がするんですけどね。

「それは…素晴らしいね。うん、応援するよ」

うまく整理できずに語ってしまったけど、パイクさんには伝わったようです。
さすが同志。解ってくれると思ってました！

満ち足りた気分で食事を終えて、僕は部屋へ戻りました。疲れたから昼寝させてもらいましょう。

18・迷子その2（後書き）

このあとパイクは午後の訓練に向かいました。

１９・危ない時は徹底抗戦（前書き）

ずっと姉視点です

１９・危ない時は徹底抗戦

素晴らしい朝が来た。
日々寒くなるけど、私は最近ドキドキしてあったかいよ。気持ち的に。むしろ熱い。
何日か前、ボッシュさんのお父さんが来た。ボッシュさんは末っ子らしくてもうお爺さんなんだけど――　７０歳位かな――優しくて格好いいお爺さんなんだわ。
ボッシュさんと似てるし。親子だから当たり前か。

それで何か解んないけど、ボッシュさんにちゅーされた。うあぁぁぁ。
思い出すたびになんか頭に血がのぼって思考停止してしまう。
あの後は親子喧嘩が始まって、結局ちゃんと話せてないんだよね。

なんで私に？好かれていると思っていいのだろうか。男は好きじゃない相手にも手を出してくる、とクラスメイトが言っていた…。

あれ以来仕事の時間が微妙にずれてて会えていない。
テンションが上がったり下がったりするので弟に変な顔をされた。
これ以上心配かけられないし、なんとなく言うのが憚られる。

お姉ちゃんボッシュさんにキスされたんだけど、どう思う？

死んでも言えるか！！

「君がトモかい？」

自分の想像で何となく落ち込みながらいつもの切り株に座ってたら、誰かが声を掛けてきた。またこのパターン？
邪魔しないで欲しいんだけど。
一応挨拶しようと思って振り返ったら、知らない人だった。制服じゃないからここの人じゃないっぽい。

上等そうな、装飾の多い服装は、貴族ですか？
お爺さんと同じように、私達を見に来た人かな。珍獣扱いですかコラ。

「こんにちは」

睨み付けないように、立ち上がって会釈しておく。後で怒られたら嫌だし。

相手は若くて２０代前半、くせのある金髪を長めに、ちょっと垂れ目は明るい青。甘めの美形、だけど趣味じゃない。髪伸ばすなら結びなさいよ。

「意外に普通に見えるな。おとなしそうだし。持って帰るなら、男

よりは女だよねぇ」

は？何言ってんのこの人。なんか、ヤバい。

思わず後ずさると、横から手が伸びてきた。掴んでそのまま引っ張って、体勢が崩れたところを逆に捻る。無我夢中で掴んだ方の肩に蹴りをいれると変な音がして悲鳴が上がったけど知るもんか！

逃げなきゃ逃げなきゃ

貴族っぽい人と逆に走りだしたら今度は黒っぽい人が立ちふさがって、思わず息をのんだ、その瞬間にお腹に衝撃。

声が出ない　息ができない
痛い　気持ち悪い

パパ　　リョータ

　　ボッシュさん

そして私は目の前が真っ暗になった。

頭がガンガンする。お腹痛い。腕と肩も痛い。

要するに全身痛い。

何だか固い床の上に寝てるみたいなんだけど、その床が揺れている。目を開けるとぼんやりと誰かの顔が見えてきた。誰？

「おわっ！突然何をするんだっ」

「誘拐犯のアホ面に蹴りをいれようとしましたが、何か？」

金髪男目前でごつい手に足首をはたき落とされて失敗しちゃった。容赦なく叩かれて、じんじんする。

睨み付けると、推定お貴族様の隣の男は全体的に黒っぽい服を来てて、焦茶の髪は坊主っぽく短くて、同じ色の目は無表情で私を見下ろしている。コワ。

あの時私をぶん殴ったのはこいつだ。

怒りも不審も哀れみも、私を見る目にはなんにも感じられない。この人目茶苦茶怖い。イメージ的にお庭番とか忍者とかそんな感じ。

でも何をされるとしても、殺されたとしても、私の辞書に無抵抗という字は無いの。黙って馬鹿男にされるがままなんて、プライドが許さない。

「まったく、見た目と違って狂暴だな！足も縛っておけ」

お馬鹿がそう言うと、怖い人は無言で私の両足を掴んでぐるぐる巻きにした。即ロープ出てくるって、常習かよ。

「ずいぶん手慣れてるけどよくやるんですか、誘拐犯さん」

お馬鹿はちょっと引きつって私を見た。ますます馬鹿っぽい。変態な上に馬鹿って最低だな。

「人聞きの悪いこと言わないでもらいたいな。ガルニエ家が独占するあの『森』から人が出たとあっては、確かめずにいられないじゃないか。領内というだけでなぜあのような貧しく下流の家が全て保護するのだ」

そう言いながら手を伸ばして私の頬を触る。

全身鳥肌！気持ち悪い！

ボッシュさんが触った時はあんなに暖かくて幸せになったのに！

離れようとして後ろに下がったら、壁で後頭部を打った。女なんだからせめて座席に寝かせてくれない？

痛みと情けなさで目がじんわり滲んだ。

「君を持って帰ったら我が家の素晴らしい所蔵品として披露するつもりだよ。もっと綺麗にしてあげるからね」

「人を珍獣か何かと勘違いしてませんかこの野郎」

思わず低〜い声が出る。
話の筋からして、ガルニエ家っていうのはパイクさんちのことだ。
お馬鹿の家はそこよりも格が上で、あの森の珍獣（私達含む）が羨ましかったので今回強行手段に出た、と。

あの砦の中は、少なくても表面上は身分のことを鼻にかける人はいなかった。騎士や文官に、ジルさん達一般人が遠慮するくらいで。
騎士の中にもパイクさんみたいないいとこの坊っちゃんや、平民出身の人が混ざっていたけど、同じように訓練して同じご飯を食べていた。
きっとラーソン隊長の指導が行き届いてたんだね。

ずっとあそこに居たかったよ。変な話、ある意味理想的だったのに。
同年代の女子がいないのはちょっと困ったけど。
みんな優しくて仲良くて、好きな人が居て。

ぐるぐる考えてたら、また気が遠くなってきた。

あぁ、リョータが泣いてなければいいけど。
知らない世界でたった二人の家族なのに、離れるなんて。

１９・危ない時は徹底抗戦（後書き）

何事もなくいちゃつかせませんよ

20・ひとりぼっち（前書き）

パイク　姉　視点です

20・ひとりぼっち

今日は午前中が当番で、久しぶりにボッシュ先輩との組だった。
皆に半分脅迫されてるからトモとのことを聞き出さなくてはいけない。でも。どう考えても無理だよ～！
個人的な話なんてほとんどしたことないしさ、照れ屋の先輩が素直に教えてくれるわけ無い！
緊張のあまり、いつものように喋れない…。

「…なんだ、今日はずいぶんおとなしいな」

なんと！逆に先輩が話し掛けてきた！　心配してくれたんだろうか？

「いやー、ははは、あ、そう言えば二人を見つけたのはあの辺りでしたね～」

自然にさりげなく会話を誘導していこう。
先輩は森の方をちらっと見て無言で頷いた。

「二人はずいぶん馴染みましたよね。リョータは最近男らしくなってきて、動物達の医学を学びたいと言っていました」

あの真っすぐな眼差し。灰色に緑や茶の混ざった綺麗な目は、出会った当初は恐怖や警戒、打算が見え隠れしていて心配だった。
動物好きという共通点を発見してからは、実の兄弟よりも気が合う。かわいい弟ができたみたいで構いたくなる。そしてトモは。

「トモはすっかり食堂の看板娘ですよねぇ～？」

先輩を伺いながら本題に入った。斜め後ろから見てると、口角があがった…先輩のほほ笑みっ…初めて見たんじゃないか、な？
ちょっと焦って何言おうか考えた一瞬のうちに、もとの、飄々とした先輩に戻ってしまった。
先輩…さっきの顔で女性口説いたら百発百中だよ…どうしようジルさんが…

「せ、先輩っジルさんは、渡しませんからね！って
違ーう、わー言いたいのはこっちじゃなくて！トモが先輩で、いや…その」

くそぅ混乱のあまり言わなくていいことを。誘導尋問なんて苦手なのに～。

「で？何が言いたかったんだ？」

ひんやりとした声が…先輩を恐る恐る見やると馬をとめてこちらを見て…目が…口は笑ってるのに目が…。そういえばマルキン先生がいらしてから不機嫌でしたね先輩。

それから寒い道の真ん中で先輩による誘導尋問のお手本が披露されて、僕は洗い浚い白状したのだった。

「ジジィとレオと、アガサな。あいつら他人のことばっかり…」

お三方以外にも、まわりには知りたくてうずうずしてる連中でいっぱいだった。

そりゃ突然現れた少女と騎士の恋なんて、まるで吟遊詩人の唄みたいだから、気にならないわけが無い。しかも綺麗な子だし。

周りの奴らもよくトモの話をしていたけど。贔屓じゃなく、先輩がいいと思う。トモはきっと先輩が好きだから。

リョータ以外では、先輩といる時が一番可愛い顔をしている。普段は無表情で無愛想だけど、仕事中の顔とも違う、自然な顔で、普通に女の子の顔をしていた。

あと、恋するもの同士なんとなくわかったと言うか。

あの二人には幸せになってもらいたいと思う。

後半神経をすり減らしたけど、無事に巡回が終わって食堂へ！

今日の初・ジルさん。

「こんにちは！ジルさん」

今日も綺麗ですね！と言いたいけど無理。レオさんなら臆面もなく言うけど。
いつもなら笑顔で返事をくれるのに、今日は沈んでいる？

「パイクさん！いらっしゃい。ボッシュさんも。今日はお二人一緒だったんですか」

「はい、そうですよ。さっき戻ったところです」

僕が言うと、ますます不安げな様子。何があった？

「トモがいないんです。昼の当番なのに。今リョータ達が探してるんですけど」

「…いないって、行くところもないだろう。またどっかで昼寝でもしてるとか」

心配そうな先輩の声。

誰かにどこかの部屋に――いやいやまさか。ボッシュ先輩と噂になってて、後見人が無敵のラーソン隊長だよ？そんな命知らずはここ

にはいない！
じゃあ外部？
マルキン先生は王都から来た。他にもトモ達に興味を持った人物がいて当然。
「先輩…先生以外に誰か来ましたっけ」
「隊長のところへ行く」
先輩は食事をすごい勢いで口の中に放り込んで立ち上がり、そこへリョータが駆け込んで来た。
「あっ！ボッシュさん、トモ見なかった？どこにも居ないんだ！こんなことあるはずないのに」
ひどく怯えて、青ざめて、先輩の上着を掴む手は震えている。
「落ち着いて、リョータ。皆探している。どこかで迷子になってるのかもね？隊長のところに一緒に行かない？」
僕が手を伸ばすと、リョータは払い除ける。
彼の目は猛禽のように、手負いの獣のようにぎらついていた。初め

て会った時よりも強く。

「トモは自分からどこかへ行ったりしないんだよ！誰かが連れ出さない限り、行くわけないだろ?！僕達はこの中から出ないって決めたんだから！また飛ばされないように！だからさっさと捜せよ！トモが独りぼっちじゃないか！」

血を吐くような叫び。どんな時も穏やかに冷静に対処していた少年とは思えないほど、取り乱していた。
彼らは僕達の何気ない言葉に恐怖していたのか。
いつかまた別の世界へ迷い込むのかと、じっとこの狭い砦に閉じこもって。
今やリョータはぽろぽろと涙をこぼしていた。

先輩は厳しい表情でリョータを見下ろし、顔を上げようとしない彼の両肩を掴んだ。

「トモは俺が必ず捜し出すし、お前達を独りにする気もない。だから落ち着け。隊長に許可を貰いに行く」

ゆっくりと、混乱した心に染み込ませるように、リョータに言い聞かせる。
彼が頷くと、ほとんど引きずるようにして先輩は出ていった。

「あ、ジルさん、僕も失礼しますっ」

急いで追い掛ける。外部の犯行としたら、それは一部の貴族階級。
不愉快なことに心当たりが無くも無い・・・。

○　○　○　○

縛られて馬車の中なう。

上着来てなかったから寒気がするし、相変わらず体痛いし、ちょっと酔ってきたし。明るい話題はない。

ちょっと黙ったかと思えばべらべらと家や自分の自慢話をする金髪男がうざくて睨み付けると、その隣から恐怖の視線が降ってくる。多分、無礼者、とか余計なこと言わずに黙って聞け、とか言いたいんではないかと思う。

こいつら相手に限って、ストックホルム症候群はないね。

あ、収穫はあった。
お馬鹿金髪男の無駄話で、ご自慢の家名はレヴィン家というらしい。
レヴァインかな。どっちでもいい。
あの時はさすがに、隣の人も馬鹿様の顔をはっとして見ていた。自分でバラしてどうするよ、みたいに。

気持ち悪いなぁ。

「あのー、ちょっとだけ下ろしてもらえませんか。気分が悪くて…あんたらの足の上に戻しちゃいそうなんですが」

顔を上げるのも億劫なので横たわって弱々しく声をかけてみた。ダメ元でも一応ね。この時代にエチケット袋はないでしょ。

「逃げないようにね！」

案の定停まってくれた。はしたないとかぶつぶつ言いながらだけど。いちいちむかつくなぁ。

足と手の紐は解いて、代わりに首に付けられた。長ーい先は怖いお兄さん。御者の人は私の蹴りで肩を痛めたらしくて、睨まれた。自業自得！

できるだけ背の高い草むらに入って、しゃがみ込む。涙がでてくる。本当に気持ち悪いし、怖いし、叫んで逃げ出したい。でも無理だから考える。

ズボンの腰部分に、小型のサバイバルナイフのホルスターを下げている。ナイフがあったって、馬鹿様だけならまだしも3人は無理。細い木の幹に跡をつける。ガリガリ。漢字で巴。日本名トモエなの。それから片仮名でレヴィン。

文字のちょっと上に、ナイフを突き刺した。どう見てもこの世界のものではないので、見つけてくれたらわかるはず。うん。きっと捜しに来てくれる。ちょっと解りにくいけど、陽が当たればけっこう光るはず。

ぐえっ。

首、絞まる！

待たせすぎたのか引っ張りだしたんで、よろけながら戻った。扱いがひどい。

でも紐を持ってる人は怖いので、顔も見られない。そしたら革の水筒を渡してくれた。一口、水を飲んで返す。

怖い人が優しくすると印象がよくなる法則は適用されなかった。なぜならその後すぐに私の手足を縛って馬車の床に転がしたから。

夜になって、金髪男の屋敷に着いた。多分でっかい。二階建くらいで横にでっかい。掃除が大変そう。メイドとか執事がいるに違いない。

今日は疲れたから話は明日ね、という馬鹿様のお言葉で、私は例の怖い人に小脇に抱えられ、2階の部屋に連れて行かれた。

紐を外されて、ぽいっと放り込まれて、鍵のかかる音がする。

部屋は真っ暗。窓から薄い夜の明かりが差し込んで、中がぼんやり見える。

ふかふかの絨毯。ダブルくらいのベッド。華奢な猫足のテーブル。わりと広いけど調度品がほとんどないので、普段使ってないんだろうなぁ。

広いお屋敷は静まり返っている。

2食抜きなのに、ちっともお腹が空かない。

とりあえずブーツを脱いでベッドに入る。むかつくし気持ち悪いけど、すごく寒いんだ。風邪のひきはじめみたい。

私は独りだ。

考えなくていいことを考えてしまう。

涙が熱い。だらだらと顔を伝って耳へ流れる。
こんなに泣いたことない。
今までで最悪の時は弟がいたから。母さんに置いていかれた時も、
この世界にトリップした時も。

涙がとまらない。きっと明日起きたらひどい顔だ。

私は独りぼっちだ。

20・ひとりぼっち（後書き）

熱い涙って自分でびっくりしますねー

21・親の顔が見たい（前書き）

姉　ボッシュ視点です

21・親の顔が見たい

喉が痛くて、夜明け前に目が覚めた。だるいので熱が高いのかもしれない。

でも、動けないわけじゃない。

ブーツを履き直して、紐をぎゅっと絞める。

窓を開けて外をみると、そこはバルコニーになっていた。下は柔らかそうな草の生えた地面。うん、コンクリなわけないよ。

綺麗に整えられた庭が見えて、とくに敷地は塀で囲ったりしていない。

問題はどっちから来たか、なんだけど…逃げてから考えようかな。

熱の所為で思考がばらけていく。

バルコニーを乗り越えて、飛び降りる。あいきゃんふらーい。地面に着いたら前回り受け身。

勢い良すぎて2回転してしまったよぅ。うぇ。

ちょっとしばらくじっとして、誰も出てこないのを確認。とりあえず、この屋敷から離れよう。大きな道を探して、馬車でも馬でもヒッチハイクして帰ろう。

帰る先は砦だって解ってるから、手段さえあれば簡単なことよ。

それにしても、だるくて走れない。そう言えば食べてないし。

「ぐえっ？！」

またしても首に衝撃！
突然誰かに襟首掴まれて、ふわっとぞわっと体が持ち上げられた。
これはあれか、絶体絶命？

「若がお呼びだ」

ここは普通、逃がさん、とか手間かけさせやがって、とか、悪の手下っぽく言わないかな。
今の状態スルーして、用件のみをお伝えしてます？
使用人の鏡だね。
変な台詞が次々浮かぶ。
ちょっと私やばいかも。

使用人の中の使用人、今日も朝から黒づくめの彼はもう何も言わずに私を運んで行く。あんまり遠くに来てなかったのか。残念。あ、あと、肩に担がれるのはとても辛いということが解ったよ。
部屋に放り込まれて、今度は中に人がいた。

清楚な白いカラーとカフスの黒ワンピースは、喉元手首まできっちり覆い、スカート丈は足首より少し上。ワンピースの上には白いエプロン。

生メイド！

くらくらする頭をゆっくり起こして観察すれば、メイドは3人。背筋を伸ばしてこっちを見ている。平均年齢は４０歳くらい？馬鹿様はベテランを私にあてがったようだ。

泥だらけで髪に葉っぱなんかが付いてる私を見て、真ん中のメイドその1は片眉をぴくりと動かした。

ゆっくり近づいて来て、私に手を差し伸べるので思わずその手に掴まる。だってなんか眼力が。逆らえる気がしない！この屋敷は怖い人ばっかりか。

そして私はされるがまま、風呂に入れられごしごし洗われたのだった。風邪が悪化するような気がする。

触れば発熱してると解ってるはずなんだけどな～。

洗われたあとはお着替え。異世界トリップお約束が今ここに！

この国のドレスはゆったりしていて、胸の下で切り替えがあって楽なタイプだった。マリー・アントワネットみたいなんじゃなくて良かった。体に凹凸が少ないからな。長めの袖口は先が広がって、下に着た白い薄いドレスのレースが見え隠れする。こんな服じゃ家事はできないね。あ、メイドがやるのか。

深緑で、ベルベットみたいな触り心地の生地。服だけ貰って帰っていいかな？

着替えが終わるとメイドその2が食事を持ってきた。スープだけ飲んで終了。

朝の運動とお風呂と着せ替えで、もう力尽きそう。

「や、着替えたね！」

能天気な笑顔で馬鹿様が入って来た。例の人は影のようにするりと彼の後から入って来る。私は返事する元気もないので長椅子？のクッションにもたれて、ぼんやり二人を見ていた。

「ふぅん、きちんと装えばなかなかだね。都へ行けばすぐに求婚者が集まるだろう」

近寄ってきて私を覗き込みながら彼は言う。
働いたことなんて無さげな白くて細い手をのばして、私の首をそっと撫でた。

ぞわっとした。

無言で睨むと、嬉しそうに微笑んで、懐から何かを取り出した。じゃらり、きらり。宝石のはまったチョーカーを私に付ける。

「君はどうやらとても活発なようだから、繋いでおこうと思ってね」

トンでもない事を言う顔を霞む目で見つめると、本気で嬉しそうなうっとりした目とぶつかった。
チョーカーには細くて長い鎖がついていて、いつのまにかその端はベッドの支柱に繋がれていた。メイドその3の手によって。

「昨日みたいに暴れないでね？傷がついたら価値が下がるし、痛いの嫌でしょ？僕としては部屋の中でのんびりして欲しいんだけど」

本格的に監禁された。

「なんの権利があってこんなことするの」

苦しいけど言わずには…。

「素晴らしい家の跡取りたる僕には、全て一級品が相応しいとは思わないかい？だから僕はね、いいものを手に入れるのに、努力は惜しまないよ」

得意げに！言いやがった！努力するとこ違うから！

どういう教育受けてんの？

ショックで意識が飛びそうな私の耳に、変態金髪男のくすくす笑いが聞こえて、誰かのでっかい手でベッドに運ばれたところでまた真っ暗になった。

○　○　○　○

トモが居ないという。

この砦しか知らない彼女がどこにも行く筈がないし、そもそも可愛がっている弟を置いて行くわけがない。

朝は普段通りの姿を何度か目撃されており、消えたのは朝食後から昼食までの間――俺が巡回に出ていた時間。

パイクの読み通りならば、『森』から出た姉弟に興味を持った宮廷の連中の仕業だろう。引退寸前のジジィの耳に入ったということは多くに知られていたということだ。

リョータはひどい顔色で、さっきの剣幕が幻だったように黙り込んでいる。

哀しげなその顔は、トモによく似ていた。

「失礼します」

隊長室に着くと、レオが無言で扉を開いた。目を合わせてから中に入る。

机の前で腕を組んで立っている隊長と、その横で椅子に腰掛けたジ

ジィがいた。

「報告は上がっているようですが、改めて。外へトモの捜索に出る許可を頂きたい」

「トモを拉致したとしたら馬車を使ったはず、我々が巡回した西側では徒歩の者と地元民の荷車のみ確認しています。東側に絞って我が家の領地外を捜索するのなら、あまり目立たないかと」

こういう時はパイクが役に立つ。事態を冷静に判断している。

隊長は腕を伸ばして、俯いたリョータの頭にのせた。

「手の空いている青騎士は全て使って構わん。私の砦から私の娘を攫ったのだ、何としてでも取り戻すように」

重々しく響くその言葉に顔をあげたリョータに隊長は言った。

「馬に乗れるならお前の同行も許可する」

無言で頷くリョータを目を細めて眺めながら、ジジィが口を挟んだ。

「ガルニエの末っ子はワシと来るがいい。一応体裁は整えねば宮廷がやかましいからな。リョータや、不肖の息子はいつになく本気だから、安心おし。一流の猟犬だからな」

ジジィはいつものように子供じみた顔でそう言うと、杖で床を突いて立ち上がった。

「はい、先生ありがとうございます。では」

パイクは一礼してからリョータの背中を軽く叩いて、ジジィと共に出ていった。あの二人が貴族連中相手に緩衝材となるならば、こっちは好きにやっていいということか。

「一応、領内東側の民家、街道周辺の建物は全てあたります。その後は他領地への巡検となりますが」

俺の問い掛けに、隊長は机の上にある地図を指す。

「砦からの道が繋ぐのは三家だが…東は二つだな。どちらもガルニエ家より格上だが、ふん。金を積んで来そうな奴らではあるが」

リョータに配慮して隊長は言葉を濁したが、両家の悪い噂は耳に入っている。

金を積んで部下の妻を買っただの、領民への暴力的な仕打ちだの――考えるだけで虫酸が走る。

「トモの保護を最優先にせよ」

あの少女がどんな目に合わされているかと思うと、今までにない怒りを感じる。

「リョータ、行くぞ」

まずは斥候を出して両家を監視するとしよう。その間街道沿いをしらみ潰しに捜索する。人や馬車が通れば必ず痕跡を残す。跡を消せば消した跡が残る。

俺は昔から捜し物ばかりさせられている。そのせいで不本意な『猟犬』などというあだ名すらあるが、今回は別格だ。

自分から追い求めている。失うことに恐怖すら感じるほどに。たった数ヵ月前に出会ったというのに、あの子が居なくてはひどい喪失感を覚えている。

取り返して、この手の中で笑う顔を見たい。

強い光を宿した目で、リョータが言う。

「ロボも、連れて行っていいですか。匂いをたどれるし、戦力にもなります」

本物の猟犬も参戦だ。

待っていろ。

21・親の顔が見たい（後書き）

馬鹿様逃げて！
怖い人が来るよ

番外編・小さな呟き2

最近おへやの中がたのしい
箱に入ったぴーぴー言う奴
ふわふわで細長いおじさん

お部屋にいるけどいっしょに遊んでくれなかった
パイクはときどき

新しいこがきた
いちどに　ふたりも

やわらかくてふにゃふにゃで　とてもいいにおい

はじめは　こわがってたけど
本気じゃないにおいがした

りょーたはいつもいっしょ
かゆいときはかいてくれるじまんの毛をきれいにしてくれる

ともは　べたべたするといやがるけど　はなれて見るのはおこらない

りょーたと遊んでたら
ともからはいいにおいがする

りょーたがおこっている
おれじゃない誰かに
本気でおこって恐がっている

『ともをさがして』
りょーたを泣かすのは誰？

これから狩りがはじまる
群れからはぐれてはじめての狩り

ともをつかまえてりょーたを泣かしたやつを
狩りにいく

22・少年の誓い（前書き）

弟視点

22・少年の誓い

砦は夜中になってもざわついていました。
ボッシュさんに夜はきちんと眠るようにと言われたけど、とてもじゃないけど寝られません。

この世界に来てからトモと決めた、二人のルール。

生きること。

忘れること。

嘘をつかないこと。

順応すること。

政治・宗教について言及しないこと。

一人で砦から出ないこと。

でも　もし　トモが自分の意志で居なくなったんだとしたら？

母さんみたいに。

もう僕の面倒見るのが嫌になったんだとしたら？

暗い部屋の空っぽのベッドは、忘れていたはずの記憶とダブって目眩がするようでした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「…お母さん？どこ？」

トモの声で目が覚める僕。まだ外は真っ暗やみで、何の音もしない。

「お母さん！」

さっきよりも強い声に驚いて、二段ベッドから飛び降りて部屋をでた。

トモはパジャマ姿で居間にいる。手には白い紙を握り締めて。

パパは仕事で、日本に帰るのはあと二週間先。だから居間とキッチンの間の和室には母さんが一人で寝てるはずだった。

「大きい声だすと、母さんに怒られるよ」

トモはもう中学一年生なのに、寝呆けたのかな？そう思ってると、怖い顔になって僕を見た。

「お母さんがいなくなったの」

僕には意味が解らない。母さんは寝る前までテレビをみていた。おやすみと言ったら無言でいつものように手を振って。

「コンビニにお菓子買いに行ったとか。散歩とか」

僕が言うと、トモは手に持った紙を居間のテーブルに叩きつけるようにして置いた。そこにはいろんな紙が置いてあって、僕が見に行こうとしたらトモが通せんぼして、見せてくれなかった。

「明日寝坊するよ、もう寝よう」

トモはそう言って僕を引っ張って部屋に戻った。

朝になっても母さんは戻ってなくて、次の日もその次の日も、何日経っても帰って来なかった。

僕達は二人きりでご飯を作って学校に行って、いつもと変わりなく暮らした。

トモは母さんのことを何も言わなかったし、僕も聞かなかった。けど、僕は何となく、トモははっきり悟っていた。

僕達は母さんに捨てられたんだと。

母さんは離婚に必要な書類だけを残して、さよならも言わずに置き手紙もなしにどこかへ行ってしまった。

それから何日かして、パパが帰ってきた。僕達にお土産をくれたそ

の手にトモが書類を渡すと、真っ青になってパパは和室へ行ってしまった。
しばらくして出てきたパパは泣きながら僕達をハグして、日本語と英語でずっと謝っていた。どちらかと言うと厳しくて気難しいパパのそんな姿を見たのは初めてで、母さんの不在よりも有り得ないと思ってしまった。

それから二年くらい日本で暮らしたけど、パパは仕事をやめて三人でアメリカに引っ越した。

休暇には初めて祖父に会えて嬉しかったけど、それは母さんが居なくなったから実現したことだから、それを思うと複雑な気持ちになった。

あれ以来トモは他人と距離を置くようになった。
僕は一人になるのが怖くなった。

考えると辛いので、忘れることにした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

気が付くと僕は床にぼんやり座り込んでいて、顔は涙でびしょびしょでした。

あ、それは涙だけじゃなくてロボが舐めてくれてたんですけど。
モップは足の上に乗っていて、鳥のピルルはせわしなく小さく体を震わせていました。

まるで皆して僕を慰めるように。

多分、今もっとも苦しんでいるのはパパに違いないです。妻も子も、何も言わずに消えたんですから。

僕はもう何もできない子供じゃないし、ただ待つつもりはありません。
パパのかわりにトモを守って、お嫁にいくのを見送る義務があります。
例えトモが自分の意志で出ていったんだとしても。
無理矢理攫われたんなら尚のこと。

「トモを捜して」

だからロボに頼みます。
僕達と同じように異世界から来た生きもの。
異世界補正で言葉はきっと通じている。

ロボはまた僕の涙をべろりと舐めて、何となく返事が聞こえたような気がしました。

22・少年の誓い（後書き）

元服に因んで、私の地元では少年式というのがありました。

リョータは過去をただ忘れるのではなく、受け入れてから昇華しようとしています。難しいことですが。

ちょっと前にはこの世界初の獣医を目指す決意をしましたし、荒波にもまれて劇立派に成長してくれそうですね！

結局のところ本格的なシスコン宣言ですが！

23・SEARCH AND DESTROY（前書き）

ボッシュ　弟

23・SEARCH AND DESTROY

夜中には流石に何の報告も上がらなかった。
街道からは旅人の姿は失せ朝の早い農民はとっくに寝静まっている。
それでも報告を受けられるように待ち続けた。

俺も他の奴にしても、この所惚けていたのかもしれない。だから自分達の庭から大事なものをまんまと奪われてしまった。
そんな自責の念があるのだろう、誰からも異論はでなかった。まぁ聞く気もないが。

翌日、昼頃になって戻った騎士からようやく手がかりらしきものを掴んだ。

「東への街道添いの、宿にいた旅人の、話なんですけどっ、紋章なしの、箱馬車で、走りっぱなしのを、見たってことです。ハァ、中は、締め切ってて見えなかった、そうですが。しばらく並走したけど、宿も、通り過ぎたと」

そいつは自分も馬を休まず走らせ戻ってきたので肩で息をしながら報告に来た。
普段は仲のいいのと二人して、訓練をどうやってさぼろうかということに知恵を絞っているような奴なのに――見直した。

「ご苦労、よく休めよ」

そう声をかけて机の上の地図に印をつけた。方角と時間から、目撃された馬車がトモを乗せたやつだろう。
午前中にここを出て、宿もとらずに馬車を走らせたということは、殆ど休憩もしなかったということだ。乗っている者にかなりの負担をかけたことだろう。
トモは乗馬は経験があるといっていたが、馬車はどうだっただろう？か細く体力のない少女に馬車での旅は耐えられただろうか？

そもそも、無傷でいるのだろうか？

こんなにも不安を覚えたことはない。自分の命が危険だった時よりも、はるかに恐ろしい。

集まってくる情報は微々たるものだったが、それでも地図には着実に印が増えていく。

「あの…」

声をかけてきたのはリョータだった。ろくに眠れなかったんだろう、ひどい顔色で目は真っ赤だった。傍らには灰色の獣が静かに控えている。尾でリョータを巻くようにしているところを見ると、一人前に守っているつもりなのか？

「その辺に座ってろ」

声をかけると近寄ってきて地図を見下ろした。
印を目で追うが、無言のまま椅子に座る。

「どこの誰か、目処はたってるんですか」

地図に目を向けたまま、リョータは呟く。

「街道を東へ進むと、ここで分岐する。こちらがルーヴ家の領で、
こちらがレヴァイン家の領になる。
まだ決め手はないので両方に監視をつけている。家ぐるみでやってる
ってことはまずないからな…」

「どっちかの家の誰かということですね」

地図を見るリョータの目はその誰かを睨み殺せそうなほど強かった。

その日は結局それ以上のことは解らなかった。

○　○　○　○　○

三日も経ってしまった。三日も！

行方不明者の生存率は時間が経つにつれて格段に低くなるっていうのに。

今回は命を狙われた訳じゃないから、悲観するなとボッシュさんはいいますが。

誘拐された人がそのまま元気でぴんぴんしてるなんて考えられないし、トモは女の子だから、貞操の危機とか・・・不安は尽きないわけですよ。

ご飯が喉を通りません。

鬱々として、ロボとこっそり探しに行こうかと思っていた時、報告に来た騎士がやたら興奮しているのに出会いました。

ちょっと年食ったおじさん騎士です。

すぐに僕も呼ばれてボッシュさんの部屋に行くと、机の上を指差しました。

そこにはトモのサバイバルナイフ。片刃で波打って、グリップは、人の手が握りやすいように形作られている。チタンとステンレスの輝き。

まがまがしく見えるそれは日本なら銃刀法違反で捕まる代物だけど、実際は枝を切ったり紐を切ったりするのにパパが買ったプレゼントなんです。

「これ、トモのです！どこにあったんですかっ」

思わず詰め寄ってしまう僕の耳に、ボッシュさんの『こんなもん持ってたのかよ』という呟きが聞こえたけどスルーですよ。

「街道の…この辺りの、道から少し外れた場所の木に刺さっていたのです」

おじさん騎士が地図を見て指し示し、ボッシュさんがそこに印をつけました。それから、懐から折り畳んだ紙を出して机に広げます。

「ん？」

線のような、謎の落書きが書かれています。おじさんの顔に視線が集中すると、困ったように言いました。

「刺さっていた木に、新しい彫り傷のようなものがありまして、写してきたのです。この小剣が見慣れぬ物でしたので、何か意味があるのかと」

おじさんの声を聞きながら僕は手を伸ばして紙を取りそれを見つめました。
角度を変えつつ見たそれ。

「巴…レヴィン」

「それはっ、トモのことなのか？レヴィンは…レヴァインか！」

ボッシュさんの目が怖いくらいギラついて、僕の肩を掴んだ手も乱暴で、骨が折れるんじゃないかと思うほどでした。

「はやく、行きましょう！犯人が判ったじゃないですか！」

ボッシュさんはぎらぎらした目のまま、笑いました。獰猛な、肉食獣の笑い。
ロボがぶるっと震えたのが伝わります。
この人が、猟犬だなんて。そんな生易しいものじゃないでしょう！
あれ、なんか、見つかってもトモが危ないのに変わりはないような気がしてきました。

「ルーヴに回したやつを呼び戻せ。すぐ出られるやつ２０名ついて来い。それ以外は待機。リョータはアガサの馬を使え」

歩きながら、次々と指示を出して行くボッシュさん。

「レヴァインに置いた斥候の報告では当主は不在、恐らく都に。当主の夫人と長男、長女、次女が在宅中」

「腕の立つ私兵を飼ってると聞きますねぇ。ガラの悪いのも多いとか～」

厩舎に向かうにつれ、騎士が集まって来ました。
いつもより空気が重く、ピリピリしてて、皆の雰囲気が全然違っています。

「リョータ！こいつが私の馬！頭のいい子だからね、掴まってりゃ勝手に他のについてくから。それからこれ、一応、トモの着替えと外套。薬。まったく、男どもは気が利かないからね」

走ってきたアガサさんが荷物を馬に括り付けてくれました。流石、皆の姐さん。

ボッシュさんは集まって来た馬上の騎士を見渡していました。

「明るいうちに着くようにできるだけ飛ばすぞ。それから――敵を見つけて、ぶっ潰す」

騎士達は大地と砦に響くような雄叫びをあげ、馬の腹を蹴りました。

置いていかれそうな僕の横にはロボが悠々と駆けています。

トモ、待っててね。こんなにも皆が必死で救けようとしてくれているから。

23・SEARCH AND DESTROY（後書き）

タイトルは曲名から。
レッチリのカバーバージョンを聴きました。

２４・泣く暇があったら考えろ（前書き）

姉視点です

２４・泣く暇があったら考えろ

二日くらい、意識がなかったような気がする。
まだ喉は腫れてるし、体に力が入らない。唇も乾いてカサカサ。

相変わらず豪華な首輪は着けられたまま、だけど服が変わっている。
ドレスから寝巻みたいなやつに。
え？いつの間に？
メイド部隊が着替えさせてくれたんだろうか。
もし、馬鹿男や忍者もどきがやったんなら、どんな手を使ってでも後悔させてやる。
お昼にメイドその１とその２が食事を持ってきた。
私が食べられないのが解っているので、水とお粥状の何かと摺りおろした果物。あれかな、悪名高いオートミールっぽい。まっずい。

「あの、あなた達が着替えさせてくれたんですか」

かすれる声で話し掛けてみたら、その１がむっつり頷いた。そういや初対面で私がドロドロだったのを洗ったのもこの人だった。

馬鹿様達、命拾いしたね。
ちょこちょこ話し掛けてもメイドのおばちゃん達は返事をしてくれない。たまに首を振るだけ。命令されてるからか、私なんかと喋りたくもないわ！ということなのか。
後者なような気がする。人間扱いされてる気がしないし、普通主人が未成年の少女を攫ってきて鎖で繋いだらリアクションするよね？

しかも熱だして倒れても医者を呼んだ気配もない。

私がいるのが外部に洩れないようにしてるのか。まぁそうするよね。
少しは世間に顔向けできないことをしている自覚があるのか。

窓の前は鎖がギリギリ届くライン。多分、ここから飛び降りて逃げてたのを告げ口したんだろうな。ムカつく！外の空気が吸いたいのに首輪が食い込んで、それ以上進めない。

心配してるだろうなぁ。捜してくれてるかな。ケータイもネットもないのに、捜せるんだろうか。でも鬼平とかホームズだって自力でやってたよね。
ん？ホームズは小説の人だったか。

待ってりゃいいよね。
リョータも、ボッシュさんも、砦の皆も。
びっくりするほど優しいから、私を独りぼっちで放置なんてしない。
きっと。

「ようやく起きられるようになったんだね。あーぁ、まだ顔色悪いなぁ。前より痩せちゃってるし」

キラキラしながら馬鹿様がやって来た。自宅だからか真っ白な長いフリフリシャツの腰に青や緑、金色の紐を絡めたものをゆるく結んで、細身の紺色のパンツに手入れの行き届いたブーツを履いている。
久々に見ると眩しくて不愉快。
この世界ってボタンがないんだよね。考えてみたら、機械がなけれ

ば作るのにすごく手間がかかるもんね。いつもの彼はいつものように黒いプルオーバーに黒いパンツ、黒いブーツ。黒にこだわりがあるとしか思えない！

私がこっそりファッションチェックをしていると、馬鹿様は長椅子に座って長い足を組んだ。絵になる。黙って何もしなければいいのに。

「どうやら屋敷のまわりを鼠がうろついてるようだ。鼠が多い時はどうすれば簡単に始末できると思う？」

にやけた顔で私を見つめるお坊っちゃん。鼠？鼠ってそれはまさか。

「私を捜してる人が来てるんですか？」

ちょっとテンションあがったよ？

でも、金髪男は私に返事をしないで、後ろに控えている忍者もどきを振り返る。

「数が多いのであれば、餌を仕掛けて一ヶ所に集め、まとめて仕留めるのが無駄のない方法かと」

淡々と、まるで本当に害虫か何かを退治するみたいに言う。でもそ

れって、あれだよね。
騎士の皆のことだよね。
強くて優しくて、厚かましいくらいに、フレンドリーで大好きな人達。
リョータやボッシュさんが来るかもだよね。
それを、まとめて仕留めるって？

「ふざっけんなっ！！何なんだ、あんたは！ヒトを何だと思ってる？！」

怒りで涙がにじんでくる。反対に背筋が冷える。ガラガラ声で喉から血が出そうだけど、思わず絶叫した。

「やだなぁ、そんな声で叫ばないでくれよ。喉が潰れちゃうよ？前から騎士は邪魔だったんだ。戦うしか能がないのにのさばってさ。ちょっと減らすくらい何ともないさ。邪魔がなくなったら、君のことをゆっくり考えよう。飾っておくもよし、どなたかが、欲しがるかもしれないねぇ」

白い手をひらひら振って、頬にあてる。後半は独り言みたいに、ぼんやりと。その姿はとても綺麗なのに、なんで、こいつはこんななの？

「新しい衣裳を用意したからね。淡い、薄紅と白を重ねた美しい品だよ。髪飾りも用意したからね。君のその首輪にぴったりの。ふふふ、君はとてもいい餌になるだろうね」

首輪基準か！

解ってたけど私が餌になるんだ。こいつは、皆が救けに来るのを待ってたの？

罠に掛けるの？

私のせいで皆が傷つくのは嫌だけど、是非救け出していただきたい。

だんだんこいつは気持ち悪くなってきたし、相変わらず体調は悪い。

どうしよう。

落ち着け、私。

２４・泣く暇があったら考えろ（後書き）

レヴァイン家長男キモいですね

書いてて嫌ですわ

今後の展開ではＲ１５にするかもしれません。

25・それぞれの戦い（前書き）

パイク　リョータ　ボッシュ視点です

25・それぞれの戦い

イライラするなぁ。
どうしてこう、宮廷の手続きは面倒なのか。無駄が多いんだよね、きっと。

「パイク、首尾はどうか」

「マルキン先生。書類は受理されました。ケラーさんが、完璧に身分証明の登録を済ませてあったので、なんとか半日で。あとは陛下への面会の、許可待ちで」

砦から姿を消したトモの捜索のために、『ラーソン隊長の養女が行方不明、若しくは誘拐された』という届けを出した。元は保護した二人の後見人という立場だったんだけど、籍を入れたほうが箔が付くと先生が言うから～。冷静になったら隊長からきちんと許可とってなかったと思い出してしまった。
ううぅ。知らない内に二児の父。ま、でも、砦内の者は自分の子も同然だ、と言ってたから大丈夫かな？

来るのに二日、届けに半日かかってしまった。

それにしても、こっちは緊急だっていうのにお茶会や側室優先って、仕事する気ないわけ？うちの王様は。いたいけな少女の危機なのに！

あとは先生と一緒に陛下を脅し――いや、お願いしてトモを捜して

保護する際に生じるあれやこれやを有耶無耶にするように働き掛けるのが、僕の仕事。

王様は、詳しくは知らないけどボッシュ先輩やマルキン先生に借りがあるらしいし、ラーソン隊長にも負い目がある。
どこの腐れ貴族か知らないけど、僕達の砦から大事なものを掠め取って、無傷で終わるなんて思わないほうがいい。

ああ、やっと謁見だ。

相変わらず貧相な王様だ。うーん、その辺の人の善さそうなおじさん？

その昔、近衛騎士だったラーソン隊長があまりにも立派で、何度か外国の使節に国王その人と間違えられたとか。それで宰相がラーソン隊長を単なる騎士団員にもどして、田舎というか僕の領の砦に飛ばしてしまった。しかもそのせいで隊長は婚約がダメになって、今も独身のまま・・・なんてひどい話だ。王様はそれを宮廷の噂で聞いて、宰相に騎士の人事に口出ししないように言ったらしいけど、撤回はさせなかった。議会にかけたら割と面倒なことになるけど、隊長がその件について何も言わなかったので、無かったことになっている。それが弱み。

二人のおかげで食堂のメニューが増えたし、井戸の水を汲んでくれる道具の事を教えてくれた。
異世界の人間は大事にするといいことあるよ～と吹き込んだ。

「ふむ、それは気になる。全土に普及すれば、助かるの」

その辺の気配りはできるんだよね～。
弱いところをネチネチ突き回して、『森』から現われた重要人物でラーソン隊長の大事な養女の身の安全を確保するのに、ちょっと乱暴な手を使うかもしれないということと、犯人がいかなる人物であれ、正式に罪を問うということを、約束してもらった。

「まだ先のこととは思いますが、当家の嫁となるやもしれませんなぁ」

先生のこの言葉も効果が大きかった。でも先輩が知ったらまた親子喧嘩になるんじゃないかな。

あぁ疲れた。やったやりましたボッシュ先輩。言質をとりました！

「これで先輩がなにやっても大丈夫ですね」

「お前さんは本当にボッシュの奴を慕ってるが、あの腕っぷしだけで可愛げのない奴のどこがいいんだ？」

「可愛げのないのがいいんですよ～！」

先輩のいいところとジルさんの素敵なところなら、小一時間語れますって。
先生はなぜか微妙な間をあけてから、ふっと力を抜いて笑いました。

「お前さんのようなのが居るから、奴はあの砦から出て来んのだな」

どういうことでしょ?首を傾げる僕を置いて、先生は帰ってしまいました。

明日はお偉いさんに事情と陛下のお墨付きをそれとなく匂わせて、さっさと帰ろう。もしかしたらもう救けたかもしれないし。

単騎なら一日で戻れる、倒れるかもしれないけど。

○　○　○　○

ううう、お尻が痛いです。こんなに長時間、馬に乗り続けたことなかったから…腿もひりひりする気がします。あ～!リアル髀肉の嘆ですね!

目的地に近づくと、何人か騎士服じゃない人が寄ってきました。密偵の人達でしょうか。先頭にいるボッシュさん達と何か話しています。

僕達が止まったのは、なだらかな丘の木立の中。大きな屋敷というか、小さい城というか、とにかく立派な建物が見えます。あそこにトモが捕まってるんでしょうか?なんでこんな家に住んでるような人が誘拐なんてするんでしょう。

きっと欲しいものは全部手に入るような生活してるに違いないのに。

「静かなもんですね～。人の出入りが極端に少ない」

「ん、庭師も下働きの女もでてない」

「俺達が来るって解ってんだろうよ」

騎士が話しているのが聞こえてきます。
相手は待ち構えてるんでしょうか。この世界に銃が無くてよかった。
こんな周りが開けた土地では狙わなくてもあたるでしょう。あ、でも弓矢がある～。

「あの、正面から攻めるんですか」

僕が近くの騎士に恐る恐る聞いてみると、その人は低く唸って首を振りました。

「威勢よく行きたいところだがな、屋敷には夫人や姫さんもいるから、攻め込むわけにいかんのよ。礼を尽くして巡検させてもらうわけ。中に入ればこっちのもんだし、抵抗されればこっちもね」

楽しげに腰の剣を叩いて言うその姿は、抵抗してほしい、という心がダダ洩れですが。
ボッシュさんについて来た騎士は、くだけた感じで一癖ありそうな人が多いようです。
悪く言えば危なそう?でもこの上なく頼りになりそうな人達です！

いつの間にか人数が減ったと思ったら、屋敷に偵察に行って、外に出ていた使用人を連れて来たようです。というか無理矢理引きずってたり担いでたり。
その人達によると、レヴァイン家の長男がなにやら屋敷に籠もって出ていないこと、部屋の近くには絶対寄ったらいけないと言われたこと、ガラの悪い男達を近くの小屋に住まわせていること、最近食事を一人分多く用意していて、病人らしいということ・・・。

真っ黒ですね。

病人食ってトモのでしょうか？無事なんでしょうか？

「その、長男はなんて名前ですか」

「ん、ハウィット・レヴァイン。歳は２２、３で顔よし家柄よしでやりたい放題な奴」

「や、やりたい放題って」

ななナニを？声が裏返っちゃいましたよ？

「あ、噂では人妻とか熟女好きらしいから、トモならだーいじょうぶっ」

「俺も聞いたことあるわ～親父の方。屋敷や城の侍女に手つけまく

りで隠し子が１０人近いって」

なんかもう、あとは爛れた猥談が始まったので僕はボッシュさんの方へ避難しました。あぁ、ロボもあんなの聞いちゃいけません。

「ボッシュさん……あの家燃やしましょう！」

家系を根絶やしにしたほうが世のためだと思います！

「気持ちは解るがそこまではちょっと」

逆に引かれた?!トモだって言うと思うけど。というか実行しますね。

「さて、そろそろ行くか。５名来い。残りは正面と裏で待機。合図があればすぐに突入するように。リョータ、お前は」

「行きますよ」

当然です。戦いに役に立たないし足手まといだろうけど。
尻尾を振って遠くの匂いを嗅いでるロボをガシガシと掻くと、優しく手を舐めてくれました。

「ロボ、こっそり来てね。危なくなったら呼ぶから」

正面からにこやかに入る僕達は陽動、というか囮。時機を見て合図で残りが突入して制圧、という作戦。

屋敷には多分無関係な家族の女性達がいる。下手に傷つけられないので、こんな無茶な作戦になったらしいです。

○　○　○　○

ゆっくりと屋敷に馬をすすめた。傍らのリョータは緊張して強ばり、青い顔をしている。危険と解っているので置いて行きたかったが了解しそうにないので仕方がない。

「誰も出て来んなぁ、つまらんわ」

他国出身で独特のなまりのあるマイヤーが言う。こいつは剣を触る癖があるので傍から見ると危険人物だ。

「俺達は巡検に行くんだ、マイヤー。愛想よくな」

「ん、無理無理。ボッシュも愛想ないし」

緊張感のない会話。
だが全員油断なく周囲に意識をやっている。不自然なほど、屋敷は静まり返っていた。

扉を叩くと年老いた家令が現われた。俺達の来訪に目が泳いだが、次の瞬間には完璧な礼で出迎えられた。

「ガルニエ砦から参りました。実は少々事件がありまして、御当主にお力添え頂きたいのだが」

「旦那様は御不在ですが、奥様と若旦那様がいらっしゃいます。お伝えいたしますので、少々お待ちくださいませ」

できれば奥方は放っておいてもらいたいんだがな。
歩き去る家令の後ろ姿を見ていると、階段の上に人の気配がした。

「聞こえましたよ。何かお困りのようですね」

若い男の声。手摺りにしなだれかかるようにして立つのが、ハウィットだろう。女が好きそうな優しげな姿で、やることはえげつない

という。
確かに嫌な目をしている。初対面の癖に、蔑むような妙な敵意を感じた。

「はぁ困ってるんですわ。実は少女が一人誘拐されましてね。茶色い髪と目で、たいそう可愛らしい子なんですが」

ハウィットは微笑んでから手を合わせた。いちいち芝居がかった奴。

「そうですか。実は私、先日変わったお嬢さんを保護しましてね。当家でお世話しているんですよ。もしかしたらその方かもしれませんね？」

危なくなったから返して知らぬ振りをしようっていうのか？
しかしこの流れではこいつに乗るしかない。

「では、我々がその方にお会いしてもよろしいでしょうか」

奴はにっこりと笑った。

家令を下げて、自ら案内するという。二階のやや奥まった場所の、日当たりのいい部屋。

俺達が全員行くのをなぜ許した？本気で彼女を返すつもりか？なにかの罠か？

疑う心は、トモの姿を見た途端に霧散した。

柔らかそうな、何重にもなっているような白と淡紅色の美しい服に身を包み、長い髪を結って輝く髪飾りをつけ、長椅子にぐったりと体を横たえていた。

数日会わなかっただけなのに、ひどく青白く儚げな様子に胸が締め付けられる。

「こちらのお嬢さんでしょうかね」

壁ぎわのハウィットが、笑いを堪えるような声で言うので思わず怒鳴り付けそうになった。

「ト、トモ」

リョータが震える声で呼び掛け、近寄ろうとすると、トモは上半身をもたげてこちらを見た。細い首に美しい首飾りがあるが、そのまわりの皮膚がこすれて血が滲んでいる――？

「リョータ、アサイさんにお嫁にいったオイチさん知ってるよね」

「は？」

トモはかすれた声で言う。

「オイチさんが兄のノブナガさんにアズキブクロを贈った話をしてたよね」

それだけ言うと、またぐったりと横たわった。何の話だ？誰のことだ？ハウィットも不審そうな表情でトモを見ている。
不意に、リョータがこちらに戻って囁いた。

「罠です、多分どこかに兵を隠してます」

必死なその顔は、嘘や冗談で言ってない。

懐の呼び子を鋭く吹いた途端、ハウィットの表情が一変した。手に持った何かを床に叩きつけると、黒っぽい煙がゆっくりと広がっていく。下の階で突入した騎士たちの声と、物が壊れる音がした。どうやら後手に回ったらしい。

部屋の壁が震えて隠し扉が開き、剣を持った男達が乱入してきた。準備よく、鼻と口元を覆っている。

「トモ！」

駆け寄ろうとするリョータの襟首を掴んでなんとか止めると、その先を長剣が霞めた。
いつの間にか、長椅子との間に黒づくめの男が立っていた。

布に隠れて目元しかみえないが、感情がなさそうな平凡な顔立ち。
鍛え上げられた体、軽がると長剣を扱う力。名のある騎士ではなさそうだが、ラーソン隊長を相手にした時のように緊張が走る。

「リョータ離れろ。ロボを呼んでトモを取り返せ」

ハウィットは長椅子の上からトモを引きずりおろし、抱えるようにして窓際まで後退している。
細い体に手を回して、喉元は苦しげに仰け反って――あれは鎖か？
できれば奴を真っ二つにしてやりたい。

怒りで出来た隙に踏み込まれて飛び退く。
他の奴は咳き込みながらもなんとかやっているようだから、下のが来るまで保つだろう。この煙が何かが不安だが・・・。

25・それぞれの戦い（後書き）

長くてしかも途中
すいません

悪役の名前を付けるのに手間取りました。
他の方の物語の登場人物とかぶったら申し訳ないし。悪役は基本的に悪役からいただいてますが、いい人なのに悪役からいただいた人もいます。

名前って大事ですよね。

オビスポって響きがかわいくて、グライシンガーは変形とか合体しそうですね。

26・善行は堂々と（前書き）

弟　姉　弟　視点です

26・善行は堂々と

広い部屋の中、目に入ったのは大きなお姫さまベッドで、次にその傍の長椅子に寝ているドレス姿のトモが目に入りました。
クッションを枕にして横たわった姿は有名な絵画のようで、トモの本性を知ってても、お姫さまのように綺麗です。

でも、僕達が来たのにぐったりしてて、絶対文句を言うか物を投げるかすると思ったのに・・・どこか悪いに違いないです。

「ト、トモ」

思わず声もかすれます。壁ぎわにたたずむハウィットが不気味で、ゆっくり近づこうとしました。
近付いた僕に気付いて、トモはゆっくり体を起こしました。近くで見ると、物凄くだるそうで、目が潤んで顔に汗が浮いています。熱がある?
聞こうとしたら、トモがゆっくり口を開きました。

「リョータ、浅井さんにお嫁にいったお市さん知ってるよね」

「は?」

知ってるけど今何でそんなこと?やっぱ熱でおかしくなってる?

「お市さんが兄の信長さんに小豆袋を贈った話をしてたよね」

いつだったか忘れたけど、確かにしました。
朝倉家を攻める信長にお市が両端を結んだ小豆の袋を贈って、夫の浅井家が挟撃しようというのを知らせたので、織田軍はなんとか逃げられたっていう――金ヶ崎の戦い。

今、言うってことはそういうこと？マジでか。

「罠です、多分どこかに兵を隠してます」

すぐ回れ右してボッシュさんに言うと、小さい笛を吹きました。
突入の合図。

変な音がしたのでそっちを見ると、何か黒い煙が部屋に広がっていきます。ナニコレ、煙幕？
咄嗟に動けずにいると、部屋の壁が開いていかにも悪そうな覆面男達が乱入してきました。
こちらの騎士が応戦に向かいますが、敵のほうが多いような。

とにかく、トモを救けなきゃ。改めて一歩踏み出した途端に、後ろから掴まれて引き戻されました。

ぎらり、と何かが目の前を横切りました。

僕と入れ替わりに前に出たボッシュさんが、剣を構えて睨み付けるその人は、黒づくめで覆面で、得体の知れない忍者みたいな奴でした。

周りでは剣を打ち合う金属音や叫び声、物が壊れる音が引っきりなしに聞こえてきます。

恐怖と焦りで口の中がカラカラになって、何か言いたいのに動きません。

でも、それでも、トモを救けなきゃ。

ボッシュさんに促されて、トモの方へ向かいます。

ハウィットに抱えられて、ぐったりして、首が・・・首輪と鎖に繋がれて、あのトモが、気持ち悪い奴に捕まっている！

走りだしたいのに、なぜか足が重くてもどかしい。

そんな僕を、あいつは嘲笑うような余裕の表情で見下ろしていました。

「ふ、ふふふっ。ちょっと焦ったよ！でも、いい具合に効いてきたようだね。半信半疑だったけど、姉弟揃って飼えるなら相応の値だったなぁ」

「くっそ、お前、人の姉に何してくれてんの?!手ぇ放せよ」

こいつは、危険人物でしょう！この状況で笑ってられるなんて、神経疑いますよまったく。

ちらっと見ると、騎士達はは煙にまかれて劣勢のように見えます。この煙、吸い込んでどうこうというよりも、物理的に、足腰に絡まってきてる気がします。

ボッシュさんはでかい忍者みたいな人と戦ってて、助太刀できる雰囲気はまるでないです。なんかもぅ別次元?映画の殺陣みたいで近寄れません。

唾を飲み込み、有りったけの声で叫びました。

「ロボっ！二階に来て！」

もしかしたら突入班の皆と戦ってるのかも。でも聞こえるはず。あんなに耳長いんだし。

「トモを、放せ」

僕が言いたいことは、ただそれだけなんです。

ハウィットがまた何か言おうとした瞬間、窓が砕け散って、キラキラとしたガラスと共に巨大な獣が降り立ちました。

いつもよりも毛が逆立って体を大きく見せて、その上銀色のように

明るく輝いています。
興奮度合いを示す耳はピンとして横に広がり、いつもは長い毛に隠れて見えない真っ赤な目が爛々として。
ああぁカメラがあれば！
なんて格好良いんだロボ！
僕の期待に答えるように、ロボは口を歪めてから、咆哮しました。
部屋中に、屋敷中に響くような咆哮は、例えるならライオンが、狼の遠吠えをしているようなとんでもないものでした。狼王の名前を付けた甲斐がありました！ムービーも撮りたかった！

窓からの風と、ロボの咆哮に押されて逃げるみたいに煙が部屋から消えていきます。
ロボの迫力に押されて固まっていた人間も、再び戦いを始めました。
もちろんあの御方も動かないわけがないのです。

「そこの毛玉、うっさいのよ。頭にガンガン響くでしょうが」

口を開いて固まってるハウィットの腕の中で、姉はしっかり立っています。それに奴が気付く前に、首輪に繋がった鎖を持って引っ張りました。

「あ、待て！」

間抜け面が、気付くの遅いんですよ。
奴が引っ張り返した瞬間に手を離すと、不様に仰向けに転がりまし

た。よし。

「ロボ、踏んで」

のし、と大きな脚で踏まれた挙げ句、顔を嗅がれて震えだすハウィット。みっともなく泣きそうですよ。爆発すれば良いのに。

ふらふらとへたり込むトモを支えると、やっぱり全身が熱いです。３９度くらいあるんじゃないでしょうか。

「リョータ、苦しい」

「遅くなってごめん、でももうすぐ帰れるから」

「気持ち悪かった。主に精神的ダメージを受けた」

「そう…ロボ、もうちょっとこの辺踏んどいて」

二度と使えなくなればいいですね。後世のためにも。

やっと取り戻した姉をぎゅーっとしました。大きくなってからはあんまりハグしなかったけど、たまには。泣き顔を見られたくないというのも一因ですが。

「降伏しろっ」

ボッシュさんの声に我に返ると、まだしぶとく戦っている奴らがいました。

とくに、忍者っぽい人はまだまだ元気なようです。

援軍も来て粗方縛り上げられているなか、二人の戦いは激化していました。

○　○　○　○

灰色毛玉のオタケビで、目が覚めた。ちょっと意識がとんでたみたい。

私が考えた暗号はリョータに伝わったみたいだけど、結局戦闘になったね。

金髪野郎は私を支えて立っている。胸に当たってるんですけど？

ふ、とリョータがこっちに近付いて、鎖を手に取る。上手いこと変態男の隙をついて、私はようやく自由になった。

熱がなければ飛び跳ねたいくらいの喜びだけど、野郎から離れるので精一杯。その場に座り込んだ。

ようやく、帰れるんだ。

ようやく、弟に会えた。

怖くて気持ち悪いのも、もうおしまい。
部屋に獣が居ようが構わない。安心はプライスレス。救けに来てくれたし。

それからリョータと抱き合って泣いた。わんわん泣いてはない。ぐすっ、程度。

ギンッ、と非現実的な音がする。
ボッシュさんの声がした気がしてそっちを見ると、長い剣を振り、競り合い、ボッシュさんと覆面忍者が戦っていた。

ファンタスティック。

まるで映画のような美しさなのに、誰も間に入ることのできない殺伐とした空間がそこにある。
怖いのに、目が離せない。というか、それしか目に入らない。

怪我してほしくない。でもボッシュさんが来てくれて嬉しい。

きっと、マリオを待つピーチ姫はこんな気持ちだ。
メチャクチャ幸せ。

ボッシュさんが忍者の剣を弾き飛ばして奴がよろけた瞬間、なんとボッシュさんは自分の剣も捨てて、奴の腕を掴んだ。

「あっ」

私も、多分見ていた皆が異口同音に叫んだ瞬間。
忍者はくるりと床に倒れこんでいた。一緒に練習した小手返し。
周りの騎士が飛び掛かるようにして、忍者を縛り上げた。

ボッシュさんが剣を拾ってこっちに来るのを、私はぼんやり見ている。熱のせいか、他の要因か解らないけど、ぼーっとしてただ見てるだけ。

リョータがごそごそして、首輪を外してくれたのもよく解らなかった。

目線の端で、ロボに馬鹿様を引きずらせているのが見えた。

「トモ？」

優しい、低い声。
大きな手が濡れたほっぺをこすってから、首にそっと触った。やっぱりこの手なら全然嫌じゃない。
首輪が絞めた所が痛い。擦り傷になってるかも。

「遅くなってすまん。迎えに来た」

耳元で聞こえる声。

抱き締められて、頭や背中を優しく撫でられていた。暖かい。
色々言いたいのに言葉が出なくて、とりあえず顔をぐりぐりと大きな胸元に押しつけた。あぁもう解ってくれるかな、この嬉しさとかさっき格好良かったとか。大好き、とか。
ボッシュさんがため息をついて、両手で抱き締めてくれたところでその幸せは途切れたけど。

○　○　○　○

騎士の側には死者は出ませんでした。そのかわり軽傷者多数ですが。
ボッシュさんとマイヤーさんは無傷でしたが。怖。

レヴァイン家の家族は、奥さんだけが出てきて異議申し立てをしていました。
曰く、どこの馬の骨とも知れない小娘を息子が拾ってきたののどこが悪いの？みたいな。
止めてくれなかったらあのオバサンを殴ってたかもしれません。反省。

騎士達によると、ロボは大活躍だったらしいです。運動不足だったんでしょうかね。

捕まえた下っぱの人は、寝起きしていた小屋に閉じ込めて、後日取

り調べるそうで、何人か監視のために残ることになりました。

ハウィットと忍者は馬車に閉じ込めて一緒に砦へ連れて行くそうです。ロボの恐怖から復活した後は散々僕らの悪口を言ってたので、道中の扱いが荒くなりそうですね。

忍者は、もちろん忍者じゃなくて、雇われ兵士でもなく、なんとハウィットの異母兄ということでした。突入前に噂していた、当主の隠し子の中の一人。なんであんなダメ弟の言いなりになってたのか。あの人にも言い分はあるんでしょうけど、他人を虐げていい理由は誰にもありません。
だから僕はそれ以上のことは聞きませんでした。

レヴァイン家から無理矢理借りた馬車に、僕とトモとロボは乗っています。
アガサさんが持たせてくれた外套にくるまってトモは横になり、僕の膝枕で寝ています。固いとか高さが悪いとか文句を言いつつ。
僕らの足元にロボが丸くなって、犬懐炉として活躍しています。ふかふか。

「チートがよかったね」

出し抜けにトモが言いました。

「魔法が使えたりも羨ましいね」

異世界トリップしたことについて話すのは、ルールを決めて以来です。意図的に避けていました。

「これからは、少しこの世界について勉強してもいいかもね」

目を閉じて、トモが言いました。

僕達は一歩進めるのかもしれません。

砦の外を知ったから。

こんなことがなければ、塀で囲われた空間だけで終わるところでした。

血の繋がった家族は二人しか居ないけど、それ以外の家族が頼もしいと解った今は、なんでも出来そうな気がします。

幸せな気分で家に帰りながら、僕も目蓋が重くなりました。やっと安心して寝られます。

26・善行は堂々と（後書き）

ようやく皆で帰ることが出来ました。

トモはここにきて乙女回路発動です。言動が若干おかしいのは熱のせいでもありますね。

27・今時の若いモンは（前書き）

姉　ボッシュ視点です

27・今時の若いモンは

砦に帰ってから、5日間寝込んだ。
その間、皆にそれはもう甘やかされて、逃げ出したいくらいだった、うん。
ジルさんは特別にご飯を作ってきてくれて、特にフレンチトーストとパンプディングの中間みたいなやつがすごく美味しかった！甘かったけど。なぜかジルさんは私達をもっと太らせようとしているらしい。
まぁ、胸だけ太ってくれるなら嬉しいけどね。

久しぶりに外を出歩くと、会う人がやっぱり喜んでくれてるのが伝わってきて、くすぐったい。
リハビリがてらてこてこ歩いていると、よく会う騎士3人組に会った。弟によると、私を救けに来てくれてたらしい。
ボッシュさんしか目に入ってなかった。

「先日はどうも、お世話になりました」

お礼を言ってお辞儀をすると、なんだか顔を見合わせている。

「固い！固いよトモ！」

「そうそう！もっとこう、ありがとう、お兄ちゃん！ガバッ、みたいにね～」

「ボッシュさんに殺されるような気がするけど」

相変わらずテンション高いなこの人達。
よく見ると、あんまり歳変わらないんじゃないかな、て思えてくる。

「皆さん、お幾つなんですか」

よく会うし話すけど、根本的に名前も何も知らないんだよね。皆でかくて、１８０は越えてる。よく肉食べてるから？

「あ～そっか、自己紹介まだだったね！俺はセオ、１９歳」

「俺はクルト、２１歳」

「俺はイアン、１９歳」

セオは焦げ茶色の髪で灰色の目、ちょっとたれ目で悲しげな顔つき。性格は違うけど。だいたい、いつもセオから話し掛ける。リーダー格かな。
クルトは一番背が高くて、全体的に四角い。綺麗なプラチナブロンドを短く刈り込んでて、ちょっともったいないなぁ。目は明るい青色。言動が一番幼いというか、馬鹿っぽいけど年上だったんだね。すぐ可愛いと言うのが口癖の人だ。
イアンは癖のある赤毛で、目は青紫っぽい色。一番の美形だけど、すぐ大口開けて笑いだす――笑い上戸。止まらなくてたまにどつか

れているのを見たことあるよ。

3人とも、なんというか世界のどこに行ってもいるような、悪ガキって感じ。

「お前ら、こんなとこで何をやってんの～」

「トモ、もう出歩いて大丈夫なんだね！元気になってよかった」

4人でとりとめのない話をしていたら、パイクさんと知らない騎士が来た。

パイクさんはあの時、ボッシュさんのお父さんと宮廷へ行って、1人で手続きとか裏工作をしてくれていたらしい。なんか意外だけど交渉が得意らしい。
実は腹黒なんだろうか。

「お嬢ちゃん、良かったなぁ、怪我もたいしたことなくて。リョータが活躍したの誉めてやったか？」

なんだろ、この人。なぜか関西弁ぽく聞こえるよ？

「あ、この人はマイヤーさんだよ。怖いけど取って食ったりはしないからね」

その説明はどうかと思うけど、パイクさん。
マイヤーさんは３０代かな、髪も目も黒で、肌は焼けてなくて白いけど所々古傷が見える。若い頃ヤンチャしました、みたいな妙な迫力があるよ！背はあんまり高くなくて、リョータと変わらないんじゃないかな。

なんとなく見ていると、目が合って、ニッと微笑まれた。笑うと若く見える。２０代かも？

「そうそう、これ、ボッシュに届けるとこなんやけどお嬢ちゃん頼まれて？」

疑問系での命令ですね！
条件反射で手を伸ばすと、布のかかったバスケットを渡された。結構ずっしりくる。

「何ですか、これ」

興味深そうにセオが覗き込むと、マイヤーさんは開いた手を腰の剣の柄にひっかけて、もう一方の手で布をめくった。

「カールからご褒美の酒」
「あとマルキン先生からのお手紙だよ」

マイヤーさんとパイクさんが続けて言う。ん？

「カールさんて、どなたですか」

どなた、てのはおかしいかな。えーと。

「あっ、カールは隊長ね。ラーソン隊長」

一瞬3人組がシーンとなった。こいつら自分の上司の名前も知らなかったのね。てか、隊長を呼び捨ての人に初めて会った。マイヤーさん偉い人？童顔なの？

「先輩は今日は休暇だから部屋にいるよ。じゃあね」

あっさりパイクさんは行ってしまい、マイヤーさんも手を振ってさっさと引き返してしまった。あれ、私場所知りませんが？

「じゃあ行ってみよう！」

お名前ショックからすぐに立ち直ったクルトがそう言うと、あとの2人もノリノリで私の手を引いたり背中を押したりと歩き始めた。こいつら、仕事中じゃないの？

「ここがボッシュさんの部屋で～す」

砦の中に戻って部屋に着くと、なぜか声をひそめる3人組。
イアンは軽くノックして返事がない扉の前で、ごそごそ懐から小さな針金のようなものを出して、にやりとした。

「先輩は、休みの日は寝てるか読書してるかで、滅多に部屋から出てこないんだよ」

扉の前でなぜか皆でしゃがんでひそひそ話している。なんなの、この状況？

気が付くとイアンが針金でドアノブの辺りをカチャカチャしているので思わず止めようとすると、逆に2人に口を押さえられた。

「先輩疲れてるから！褒美をトモが持って行ったら、この上ない癒しでしょ～」

セオが言うと、クルトも頷く。いや、それと無断侵入がどう繋がるか解らないんだけど？

「ささ、トモ、行っちゃって」

語尾にハートが付きそうな感じでイアンが促してきたよ。もう開いてる！単純な構造とはいえ早い。
もしかして常習？

軽く開いた部屋を見ると中は静まり返っている。もしかしたら留守かもしれないし。
ちょっとどんな部屋か気になるし。

背中に頑張って～という小さな応援を聞きながら、忍び込んだ。
怒られたら道連れにしてやるから。

部屋は私達のと同じくらいの大きさで、そこを1人で使っているようだった。　ベッド、本棚、机、椅子、クローゼットが壁ぎわに配置されている。殺風景。男の部屋って感じ。

ボッシュさんはベッドの上に座って、壁にもたれて本を広げていた。

居るし！

心臓がバクバクする。

そっと近づいて、バスケットを差し出してみた。

「お、お届けものですよ」

声をかけても反応がない。本に夢中なの？
じりじり近づいて様子を伺う私。いや、なんで足音消してるのか。

ベッドの傍まで行くと、どうやらボッシュさん寝てるみたい？

そっとバスケットを机において椅子に座って観察。
ほんとに寝てる。
顔色悪いし、疲れてるんだね。私のせいか。

斜めになった顔に窓から弱い陽があたって、睫毛の影ができてる。
こうして見ると、綺麗な顔の人なんだなぁ。目を閉じると表情変わるよね。

そっと顔を近付ける。

まだ起きない。

「起きないんですか～？悪戯しちゃいますよ～」

こそっと言ってみる。

起きないねぇ。

髭の生えた眠り姫って笑えるけど。起きてくれると嬉しいな。

できるだけ、そっと、私の騎士にキスをする。

○　○　○　○

トモの捜索から砦に帰り着くまで不眠不休だった。

レヴァインの屋敷で彼女を取り戻した時には安心のあまり気が遠くなりかけ、やばかったな。

しかしトモは健康状態が悪く、砦に戻ってからもなかなか回復しなかったので心配でろくに眠れなかった。

リョータも戻ってから倒れたしな。２日程休ませたら回復して、トモには絶対言うなと頼まれたので秘密にしている。

不愉快な事件はパイクが上手くやったようで、貴族には珍しくきちんと裁かれるようだ。

雇われていた男達はほぼならず者といったところで、厳罰に処されるだろう。

俺と戦ったあの男の腕は惜しいと思うが、どうにもまともではない様子だったので自由にはならないだろうな。

あの不愉快な男は、廃嫡されて、よければ幽閉されるだろう。あれが野放しにされるのはどうにも許しがたい。

今日は久しぶりに丸１日休みなので、本でも見ながらゆっくりしよ

う。

いつのまにか眠っていて、人の気配に気付いて捕らえてみれば、トモだった。

これは、まだ眠っているのだろうか？

自分の部屋に入れた覚えはないし、鍵をかけていた。

顔に触れてみると、柔らかくて暖かかった。

「あのぉ、起きてます？」

不意に目の前のトモが口を開いた。

手を俺の目の前で振っている。

「俺の部屋で何やってる」

寝起きの頭で問い掛けてみると、困ったような顔をされた。

「それより、苦しいです」

言われてみると、俺はトモの上に跨り、腕を掴んで押さえ付けていた。寝台の上へ。これではまるで――。

「すまん！お前だとは」

慌てて飛び降りたが、まずいことに腕を掴んだままだった。

「うわっ」

不様に床に転がるのがわかり、せめてトモが体を痛めないように抱き込んだ。

彼女を抱えて、ようやく力を抜けた。
細い体は上手い具合に俺の上から落ちずに済んだようだった。下敷きにでもしていたら、死ぬかもしれないな。

「そろそろ放していただいてもいいですよ」

顔を赤くしたトモが言う。
細い体は意外に柔らかくて手放したくなかった。

「ん？寒いから丁度いい」

冗談めかして言うと、じたばた手足を動かし始めた。

髪の毛が首にあたってくすぐったい。そっと払うと、白い首筋と、痛々しい傷跡が目に入り、思わず唇を寄せていた。

トモはいつのまにか抵抗をやめて、くったりと猫のように伸びていた。

「トモ？」

抱えたまま上体を起こして顔を見ると、さっきよりも真っ赤になっている。

「く、首はダメ。首は」

繰り返す姿はとても弱々しく、どうにも解放する気になれない。首が嫌ならば。

「こっちならいいか？」

そっと唇を親指で押さえると、じっとりと上目遣いで睨んでくる。

「さっきボッシュさんが寝てる時にしたもんね」

なぜだか勝ち誇って言われた。

自分でしたということは許すということだな？

細い体をもっと抱き寄せ、仰け反る顔を追うようにして口付けした。

前回はジジィに邪魔されたから、今度は出来るだけ、長く。

何度も唇を重ねて、最後に少しだけ、トモの甘い舌を味わった。

「これ、隊長からのご褒美のお酒ですって。こっち、ボッシュさんにお父さんから手紙だそうです」

ややぎこちなく差し出されたそれらを見る。

これを持って来たのか。

一応手紙に目を通すと、相変わらず馬鹿らしいことしか書いてなかった。

『子供は早いうちに、男女2人づつ』

細かく破って捨てる。

「そう言えば、よく部屋がわかったな。誰かに連れて来てもらったのか」

トモはなぜか視線をそらせて唸った。

「鍵もかけていた筈なんだが」

さらに首をまげて天井を見つめている。

「トモ？誰と来たんだ？」

指の背で首を撫でると、面白いくらいに飛び上がる。顔を両手で挟んで見つめると、あっけなく白状した。

「マイヤーさんが持ってって、て言って、セオとイアンとクルトに案内してもらって、それでイアンが鍵開けました！」

そうかあいつらか。いつもつるんでくだらない事に精を出している3人組。

「ボッシュさんは好かれてるね」

ちょっと違うと思うが。
まあ、トモを送り込んだのはよしとしよう。特別訓練でおせっかいの礼をすることにしよう。マイヤーは面倒だっただけだろうな。部屋の位置が真逆だ。

「部屋に送ろう」

声をかけると嬉しげに目を細める。

ジジィの言う通りなのは癪に障るが、この子は得難い宝のようだ。手の中で大切に守るとしよう。

27・今時の若いモンは（後書き）

ようやくイチャイチャできました。
頑張ったボッシュさんにご褒美です。

悪戯トリオは好きなキャラです。仲が良くてその辺の学生さんみたいな、トモ達にとっては馴染みやすいお兄さんです。
単体ではそれなりに有能なのですが、揃うと途端におバカになる、そんな感じです。

28・事件の影響（前書き）

ずっとリョータがだべってます

28・事件の影響

最近は昼がずいぶん短くて陽の光も弱々しくなりました。晩秋か初冬といったところでしょうか。
これからの季節、どんどん寒くなって雪も結構積もるようです。

あの事件からまたしばらく経ちました。
結局、ハウィットは家から出されて、貴族から犯罪者がでた時に閉じ込める豪華な牢獄があるそうで、そこに幽閉されたそうです。

雇われていた人達は、余罪がある人がほとんどで、処刑されてしまったということでした。扱いの差が激しいような気がするけど、それでもこの国は余所に比べて身分差がゆるいらしいです。
あの、とても強かったハウィットの義兄は、貴族扱いにはならずに普通の牢獄にいれられたということで、牢獄で１０年、強制労働。
あの人は特に抵抗もせず、淡々と刑に服したとか。

同じ罪なのに、義理とはいえ兄弟で扱いが違うのは納得がいかない、とトモは暫く文句を言ってました。主犯と従犯ということを考えたらちょっと、とも思ったんですけど。父親の意向が影響して、跡取り息子と隠し子への刑にあれだけの差がついたんですね。これまでもそんな感じだったんでしょう。どんな人か知らないけど父親としては最低だと思いますね！
でも、まぁ、僕としては姉をモノのように扱われて、救けられなかったらどうなってたか、と考えると、とてもじゃないけど同情なんて出来ませんし。ハウィットには雷でも落ちてハゲればいい！
王様の口添えがあったとはいえ、大貴族の跡取りを裁判にかけて、しかも勝ったのは珍しくて、割と大事になってしまったそうで、司

法関係の人が大喜びで一晩酒盛りをしたとか。
でも、逆恨みされそうでちょっと怖いです。

今回の件で、砦内にも影響がありました。

姉とボッシュさんは、前よりもこう距離が近くなったというか。
前までは明らかに両想いなのにくっつかなくて周りが赤面モノだったのが、今はくっついたけどそんなにベタベタしなくて、でもボッシュさんは姉に近づく人を威嚇するし～。健全な中高生のお付き合いレベル？
テレビで見たけどアメリカのハイスクールの生徒のほうが進んでると思う。
まぁ、いいんですけど。

強力な第2の父も出来ましたし。未婚の父。なんだか申し訳ないですけど、すごい後ろ盾ゲットです。

ボッシュさんのお父さんはなぜか早く2人を結婚させたがっていて、よく手紙で催促してくるようです。僕達読めないですけど。
見た感じは渋い、歴戦の騎士って感じの人だったんだけどなぁ。ボッシュさんにそう言ったら、遠い目をしていました。パイクさんはボッシュさんと同じくらい尊敬してるみたいで、ベタ誉めでした。

パイクさんといえば、お城で色々な交渉を成功させ、株を上げました。僕達を隊長の養子扱いにしたのもその一環だったようで、あの手この手で王様を凹ましていったということです。父の手紙に書いてあったとボッシュさんが教えてくれました。

パイクさんてただのお人好しじゃないんだ～。
実は出来る男なんだ～。
前に、特に騎士を目指してたわけじゃないと話してくれたけど、外交官が向いてるんじゃないですかね。

男を上げて帰ってきたパイクさんは――食堂では相変わらずですが。
なんでジルさんには弱気なんでしょ？
最初にちょっと疑った通りジルさんはどうも意図的にハーレム状態を維持してたようだから、頑張らないと負けちゃうと思うんですよね。

レオさんは色んな人に声をかけてるから、ジルさんが多分選ばないと思うし。

ケラーさんは、パイクさんが王様にポンプのことを紹介したので、本格的な開発へ向けて日々忙しいようです。
ん？
パイクさんの作戦？

番外編・小さな小さな呟き

あたしは
『うつくしいこえ』
　　そうよばれていた

森の中でとびながら
　尊いいのちのために
ただ　歌っていた

気がついたら違う森で、風にあおられて木にぶつかって乾いた大地におっこちたのよ！！

二本足に救けられたけど
羽は元に戻らなくて
　四つ足に食べられかけて箱に入れられた

今は　ただ　歌うだけ

　二本足が喜ぶから

あの四つ足は許さないわ！あれはどうも匂いで意志を伝え合う種族で、あたしにはどうしようもないのよね

細長いのは話が通じそうだけど、どうも年寄りくさく無関心
だからもうあたしはただの歌を歌うだけ

　最近二本足の子供が
あたしの歌を真似る
　あたしを呼ぶときに
へたくそに　ピルル
　口をとがらせて
高くほそい音をだすもんだから

たまに一緒に歌ってあげる

飛べなくても
　そこそこ楽しいわ

番外編・小さな小さな呟き（後書き）

知能は

ピルル＞モップ＞ロボ

鳥は影薄いですが。

29・花には毒あり刺あり（前書き）

姉視点

29・花には毒あり刺あり

「だからぁ、愛があってこその結婚じゃないかぁ」

果実酒を飲み干し、グラスを机に叩きつけてアガサさんが言う。

「愛なんてぇ、そんな、不確かなもの信じられない。愛が覚めたら捨てられるじゃないのよぉ」

グラスを両手で握って、マイクのように口元で固定して、ジルさんは唇を尖らせた。

「そんな、ジルさん～。愛を疑うなんて！ずっと愛せる人を見つけたら、いいのですよっ」

涙目で、若い文官のお姉さんが言った。名前は知らないけどたまに見かける人。
なぜか両手に酒瓶を握っている。

私はベロベロの3人のお酒に水を混ぜながら逃げ出す機会を伺ってるんだけど、アガサ姐さんは流石に騎士だけあって、酔ってても隙がない。腰を浮かすとギラリと目を光らせて、私を見た。

「トモ～？どこ行くのさ」

「あ、おつまみ、もらって来ようかな、と」

他の2人もさっとこっちを見たので慌てて誤魔化す。

「あ～？いいのいいの。若い奴に取って来させたら。ほら、誰か料理取ってきなよ」

この酔っ払い達どうにかしてほしいんですけど。

救いを求めて食堂を見渡しても、視線をそらされた。いつもなら呼ばなくても女子のテーブルに寄って来るやつらが、今夜は遠巻きに見てるだけ。弟は眠いと言ってとっくに逃げた。

パイクさん達は仕事。まだ戻らないのかな～。私どれくらいからここに居るんだろう。

「自分が求める、最っ高の条件に合う男とぉ、一緒になれたら幸せでしょぉ」

呂律の回らなくなってきたジルさんがそう言った。

言っちゃったよ、この人！

パイクさん居なくてよかったよ！泣くかもね？

「ジルぅ、あんた」

流石の姐さんも絶句。

そしてなぜか私を見た。

目、すわってる。

「トモ、あんたはどうなんだいっ？」

「相手が自分を好きで、自分も相手を好きだったらいいと思うけど。ご飯が食べられたら、それでいいんじゃないかと」

いくら好きでも、３食食べられない生活はちょっと。

私の返事を聞いて、なぜか姐さん達に抱き締められ、窒息しかけた。

ホントもう勘弁して～。

解放されてゼハゼハ言う私にグラスが差し出されたので、つい飲んでしまった。

「げほっ、これ酒じゃん」

喉が熱くなって、次に胃に移って、最後に全身が熱くなった。

どきどきする。ちょっと甘めの味。リンゴのような、さわやかな味。

て、いやいや、未成年ですよ私。

「あら、トモさんいけますね？おいしいデショ」

やたら色っぽくなった文官のお姉さんが、握り締めた瓶から新たにお代わりを注いでくる。

「私、未成年だから！」

止めようとすると、首を傾げられた。

「17歳でしょ。飲めるじゃない。いいじゃない」

ジルさんも迫ってきた。

あっちの世界でも早い国は16とかだったかな～。
住んでる国の制限でいいのかぁ？

また一口飲んでしまった。

「ジルさん、さっきの話ですけど。パイクさんならぴったりじゃない」

私が言うと、アガサ姐さんも腕組みして深く頷いく。

「顔よくって、家柄よくって、ちゃんと働いてて、それから、性格よいでしょ～なによりなにより、ジルさん大好きじゃな～い？」

「そうそう。あいつはいい奴だよ、うん。ちょっと頼りないけど、一般人よりは十分強いからぁ」

「だってぇ年下だし。まさか領主しゃまの一族だとは思ってなかったぁ」

あ～もうこの人たまにうざいなぁ。

「さっきと言ってること違うじゃん。なにをうだうだ言ってんの。結局、ジルさんはパイクさんのこと好きなんでしょ？」

言いたいこと言ってすっきり。

おつまみの皿から、ピリッと辛いピクルスを摘んで食べて見た。んまい。

何の野菜か解んないけど。

だから、周りが静かになっているのに気が付かなかった。

座っている私の肩に、誰かが大きな冷たい手を置いたので、飛び上がりそうになった。心臓止まるでしょ！

後ろに振り向くとボッシュさんだった。隣には真っ赤になったパイ

クさんがつったっていた。

「おかえりなさいー」

顔を見上げてそう言うと、怖い顔をした。あれ？なんでか怒ってる？

「お前等…こんな時間まで酒盛りか。しかもトモまで飲ませて」

「女だけだと、話が弾むのさ。ねぇ～」

姐さんが可愛く言った。
ぷぷぷっ。

笑いを堪えていると、ボッシュさんに抱き込まれて、持っていたグラスを取り上げられた。
まだ残ってるんですけど？気に入ったんですけど？

じっと見上げて目で訴えてみると、でかい手で顔を押さえられた。
なぜにアイアンクロー？

あ～でも冷たくて気持ちがいいかも。

ボッシュさんの手のひら越しに、皆の会話が聞こえてくる。

「私達、理想の結婚について～、議論してたんです。男性の意見も、聞きたいですっ」

「えっ、あの？」

「まぁ～、パイク、どうなのさ」

酔っ払いに絡まれて困っているパイクさん。
さっきの聞こえたかなぁ？ジルさんは机に突っ伏して動かなくなってる。寝ちゃったのかなぁ？

「ふぁいくしゃん、じるしゃんをおふぇやにつれてってあげたら」

顔を塞がれたまま発言すると、後ろのボッシュさんがびくっとした。

「えぇぇ、トモ、何言ってるのかな？」

パイクさんが聞き返すのでもう1回言おうとしたら、酔いどれ姐さんズが手を叩いて色めきたった。

「そうね、パイクさん、ジルさんを送ってあげて！」

「ふらついてるから、しっかり送ってやんなよぉ？」

送っていかなきゃ分かってんだろうなぁオイ、という心の声がはっきり聞こえたよ。そのまま2人は帰っていく。足元しっかりしてますね。

クイクイと、ボッシュさんの袖を引くと、ようやく顔が自由になった。ふう。

机を見ると、パイクさんが優しくジルさんを介抱してあげてる。やっぱパイクさんて王子キャラかも。

何となく見ていると、ふわりと椅子から抱き上げられた。食堂に残っていた人達から小さなどよめき。ゴルフ場のギャラリーみたいな。

空中でふわりと横向きにされた。

こ、これは。

お姫さま抱っこ！

ボッシュさんを見ようとしたら、脱いであった外套を頭からかぶされた。そのまま運ばれていく私。

食堂から遠ざかる気配がして、もそっと手を動かして顔だけ出した。

「窒息しますよ」

意義を唱えると、立ち止まった。それから無言で睨んできてたので

声をかけようとしたら、いきなり顔が近づいた。

「…んっ…」

お、大人のキスでした。
逃げられない時にするとは卑怯なり。

ボッシュさんは小さくため息をついて、私を見た。

「トモは酒を飲むな」

えぇー。あんなにみっともなく酔ってないのに？

そう言うと、今度はほっぺたにキスされた。そのまま耳元で囁く。

「俺の前ならいい。そんな顔を人前で見せるな。襲われる」

やっぱり心配性だね。
てか、今襲われてる。

段々、目がしぱしぱしてきた。眠いかも。

寒気がして震えると、きつく抱き締められた。

それから、目蓋に優しいキス。
唇に、今度はちゅっ、と短いキスが落ちてきた。
ボッシュさんてキス魔？

そのまま眠っちゃって、次の日朝起きたら自分の部屋だった。

微妙に記憶があやふやだ。
ジルさん達どうなったのかな？

でも女子だけの飲み会は楽しかった。

またやろう。

29・花には毒あり刺あり（後書き）

各国により、飲酒年齢は違っています。

それぞれのお国の法律にそって、おいしくいただきましょう。

番外編・永遠の二番手（前書き）

なんでもそつなくこなす
目立たない男

番外編・永遠の二番手

皆さん、おはようございます。
私はガルニエ砦警備隊副隊長のハリー・リヴァン、４１歳です。
本日は私の独り言にお付き合いください。

私の職務は隊長の補佐でありますが、今は戦中ではありませんので主に総務を担当し、文官の長ケラー君と一緒に仕事をすることが多いですね。
備品の管理、食料の管理、管轄内店舗の監督指導等。ただ隊に領主の子息が在籍しているので、非常にやり易いです。
他の地域では、管轄と重なる地方領主に賄賂を要求されただのと、よからぬ噂があるものですから。

半年ほど前に『森』から出てきた姉弟は、最近ではすっかり砦に馴染み、皆から可愛がられています。どうもこの国の人間に比べると骨格自体が華奢で弱々しく感じられますが、出身国ゆかりの武芸を身につけており、なかなか興味深いことです。
うちの隊ではマイヤーに近いでしょうか。彼も小柄ですが恐ろしく機敏で、独特の剣技を習得しています。

そう言えば、２人は私と初めて会った時に、『ルイージ』と呼び掛け嬉しげにしていました。故郷に似た人でもいたのでしょうか？
望まずに故郷を離れるとは不憫なことです。

先だって、近領の若い貴族にトモ嬢が誘拐されるという事件がありました。
隊員の活躍により無事解決しましたが、禁制品の使用が確認されましたので調査が必要です。使用者が領主の後継ぎであったのも由々しき問題ですが、事件後幽閉されましたので本人への接触が原則として不可能なのが歯痒いことです。

甘やかされて育ち、頭の中に飴が詰まっているような者こそ厳しい牢獄で労働の辛さとすばらしさを叩き込めば良いと思うんですが。
トモ嬢は隊員のボッシュとお付き合いされているようで、たびたび噂を耳にします。
ボッシュは恐らく本気になれば隊長をも負かすでしょうが、殆ど彼の本気を見たことがありません。入隊時から苦労したようで、与えられた任務を消化するだけの無気力な青年となっていました。それでも訓練だけはきちんとしていたようです。

守るものができて、彼も成長すると良いのですが。

私も、離れて暮らす妻と子のことを思えば、単調な暮らしにも耐えられるというものです。

番外編・永遠の二番手（後書き）

本編には多分でない人です

実はジルの初恋の人

３０・いまさらですが（前書き）

弟　姉　視点です

30・いまさらですが

「2人には、王都へ行ってもらうことになった。雪が積もる前に行って帰って来なさい」

ある朝、久しぶりに隊長室に呼ばれた僕と姉は、ラーソン隊長に重々しく告げられました。

「あちらではフォザーギル家に滞在することとなっている。同行者はアガサ、ボッシュ、マイヤーの3名」

そこで姉がおずおずと手を挙げたので、隊長は無言で首を傾げて発言を促しました。

「ふぉざーぎる、さんてどなたですか」

「……ボッシュの実家だ。今はマルキン殿と、長男のロデリック殿がいらっしゃる。城に泊まるより安全であるし、気安かろう」

そう言って僕達を交互に見て、珍しく微笑みました。ボッシュさんのご家族はとてもとても気になります。どんなお家かチェックしなくては。

マルキンさんには誘拐事件でお世話になったのにお礼も言えてないし。

単純に、遠出が楽しみでもあります。遠足気分とでも言いますか。

同行者が、ボッシュさんはともかくアガサ姐さんとマイヤーさんという面子なのが不安な所ですね。
それぞれ皆、強すぎる個性とマイペースさを誇っているし。まぁアガサさんはトモの為の人選なんでしょうね、おとーさん。

「ボッシュさんのお兄さんかぁ…」

部屋に戻って来て、姉が首を傾げて呟きました。

「あんまり想像つかない。兄弟か。お兄さん1人なのかなぁ?でも末っ子って感じしないよね」

「確かに。家族の話とかしないの?」

僕が聞くと、困ったような顔をしてベッドの上で体育座りをしました。

「うん。おじい…マルキンさんの事を聞いたら遠い目をして、あれのことは聞くなって言うんだよ」

なんだそれ？親子仲が悪いのでしょうか。これはマイナスポイントですね。

ボッシュさんのお宅拝見はいいとして、ナマ王様に会うのはちょっと緊張しますね。王族なんて当然テレビで見たことしかないし、実際に統治をしている現役バリバリ。どんな人なんでしょうか。もっさりヒゲがあるイメージなんですが。

「そう言えばさぁ。この国なんて名前なんだろうね」

考え事をしていると、突然姉が言いました。

国名？

そう言えば知らなかったですね。

「まぁ、今更聞きにくいしその辺はスルーね」

話題を振っといて、姉はあっけなく打ち切りました。この辺は相変わらずです。まぁ、色んな人と話をしていたら、国の名前がでることもあるでしょう。

「マイヤーさんてどんな人なの？この前ちらっと会ったんだけど。隊長呼び捨てだったよ？」

「すごく強くて、よその国から移住？してきたらしいよ。なんかいっつも剣に触ってるんだ。すごく若く見えるけど…呼び捨てはすごいね」

変わった人多いよな、と思います。

よく姉にちょっかいかけてる3人組は、いたずらに命と騎士生命をかけているかのように、色んなとんでもない事をやっていますし。

ヒゲの副隊長さんを落し穴にはめたり、レオさんの練習用の剣の鞘に油を流し込んだり。たまに砦を抜け出して、綺麗なオネーサンのいる店に行ったり。

この砦の人が個性的なのか平均的に愉快なのか。

都に行くのが楽しみです。

○　○　○　○

「トーモー！都に行くんですってね、もう用意はできた？」

隊長から指令？を受けた次の日の夜、ジルさんがやってきた。

アガサさんから貰ったトランクには服とか下着とか適当に詰め込ん

である。それを見てジルさんは苦笑し、持っていた包みを手渡してくれた。

「化粧道具とか、細々したものね。アガサには借りられないわよ?」

女子は色々必要なのです。有り難く貰っていくことにしました。丁寧な手つきで荷物を整えてくれるジルさんに、気になっていたことを聞くことにした。

「この前の…パイクさん」

名前を言った途端、バン!とすごい音を立てて蓋を閉めたので、部屋の隅で遊んでいた弟と毛玉達が飛び上がった。びくびくしながらこっちを見ている。

「何もないわよ?」

引きつった顔で言っても説得力無いんだけどな。
じーっと見ていると、ジルさんの顔は段々赤くなってきた。

「ほんとだってば!あ、あんなことトモが言うから、なんか意識しちゃうのよ?最近」

てことは、やっぱり本気でパイクさんのことはなんとも思ってなかったのか。

「「不憫…」」

いつのまにか寄って来ていた弟とハモった。

「ジルさん、僕達がいない間パイクさんのことお願いしますね。ボッシュさんも行くから寂しいと思うんですよね～」

弟よ。微妙に失礼だと思うぞその台詞。あ、でもなんかジルさん頷いてる。
いいのか。楽しみだなぁ。

明日はもう出発だ。
やたら乗り気なアガサ姐さんが決めた。ボッシュさんは嫌そうだったけどため息まじりに頷いて、マイヤーさんはいつでもいい感じなことを言っていた。
姐さんは普段は砦内の警備だから、遠出が楽しみらしい。
やっぱ遠足のノリかな。

私も楽しみになってきた。
ボッシュさんの実家――ということは、ボッシュさんのお部屋！好きな人の部屋ってテンションあがる。

うふふふ。

「トモ、ボッシュさんが一緒で良かったわね」

立ち直ったジルさんがそう言って、1人でうんうん頷いた。

「マイヤーさんも強いし、安心ね」

ん？

「寒い季節って、薄暗いからかわからないけど、野盗が多いのよね」

なんですと？

「あの2人は騎士団の中ででも並外れて強いらしいから。やっぱり、隊長さんはあなた達を大事にしてるわね～」

感心したように言うジルさんを横目に、弟と顔を見合わせてしまった。

そう言えば初日に言われたわ。危ないからって。

ボッシュさんには初日から守られてたんだなぁ。パイクさんもだけど。うん。

何か恩返しができたらいいけど。
鶴や宇宙人だって受けた恩は忘れないのだ。

30・いまさらですが（後書き）

細かいことに拘らない姉弟です。
国名聞いたってどうせ知らないんだからいいかー、
というノリで放置していた二人。

31・かわいい子には旅をさせよ（前書き）

姉　ボッシュ　視点

31・かわいい子には旅をさせよ

ガタガタガタ――馬車は一定の速度で進んで行く。
この前の『輸送』と違って今回の馬車は座席がクッション張りになっていてお尻に優しい。
マイヤーさんが御者をしてくれていて、とても丁寧に馬を操っているし、でこぼこ道の前には声をかけてくれる。一見怖いけど、すごく気を遣ってくれているのがわかる。
窓を開けて外を眺める。

遠くの山のなだらかな稜線に、その向こうの尖った雪山。ぽつぽつと建っている石積みの家。刈り獲った後の麦みたいなのが所々に積んである。くわみたいなのを担いだ人が立っているのが見えた。季節が違えば作業が見れたんだろうな。

「のどかだなぁ」

無言で見入っていると、弟が呟いた。

いつのまにか夕暮れが近づいていた。

「おふたりさーん、ちょっと宿まで飛ばすで」

壁をノックしてマイヤーさんが言った。

小さな町というか集落があるらしい。
宿屋に道具屋、武器屋兼鍛冶屋、食堂なんかがあるらしい。ゲームなんかで勇者が最初に立ち寄る村みたいなものかな。

私達が先にそっちと接触してたらどうなってたんだろう？砦では前提として異世界の存在を知っていたからあっさり受け入れられたけど、そうでなかったら怪しい姉弟だよね。
殺されはしないかもだけど迫害必至？

「お腹すいたね～。晩ご飯何かな。楽しみだね」

弟が私の腕を軽く叩いてからそう言った。多分、不安になったのが解ったんだ。慰め方がロボと一緒なのが気になるけど、まぁ許してやろう。

急に馬の荒い鼻息が聞こえて、馬車が止まった。
やっと到着かな？
外がザワザワしている。

「2人とも、窓から顔出さずにしゃがんどいてな」

ちょっと厳しいマイヤーさんの声がしたので、おとなしくしゃがんで、弟と一緒に小さくなる。
緊急事態？そうなの？
早すぎない？

○　○　○　○

トモ達を護衛して、俺とアガサは馬、マイヤーは馬車に乗った。意外にも気を遣って馬車を走らせている。
時折、窓から顔を出して外の様子を熱心に見ている様子はいつもより子供っぽくて微笑ましい。

「ちょっと！先の道が塞がってるよ」

先行していたアガサが戻るなり、低く言う。

「倒木が何本か転がってたのよ。協力すれば退かすのは問題ないけど」

「事故か罠か～ってとこやな」

馬車を減速させながらマイヤーが受けた。罠だとしたら、盗賊か、もしくは先日の一件で恨みを買った貴族の回し者か。

何にせよ、あの2人には手出しさせない。

倒木の見える辺りまで近付くと、案の定、武器を持った輩に囲まれた。
人数は多いが、見たところ弓を持った者はいないのでなんとかなるだろう。

「騎士さんよ、大事に守ってるのは貴族様か？それともお宝か？怪我したくなきゃ馬車ごと置いてけや」

首領格か、強面の、おさまりの悪そうな髪の男が口を開いた。この様子ではただの野盗のようだ。数に任せて旅人を襲って、金品を強奪しているのだろう。

「どうする？お前は馬車に張り付いて番しとく？」

立ち上がって彼らを見回しながらマイヤーが言う。既に剣を抜いているので、これは手出しするなってとこだろう。右手に長剣、左手に小剣。

「アガサ、馬車の後方を」

今回は楽ができるな。俺は馬車に近付く不届き者がいたら相手してやろう。それまではマイヤーの剣舞を観るとしよう。

「たった3人でやろうってのか、舐めやがって」

男達は激高し、口々に喚きながら殺到した。
その直中に、馬車からマイヤーが舞い降りる。
着地時にまず1人、哀れな犠牲者を踏み台にしながら小剣を突き立て、そいつを蹴った反動で跳ね上がり、迫っていた剣をかわす。
くるりと回転しながら剣を握って突き出されたその腕を斬り落とし、今度は斧を振りかざした男のがら空きの脇に小剣を突き立てた。
あっという間に3人を戦闘不能にする。こいつには正直かなわないと思う。両手の剣を自在に操り、返り血を浴びないその早さ。変幻自在の剣技は到底真似できない。

「そっち行ったで～」

その言葉通り、血走った目の男が2人襲い掛かってきた。マイヤーに恐れをなして、こっちに来たのかもしれない。面倒な。
振り下ろされた幅広の剣を受けとめ、馬上から顎を蹴りあげた。徒歩で馬に向かってくるのが無茶なんだが気付いてないらしい。もう1人は尻込みした一瞬に叩き斬った。
後方ではアガサが着実に仕留めている。実に楽しそうな声が聞こえてくるのは気のせいだろう。
数も減ったのでもういいだろう。

「お前達、これ以上数を減らされたくなかったら、仲間を引きずって逃げるんだな。逃げるなら追わない」

そう声をかけると、残っていた連中はあっさり逃げ出した。早く手当てをすれば助かる者もいるだろう。

「つまらんなぁ。木ぃどかそうか」

どうもマイヤーは暴れ足りなかったらしい。俺よりいくつか年上らしいが・・・体力は余っているようだ。3人でさっさと倒木を転がして道の端へ寄せ、道に残った血だまりに砂をかけて隠しておく。

「俺だ、開けるぞ」

馬車の戸を叩き、そっと開いた。見てなくても戦いがあったことは解っているだろう、争いに不慣れな姉弟が心配だった。

2人は、馬車の床に座り込んで、互いの体に手を伸ばして小さくなって震えていた。

「……っ」

なぜか2人が猫に見えた。団子になって震えている子猫。
両手を伸ばして、2人の頭を撫でた。リョータの髪も柔らかい。

「な、なんの騒ぎだったんです?悲鳴とか」

リョータが恐怖を押し隠しながら聞いてくる。ならば知らぬフリをするのが礼儀だな。

「ちょっと襲われたんだが問題ない。マイヤー達が撃退した。真っ暗になる前に宿に着けるから、姉さんを頼んだ」

何も言わないトモを見ていると抱き締めたくなってくるが、なんとなくリョータの視線が痛いので撫でるだけにしておいた。

前回といい今回といい、トモは馬車で碌な目にあっていない。旅が嫌いにならねばいいんだが。

31・かわいい子には旅をさせよ（後書き）

ボッシュは萌えを覚えた

32・それは心の奥底で（前書き）

弟　姉視点です

32・それは心の奥底で

騒動の後、真っ暗になる前に町に着きました。いきなり強盗？に会うとは思ってもみなかったので、かなり焦りました。生の斬り合いは心臓に悪いです。暴力反対。

騎士が一緒だから、大丈夫だと思ったんですよ。だって警官や軍人をわざわざ襲う人はなかなかいませんよね！

騎士が一緒だから襲われないんじゃなくて、襲われても撃退できるということだったんですね。甘かったです。

「あそこで食事をしてから宿に入ろう。馬預けてくるから待っていろ」

ボッシュさん達は馬と馬車を預けに移動して行きました。心配そうに見ていましたが――だったら連れて行けばいいのに。トモはきょろきょろ見渡して、なぜか満足そうに頷いています。頭の中でナニがあったのかはよく解りませんが、ボッシュさんの注意は聞いていなかったのは確実です。

店頭で立ち話をしている男性や、大荷物を抱えた丸いおばさんなどを見ながらふらりと歩き出してしまいました。

「知らない町で勝手に歩くのは危ないよ」

「こんな小さな町で迷子になるわけないでしょ」

僕が心配してるのはそこじゃないんだけど。治安とかそういうことなんだけど。

「さっきのとこから見えてるし、遠くには行かない」

僕から目をそらして拗ねたように言います。ここで逆らうとどうなるかは身に染みているので、お供することにしました。

「ファンタジーだね！武器屋とかあるし。棒売ってんのかしら」

ご機嫌になって店を覗きます。店内の壁にはシンプルな剣や弓なんかが飾ってあって、品揃えはものすごく実用重視、に見えます。

石造りの建物を観察していると、姉に袖を引っ張られました。

「喧嘩してる？」

いや、聞かれても。
耳をすますと確かに男女の争う声がしています。
建物の間、狭い路地から。
暗い路地は犯罪の温床。
子供は絶対入ってはいけません！

引き止める間もなく、姉は人がすれ違うのがやっとの狭い空間に突っ込んでいきました。

「しつこいのよ！触んないでってばっ」

「やかましい、金は払うって言ってんだろうが」

う～わ～明らかに僕達場違いでしょう。大人の商談がこじれたか、痴話喧嘩って感じの会話ですよ。

姉の外套を引いて帰ろうとするのに、無視です。

どんどん近付いて、彼らが見える所まで来てしまいました。

ムサイおじさんと、やたら露出度の高いお姉さんが、腕を振り回してまだ小競り合いを続けています。

「ちょっと、おじさん。その人嫌がってるじゃない」

僕の気も知らないで、姉はフツーに声をかけてしまいました。

2人はびっくりしてこちらを見て、お姉さんはがっかり、おじさんは――まさにエロ親父という表情に変わりました。だから嫌だったのにな。

「なんだぁ、じゃあお前が相手してくれるのか？」

舌なめずりが聞こえてきそうな調子でおじさんが言うと、姉は冷然

と返します。

「するわけないだろタコ」

顎をつんと上げ、見下すような視線で。止めに入って怒らすってどうなの？

僕は咄嗟に踏み込んで、おじさんが反応する前にお姉さんと姉の腕を掴んで走りだしました。多分、タコの意味が解らないと思う。

路地から出て、少し大きな通りに戻ったので2人の手を放しました。少し明るいところで見るとお姉さんはなかなか美人さんです。ただドレスが、胸が半分くらい出ているのでどうかと思います。それに香水つけすぎ。お水の方でしょうか。

僕達には嫌な相手です。

「助かったわぁ、あいつしつこくって」

「無理矢理言うことを聞かそうとするのが嫌なだけです」

姉は無愛想にそう言うと、その場を離れようと僕を促しました。

その時。

「ガキ共、待ちやがれ！お前もだっ」

猛り狂ったおじさんが、路地からすごい勢いで現われました。さっさと移動しとけばよかった。
知らない町で逃げる方向を迷ったせいで、タイミングを逃してしまいました。
お姉さんが腕を掴まれ、僕が外套のフード部分を掴まれています。
脱げば逃げられるけど、お姉さんが危険です。ちょっと迷っていると、おじさんが更に絡んできます。

「そんな格好で、客引きの癖に逃げるんじゃねえ。そっちの生意気なガキ共も、一緒に買ってやろうじゃねぇか。さっさと来い！」

え、ガキ共って言った？僕も含まれるの？また？
ショックですよ。皆には男らしくなったって言われるのに。お世辞だったんでしょうか。

「うるさいやかましいこの甲斐性なしが。金を出さなきゃ女が寄って来ないやつが偉そうな事言うなばかばかばーか！あと弟を放せ変態！」

うわ～。嫌な所をえぐるような悪口ですね。珍しく大声なので、姉はどうもキレてるみたいです。
僕らを掴んでいたおじさんの手がぶるぶると震えて、突き飛ばすように放すと、言葉にならない叫びをあげて姉に向かって突進しました。
当然、僕は黙って見送るわけがなく、おじさんの足を引っ掛けて転

ばします。
前しか見てなかったおじさんは見事に前方にスライディングして、
蛙の鳴き声みたいな悲鳴をあげました。

「リョータ、確保」

いや、捕まえてどうするんだろう？
そう思いつつも、倒れたままのおじさんの背中に膝をついて、腕をとって関節を極めました。
本当、どうしよう。

困って辺りを見回すと、知らない間に人だかりが出来ていて、その中に見知った顔を見つけました。
怖い顔をしているボッシュさんと、その腕を拘束しながら爆笑しているマイヤーさん。
何なの。見てるなら助けてくれたらいいのに。

○　○　○　○

小さな町に着いて、ちょっとだけ探険してみた。町並みはほのぼのとしていて、まさに最初の町。
店先に吊した薬草？金属音の聞こえてくる武器屋。
想像通り。満足じゃ。

楽しく見学していたのに、なんだか不愉快な声が聞こえてきた。

オヤジの脅すような声と、嫌がる女の声。とっても不愉快。

弟は止めようとしたけど、止めるならあっちでしょ。
路地に入っていくと、やっぱりな光景だった。
エロい格好の女と、薄汚れた旅人風の男がもみ合っている。
商売の邪魔する気はないけどさ、それ以前に無理矢理は見てて嫌なんだよ。

声をかけるとおっさんはこっちにロックオンしたらしい。ああぁ気持ち悪い！この前の金髪馬鹿男を思い出して、固まってしまった。

「こっち！」

弟が、私と女の腕を掴んで走りだして、路地を抜けて出た。あぁ、グッジョブ。あとで誉めてあげよう。

息を整えていると、女の人が甘ったるい声をかけてきた。
別にこの人を助けようとしたわけじゃないけど。リスクは承知でそんな格好してるんだろうし。

ちょっと喋って、流石にもう戻ろうとした時、しつこくもおっさんが現われた。

「きゃあっ」

あっという間に2人が捕まる。おっさんは唾を飛ばして、ふざけた

事を言った。3人まとめて買ってやるって。

ほんっとに、ふざけてる。

頭の中で何かがキレる音がした。

「うるさいやかましいこの甲斐性なしが。金を出さなきゃ女が寄って来ないやつが偉そうな事言うなばかばかばーか！あと弟を放せ変態！」

お口が勝手に動いたよ。

おっさんが飛び掛かって来ようとしたので身構えたら巧く弟が足をかけたので、見事に転んだ。ギャグっぽいわこの動き。顔面強打したかもね。

弟が押さえ込んで、ふっと顔をあげて、そのまま固まった。私もそっちを見て、うわぁってなる。

忘れてた。

ボッシュさんはずるずるとマイヤーさんを引きずりながらこっちに向かって歩いてきた。

怒られる。飯抜きにされたらどうしよう？

「トモ、お前は…！」

「いやぁ、トモちゃん最高やわぁ！こんな子とは知らんかった～」

ボッシュさんが怒るのに被せてマイヤーさんが楽しげに言う。どっちかにしてほしい。怖いので俯いていると、弟が声をかけた。

「その女の人が絡まれてるのを助けたんですよ。このおじさんから。だからトモを脅さないでくれますか」

静かに怒っている時の、よそよそしい声。
あぁ、ちょっとヤバいな。

「ま、あんさんは痛い目見たから反省しただろ。もう行きな」

マイヤーさんがおっさんを乱暴に立たせて軽く足を蹴っ飛ばすと、何も言わずに逃げていった。

「あのぅ、騎士様、アタシこの子達のお陰で助かったんですよ。叱らないであげて下さいな」

女の人がふわり、と私の肩を抱いた。強い香水の匂いがする。砦の中には使ってる人はいなかった。クラクラする。ぞわぞわする。金髪馬鹿様の時より強い、嫌悪とか恐怖とか。

「アガサは店で待ってる。食事に行くぞ」

ボッシュさんが言うと、手が離れたのでほっと息をした。というか、息してなかったな今。

「お食事ですか、じゃあアタシの店ですね。ご案内しますわ」

酒場のヒトだったのか。

何となくまだ固まったままでいると、弟が腕を引っ張って、私の顔を覗き込んでいた。大丈夫?とその顔は言っている。
大丈夫だと思ってたんだけどな。

酒場に向かう途中。女の人は時々ボッシュさんに話し掛けて、それに律儀に答えている。
私も話したいのに。謝らないといけないのに、喉がきゅっとして、声が出なかった。

マイヤーさんは私達の後ろから、ぶらぶら歩いてる。

「嬢ちゃん、ヤキモチか」

そんなことを言うので、否定しようと振り返ったら眉をひそめられた。

「顔色、真っ青や。怪我でもしたんじゃないやろな」

「お腹空いただけですよ」

違うって解ってるけど。

焼き餅も焼けないくらい、今の私は余裕がない。

32・それは心の奥底で（後書き）

お便りを下さった読者様と共通のゲームが好きなことが判明して、ちょっと嬉しい私です。

殺陣のシーンを書くのに、ゲームのアクションを参考にすることもあります。

ただ斬った殴ったじゃつまらない時もありますから。でもちっともウマクイカナインデスケドネ。

目の前に情景が浮かぶような、味のある文章が書きたいものです。

33・思い出に結び付く（前書き）

姉　ボッシュ視点です

33・思い出に結び付く

苦手なものはいつか克服しないといけないね。
そんなことはわかってる。わかってるんだけど・・・

「遅かったじゃないか！心配したんだよ」

店に着くと、テーブルに着いてたアガサさんが立ち上がって迎えてくれた。私の肩をぎゅっと掴んでから、背中を叩かれた。
ちょっとほっとする。

「では、皆様、ごゆっくりなさってね」

あの人はそう言って奥へ入って行った。店内には他にも女性がいて、給仕をしている。やっぱりかなり露出度が高い。

食べ物とお酒と香水の匂いが店には充満していて、めまいがしてくる。

アガサさんが頼んでくれていたらしく、すぐに料理が運ばれてきた。丸っこいパン、ポトフっぽいスープ、骨付き肉の香草焼き、果物などなど。

お腹は空いてる筈なのに、全く食が進まなかった。パンを少しつまんで、スープだけを飲んでいると、弟がこそっと話し掛けてきた。

「ここ、居たくないんでしょう？宿屋に行かせてもらったら？」

「ん～多分まだ平気」

弟は眉間にシワを寄せて、父上そっくりの顔になる。小さかった弟はあんまり覚えてない筈だ。それなのに察知されてしまっている。ここの雰囲気は、母親の嫌な記憶を呼び起こす。まぁ、弟の方はひどくないってのは救いがあるよね。弟はボッシュさんの方を向いて、袖を引いた。

「ボッシュさん、トモの具合が悪いので、先に宿に行かせてもらえませんか」

平気だって言ってるのに。
弟が大げさに言うから、皆がこっちを見た。これ以上心配させるのもアレなんで断ろうとしたら、
マイヤーさんが頷いてしまった。

「さっきも顔色悪かったしな～。ボッシュ、送ってやり。お前の飯は包んでもらうから」

いやいやいーんですよ?

私が止める前に、ボッシュさんはさっと立ち上がって外套を私にかけてくれる。紳士ですね!

弟は小さく手を振った。

私達は無言で、暗い道を歩いた。謝るタイミングを完全に逃した私はずっと俯いたままで、足だけを見て歩いた。

傍から見たら、連行されてるように見えたに違いないね。それくらいしょぼくれてた。

そう遠くない場所に宿屋があって、私達が入っていくと受け付けみたいなカウンターに小さなお婆さんが座っていて、ボッシュさんと話して鍵を渡してくれた。あと少しでくつろげるか。ボッシュさんも居てくれるから、ちょっと休んだら謝ろう。

重い体を引きずって階段をあがり、戸を開けてくれた部屋に入った所で、いきなり力尽きた。

「トモっ?!」

私が倒れて、どこかで頭を打った音で驚いたのか、ボッシュさんが物凄く慌てて駆け寄ってきた。

体には力が入らないし、頭はズキズキするけどそんな姿が新鮮で笑

える。

そっと抱き起こしてくれる腕にしがみ付いて、目を閉じた。
安心したら楽になるかと思ったのに、逆に蓋をしていた感情みたいなのが溢れだしてしまう。

○　○　○　○

待っているようにと、言っておいたのに。
トモとリョータは揃って姿を消していた。
初めて砦を出て、町が珍しいのはわかるが、昼間ならともかく子供だけで歩いて安心できるような場所ではない。
マイヤーと共に町中を探すと、人だかりの中に見つけた。すぐに捕まえようとすると、マイヤーに腕をとられた。

「なんか、面白いことなってる～」

確かに。それは、リョータと見知らぬ女が拘束され、その男に向かってトモが啖呵をきるところだった。

「すごいわ～か弱いお姫様かと思ったのに」

どこがおかしいのか、マイヤーは大笑いしている。こいつの感覚はよくわからんな。笑いながらも腕を放さないので、引きずって行くことにした。

リョータと女の話から、2人は乱暴な男から彼女を守ったということがわかったが、相手が武器を持っていなかったから良かったようなものの、あまりに無謀すぎる。

文句のひとつも言ってやりたいが、リョータに牽制され、女がこれから行く酒場に勤めているということで先に移動することにした。

それにしても、トモが全く喋っていない。ひどく沈んだ様子が気になるが、その他の面子が邪魔で話し掛けられない。

酒場でもトモは食が進まない様子で、ぼんやりと皿をつつくばかりだった。

やはり何かあったのか？それとも冷えて体調を崩したのだろうか。

無理にでも聞き出そうかと思っていると、意外な所から助太刀された。

「ボッシュさん、トモの具合が悪いので、先に宿に行かせてもらえませんか」

リョータの機嫌も悪いようだったが、お許しが出たのは丁度いい。

すぐに支度をしてトモを連れ出した。

道中も口を開くことなく、宿に着いた。
確保していた2部屋の内、端の部屋へトモを入れ、明かりをどうしようかと思っていると、鈍い音がした。振り返るとトモが床に倒れていた。今のは、頭を打ったんじゃないか?!

「しっかりしろ、トモ」

細い体は震え、顔には血の気がない。ざっと触った頭は出血は見られない。背中と腰にそえた手を掴んできた冷たい手は意外に力強くて、意識ははっきりしているようだ。

「じっとしてたら…治まるから」

囁くように言うので、出来るだけ体を冷やさないように外套や寝台の掛け布で包み込んで、抱き締めた。

しばらくすると、体の震えもとまり、トモの目がゆっくり開いた。ぼんやりとして、潤んでいる。

「もう、大丈夫なのか」

自分の声が擦れているのがわかる。
ゆっくり上体を起こしてやったのに、また俯いてしまった。なぜ、

顔を見せてくれない？

「さっきはすまなかった。お前達を置いて行ったから面倒事になったな」

そっと背中を撫でながら声をかけると、俯いたまま、トモはふわりと俺の首に抱きついてきた。そのまま頬摺りをするので、思わずきつく抱き締めた。

耳にトモのため息がかかり硬直してしまった。

「トモ、くすぐったい…」

放したくないが耳は止めてほしい。訳のわからない葛藤が生まれてしまった。

「あの人が嫌なんじゃなくて、ああいう人が嫌なんですよ。無理矢理の。他人を思い通りにしようとするところ。……お酒と香水の匂いをプンプンさせて、男に遊ばれるとか…馬鹿じゃないの？嫌ならあんな事しなきゃいいのに」

始めはあの男のことだったようだが、涙声で吐き出すように言ったのは——誰のことか。あの酒場の女か、それとも、母親らしくなかったという、自分の親のことなのか。

首筋や、くっついたままの頬に涙がぽろぽろとこぼれ落ちてくる。

「いつもいつも私達が邪魔だと言ってたの。お酒を飲んで、怒って、叩くの。ずっと我慢してたのに」

小さな子供のように泣きじゃくりながらトモが語る内容に、心臓を掴まれたような鋭い痛みが胸に走った。

「我慢、してたのに、私達捨てられたの」

ほとんど呟くようにして言われた言葉に、何も言えなくなり、ただ抱き締めた。様子がおかしかったのは、酒場の女と母親を重ねていたからか。恐怖で震えていたのか。

トモの呼吸が落ち着いてきたのを見計らって、そっと腕を外し、正面から顔を見つめた。

今までになく感情を顕にして涙に濡れた顔は、胸が締め付けられる程痛々しく、愛しく感じる。

額をあわせて、この気持ちが直接伝わればいいと思いながら語り掛ける。こんな時だけはレオのように口が巧ければと思うな。

「トモ。もう誰もお前達をそんな目に合わせないし、俺がさせない。嫌なことや怖いことを我慢することもない。ずっと守るから」

恐る恐る顔を離してトモを見ると、無言で何度も頷いていた。

思わず力が抜けて、顔が緩むのを止められない。
トモを改めて抱き寄せ、泣き腫らした目蓋や濡れた頬に口付けを落とした。

「顔…塩辛いでしょ」

トモが細い指を伸ばして唇に触れてきたのでそのままくわえてやると、妙な声を出してすぐに手が逃げる。

「なんで、指なんか舐めるのっ」

「指もダメなのか?首も弱かったよな…」

そっと喉を撫でると、飛び上がって逃げようとするので慌てて捕まえた。
やはり猫だな。

「逃げるな、もう触らないから」

手を後頭部に滑らし、髪を何度か撫でるとおとなしくなった。頭も腫れていないし、打ったところは心配ないだろう。
片方の腕を膝下に入れると華奢な体は軽がると持ち上がった。そし

てそのまま、寝台の上へ横たえる。

落ち着いたので、よく眠れば明日は食事ができるようになるだろう。

寝台の横へ膝立ちをすると高さが丁度よくなるな。

寝台に肘をついてそっと顔に触れると、トモは微笑んだ。さっきまで幼子のように泣いていたのに、今の顔は息を飲むほど美しい。

顔が近づくと、ゆっくりと目を閉じていく。

柔らかな唇をそっと啄むように重ねていると、何度目かで唇が開いたので、忍び込む。

互いの舌で遊んでいると子猫のような声を出す。いつのまにかトモの手がこちらの肩にかかっていた。

これ以上はまずい。止まらなくなるな。弱っている時に最後までいくのは外道だろ。

それにリョータとアガサに殺されそうだ。

「眠るまで、ここにいるから。安心して寝ろ」

頭を撫でながら言うと、小さく頷いて目を閉じた。

「今日は勝手なことしてごめんなさい」

小さな声で言うから、思わず吹き出しそうになる。妙なところで律

儀だ。

もとの世界で不幸だったなら、ここで幸せになれば良い。できれば俺の傍で。

33・思い出に結び付く（後書き）

リョータは過去を克服しましたが、トモはどうでしょうか。
年上の分、辛い事が多かったので根が深いようです。
ボッシュさんが一緒に支えてくれるそうですが、あれはあれですね、
プロポーズみたいですね。
親公認ですしね。

３４話・お腹が満たされると心も満たされる気がする（前書き）

ずっと弟視点
前話で酒場に残ってこんな話をしていました。

３４話・お腹が満たされると心も満たされる気がする

エロいお姉さんを助けた後に、姉の様子がおかしくなりました。
あの人はちょっと雰囲気が母さんに似てる様で、そのせいだと思います。
僕のことは無関心だったけど、どちらかというと姉には厳しかった…ような。

助けておいてさっさとどっか行ってもらうわけにもいかず、しかもこれから行く店の人だというじゃないですか。店員がこれって…キャバクラの類でしょうか？
姉の様子がおかしいのにボッシュさんは頭ごなしに叱ろうとするし、マイヤーさんは笑ってるし。

このオジサン達、女の子への接し方の教育が必要ですね。

お店に着いたら、やっぱり何となくガラが悪いです。隅のテーブルをアガサさんが確保してくれてましたがむさいオジサン集団とか酔っ払いとか、酒や料理を運びながらそれにベタベタするキャバ嬢？など。

料理は薄味に香草を利かせていて食べやすかったですけど、パンは堅いです。もそもそして、向こうでのドイツ風ですね。
相変わらず姉は白い顔で食も進んでなくて、ボッシュさんは気にしながらも声をかけることなくて。
たまにさっきのお姉さんと話したりして！いい加減にしろっての。

思春期のカップルですかあんたら。

僕が声をかけると、さっさと姉を連れて行きました。遠慮してたのでしょうか。

「トモは具合悪いのかい」

アガサさんがとても心配そうな顔をしていました。さっきのことも知らないからいきなり体調を崩したように見えたんですね。

「トモのあれは…精神的なものです。原因から離れたので大丈夫です」

思わず他人行儀な言い方になってしまって、アガサさんの表情が曇ってしまいました。しまったな。心配してくれているのに。

「お前等、酒場が嫌いなんやね。まぁ子供だし?好きでも困るかぁ」

凍った空気を溶かすようにマイヤーさんがゆったりと取り成してくれました。

案外、いいところあるんですね！

「あぁ、そうか。ボッシュが一緒だし、心配ないね。じゃあ、リョータ、しっかり肉食べなさいよ?ジルから頼まれてるんでね」

この人達は肉肉って――。

「でも、ボッシュが一緒だと別の意味で危ないわな?リョータ君。2人にするとは思わんかったよ」

喉の奥でクックッ、と笑いながらマイヤーさんが言いました。やっぱ性格悪いですねっ!お酒をラッパのみしてるのに顔色変わってないし。
服によったら学生にも見えるんじゃないかな。

「僕は姉にとっての最善を選んでるだけです」

ぶすっとしてるだろうな、という自覚はありますよ。

「難儀やな。でも羨ましいわ。兄弟いないから」

マイヤーさんはちょっとだけ、真面目にそう言いました。

「ボッシュには年の離れた兄さんが2人いて、2番目がそっくりな

んや！兄弟揃って、あの親父さんの血筋と思えんくらい真面目で朴念仁でな～トモちゃん苦労するで」

お酒呑むと、訛りが強くなるんですね。やっぱり関西風にしか聞こえないけど。アガサさんも深く頷いてるので、からかってるだけではないんですね。

まぁ、まだ嫁にやるとは決めてませんけどね。

「マイヤーさんもアガサさんも、ボッシュさんと付き合い長いんですよね？もっと若い時はどんな様子だったんですか？」

何事もまず情報収集から、です。

元カノだの婚約者だのがひょっこり出て来られたら面倒ですからね。

お腹が満たされてアルコールが入れば、口が滑りやすくなるってのは万国共通ですよね。

３５・子供はまわりの大人を見て育つ（前書き）

姉　弟　視点です

35・子供はまわりの大人を見て育つ

弟以外の誰かに見守られて寝るのは初めてで、握った手を放したくないと思っていたら、いつの間にか眠ってしまっていた。

ふと目が覚めたら部屋にはアガサさんがいて、私の顔を濡れた布で冷やしてくれていた。

「あ、すまないね、冷たかったかい？」

いつもと違ってボリュームをかなり落とした声。優しく頭を撫でてくれる。

「泣き腫らした顔じゃ、明日リョータが心配するからね。ボッシュも…ね」

「気持ちいいです。ありがとアガサさん。私大丈夫だから、休んで下さい」

うとうとしながら言うと、にっこり頷いて隣のベッドに寝に行った。アガサさんは幼稚園の先生に似てる。名前は忘れたけど、わりと大柄で豪快だったあの人。飛び付いてもびくともしなかったな。

どこにでも、優しい人はいる。強くて優しい人達は、なんて素敵なんだろう。

幸せな気分で、また眠りについた。

次の日は何事もなく、ガタゴトと馬車は進んだ。
途中で綺麗な場所で休憩を取りながら、３人が名所の解説をしてくれた。
国内で一番高い山、真冬に凍り付いて渡れる湖、幽霊が出るという噂の廃城、初夏に紫の絨毯みたいな花畑があらわれるという平野。
ちょっと古いお城に入ってみたかったけど、崩れそうで危ないからと却下されてしまった。残念！

それから、今晩泊まる街に着いた。
もう都へは半日という距離なので、かなり大規模で、整然とした街だった。しかも少人数だけど騎士団の部隊が常駐しているってことで、治安はかなり良くなってるらしい。

「ちょっと俺は別行動ね」

マイヤーさんは馬車を預けると、すぐにどこかへ行ってしまった。
不思議に思って、リョータとなんとなく後ろ姿を見送っていると、ボッシュさんに肩を叩かれた。

「マイヤーには単独任務がある。４人で飯に行くぞ」

そうなんだー。私達を送ってくれて、その上残業だなんて・・・。過労死しなきゃいいけど。

都に近いせいか知らないけど、料理がちょっと手の込んだ感じになっていた。

店員はなぜかおじさんとお兄さんとおばさんだった。家族経営かな？えちぃお姉さんがいないのは、専門の店があるからだって。アガサさんがこっそり教えてくれた。

前のが塩とハーブの焼肉どかーん！だったのが、柔らかく蒸したような肉にソースがかかってたり、野菜が飾り切りされてたり。料理の違いは、その地域がそれぞれ違う国だったとか都から情報が伝わり易いかどうか、らしい。今のブームは蒸したり茹でたり、あっさりした素材に、フルーツとかハーブとかで工夫したソースをかける料理。

食べ易くって、とっても美味しかった。砦に戻ったら報告しよう！

「南の地方では、大きな川があるから、そこで獲れる魚をよく食べるよ。レオの出身地だね」

お～淡水魚ね。鱒の塩焼きは美味しいよな～。

「この国は、海には面してないんですか？」

リョータが言うと、２人はすぐ頷いた。

「内陸だからな。川と湖だけだ。一度だけ、海を見たことがあるが…すごかったな。水が塩辛いし」

「へぇ～！想像もつかないよ！」

ボッシュさんとアガサさんの会話に、思わず弟と顔を見合わせてしまった。

海の魚は無しか～。

今夜はお腹いっぱい食べられた。

アガサさんとおしゃべりして、楽しく眠りについた。良い夢見られそう。

○　○　○　○

昨日はちょっとイライラしてしまったけど、今日は姉の機嫌もいいし、寒いけど晴れているから旅には最高の日です。

しかも今日は観光案内付きでした。姉がいかにも危なそうな城に行きたがったのは焦りましたけど。
幽霊が出るとか、妙な噂で人を遠ざけようとする場所は大抵、近づくと碌なことがないんですよ。
悪者が根城にしてるとか、倒壊の危険があるとか。

街に着いたらマイヤーさんが別行動だということで、どこかへ行ってしまいました。騎士団の詰め所にでも行くんでしょうか？ちゃんとご飯食べるか心配です。

昨日とは違って、姉も肉を食べたし、会話も弾んで楽しい夕食になりました。
一家団欒みたいですごくよかったです。
砦の、学食みたいなのも楽しいんですけどね。

夜遅くに、マイヤーさんが戻ってきました。
やっぱり何も食べずに仕事をしていたようで、ボッシュさんが料理屋から持って帰ったパンを出して、更に宿の人に何かもらってくると言って部屋を出ていきました。

「リョータ、騒がしくしてすまんな、もう寝とき」

気を遣ってくれますが、大丈夫なのです。馬車で寝られますから。

「マイヤーさん、こんな時間まで働くなら、途中で何か食べないと！体に悪いんですよ？」

僕が真剣に言うのに、ベッドでごろごろしながらマイヤーさんは気のない返事です。
消化に悪いって言っても、前に意味が通じなかったので困ります。
たまに、言葉が変換されないですね。

「あ～、リョータ。いい子やな、おじさんの心配してくれて」

どう言ってやろうか悩んでいると、ベッドで胡坐をかいたマイヤーさんがこっちを見て言いました。
その時ボッシュさんが戻ってきて、スープの入った木製のボウルを渡しました。

「これもらって来た。さっさと食って暖まれ」

マイヤーさんは無言でボッシュさんと僕を見て、それからなぜか肩を揺らして笑い始めました。

「いやぁ～ほんと、お前等はいいな」

そしてマイヤーさんは真顔になって、宣言するように背筋を伸ばしてから言いました。

「ボッシュがお前等を守るように、俺も助けとなる。ボッシュが正面に立つなら俺は背中を守ったる。お前達はお人好しすぎやから」

それから照れたように笑ってから、パンとスープを食べ始めました。

ボッシュさんはフン、と鼻を鳴らしてから、マイヤーさんにだけ聞こえるように何か言ったようです。

僕はとりあえず、お願いします、とだけ言っておきました。

マイヤーさんて忙しそうなのに僕達に構っていていいのでしょうか？

ちょっと心配だけど、でも嬉しいです。

存在を認められて、許されるっていうのは、嬉しくって安心できることですね。

35・子供はまわりの大人を見て育つ（後書き）

尊敬できる人もそうですけど、「うわこいつ最悪」な人も印象に残りますね。
子供の時なら尚更インパクトを残すというものです。

３６・お宅拝見（前書き）

姉　弟視点です

36・お宅拝見

昼過ぎに、都に到着した。背の高い壁に囲まれた、広大な都市。全体が丘の上にあるようで、私達が入った門から見ると、段々畑？みたいだった。

一際高いところに、王様のすんでいるお城があった。旅行会社のチラシで見た、モン・サン・ミッシェル？に似た形。ちょっと怖そうな雰囲気。夢の国にあるシンデレラのお城みたいのを想像してたよ。

街の中は道も広くて、大抵のとこで馬車が余裕ですれ違える。しかも石畳はきれいに平ら。

街行く人は、色んな格好で見てるだけで楽しい。

ドレス姿でお供のイケメンに荷物を持たせる女性、刺繍たっぷりの豪華な衣裳で馬に乗ったおじさん、服は粗末だけど立派な剣を背負った冒険者風の若い人、寒さで真っ赤なほっぺをして走り回るちっちゃい子供達などなど・・・。

にぎやかで、生きてるって感じがいっぱいする。

うっとりしていると、段々静かな区画に入って来たらしくて、道を歩いている人は格段に減った。

馬に乗っているボッシュさんが近付いて来て、窓から顔を出している私に向かってちょっと屈んだ。

「あそこだ。もう着いたから」

高い木が植えられて建っているそれは、かなり立派なお屋敷だった。
門から玄関が見えないくらいの。

「ボッシュさんも、お坊っちゃんだったんだね」

弟が自分に頷きながら言った。
広くて静かで、でも派手じゃない。ボッシュさんがここで育ったのはすごく納得できる。冬じゃなきゃ、庭でお昼寝したいな。
初めて来た他人の家なのにすごく落ち着けそうな気がした。

「と〜うちゃく〜」

マイヤーさんの声がして、馬車はゆっくり止まった。
ああぁボッシュさんの実家だ！ドキドキするっ。
私達が馬車から降りて家を眺めてると、扉がガゴッ、と開いて、久しぶりのお爺ちゃん——マルキンさんが出てきた。その後ろからはオレンジ色の髪をアップにして花柄のドレスを着た美人さんと、金髪くるくるの天使みたいなちっちゃい子が現われた。

「お久しぶりです」

アガサさんとマイヤーさんが、握った右手を左胸にあてて挨拶をす

る。騎士の礼らしい。背筋をすっと伸ばして、格好良い。

「遠いところをよく来た、疲れたろう」

そう言って、私と弟の頭をぐしゃぐしゃ撫でる。後ろでボッシュさんの唸り声が聞こえた気がした。

「初めまして。私はルシンダです。この子はマーシャルですわ」

口元に笑いジワができる優しい笑顔だ。まだ若い、３０前に見えるから、マルキンさんの奥さん、なわけないよね。

「長兄の、ロデリックの奥方だ」

ボッシュさんが、マーシャル君を撫でながら言う。
兄嫁と甥なのね。奥さんすげー若い！お兄さんやるなあ。

「立ち話してたら凍ってしまうぞ、皆。入りなさい」

マルキンさんに促されて家に入った。

中は広いエントランスで、正面に階段があった。

人の歩くところは厚い絨毯が敷いてあって、カーテン類も暖色系で統一されていた。でも絵とか壺とかの飾りは一切無くって、すごく『らしい』家だ。

「こっちこっち！僕の部屋案内します」

私と弟の手を片方ずつ引っ張って、マーシャル君が興奮したように跳ねた。かわいいな、4、5歳くらい？皆の方を見ると、微笑ましい、という目でこっちを見ていた。なんだか照れる。

「ご案内が終わったら、戻ってきてね。お茶にしますから。お母様が焼いたお菓子を食べていただくのよ」

まったりと、声をかけられた。くすぐったくて、弟と顔を見合わせて、笑った。

○　○　○　○

ボッシュさんの実家は中々の豪邸でした。お城からは遠いのですが、門から玄関まで馬車で行くほどの庭。落ち着いた佇まいで、庭の木々もきちんと手入れがされています。

着いたらすぐに家族の皆さんが迎えに来てくれて、マルキンさんにはとても歓迎されました。頭を撫でてくれたんですが、皆の前では恥ずかしかったです。
ボッシュさんの上のお兄さんの奥さんルシンダさんと甥のマーシャル君も、優しく迎えてくれました。

家に入ると、マーシャル君が僕達を案内してくれると言って、腕を引っ張られて新鮮でした。
このくらいの年の子とは接触したことがありません。ルシンダさんに優しく促されて、姉を見ると、なんだか照れたような顔になっていました。

「ここは父様の部屋、入っちゃいけません」

「ここはお爺さまの部屋、いろんなものがあります」

「ここは母様の部屋、いい匂いがします」

「ここ、僕の部屋！どうぞ入って！」

マーシャル君は丁寧に案内してくれて、最後に小さな部屋に入れてくれました。とは言っても１０畳はありそうです。
緑色系でコーディネイトされた部屋で、ベッドと机とソファーが置かれて、絨毯の上にはおもちゃやお絵描きセットらしきものが転がっていました。
なぜか木刀のようなものもありましたが。

「一緒に遊びましょう、ええと…」

あ、名乗ってなかった。

「お姉さんはトモだよ」

「僕はリョータ。よろしくね、マーシャル君」

貴重な年下の友達ＧＥＴ！
いくらでも遊んであげますとも！

それから質問攻めで、ロボ達の絵を描いて説明していると、ボッシュさんが呼びに来ました。
戻るのをすっかり忘れていました。
マーシャル君はボッシュさんに抱えられてじたばたして、まだ途中だったと文句を言っています。

「お前が独り占めするのはずるいぞ。義姉上も待っている」

「あ、そうか、ごめんなさい。夢中になってた」

姉が謝ると、ふわりと撫でて優しく微笑みました。姉にはベタ甘ですね。

「…じゃあ、夜遊ぼうね？リョータもトモも一緒に寝よう」

にっこりと言う天使のようなマーシャル君をボッシュさんは睨みました。

幼児に嫉妬してどうするんですか。

36・お宅拝見（後書き）

もうそろそろ人物紹介第二段をだしますね

番外編・隠れたお仕事（前書き）

マイヤーさんの単独任務話その1

「フェルゼンフェルト、あなたには彼らと同行して、探ってもらいたいことがあります」

副隊長さん、言いにくいならマイヤーでええのに。

「先日、ハウィット・レヴァインが使った品ですが。あなた方の証言から、あれは『戒めの煙』と言われる異国の道具と思われます」

「そのようですね」

眠り薬か痺れ薬の類やと思ったら、足腰に絡み付いて気持ち悪ぅなった。ちょっと吸い込んでしもぅたし、副作用はないんかな？

「現在我が国では売買も使用も禁止されているものです。彼の処分が身分にしては重く、また裁定が早かったのはそのためでもあります」

「はぁ」

あれで刑が重いんて、冗談きついわ。
領主の息子とその辺の女の子とじゃ、しょうがないことなんやろうけど。

自分がこっち来た時のこと思い出して、なんや胸くそ悪いわ～。

「あなたの気持ちは解ります、というか、あなたが最もよく解るのでしょう。あの子供達の気持ちが」

うわなんかやっぱこのお人嫌やわ～。心が読めるんやないの。

「途中の街の詰め所、王都ではブライアン・フォザーギル防衛騎士に協力を仰ぐとよいでしょう。要請書を作っていますからね。彼らは自分の街を熟知していますから。禁制品の取引経路を見つけ出して下さい」

ボッシュの兄さんやな、そっくりの。
難しいこと簡単に言ってくれてんけど、ぱっと行って書類で扱き使うんて、ものっそい気まずいねんけど。
俺が感じ悪いやつみたいやんか！

「大丈夫です。あなたは大体そんな感じです。あ、終わるまで帰ってこなくていいですよ。隊長の許可は取ってますから」

「…さいでっか…」

馬をぽくぽく歩かせて、馬車が揺れんように集中しとると面倒なこと忘れられてええわ～、て思っとったのに。
不っ細工な盗賊が邪魔しくさって。

ええわ、ちょっとこいつらどついてスッキリしよか。

37・遊ぶときは全力で（前書き）

ボッシュ　姉　弟　の順

37・遊ぶときは全力で

実家に着いて一息つけるかと思えば、久々の来客で舞い上がった家族の歓待を受ける羽目になった。

トモとリョータは甥のマーシャルに連れて行かれ、残った俺達はジジィと兄嫁の餌食だ。

「陛下の謁見はともかくだな、正式に婚約をさっさとした方がいいと思うんだ」

お前は何も考えなくていいから！

「あんまり可愛らしくて勿体ないですわ。あ、アガサさんもマイヤーさんもお代わりいかが？私が焼いたお菓子、このお茶にぴったりでしょう？いつも旦那様が誉めて下さるんですのよ」

「そうですね！本当においしいですわ！」

「ロデリック殿がほんまに羨ましいですぅ」

押しの強い2人が押し切られているのを初めて見た。流石ルシンダ。

堅物の兄に押し掛け女房しただけのことはある。

だが勿体ないというのはどういう意味だ？

「ボッシュ、早く2人を呼んで来い。甥っ子にとられるぞ～」

そういえば案内だけにしては遅すぎる。
2人の縋るような目線が気になるが、この場から離れる良い口実だ。
生け贄は活きがいいのに限るな。

マーシャルの部屋に近付くに連れ、子供達の楽しげな声が聞こえてきた。
どうやらパイクの獣達について話しているらしい。
俺が扉を開けても、話に夢中で気付く様子はない。
床に紙を広げ、3人は頭を突き合わして絵を描いているようだ。
考えてみると、姉弟は俺よりもマーシャルに年が近いのか。
思わずため息がでた。

「あ、叔父様」

ようやく子供達が気付いたので、マーシャルを抱え上げた。2年振りの甥は、かなり重くなっていた。
じたばた抵抗しながら遊び足りないという。

「あ、そうか、ごめんなさい。夢中になってた」

珍しく無邪気な姿が見られたので、こちらとしたら儲け物だったな。
マーシャルを抱えた反対側の手でトモを撫でる。邪魔がいなけりゃ両手で抱き締めたいところなんだが。
あの2人を待たすのも可哀相だし、後が怖いような気もしてきたのでさっさと戻ろう。
抱えていたマーシャルがもぞもぞ動いて、トモに話し掛けた。

「…じゃあ、夜遊ぼうね？リョータもトモも一緒に寝よう」

にっこりと微笑む甥。こちらを向いて。いい度胸だ。絞めてやりたいくらい可愛い奴だな。どうやら父親に似ず、祖父と同類らしい。
末恐ろしい。

○　○　○　○

夕方、お茶をいただきながら、主にルシンダさんとマーシャル君の話を聞いていると、それまで椅子に埋もれて固まっていたマイヤーさんが立ち上がった。

「そろそろ行きますわ。ブラさんも戻った頃でしょうし」

頷くマルキンさん達に騎士の礼をして、私の頭をぐしゃぐしゃにしてから颯爽と出て行った。今日の夜もお仕事なのか。
で、ブラさんって？

「次兄のブライアンのことだ」

ボッシュさんが椅子から立ち上がって、私の髪を直しながら教えてくれた。
マイヤーさんの撫で方は、弟がロボを撫でる時みたいで激しく、頭がすごいことになっていたらしい。
なかなか戻らないのでルシンダさんが櫛を持ってきてボッシュさんが梳かしてくれた。
くすぐったい。
というか、気付いたんだけど皆の視線が生暖かい。

微妙な空気が漂った時、表で人の声がした。

「父様のお帰りです！」

マーシャル君がそう言って部屋を走り出て、ルシンダさんもおっとりとその後ろから出て行った。

髪は何とかなったらしく、ボッシュさんは櫛をテーブルに置いて、最後に髪を少し引っ張った。

たまにこの人はよく解らないことをするな。

そんなことを考えてたら、ガチャガチャと、もう聞き慣れた金属音がして、立派な騎士が現われた。

ボッシュさんと同じかちょっと高いくらいで、ラーソンパパよりは少しスリムだけど鍛え上げられた体。
バチカンの衛兵が着ている制服のような形の、赤と黒と青の縦縞の上着。更にその上からピカピカの胸部分だけの鎧と、肘から手首までの防具?を着けている。そして青色の布を襷掛けしてメダルみたいなもので留めてある。
腰には長剣。さっきの音はやっぱりこれだ。

ボッシュさんよりちょっと明るめの金髪で、マルキンさんと同じ菫色の目。４０代かな?
よく似た家族だな~。格好良い!む?かわいいマーシャル君も将来はこんなにごつくなるのか・・・?
お父さんの腕に軽がると抱き上げられて、ルシンダさんが笑顔で寄り添う。
ちょっと羨ましいかな~。

「よく来たね。会えるのを楽しみにしていたよ。自分の家だと思って、ゆっくり寛いでくれ」

渋い声でそう言うと、着替えをしに行ってしまった。

謹厳実直とか質実剛健という言葉がぴったりだ！

「お兄さん、格好良いね」

傍に立ってたボッシュさんに言うと、微妙な顔をされた。兄弟誉められて嬉しくない？年が離れてるから微妙なのかな。
ボッシュさんは何も言わずにまた髪を引っ張ってため息をついて、見えない角度でアガサさんとマルキンさんが内緒話をして笑いを堪えていた。
謎だ。

○　○　○　○

お茶とお菓子を戴いてるとマイヤーさんがまた出かけて行きました。
今日はちゃんとご飯食べると良いんですが。
出掛けに姉の頭をぐっしゃぐしゃにして行ったら、ボッシュさんがせっせと直していました。
僕達の周りには、人の頭を撫でるのが好きな人が多いです。

姉の頭が整った頃、この家の長男ロデリックさんが帰ってきました。
とても立派な人で、バチカンのスイス衛兵並みに派手な格好に負けていません。マイヤーさん情報で、近衛騎士団の副団長と聞きましたが、エリート中のエリートらしいです。

揃ったところで、皆で夕食を戴きました。
お菓子も食べたんですけど夕食もあっさり目で、苦しいくらい食べました。
ルシンダさんは貴族出身なのに珍しく、色んなことを自分でやるので使用人は最低限しかいないということです。
僕の感覚からするといるだけですごいんですけど。セレブ。

ちょっと面白いのは、姉がマルキンさんやロデリックさんに懐いたのが気に食わないボッシュさんが、拗ねてるようなのです！

そもそもあなたに似てるから2人にすぐ打ち解けたんですよ？
言いたいけど、面白いからこのままで！

マーシャル君の相手もしなくてはいけません。

「僕達がいる砦はこんな形で、たくさん騎士さんがいるんだ」

「パイク様は前に遊びに来ました」

「ふふ、パイクさんてボッシュさんが大好きなんだよね」

「トモは？トモも叔父様好き？」

話していると、マーシャル君が真剣な顔をして言いました。この幼稚園児くらいって、よく誰が好き～とか先生と結婚する～とか言いだす年ですよね。

「ボッシュさん好きだよ」

そんな子供に、姉は真面目に答えてから真っ赤になって、クッションに顔を埋めました。あ～あ。マーシャル君ふくれちゃった。

それからご機嫌をとるために、画を描いたり漢字を教えたりしている内に、ふかふか絨毯の上で眠ってしまいました。

どうしようか、と姉に声をかけようとしたらそっちも熟睡中です！

眠ったら雷でも起きないというのに。

一緒に寝ようね、ていうのが実現してしまった。

誰か呼びに行きたいのに、微妙に僕の服を掴んでいて動きません。

姉ならともかく余所のお子さんを無理矢理引き剥がすのはちょっとためらいますね。泣いたら怖いですし。

おとなしく、マーシャル君の絵本を見ながら待つとしましょう。この程度なら読めるようになりました。

「…真剣に絵本を見ているんだな」

小さな声に気付くと、ボッシュさんとロデリックさんが部屋にいま

した。
気付かなかった・・・こんなでかい人が2人も来たのに。ちょっと顔が赤くなるのを感じながら、そ知らぬ振りです。

「すまなかったな、疲れているのにマーシャルの相手をさせてしまって」

申し訳なさそうにお兄さんが言うので、急いで首を振りました。
貴重な年下との接触ですから！

「すみません、トモは多分朝まで起きません」

明日は王様に会いに行くから、話とかあったかもしれないのに。

ロデリックさんは優しく笑って、マーシャル君を抱き上げてベッドに寝かせました。いつの間にか手が外れてた！
どんだけ絵本に集中していたんでしょ、僕は。

ボッシュさんは姉の傍にしゃがんで、また頭を撫でていました。
むむ。無断で寝顔を見るのは感心しないですよ？

とか思っていたら、ロデリックさんがボッシュさんの後頭部をはたきました。
はたいたというか、首が前にグキッてしたように見えたんですけど。
ボッシュさんは何も言わずに叩かれた辺りをさすってから姉をそっ

と抱き上げました。
今のやり取りスルーなんですか？男兄弟ってこんなもんなんでしょうか。
ニヤニヤしているアガサさんのいる部屋に姉を運んでから、僕も案内してくれました。

「マイヤーさんは？」

「心配するな、兄のところだ。騎士団の宿舎もあるからな、どうにでもなる。今日はよく休めよ」

何事もなかったように言って、ボッシュさんは自分の部屋に行きました。
解り易いようで、謎な人です。表情があまり変わらないからですね。
変なカップルですよ。

37・遊ぶときは全力で（後書き）

マエケンＡＮＤエーシン
おめでとう

そんなわけで、この国（まだ名前がない）のカラーは赤なんですよ。

38・王様と私（達）（前書き）

長くなってすいません

姉　弟　ボッシュです

38・王様と私（達）

今日は王様に会いに行く。午後のお茶の時間に和やかに会談、という予定なのに朝から着せ替え人形。

そう、異世界でお着替え第二段弟も一緒！

「あ～やっぱりこっちの方がいいかしら～」

「青色だと寒々しいねぇ」

すいませんね、胸がない上に顔色も悪いもんで。

ルシンダさんとアガサさんと侍女さんがあれこれ持って来ては私にあてて悩んでいる。

結局、真っ白な薄いドレスの上にワインレッドのドレスを重ねたのに決まった。下のはハイネックで首元はレースがついて、胸元にプリーツをたくさん寄せて、ふわっと膨らませている。上のドレスはそのプリーツを生かすような大胆なカッティングで、さらに胸下の切り替えで強調。所々に真珠みたいな石が縫い付けられていて、控えめに光を反射していた。

やっぱり袖は長めでひらひらしていた。腕を真上に上げたら肘までへにゃっと垂れてくる。

一応７０のＢなんですけど？お着替え中すごく可哀相なものを見る目をされた。

着替えが終わったら今度は髪の毛とメイク。侍女さんに鼻息荒く鏡

の前に座らされて待ってると、弟が引きずり込まれて来た。

「僕は、普通でいいです」

散乱する衣服を見て、恐れ慄くように弟は言う。
でもお姉様方は聞いちゃいなかった。

「色を揃えると可愛いんじゃないかい？」

「逆に黒なんかよろしいと思いますの。何とも言えない少年の初々しい色気がでますでしょう？」

「アンタ…やるわね」

顔色の悪くなっていく弟そっちのけで、ルシンダさん達は熱くなっていく。なんか、怖い。王様相手に色気出してどうするんだ？
結局少年の色気になった。見てて思ったんだけど、ルシンダさんは日本に行ったら腐女子になるだろう。逞しい旦那様と可愛い少年について語っていて、鏡越しに見た弟は半泣きだった。

「トモ！どうかしら？」

ルシンダさんの声に振り向くと、疲れ果てた弟と目が合った。恨めしそう。

白い和服というか、甚兵衛みたいなのを襟元ぴしりと着て、上に暖かそうな黒のチュニック。腰にバックル無しのベルトを巻いて、緩く結んで垂らしている。丸い襟首と袖口にはなんかの毛皮がついていた。強いて言えば、ホワイトタイガーかな。白地に灰色の微妙な模様。あ、裾に真珠的なものが付いてる。これをお揃いにしたのかな。

パンツは細身の黒で、膝上のブーツも黒。南瓜パンツと白タイツじゃなくて良かったね。

私もこんな服のほうが良かったな。ロングスカートは慣れないし、寒い。

それに細いミュールみたいな靴を履かされた。

髪は編んでレイア姫みたいなお団子になっていた。団子にはひらひらの白いリボン。化粧は薄いけど、唇はピンク。

髪を上げるのは好きじゃないんだけどな。寒いし、首が無防備になっちゃう。

弱点を知ってる弟とボッシュさんに狙われないように気を付けよ・・・。

お昼は軽く、パンと野菜のポタージュ。

王様のお茶会はお菓子がたくさん用意されるらしい。楽しみ～。砦ではほとんど甘味がなかったからなぁ！

それにしても。

「うわぁ～！トモ、とっても綺麗ですっ」

マーシャル君はお目々をアメシストみたいにキラッキラさせて誉め

讃えてくれたのに、肝心の人は何も言ってくれなかった。

「あぁ、着替えたのか」

って、それだけか?!
見たまんまじゃん。

場を盛り上げてくれそうなマイヤーさんはまだ帰ってきてなかった。
仕事が片付くまで合流しないらしい。
あ〜あ。

○　○　○　○

僕はもう朝から疲れてしまいました。
国王に謁見するから普段着じゃいけないのは解りますけど!女性2人にアレ着てコレ着てとおもちゃのように翻弄されました。
女子は着せ替え人形で遊んでいたけど、こっちの世界の女性もそういうのが好きなんですかね。

「あ〜もう可愛いわ。リョータ、旦那様の従者にならないかしら?

並ぶときっとお似合いよ～」

「うーん、ロデリック様だと親子みたいにならない」

「よろしいのよ、逞しい騎士と、か弱き少年…なにやら…あぁ」

アガサさんとルシンダさんは僕そっちのけで話していて、何かよく解らないけど寒気がしました！

結局、決まった服はフリフリもレースもなくて、姉とお揃いの色でもなくてホッとしました。あんな濃い赤は着たことないですし。

服の飾りについていた毛皮が気になります。柔らかでふかふかで・・・・ホワイトタイガーみたいな。

「これはね、昔に旦那様が仕留めたのですよ。雪山で演習中に出会ったなんとかという野獣で、狩人や騎士が何人も犠牲になって。退治したご褒美に陛下から賜ったのですって。強い獣だったから、丈夫で長持ちするのよ」

そう言って、大きさはこれくらい、と示されたサイズはやっぱり虎かヒグマか、というサイズでした。

そうですか。

仕留めたんですか。

見たまんま、すごく強い人なんですね。

ま、まぁ、それは置いといて。

昼食の時に皆にお披露目になったのですが。
ボッシュさんは明らかに姉に見惚れてたんですが、反応が薄いので姉には伝わらなかったようです。明らかに不機嫌になりました。
なんだかすごく大人の女の人みたいに、大変身してたんですよね～。
言葉を失うのは解りますけど、お姫様のご機嫌を損なうのは止めてほしいです。とばっちりは僕に来るのですから！
マルキンさんとマーシャル君は物凄く解りやすくデレてたのに。
マイヤーさんとロデリックさんは仕事でした。反応見たかったな。

お城までは馬車で行くようで、新しい深緑色のコートを着せてもらって、乗り込みます。
歩きにくそうな姉の様子を見て、アガサさんに突かれたボッシュさんがようやく我に返り、手を取って馬車に導きました。
見送りに出てきたマルキンさん達3人に手を振り、遂に出発です。
城に近付くにつれて、その迫力に圧倒されます。
見る角度が変わるとまるで違う雰囲気で、クレムリンの玉ねぎっぽい塔？のような部分が見えます。
都の端には大きな川が通って堀の役割をしていて、ほぼお城を中心にして楕円系に街が広がり、その外側に城壁が広がっています。
そして川とハの字になるような位置には崖があり、延長線上は滝になっているということでした。
この街はとんでもないところにあるのですね。
丸い内陸の都市なんて攻められたら守りが大変と思ったけど、実際はハの下側に注意してればよく、そもそも攻めたことはあっても攻

められたことはないとか。
飛行機無くって良かったですね。

馬車が止まり、いよいよお城へ！
非公式ということで、よく解らないけど端っこにある小さな出入り口に停まったようでした。そして長くて真っ白い石で出来たアーチの綺麗な回廊を進んで行くと、灰色の制服――中年の文官が待っていました。
特に何も言わずに、その人は先導していき、ずんずん奥へと進みます。響くのは皆の靴の音だけ。進むにつれて、所々に騎士の姿が見られ、高そうな服を着た人が歩いてたりします。
うーん。場違い。
思わず緊張して何度も唾を飲み込みました。
隣の姉も、いつもより無表情なのでお人形のように見えます。

何度か廊下を曲がったり階段を上ったのに、ある扉を開けた先は中庭でした。
それもかなり広いです。
ド派手な近衛騎士達が、直立不動で中庭の周りに立っています、ある人は槍を持って、ある人は体の前に立てた長剣に両手を重ねて。
少しでも変なことをしたら斬られそうです。しませんけどね！

冬なのに外で会うのかと思ったら、木々で隠れた場所にガラス張りのサンルームのような小屋が建っていました。中には可愛い机や椅子が幾つか並んでいて、もう既に誰かが座っていました。
その人の後ろには3人の近衛騎士がいて、近付くとロデリックさんがいることが解りました。
あとはもうちょっと若い人ともっと若い人。

入り口前で案内の人が立ち止まって、ボッシュさんに言いました。

「陛下におかれましては、本日のご休憩に、そちらのお子様方をお招きになるということです。偶々、お声が掛かったわけですので心してお相手をなさいますように」

あくまで、『たまたま』僕達を招いたという設定なんですね。
ボッシュさん達はお互い挨拶をして、更に進みます。中から1番若い近衛騎士が扉を開いてくれました。

「そんなに緊張するな。優しい方だ」

入る直前に、ボッシュさんが小さな声で言いました。もっと早く言ってくれませんかね。
騎士同士の挨拶をかわし、奥へと入ります。僕と姉は立ち止まって日本式の軽いお辞儀をしました。
騎士に握手は有り得ないし最敬礼は砦でドン引きされましたからね・・・。
近くで見ると20歳前後じゃない?というくらい若い人で、きっとすごい強いんだろうな、という隙の無さ。僕達を見て、安心させるように笑ってくれので、きっと性格もいいんでしょう。きっとモテモテ。

「よく、来たね。お座りなさい」

落ち着いた優しい声で、王様は言いました。

イメージ全然違う！

若いし！４０そこそこの、痩せててちょっと顔色の悪い――どこかの研究員とか教師とか、そんな感じで。

唐代の皇帝のようなゆったりした深紅の服に、宝石のついたベルトをしめて、裾の長い陣羽織みたいな毛皮を羽織っています。例の野獣の。もっと灰色が濃くて鮮やかでとても綺麗です。

王様は薄い幅広の金の輪っかを頭にはめていて、真ん中にでっかい赤い宝石、両隣に緑と青の宝石が輝いていました。黒い髪を後ろに撫で付けていて、配色的によくお似合いです。

優しい顔の優しい眼差しはモスグリーン。

僕らの世界なら、素敵な王様として人気がでそうですけど、マッチョがもてるこの国では物足りないんでしょうかね。

ボッシュさんが懐から手紙を出して王様近くの机に置いて少し会話して、僕達の後ろに立ちました。アガサさんは初めから後ろ。

あれ？

ダイレクトにお相手？

「ラーソンの籍に入ったのだったな。彼の様子はどうかね」

「…元気で毎日一生懸命働いてらっしゃいます。たまに若い騎士と

訓練したり」

姉が恐る恐る返事をしました。王様はにっこりして頷いて、それからちょっと右手を挙げました。

どこから出てきたのか、お菓子やティーセットを載せたトレーを持った人達が湧いて来て、ほとんど音を立てずに机の上にセッティングしてすぐに消えました。

すご。プロの仕事ですね。

○　○　○　○

久しぶりに会った国王陛下は、相変わらず気弱そうでどこか遠慮がちに座っていた。

ラーソン隊長とその他諸々の報告書を提出して下がると、興味深そうに子供達を観察しているのがわかる。

居心地が悪そうに、姉弟は肩に力が入っていた。

後ろからはトモの細い首と項がよく見える。すぐに髪を解いて隠してやりたい。他の男の目に触れているかと思うと心配でたまらなくなる。

只でさえ可愛らしいと評判なのに、化粧をして美しく着飾った姿は存在を主張し過ぎだ。

物事に同じない訓練を受けている近衛騎士の若造の目は釘づけだったし、兄でさえ一瞬目を見張った。

くそ。

「ああほら、これもお食べなさい。中に煮詰めた果汁を塗ってあるのだよ」

陛下と姉弟のお茶会は至って平和に進み、緊張が解れてきた2人は勧められるままに小さな菓子を口に運んでいた。
物を食べさせたくなる気持ちはよく解る。2人はこの国の人間に比べてあまりに儚い様子をしている。
来た時に比べるとリョータはやや成長したが、それでも知らない者は女に間違うことがある。本人には知られていないが、ルシンダもそうだった。

しばらくぽつぽつと会話をしつつ食べたり飲んだりしていたが、陛下の執務時間になり、文官が現われた。

「さて。私は仕事に戻らねば。君達はゆっくりして行くといい。全部食べても構わないよ」

立ち上がって見送る俺達にそう言って、もう一方の扉から出て行った。威厳もなにもないが、子供達は気に入ったようだった。
こちらを見た兄達近衛騎士に手を振って、何かを囁きあって小さく笑っていた。

「2人とも、楽にして、お言葉に甘えて休んでいこうね」

2人と同じくほぼ初対面のアガサが大きく息を吐いて伸びをした。
こんな所でのんびりする機会はもう来ないだろうからな。
息抜きするのもいいか？

38・王様と私（達）（後書き）

まだ　次もお城の中です

この国の国旗は縦縞で、左から緑赤青。その上に×に重ねた剣と杖

緑は森　赤は王家　青は川を表しています。
剣は武力　杖は知恵の象徴

こんなどうでもいい設定はあるのに国名はつけてないんですけどね！
あと王様も王様のままですヨー　彼個人に用はないのでね。

長いうえにこんな所まで読んで下さってありがとうございました！

39・この親にしてこの子あり（前書き）

姉　ボッシュ視点です

若干グロい表現ありです

39・この親にしてこの子あり

王様とロデリックさん達近衛騎士がサンルームから出て行ってしばらくすると、侍女さんが新しくボッシュさんとアガサさんにもお茶を持ってきてくれた。

「…お嬢様方も、お取り替致します」

さっき来た人と違って、たまにカチカチと音がする。新人なのかな？まだ若くて緊張してるみたいだ。私がじろじろ見たせいかも？

ソソっと去っていく姿を見送って、新しいお茶を飲むことにした。さっきと違う花の香りのようなすっきりした風味だ。とは言っても3杯目なのだな。全部は無理かも。

「ん～、美味しいねぇ！」

アガサ姐さんがお菓子を頬張り、幸せそうに熱いお茶を飲む。弟はお菓子は断ったけど新しいお茶は気に入ったみたいで、ふぅふぅと吹きながら味わっていた。

そんな中ボッシュさんはテーブルにお茶を置いたまま腕組みをしている。

「お茶美味しいですよ？」

あの子がせっかく用意してくれたんだから、残すのは悪い気がするんだけど。

「まだ熱すぎる」

ぼそっとボッシュさんが言った。
猫舌なんだ！そうなんだ！
なんか、可愛い・・・。

ちょっとからかってみようと思ったら、突然弟の体がグラリと傾いた。
咄嗟に両手を出して支えると、ぼんやりとした顔が目に入る。
貧血？緊張の糸が切れたとか？

「頭、くらくらする…」

そう呟いて、ぐったりと目を閉じてしまった。
このままにもしておけないので地面に降ろそうと椅子から立ち上がったら、私の膝がカクンと折れた。

は？

「どうした、お前達?!」

姉弟揃って地面に転がる前に、力強い腕に抱き留められた。

「なんか、ヘンなの、力が入らない」

目眩がする。震える手で抱えた弟は眠ってるみたいにぴくりとも動かない。
ボッシュさんはその首に手を当ててから、私を見て顔を歪めた。

「リョータは大丈夫だ、脈は安定している。お前はどんな感じだ、苦しいか?横になるか?」

私を見てくれている筈なのに、私の視界は歪んでいてよく見えなかった。
なんなんだ、これ。
お茶か?なんか入ってた?

「あ、アガサ、さんは」

お茶が原因なら、姐さんはガブガブ飲んでたから!
ボッシュさんはハッとして姐さんの方を見に行った。

私は床にへたり込んで、弟を膝の上に抱えてバランスを取っている。
仰向けになった弟からは規則正しい呼吸が聞こえていた。
眠り薬でも入ってた？

王様のすぐ傍で？

王様がこんな回りくどいことをさせる理由はない。
騎士にまで薬を盛ったのはなぜ？
あの子は悪の手先だったのか。同じくらいの年の子だったのに。

目的は、私達のうち、誰なんだろう？

ボッシュさんの声がする。アガサさんを私達の隣に寝かせて、ため息をついた。

「眠らされていた」

静かな声と同時に、暖かい手の甲で顔を撫でられた。こんな状況なのに安心できてしまう、なんでかな。

「助けを得たいが、敵がまだ解らない今ここを離れる訳にはいかない。もう少し辛抱してくれ。兄貴が来るかもしれんし剣も預けたままだしな」

ぎゅっと両腕に閉じ込められて、耳元で言われた。幸せ。このまま寝ちゃっていい？

そんなバカなことを考えた時、扉が開く音が聞こえてきた。ゆっくりと、ホラー映画のように。

「いいザマだな、野良騎士が」

誰だよ、オマエ。

多分いい年のおじさん。物凄く、ヒトを馬鹿にした雰囲気が駄々洩れで、気分が悪い。

ボッシュさんが、歯軋りをした。

足音がする。重そうな、隠れる気のない歩き方で。

他にも誰かが入って来ている。聞き慣れた金属音。

「貴様は、貴様等だけは許さぬぞ、小娘共！」

私かよっ？！

恨みの籠もった、叩きつけるようなその声に、心臓がキュッとした。

流石に、知らない人から恨まれるのは恐怖だ。

動けない私達を庇うようにボッシュさんが立ち上がって、これまで聞いたことのない、怖い声で言った。

「それ以上近付かないでいただこう、レヴァイン卿」

レヴァインって、あれか！変態野郎の関係者か！

クラクラする目眩や体の震え、理不尽に命を狙われている恐怖より何より、私の頭は怒りでいっぱいになった。

「それ以上近付くなと言っている！」

「愚かな、剣を持たぬ騎士に何ができるというのだ。お前達、まずはこやつを斬り捨てよ！我が息子の無念を晴らしてくれよう」

「ちょっと待てコラ、そこの偉そうなクソジジイ！」

机に縋りついて、無理矢理立ち上がる。弟がずり落ちたけど、ごめん、今はそれどころじゃない。

勢いがよすぎて、ティーセットがいくつか派手に吹っ飛んで割れる音がした。

「トモ！下がれ！」

ボッシュさんが怒鳴る。

あぁ、でも駄目なの。

これは私の問題だ。

私が対決すべき相手だ。

この人がハウィットの父親と言うなら。

「私はそいつに言いたいことがある。邪魔しないで」

気付くと唇を噛んでいて、血の味が広がった。

でも丁度いい、痛くて頭が少しはっきりする。

ほとんど白髪になっている金髪、怒りで釣り上がった青い目、メタボな体を豪華な服で着飾ったおっさん。嫌な笑い方で口元を歪めて私を見た。

「なんと品の無い娘だ！まぁいい、死ぬ前に言いたいことを言うがよい。それ位の慈悲は私にもある」

「あんたに許されなくても言いたいことは言う。

あんたの息子が捕まったのは自業自得。あんたの教育が悪いから。

人を人と思わない勘違い野郎に育てるから馬鹿なことをしでかすの

よ。私を誘拐監禁して、救けに来た騎士達を害虫扱いして罠にはめて殺そうとした。その行いが自分に返っただけ。他の仲間は処刑されたのに生きてるだけでも有り難いと思いなさいよ」

一息ついて、睨み付ける。おっさんは怒りでぶるぶる震えている。

「あんたに謝罪される覚えはあっても殺される理由はない。あんたのそれはただの逆恨み」

「黙れっ！――早くこやつを斬れ！」

なんなんだろ、この通じなさは。

「トモ、早く逃げろ！何やって――」

私は邪魔臭いドレスの裾を限界までめくって、左足を椅子の上に乗せた。

太ももに付けたホルスターから父上から貰ったナイフを外して、鞘ごとボッシュさんに投げ渡した。

多分平和主義の父上の意志に反するけど、死ぬのは嫌だ。ボッシュさんや弟が傷ついたり死んだりするのはもっと嫌だ。

こっちを向いて固まっていたボッシュさんはちゃんとナイフをキャッチして、彼らに向き直った。

剣とナイフでは間合いに差がありすぎて不利だ。あんなの使ったこと無いだろうし。

向こうはボッシュさんの手に武器が渡った事で、動けずにいる。
私は力が抜けそうになりながら、台にしていた椅子を持ち上げる。
ズリズリと引きずって奥に行き、振りかぶって王様が出て行った方の扉に叩きつけた。

割りと、かなり、派手な音が響いて扉が壊れた。
思ったより弱かった。弁償しろって言われませんように。

「誰か、救けて！襲われてるのっ！誰でもいいからさっさと救けろコノヤロー！！」

割れた穴に向かって絶叫すると、また目眩がして立っていられなくなった。叫びすぎて酸欠になったのかもしれない。目の前が真っ白になって、受け身もとれずに頭から倒れた、と思う。

○　○　○　○

謁見は滞りなく終了した。運ばれた茶で一息いれようかとしていると、座っていたリョータとトモが椅子からずり落ちそうになった。

慌てて受けとめると、リョータは意識がなく、トモの方も様子がおかしい。

緊張していたせいか、それとも――さっきの侍女か？

やはり茶に何か仕込まれていたらしく、全て飲み干していたアガサとリョータは意識がない。眠らされただけならいいが・・・。

不安げに弟を抱いて震えるトモに手を伸ばした。

「助けを得たいが、敵がまだ解らない今ここを離れる訳にはいかない。もう少し辛抱してくれ。兄貴が来るかもしれんし剣も預けたままだしな」

しばらくそうしていると、人の気配がして、こちらを伺うようにゆっくり扉が開かれた。

入って来た男を見て、思わず顎に力が入る。

レヴァイン。忌々しい記憶も新しい、二度と関わりたくない男の父親がそこにいた。

血走った目でこちらを見据え、剣を抜いた手下を3人従えて。

膠着状態を破るようにトモはレヴァインに次々に言葉を浴びせたのは見ていて気持ちが良かったし、いい時間稼ぎにもなった。

奴は怒り狂っているが。

恐らく、誰かに見られたら自分は終わりだという判断もできていないだろう。

さて、どうするか。

丸腰で、剣４本相手に動けない３人をどう守る？

最悪でも相討ちに持ち込まねば彼女は助からない。

机と椅子は牽制には使えるだろう。ただし素材は弱そうだが――ふと視線をそれらに移した時、さらにトモが近寄って来た。

何をしている？

「トモ、早く逃げろ！何やって――」

思わず固まった。

トモは片足を椅子に乗せ、裾を思い切りめくって、白く細い足を晒していた。

腿の辺りに着けていたものを外してこちらに投げてきて、我に返った。

向こうの世界から持って来た、変形の小剣だ。

柄が握った手を守る形状になっているので、なんとかなるだろう。

半身が机の影に入る位置で対峙する。大した広さではないので奴らは1人ずつでしか戦えない。

「さっさと殺せ！」

声に押されたか、男が飛び込んでくる。
踏み込みが甘いので受ける迄もなく、躱したその背中に肘を落とすとあっけなく崩れ落ちた。
そいつを踏む勢いで来た男は、気合いと共に剣で突いてきた。
上体を捻ってなんとか小剣で受け流すと、火花が散った。切っ先が肩を傷つけ、そのままギリギリと力づくで押してくる。かなりの怪力だ。

後ろではトモが助けを呼ぶ声がする。

あと少し持たせればいい。
なんとか弾き、構え直す。立ち上がりそうな最初の男の頭部に蹴りを入れて転がし、場所を開けた。

レヴァインが喚き、男がそれに気をとられた瞬間に踏み込み、小剣を腹に突き立てた。
思ったより鋭い切れ味に注意が削がれた途端、肩に衝撃がきた。

傷口が広がったかと思えば矢が刺さっていた。

「は…」

見れば、もう1人が小弓を構えていた。
遠距離は圧倒的に不利だ。
もう充分だろう。
構えを解くと、レヴァインが勝ち誇って笑い始めた。

俺の後ろから空気を切り裂くような音がして、飛来した豪槍が弓の男を貫通し、地面に突き立った。

「武器を捨てよ！レヴァイン卿」

腹に響く声がして、逃げようとしたレヴァインの後ろからも近衛の連中が取り囲む。

振り返れば兄とさっきの若造の険しい顔が目に入ったが、それは無視してトモの元に向かう。

ぐったりとして力なく倒れた少女を抱き起こすと、床で頭を打ったらしく、額に血が滲んでいる。

撫でようとしたが両手が自分と敵の血で濡れていることに気付き、諦めた。

「すぐに医者が来る」

「…ロディ、茶に薬が混ぜられてた。３人はそれを飲んだ」

兄は頷き、指示を出していく。

俺は目を閉じて、トモの温もりを感じた。

みっともないが何とか全員守り切った。茶が好きではないマイヤーがいれば楽だったのにな。

39・この親にしてこの子あり（後書き）

トモの本性を知った上で
可愛い　とか　守らなきゃと思うボッシュさんの巻
でした。

子猫ちゃんというよりは
子虎ちゃんですね

まぁ男を投げ飛ばして股間を踏み躙る姿に惚れたし。
S同士のカップル…？

４０・表と裏（前書き）

姉　弟視点です

40・表と裏

目を開けると、どこかの知らないベッドに寝かされていた。
ふかふかで、暖かい。
いい匂い。

はっきりしない頭を動かすと、金色の毛玉が見えた。びっくりして逃げようとしたら、左手が掴まれていて動かない。

心臓が苦しいほど速く鼓動する。
ここはどこ？
あいつらはどうなった？
また、捕まったの・・・？
声が出なくて、しゃっくりみたいな変な音が口からもれた。

「……トモっ！」

左手をぐい、と引かれて、抱き締められた。
背中をぽんぽんと優しく叩いて、大好きな声が聞こえてくる。

「よかった、目が覚めて」

ボッシュさんだ！無事だったんだ！
手を伸ばして、顔を挟んでじーっと見る。本物だ。
毛玉じゃなくてボッシュさんの頭だったんだ。

困ったような、ほっとしたような表情。

体の方に視線を移すと、白いシャツの首元から包帯が見えた。
背筋がぞっとして、シャツを引っ張って確認すると、やっぱり包帯で、肩の辺りがぐるぐる巻きになっている。

「なんで、怪我してるの」

涙が浮かんでくる。あいつは私を狙っていたのに。
私のせいでこんな怪我を。包帯から目が放せない。

「ご、ごめんなさい…」

「なんでそうなる？お前のお陰で助かったのに」

頭の上から、静かな声が降ってきた。思わず顔を見上げると、とてもとても優しい目をして私を見ていた。
はだけた胸元。細めた熱っぽい目。
なんというか、男の色気？

いきなり恥ずかしくなって服を掴んでいた手を、そっと緩めた。

「トモ？」

ぎゃわーっ！捕まった！

首を傾げて低い声で私の名前を呼ぶ。

ただそれだけなのに、顔が赤くなってく。

「トモ・エ？」

巴？

たどたどしいそれに、息を飲んでボッシュさんを見ると、目の焦点が合わないくらいの距離にきていて、唇が重なった。

熱くて、柔らかくて、優しい。ふわふわする。

お互いにぎゅーっと抱き合って、生きてる喜びを噛み締めた。

○　○　○　○

王様のお茶会に行って、気付いたらベッドの上で、約2日眠りこけていました。

僕の意識が飛んだ後、ハウィットの父親が手下を引き連れて襲撃にきて、それをボッシュさんが1人で傷つきながらも撃退したそうです。

王様が去った後とはいえ、城の中で薬盛って剣で襲撃だなんてことがどうして実現しちゃうんですかね？

危機管理がなってないんじゃないですかね。

「申し訳なかったね」

「襲われたのが僕達で、しかも無事だったから良かったようなものの、外国の使節とかだったら国際問題ですよね。戦争もんですよ」

「それはちょっと話が飛躍しすぎかな～」

ロデリックさん他近衛騎士を連れてわざわざ見舞いに来て下さった王様は、僕の怒りを受け流すように穏やかに微笑んでいます。

じっとりとその顔を見ていると、引っ掛かっていたことの答えが浮かんできました。

「その逆の可能性もありましたよね」

僕達が無害であるという確証はなかった。

誰が、『変な森』から出てきた人間を信じる？

しかも、既に地方の領主と問題を起こしていたのに。

「ボッシュさん達がいたとは言え、単なる付き添いで剣を取り上げたのに、中庭の近衛騎士が全員いなくなっておかしいな、って思ったんですよ」

「気付いていたんだ」

王様は、一瞬驚いたように目を丸くして、それから悲しそうな顔になりました。

「僕達をまとめて置いといたら、レヴァインが動くと解ってたんですよね。かなり恨まれてるのは皆知ってたわけだし。僕達を襲って共倒れになれば一石二鳥ですもんね」

傍に控える近衛騎士が何か言おうとするのを、ロデリックさんが制するのを見ながら、王様はため息をついて、でも何も言いませんでした。
弁解しないのは潔くていいですけどね。

「為政者としてはこの上なく正しいですよ。最小の犠牲で最大の効果。僕達は得体が知れないし、争いの種になるからいない方が楽だし、あの家の人達は好き勝手やって評判悪いわ、無駄に権力あるわでこの機会に潰しといたら安泰ですよねぇ」

「これは陛下のお考えではない、宰相の策だっ」

堪り兼ねたように、ロデリックさんの制止を振り切って、若い近衛騎士が叫びました。

「そんなこと問題じゃないです。最終的な決定は王様でしょう？あ、あと別に言い訳とか謝罪もいりませんよ。僕達を生かしてもらってるだけで有り難いと、本気で思ってますから」

例えばアメリカだったら。病院に入れられるか、スパイかテロリストかと思われて連行されてたかもしれませんね？解剖は――人型だったらされないかな。

そしてメディアの餌食か。

王様が、可哀相なものを見る目で僕を見ているのは、ちょっとむかつきます。

「姉はまた怖い思いをしたし、ボッシュさんが怪我してしまったからすごく傷つくと思います。だから、姉には悟らせないで下さい」

後が怖いから。

僕は王様の目を見ました。深い緑の色。

「僕らの、ハハの国に伝わる言葉があるんですけど。『人の恋路の邪魔する奴は馬に蹴られて死んじまえ』とかっていうんです」

王様はちょっと固まってから、吹き出しました。
軽く爆笑してるので、近衛の皆さんがぎょっとした顔をしています。

「ハァ、それは至言だね。そうだね、うん。じゃあ尚更申し訳なかったね」

笑った後、なぜだか肩を落として王様は言いました。

「だから、王様は謝っちゃいけないんですよ。ふんぞり返って、『褒美をとらすぞ』くらいの勢いが最適なんです」

「そう？君は宰相と同じようなことを言う。それじゃあ何かご希望の褒美はあるのかな」

キタ――――！！
僕は内心小踊りです。

「レヴァイン父の処遇なんですけど。どうせ始末に困ってますよね。幽閉くらいじゃ不安要素が残るし、貴族はよっぽどのことじゃない

と処刑できないんでしょう？」

王様の眉間に皺が寄りました。僕はしれっとした顔のままで続けます。

「だから、ガルニエに連れて行って、あの『森』にぶっ込んどいて下さい」

僕達の世界に行けば、生き長らえることが可能かもしれない。上手く行けば僕達の消息が伝わるでしょう。
運がなければ、ロボやモップのいた未知の世界へご案内。大冒険が待ってる筈。

王様は無表情になって、何も言わずに部屋から出て行きました。近衛の皆さんも後を追い、ようやく僕はベッドに横になれます。
やれやれです。

ちょっとウトウトしていると、ノックなしにドアが開かれて、跳ね起きました。

「リョータっ」

走ってきた姉が、そのままの勢いでベッドに飛び乗ってきて、僕の

肩を掴んでガクガク揺さ振りました。
うぇ。脳みそシェイクはきつい。

「大丈夫？副作用はない？痛かったり痒かったりしない？」

「やめてよ～今死にそうだよ」

なんとか手を外して訴えると、姉はため息をついて目元をごしごし擦りました。

「トモも飲んだんでしょ。平気なの？あ、ボッシュさん達に会えた？」

「俺もいるぞ」

僕が聞くと、開いたままだった扉を閉めながら、ボッシュさんが言いました。
顔色は悪いけど、あんまり普段と変わらないですね。

さっきまで王様が座ってた椅子にふんぞり返って足を組みました。
体が歪みますよ。

「さっきまで、王様がお見舞いに来てくれてたんですよ。ロデリックさんと、この前の若い人と」

「あ、そうなんだ。律儀だね。私のとこには来なかったけど」

「うん。優しいよね。入れ違いになったか、ずっと誰かさんが張りついてたから気を利かせたのかもね」

2人は顔を見合わせて、首を傾げました。その様子じゃまだ清く正しい交際のようですね！

それに、ボッシュさんは知らなかったみたいです。
変に思っても、わざわざ調べたりはしなさそうだし。
ロデリックさんは言わないでしょう。
なんか嫌。ボッシュさんは許すかもしれませんが。

「はやく、帰りたい。それでロボを思いっきりぐしゃぐしゃしてごろごろして力一杯遊びたいぃー！」

心の叫びです。
癒しが足りないです！

悶える僕を、姉とボッシュさんが2人で撫でてくれましたが。
なんだか逆に、ねぇ？

４０・表と裏（後書き）

お気に入り登録
１００名様ありがとうございます！

読んで下さっている全ての皆様
ありがとうございます

登場人物紹介　その２

□レオ・プラット　２８才

砦内の警備担当騎士（上着が緑）で、姉弟とは隊長室警備で出会う。積極的なジル狙い。でも色んな女性に声をかけてるので選定外。細身のアントニオ・バンデラス（リョータ談）似で赤銅色の肌、黒目黒髪。陽気な性格と男くさい色気でもてもて。１８５センチで細マッチョ。

△ケラー・サンズ　３０才

わかりにくくジルを狙っている。砦内の文官。総務や経理の責任者。（上着は灰色のチュニックタイプ）筆記用具を腰に提げていて、いつでもどこでも仕事が出来る。眼鏡の似合いそうな、日本人好みの細身の美形（リョータ談）。赤毛の長髪をうなじの辺りで結んでいる。目は紅茶色でちょっとトモに似ている。
リョータが教えたポンプを実用化して、現在量産に向けて頭を悩ませている。一番出世しそうなのに出番が少ない。１７８センチやせ形

◇カール・ラーソン隊長３８才

砦の警備隊隊長。（上着は黒）砦で一番偉い人。国の騎士団の中でも上位で、目茶苦茶強い。

元は王様の近衛騎士だったが、王様のコンプレックスにより左遷されて砦に赴任した。本人は何とも思っていない。いつでもどこでも全力。

１９４センチでむっきむき。

薄い色の金髪を短くしてツンツン頭になっている。目は水色。いかつい顔でめったに笑わない。

無意識に威圧感を醸し出しているが、子供や目下の者には優しい。

トモはこの人に初めて会った時某鬼軍曹を思い浮べ、腕の筋肉がお気に入りで触ってみたいと思っている。

事件後に姉弟と養子縁組されたことを知ったが、仕方がないで済ませた。独身。

☆マイヤー・フェルゼンフェルト３５才

砦の外騎士。１０歳の時に家族と移住した。言葉に訛りがあり、トモとリョータには関西弁風に聞こえる。

１７５センチで童顔なので２０代前半に見える。髪と目は黒、肌は全然日焼けしてない。顔や腕にうっすら古傷が残っている。

いつも剣の柄を触るくせがあり、危ないヒトっぽい。本気の時は二刀流。副隊長の隠密をすることもある。隊長とは実家が近かったので仲良し。意外と子供には優しい。

□アガサ・コークラン

砦の女性騎士。内騎士。

金髪の巻き毛で琥珀色の目で派手な顔立ち。１８０センチで、胸がある分ボッシュよりごつく見える。

頼りがいがあって腕もたつ皆の姐さん・年齢非公開

（リョータ談）。視力が良く、弓が得意。絡み酒。愛のある結婚をしたいと思っていたり、意外に乙女。

＊マルキン・フォザーギル　６８歳

ボッシュの父親。マッチョ爺ちゃん。ベートーヴェン風の癖の強い白髪、菫色の目。元騎士団長。戦闘で片足を負傷して現役を退いているが騎士団の教練責任者なので発言力は大きい。仕込み杖を携えて若い騎士を扱きまくっている。真面目の反対。息子をおちょくるのが好き。
大きくなって構ってくれないので末っ子に集中攻撃。孫も取り込み中。１８０センチ。貴族ではないが代々騎士の家系で、息子３人すべて騎士。顔は皆似ている。
妻とは死別。

□ロデリック・フォザーギル　４５歳

長男。近衛騎士。副団長。性格はくそ真面目。妻子有りだが父親と同居中で息子が祖父に懐くのをなんとかしたいと思っている。短い金褐色の髪、菫色の目。１９０センチでゴリマッチョ。

妻ルシンダ２８歳
明るいオレンジの巻き毛、青色の目。１７０センチ、骨太。性格はおっとりしている。貴族出身だが家出して押し掛け女房した。

息子マーシャル４歳
金髪の巻き毛、菫色の目。活発で、年の割にしっかりしている。たまに剣の稽古も始めた。周りが大人ばかりなのでトモとリョータに

会ってすぐ懐いた。ボッシュ叔父さんに渡さないのはわざと。

○ブライアン・フォザーギル　４０歳

次男。王都防衛騎士。街を見回っている。奉行所与力みたいな。地域密着型で人当たりが良いので、仕事中に子供が寄って来るのが悩み。性格は一番穏やか。妻と二人の娘と暮らしている。明るい金髪、黒い目。１８０センチ細マッチョ。

▽王様　３８歳

１７８センチやせ形。胃腸虚弱で顔色が悪い。若くして王位に就いた。在位１８年。剣の腕は歴代最弱だが、その分内政や外交に手腕を発揮し、戦で疲弊した国内を立て直した。心配性の宰相が気を遣って色々するが、別にいいのにと思っている。が、特に止めない。
妃は２人。３男２女に恵まれて、家庭的には幸せ。

ボッシュは昔この人の叔父のせいで面倒な仕事をする羽目になった。

番外編・こっそりお仕事（前書き）

マイヤーさんの単独任務　その２

番外編・こっそりお仕事

ボッシュの実家で、先生と兄嫁さんと甥っこの相手をして――仕事の前に精根尽き果ててどうするん、俺。

「マイヤー、疲れた顔をしているぞ？どうした」

にやにやしながら先生が言うけど、えらい態とらしいわぁ。

「いけませんわ！そういう時には甘いものを！」

いや、もー甘いもん食べ過ぎて頭イタイし茶は渋いしで辛いんですが～。

日も暮れてきたし、もぅ逃げてもええやろ。ちっこい甥っこことボッシュの戦いを観戦すんのも面白いんやけどね。

ブラさんも見回りから本部に戻る頃やろ。

罪作りな姫さんの頭をぐしゃぐしゃ掻き回して、番犬に吠えられる前に脱出成功した。

はぁ、歩いていったら腹もこなれるかなぁ。

「どうも～。ブラさん帰ってますか～？」

「あんた、何」

無愛想な男やな。手紙を渡すと渋々奥に行って、話し声がする。
怪しい奴とか胡散臭いとか全部聞こえとるで！

「マイヤー久しぶりだね」

あ、出た！笑顔のボッシュや。似すぎてて笑える。

「何考えてるか解るけど、いい加減慣れてくれないかな」

呆れたように笑うのも、あいつには無いことで。いかん。とまらん。

「ごほんっ、手紙、読んでくれたら解ると思うけど、闇商人が入って来とる」

「うん。ちょうど当たりはつけた所だったんだ。都でも金持ち連中

にやたら接触してるのがいてね」

ん？

「丁度良かったよ。我々では面が割れてるし、雇うにしても面倒だった」

ブラさんの合図で別の騎士が抱えてきたのは、何の変哲もない男物の衣服。ぴったりな大きさやな。

用意がえぇですね？

なんで、俺が来ると解ってたみたいにサクサク話が進むんでしょうか？

「あ、リヴァンと僕は同期だよ。でもって、妻同士が親友でね。よく手紙のやりとりをしているんだ」

えぇぇぇ。

やっぱ副隊長って嫌やわ！怖いわ！

ブラさんも怖いわ。

大人って汚いわぁ。

「接触できる酒場は判明しているから、今夜にでも行ってみよう。飲み過ぎないでね」

ほーほー。それはそれは。
経費で落としてもらえるんでしょうな。

「無傷で捕らえるんだよ、他に仲間がいるかとか、聞くことあるから。飲み過ぎるなよ？」

へーほー。口が聞けたらいいんでっか。
わっかりましたぁ。
他人の金で飲むのは気が引けるけど、仕事ですから、しゃあないなぁ。

41・そろそろお暇します（前書き）

ずっと姉視点です

41・そろそろお暇します

弟とボッシュさんと3人でだらだらしていると、部屋の外から誰かが走ってくる音がして、ズバーン！と扉が開いた。

「アガサ！」

開いた瞬間、ボッシュさんは椅子から立ち上がって、私達が座っているベッドの前に立ち塞がっていた。
一瞬緊張したけど、入って来たのはアガサさん。
実を言うと忘れてた。

「ああ、良かった！2人とも大丈夫そう！ごめんよ、私が役立たずで！」

大きな体を縮める様にしてアガサさんはベッドの横に膝をついた。
ボッシュさんはまた元の椅子に座り直して、ため息をついている。
傷が痛むんだろうか？

「やだなぁ、アガサさんが気に病むことじゃないですよ？」

弟はにっこり笑って、アガサさんの手を取った。

「僕達は言ってみれば客の立場だったんですよ?警備の不手際で変なもの飲まされちゃったんだから、アガサさんも被害者ですよ」

アガサさんの罪悪感を晴らすように、優しく声をかける弟。
知らない間に大人っぽくなってきたなぁ。
あと、タラシになりそうでちょっと不安。

「私も、早く帰りたいな。せめてボッシュさんの家は無理かな?」

ぽつりと言うと、弟にシーツを握っていた手の甲を叩かれた。
このお城は綺麗だし、王様もいい人だったけど、なんというか、落ち着かない。

「ここは居場所じゃない」

また私が呟くと、ちょっとぐったりしていたボッシュさんが立ち上がった。

「じゃあ、ちょっと兄貴に言ってくる。アガサ、ここは頼む」

お兄さんに挨拶して、帰らせてもらうのかな？
勝手に帰ったら失礼だもんね。

「それにしても、陛下のおわす城内であんな事が起きるなんてねぇ。
近衛はともかく警備騎士がなっちゃいないよ」

アガサさんが腕組みして憤然と言った。同じ警備の人として許せない点があるんだろうなぁ。
いつも真面目にやってるもんね。

「それにしても、あんたら本当に体は何とも無いのかい？あたしは夜には目が覚めたのに、あんなに長く効き続けるなんて」

体質の違いかな、と言おうと思ったけど、ちらっと見た弟が目配せしてきた。　なになに？

「アガサさんは僕達より大柄だし、鍛えているからあんまり効かなかったんじゃないですか？僕達は慣れない旅で疲れていたし」

あ、そっか。アガサさんは異世界から来たこと知らないんだった。
面倒臭いな。
表向きは隊長の養子になったので顔見せとか、ひどい目に遭った可哀相な子（私だ）を王様が直々に労うとか、お世話になったマルキ

ンさんにご挨拶とか、そういう事になっていた。
本当は何だったんだろう？やっぱり王様も珍獣が見たかっただけ？
遠距離を呼び付けるところがすごく王様っぽいよね！

それからしばらくダベってると、扉がノックされて開いた。

「失礼します。陛下が御越しです」

初見の近衛騎士さんが入って扉を支えると、ロデリックさんとボッシュさんを従えた王様が入って来た。

ボッシュさんはさっきより顔色悪い。早退？させてもらえないのかな。

「…やぁ。トモも気が付いたのだな。医師からは薬が抜ければ問題ないと聞いている。だが念のため暫らくは安静にするとよい」

王様はわざわざ顔を見に来てくれたらしい。
お疲れ？それとも罪悪感？なんともいえない顔をしてるなぁ。

「お前達にはできれば城に残ってもらいたいが、の」

とんでもない事言いやがったよ！あいつと同じか！

「有り難いお言葉ですが、あんな怖い目にあったところに居られる程、僕達図太くありません」

弟がにこやかに拒絶する。なんだろう、丁寧なのに失礼な気がするよ？

「君もかね？婚約者と居られるように、彼を近衛に取り立ててもよい。私としては姉弟2人共欲しい。特にリョータ、君はその年にしては知恵が回るようだし」

王様はボッシュさんを手だけで示して言った。
近衛の人と違ってだるそうに立つボッシュさんは、物凄〜く不機嫌な顔をしている。
というか。上から目線がむかつく。いや、王様だから当然なんだけど。

だいたい何で弟狙いなの？この国の人って。
危険だわ。

「弟はまだ１４歳です。誉めて戴いて嬉しいんですけどまだ子供です。私もただの子供です。珍獣でもないし何の価値もありません」

敬語って難しいな。どう言ったらいいんだろ。

「私は弟が大人になるまで守る義務があるし、隊ちょ――義父みたいに立派に育てて、可愛くておとなしいお嫁さん見つけて一緒に遊ぶという野望があるのだから！だから弟は渡さないし私達は帰ります。ここは私達の居場所じゃない」

む、混乱の余り余計な事まで言っちゃった。弟が半目になって引きつっている。

「…弟想いなのだな。いやお互いか」

王様が微妙にずれた反応をしてくる。諦めたの？

「先に生まれたからには、当然だと思いますけど」

まぁ、相続争いで殺し合いなんて事件も聞いたことはあるけどさ！普通は大事にするよね。
そこのでっかい兄弟だって同じ筈だ。

暫らく王様が黙ってしまったので、居たたまれない雰囲気になった。

「まぁ、解ってはいたのだが。諦めるとしよう。さて子供達。レヴァインは追放刑となる。初めての試みだが、腑抜けた貴族にはよい見せしめになるだろう」

王様はちょっと意地悪そうに笑って、弟をちらっと見た。ほんとに諦めたんだろうなぁ？

そして言うだけ言うと、お供を連れてさっさと部屋から出て行ってしまった。

「はぁ、アンタ達は物怖じしないねぇ」

文字通り胸を撫で下ろしてアガサさんが言った。大げさですなぁ。

「ちょっと、トモ、色々言いたいことが…」

にじり寄ってきた弟を躱して、ボッシュさんの腕を掴んだ。
早く帰ろう。
なんだか倒れそうだ。

「ボッシュさん平気？」

いつものように撫でる手が熱い。やばいんじゃないのかな。

「じゃあ行くか。馬車は頼んである」

全然なんともないですよーという顔で言うから、しょうがない、騙されてあげよう。
戻ったら看病してあげる。まだお部屋チェックしてないし！

41・そろそろお暇します（後書き）

多分　次回でトモ待望の
ドキドキお部屋訪問☆

42・一番の薬は愛情（前書き）

弟　ボッシュ　姉　です

42・一番の薬は愛情

挨拶もそこそこに、というか王様が余計なことを言わない内に、そそくさと馬車に乗って帰りました。
ちょっとスカウトっぽいことを言いだしたので焦りました。あれがハウィットと同じ事だとなんで解んないんでしょ？生まれた時から上から目線の人にとっては何でもないことなのかな。

断れたから良かったです。あれ以上しつこかったら姉がキレてたかもしれませんね。
まぁお陰でというのも変だけど、とんでもない野望を聞いてしまったので、阻止しなくてはいけなくなりました。

未来のお嫁さんは自分で見つけたいですよ・・・。姉と2人の尻に敷かれる生活は悲しすぎます！
帰ったら砦のお兄さん達に知恵を仰がねば。

ボッシュさんの家に着いたらすぐにルシンダさん達が出迎えてくれました。

「あぁ、よくぞご無事で！大変な目にあいましたね」

今にも泣きだしそうな勢いで、逆にびっくりです。
感情の起伏が激しい方ですね。

それに、大変なのはボッシュさんなんですけどね～。

「僕は眠ってただけだから何ともないですよ～。でもトモとボッシュさんは休ませてあげて下さい。マーシャル君は僕と遊ぼうか」

事情を知らないマーシャル君がちょろちょろしてたら療養にならないですし。
簡単な字の勉強もしたいし絵本が読みかけだし。

流石に真剣な顔のマルキンさんにも挨拶して、僕達は子供部屋に向かいました。

○　○　○　○

肩の傷が熱を持って疼くのも不快だが、今はそれだけではない、と自分で解っている。

今回の謁見は、レヴァイン卿を捕らえるための仕掛けだった。
王家を脅かす勢力を早めに摘み取るのは当然だが、なぜ子供達を使うのか。
なぜ俺とアガサに明かされなかったのか。

所詮、騎士は使い捨てということか。身に染みて解ってはいるが、

たまに情けなくなるな。

そんな事よりも、今回の件についてリョータが感付いたという。
囮にされ殺されかけたというのに、表面上は変わりなくトモやアガサを気遣い、笑っている。
少しは疲れているようだがどこか他人事のように冷静だ。

その素質は王が欲しがったように政治向けだが。

痛々しく哀れだ。

トモもリョータも、自分達が誰かに守ってもらえると思ってないのではないだろうか？

帰宅すると、珍しく真面目な顔のジジィに呼ばれた。トモは着替えに行き、リョータはマーシャルと共に遊ぶという。

「ロディから簡単に事情は聞いている。まずは、よく守った」

「あんたは知ってたのか、今回のこと」

「知っとれば止めるわ」

ジジィは苦々しげにそう言った。まぁそうだろうな。

「ロディを責めてやるな」

ぽつりと言う姿が驚くほど小さく見えて、思わず笑いが零れた。

「兄に八つ当りをするほどガキじゃない。勅命は絶対だ」

「…そうだな。あの子等は大丈夫か？」

「どうだろうな。リョータは知っててあれだ」

そう言うと、ジジィは肩を落としてため息をついた。机の上の書類が飛ぶ。

「あの子はお前さんに似てる。決して弱みを見せまいとする所が」

余計なお世話だ。

いい加減目眩がしてきたので、自分の部屋に避難することにした。

トモの顔が見たかったが、止めておこう。

○　○　○　○

疲れた。あ～疲れた。
寝たのにな。寝すぎか？

寝てる間に着せられてたネグリジェ？があったかいし楽だったからそのまま帰りたかったんだけど、皆して怒られた。

王様とか皆に見られたからもう遅いと思うけど。別にスケスケじゃないんだからいいじゃん。普通に可愛かった。

帰る前にお城のメイド部隊に着せ替えされたんで、ルシンダさんにもっと楽な服をお願いした。
お姫様はいっつもあんな格好で大変だな～。本物のお姫様と王子様に会えなかったのはザンネンだ。テレビでは見たことあるけどね！
現代版は夢が無いから。

「まぁ、トモ、額に怪我をしたのねっ？！」

髪を梳かしていたルシンダさんが、この世の終わりみたいな声で言った。櫛を持つ手がブルブル震えて、今にも泣きそう。

「怪我？ってしてないよ？ん？あ、倒れた時に打ったのかも。全然まっったく痛くないからね」

意識飛んだから覚えてないんだよね。かさぶたになりかけだし。

「あれ？ボッシュさんは」

居間に戻るとマルキンさんが陽なたぼっこをしながら本を読んでいた。

手招きされて寄って行くと撫で撫でされる。

ふふ。照れるぜ。

「あいつは情けないことに部屋でボロっちくなっとるよ」

厳しいっすね！これが漢の教育？

しかしこれがチャンスだ。

「あ、私、看病してきますねっ」

「お前さんも、疲れてるだろ」

「イエ全く。寝すぎて多分一晩中でも平気です」

マルキンさんはなんとも言えない微妙な顔をして私を見た。うぅ、病人が出て喜んでるみたいに思われたかも？

「無理はせんでくれよ？」

そう言って、ポン、と軽く頭に触られた。

よし、お父さん公認だ！

ボッシュさんの部屋の前に来ています！昔見たテレビみたいだ。寝起きに行くやつ。起こしてはいけないので、緊張するぅ。

熱があったので、水と手ぬぐいも何枚か用意した。私の手も冷え症だから氷代わりになりそうだ。

よし、突入！

そっーと入った部屋は、深緑色で統一されていた。

子供部屋と違って全面絨毯じゃなくて硬い床がちょっと寒そうだけど。

砦の部屋と同じように、家具は少ないけどその分よく解らないものが転がっている。

透明な水晶玉？とか、いろんな長さの剣、謎の木箱。やっぱり本棚には色々詰まっている。読めたらいいんだけど。

机にたらいをそっと置いてから、手ぬぐいを浸した。絞ったそれを持って、慎重に、ボッシュさんの眠るベッドに近付いた。

脱いだ上着やシャツが散らばっているのを拾って、それも机に置い

た。水差しとグラスがあるから、水分は摂ったみたいだね。

苦しそうな息をして、眠っている。

ぎゅっと心臓を掴まれたみたいに、胸の奥が痛い。

汗の浮いた顔と首をそっと拭くと、うっすら目が開いた。やばい、起こしちゃったかな～。

「ト、モ？何やってる」

わりと冷静に聞かれた。
前に部屋に忍び込んだ時の事を思い出して、顔が熱くなった気がする・・・。

「お見舞い、看病、しようと思って…嫌だった？」

ドキドキしながら聞くと、ボッシュさんの手が掛布団から出てきたから、思わず握る。
その手は引っ張られて、熱い顔にあてられる。
顔、私の手、ボッシュさんの手。ああぁ熱い。

ボッシュさんは、今まで見たことのない、なんというか、うっとりと、気持ち良さそうな顔をしている！
やばい！なにそれ！反則だよっ！
嬉しいのに今すぐ逃げ出したいよっ？！

「トモ……ここにいて」

ふわぁ～！！

心臓が持たん！

『いて』って言ったよ。

ボッシュさんが私におねだりした！

弱ってるボッシュさん可愛すぎ！赤い顔で、潤んだ目で見ないでぇ！

頭の中の永久記憶に保存した。

恋で人は死ぬと思う。

それから、ボッシュさんが眠って手が放れるまで悶えた。

そっと手を伸ばして、頭を撫でた。

可愛い可愛い。

私がしっかり看てあげるからね。

42・一番の薬は愛情（後書き）

トモちゃん若干危ないですね

４３・弁解は罪悪と知りたまえ（前書き）

姉　ボッシュ視点です

43・弁解は罪悪と知りたまえ

ボッシュさんの汗を拭いたり、冷やしたり、水を飲ませたり。
しっかり看病してるよ！

外が真っ暗になる頃には、かなり楽になったようだ。苦しそうだった寝息が落ち着いてきていた。

私が幸せに浸りながら寝顔を見ていると、ドアが静かにノックされてロデリックさんが入って来た。

ゆったりしたシャツとパンツに暖かそうなガウン？に着替えているから、今日は早めに帰ってきたみたい。ボッシュさんが心配だったのかな？

「どんな具合だね」

「昼間よりは随分熱も下がったし、よく眠ってます」

私がそう言うと、ちょっと寝顔を覗き込んで頷いた。それから無言で見つめている。よっぽど心配だったのかな？
でも、それなら。

「…どうしてあの時、ボッシュさん達から剣を取り上げたんですか」

「陛下の謁見には近衛騎士以外帯剣は認められない」

「こっちに武器が無いのにどうして周りに誰もいなくなったんですか。来る時には見かけましたけど」

私達はお互いに顔も見ず、ボッシュさんを見ながら話している。

無言。無言。無言。

弁解をしない、説明を拒む沈黙が潔い。

「まぁ、どうでもいいですけど。偉い人の考えは解らないし解りたくもない」

「私からは何も言うことはない。…ただ、弟に関しては礼を言わせてくれ」

そう言ってロデリックさんは跪いて頭を下げるから、びっくりして私は椅子から立ち上がった。

「礼だなんて、何で…」

ガウンのポケットから、布に包まれたものを取り出して、私に差し出している。受け取ると、硬くて重みがある。あ、これは私のナイフか。

「こっそり持ってたの怒らないんですか」

金属探知機無いからいいかな～って思ったんだよね。

「護身用だろう？」

ロデリックさんが立ち上がらないので、私は床に座った。ベッドの一角だけ厚い絨毯が敷いてあるし、なぜか石の床もたいして冷たくない。床暖房？

「護身用じゃなくて、ただいつも持ってるだけです。父上…実の父に、貰ったものなので。父は人を傷つけることを嫌ってました。森に入る時に枝を落とすのに使えと」

「こんな最上級の小剣なのに…。だが、お優しい、善い方なのだな」

お兄さんは驚いたようだった。まぁ、騎士なんて対局だよね。職業が戦うことだもんね。
でも私は父上ほど優しくもないし善良でもない。

「私は、コレを使わないけど、家族を傷つけるのは許さないです。弟が危なかったら迷わず戦うし。…大事なのはずっと弟だけだったけど、今は…ボッシュさんも大事です。砦の人は私にとって家族な

んです」

「リョータもそんな事を言っていたな。羨ましいくらいに仲が良いのだな」

お兄さんは顔をくしゃっと歪めて笑った。

「私も、君と同じような事を思っていた。年の離れた兄弟だから、特にね。弟にはよくできた妻を探してやろうと」

あまりに話題が飛んだので一瞬何の話かついていけなかった。

つま？　ツマ？　妻って？

「どうやら自分で見つけたようだね。たいそう強くて可愛らしい奥さんを」

私はもうお兄さんの顔が見てられなくて、俯いた。きっと真っ赤になってるだろうね、耳まで！

「私は包帯を替えて傷を見るから、食事に行ってきなさい」

なんで真顔であいう事言えるんだろ。

恥ずかしすぎる。
嫌われるより、良かったかな？うん。

○　○　○　○

ふと、肩に違和感を覚えたので目を開けると、兄が包帯を手に思案げな顔で立っていた。
なんだ。
だが眠っている間は気分が楽で、安らげた。いい夢をみていたようだ。

「肩は動くのか？指に支障はないか」

傷口を改めながら兄が言うが、引っ張るのは止めて欲しい。

「問題ない。熱も下がったから」

「ふむ。ではトモに礼を言うのだな。帰ってからずっと看ていたらしい」

薬を塗り付けた布をあて、包帯で巻き付けながら言ったので、反応して思わず顔を見てしまう。
首の動きで肩の皮が引きつり、出かけた声を歯を食い縛ることで耐えた。

夢じゃなかったのか？

変な事言わなかっただろうか。なにか、言ったような気がする。

考えていると、頭の上にばさばさと着替えを落とされた。

「まさか着替えまで頼む訳にもいかんだろう。自分で着られるか」

至極、真面目な顔をして言ってくるので、ため息がでた。着替えられないと言ったらどうする気なんだ？
兄貴なりの罪滅ぼしなんだろうが・・・俺もいい年なんだけどな。

「…いいよ」

「では、よく休め」

「兄貴は俺の誇りだから」

部屋を出る兄の背中に声をかけると、一瞬止まって、振り向かずに出て行った。
俺はいつもあの人の背中を見ていた。
追い付けずに道を逸れた訳だが。

リョータとトモには、あの人を嫌って欲しく無いと思うのは、ただの我儘なんだろうな。

着替えてからまた寝台に横になっていると、控えめに扉が叩かれ、盆を持ったトモが入って来た。思わず起きて受け取ろうとするが、目で制された。
よたよたと運んできて、机の上に乗せる。

「起きたんだね、気分はどう？お腹すいてる？お腹に優しいものを作ってきたんだけど。まだ熱あるね」

食い入るようにこちらを見つめて、手を伸ばして顔に触れられた。
小さな指先はとても冷たかった。
この感触には覚えがある。
阿呆な事を言ってなかったか確かめたいが、気恥ずかしい。

「腹は、減ってる気がするな」

トモは頷くと、盆の上からいい匂いのする皿と匙を手に取り、中身

をすくってこちらに差し出した。

「トモ特製シチューです。あ～んして？」

トモは頬を赤く染め、目が輝いている。どちらかというとトモを食べたい。

いや、そうじゃなくて。

結局、根負けして全部食べさせられた。

誰かに見られなくてよかった。特に、ジジィ。トモの料理は、野菜と肉が柔らかく煮込まれて、煮汁と共に食べるものだった。食べ易いし、暖まった。

そう言えば。

「トモ、こっち来い」

手を取ると、相変わらず両手が冷たい。包み込んでこすってやった。こっちが熱いので丁度良いだろう。

「こんなに冷えて…大丈夫なのか？」

「う～ん。体質かな。足も冷たいの」

首を傾げて、指先を見ながら言う。やはり痩せているせいだろうか。
それに、足まで冷たいと。

「トモ、忘れていた。足と言えば、人前であんなに足を出すんじゃない！」

あんな腐った野郎共に見られてしまった。

「ん？緊急時だったし。ここはミニスカート穿かないんだ？マイクロはどうかと思うけど、ドレスなんかより楽なのに」

不思議そうに言うが、こっちも解らん。

「ミニ？てなんだ？民族衣裳か？」

俺が聞くと、トモは両手をするりと抜いて、服の裾を摘んだ。
何となく予想が付いたので止めようとしたが、遅かった。

「こんなの」

あっさりと裾を引き上げ、膝より上で止めた。

細く白い両足が目の前に惜し気もなく晒され、釘づけになる。

「マイクロはもっと短いのね。それはどうかと思うよね」

どうかと思うのはこちらなんだが、トモは目が合うとにっこりと微笑んだ。

わざとか？わざとなのか？

何となく怒りさえ覚えて、トモを捕獲した。

そのまま寝台に抱き上げ、上掛けの中に引き込むと、トモの体は全体的にひんやりしていた。

「な、な何を？腕、怪我してるのに動かしちゃ駄目でしょ！」

「トモは軽いからなんともない」

それに、抱き締めていると段々暖かくなってきた。

「か、可愛くない！さっきは、あんなに可愛かったのにぃ！」

聞き捨てならないことを聞いた。

可愛い？

「トモー？どういう意味？俺昼間何を言った？」

布団の中で回転して上になって見ると、トモは耳まで赤くなって目を逸らした。
俺は一体何を言ったんだ？

涙目になってきたので、目蓋に口付けして、そっと舐め取った。

「また涙舐めた」

「トモに泣かれると嫌だ」

マイヤーなんかは泣かすのが好きらしいが。

暫らく見つめ合ってから、唇を吸った。
そのまま顎を越えて、喉にそっと吸い付くと、案の定バタバタ暴れだす。

面白いが、肩がそろそろ限界だった。本気になる前に止めておこう。

「お仕置きはここまで。足はちゃんと隠すように」

トモはもぞもぞと這い出て行き、赤くなった顔を手で隠して呻いた。

「トモ、夜は冷え込むからちゃんと部屋に戻って寝てくれ。心配でこっちが寝られなくなる」

トモは赤い顔のままで暫らく逡巡していたが、やがて頷いた。
こちらへ屈んで、一瞬掠めるような口付けをしてから盆を持って出て行った。

肩が無事なら多分逃がさなかったろう。

ラーソン隊長とリョータの許しを得なくてはならないことを思うと、ため息が出る。
求婚できるのはまだまだ遠い先になる気がする。

４３・弁解は罪悪と知りたまえ（後書き）

副題は　とあるアニメの台詞から。もふもふ大量でした。

言い訳せずに批判も甘んじて受ける人は格好いいですね。

番外編・派手にお仕事（前書き）

マイヤーさんお下品です

食事中の方は読まないで下さい

番外編・派手にお仕事

ここが王都か、ちゅーくらいくたびれて暗くて汚い店やな。

全員とっ捕まえてどついたったらボロボロ悪さを白状しそうな、胡散臭い客しかおらん。

むかつくのはそこに溶け込んで疑われもせんちゅうことや。

清く正しく、お国のために日々精進しよるのにぃ。

「おっちゃん、おかわり」

おまけに酒は薄い。薄すぎる。

「兄さん荒れてんなぁ」

１０杯目か、１１杯目を飲み干した後、隣に男が座った。この店女っ気が無さすぎ。変な店やないやろなぁ？

「仕事について考えてんねや。怖い親分は人使い荒いし、連れには犯罪的に可愛らしい恋人ができるし、ええ人やと思っとったら腹黒いし」

愚痴りながら隣の男を観察する。
４０か５０か、どこにでもおる老け顔の男。白髪混じりのぼさぼさの茶色い頭に充血した目は、黒っぽい。
貧相な痩せた体はちょっくら猫背で、いかにも不健康そうで、ぼろっちい濃灰色の服。

右の耳たぶに黒子。

あれ？こいつちゃうん？

にこにこボッシュ改め腹黒ブライアンが言っとったのは？

向こうから寄って来るなんて、日頃の行いがええからやな！

「あぁ、世の中は要領のいい奴だけがうまい汁を吸うようにできている」

嫌な笑い。声を出さずに、引きつったみたいに笑っとる。気持ち悪ぅ。

「まぁあんたも飲みぃな」

店の親父に合図をして、男にどんどん酒を飲ませる。

暫らくすると、ふらつきながら便所へ立った。
気付かれん様に後を追って時間を置く。
だってほら最中は見とうないし？

音をさせずに扉を開き、閉めた扉を掃除用具でつっかい棒する。窓

はなし。臭すぎや。
逃げ道を塞ぐと、尋問の効果はあがるんで。

「おっさん」

後ろから声をかけると、肩がビクッとする。
ここ一人用やもんな！
てか、まだなんかい。年とると時間がかかるっちゅーんはホントなんや。

「あんた、何でここにっ」

声が裏返ってる。アレを仕舞ながら顔をきょろきょろさせて逃げ道を探す。無いよん。
俺がにっこり笑って近づくと、男は必死で首を振る。

「ち、近づくな」

「なんもせぇへんよ？聞きたいことがあるだけ～。楽しい噂聞いたんよね」

手で胸元を強めに突くと、呆気なく尻餅をついた。

うわきったな！最悪！俺のせいやけど！

座り込んだおっさんの、汚い床に着いた両手の外側に足を広げて立つ。
おっさんを跨ぐ形やね。傍から見たらちょっとあれやね。

「おっさん、面白いモン、売ってくれるんやて？俺人生に行き詰まってん。だからええ玩具が欲しいなぁ」

「そうか、あ、あんた客なんだな？そうか…」

おっさんは尻をもぞもぞさせ、目をさ迷わせて唇を舐めた。

打算と不審。

「おっさんが巻き込まれたないなら、教えてくれたら直接仕入れに行ってもえぇで」

にこにこ。はよしてくれんかな。鼻が曲がりそうなんやけど。

「仕入れ…じゃあ、なく。俺が作ってるんだ。俺の作品なんだ！」

はい？

こいつ、魔導士かいな！

おっさんは目を光らせ、口から唾を飛ばしながら作品の解説を始めた。

うーん。面倒やなぁ。

魔導士かぁ。生まれ故郷にはおったけど、小さかったからあんま覚えてないわ。

ここから逃げ出されん時点で駄目っぽいのは解るけどな！

道具とか薬とか作る分野の魔導士なんやろな。

こいつ引きずってったら任務完了やな。

仲間がおったらブラさんがなんとかするやろ。あんま手出ししたら苛められて帰れんなったら怖いし。

「そうかぁ、おっさん凄い人やったんやなぁ。手荒な真似して悪かったわぁ。飲み直そか」

床に着いた手を触りたないから、おっさんの服の前面を掴んで引っ張りあげ、腹に膝をたたき込んだ。
吐かんとってや～？

ちょっとの間観察。よし、おっさんは静かになった。
棒を外して男を引きずりながら外にでたら、なんでか店中の視線が集中した。

「おっさん、こいつの分もお勘定な」

薄い割りにはそこそこの代金を取られた。
世知辛いなぁ。

意識のない男は重いわ。臭いし。

「兄さん、そいつは…」

「お持ち帰りや。なんや文句ある？羨ましい？」
椅子に尻が接着しとるように飲み続ける野郎が声をかけてくるので返事をしてやると、別の奴が進路を塞ぐように立ち上がった。
なんやの、面倒な。

「太っ腹な兄さんよ、こっちにも奢ってくれよ。これからお楽しみなら財布だけ置いていっていいぜ」

不愉快な誤解をされとる？

「大事な金やねん。あんたにやったって小便になるだけやし、もったいないわ。そこどかんとこいつ持って通れんやろ」

せっかく穏便に済まそうと思ったのに。

なんか増えたわ。

まぁええ運動になるかな？

§§§§§§§§

「どうして営業停止になるほど店が壊れたんですか」

不思議やねぇ？

「酔ってたんですか？」

「まさかぁ。水みたいに薄かったです」

「いい意味でも悪い意味でも、目的以上の結果を導きましたね、マイヤー君」

副隊長と話しとるようですよ、ブラさん。

笑顔を崩さずにこっちを見とるのに、圧力がかかる。

「店を片付けるので、手伝って下さいね」

ええ？そろそろ帰って寝たいんやけど。

「平時は民の為に尽くすのが防衛騎士ですよ。あなたは元気が有り余っているようですから、我々の手助けをしていただきます」

なんで俺は、どこにいても怖い人に使われるんやろ？

４４・ある寒い日（前書き）

姉　弟です

４４・ある寒い日

早起きして家事のお手伝いとボッシュさんのお見舞いでもしようかな、と思った朝。

居間の長椅子に、仰向けで寝ているマイヤーさんを発見した。

寒くないのか？

謎の床暖房は効いているけど、それは床が冷たくないレベル。はっきり言って室内でもひんやりしている。

「あ～おはよう、トモちゃん」

声をかけようか、それとも毛布でも持ってこようかと思っていたら、先を越された。顔も上げずに！足音で解ったとか？

「おはようございます」

「窓に映っとったの」

ふぇ？なんで疑問に思ったことが解るんだ。

「私の表情、解りにくいって言われますけど」

「人生経験？」

なぜ疑問形か。
やっぱこの人変だな。

今まで仕事だったのかな。でも聞いていいことなのかな?そう考えて首を傾げると、マイヤーさんが跳ね起きて椅子の背もたれ部分に顎を乗せた。

「ちょっと聞いてな、城でも大変やったとは聞いたけどな、もぅ俺独りでこき使われて、便所臭いおっさん触らないかんかったし、瓦礫の撤去させられたし、働かされ続けたの!」

凄い早口。全部は聞き取れなかった・・・。けど。

「お疲れさん」

労ろうとしたら、また先を越された!今度は誰さ?

「ボッシュさん!何やってんですか、寝てないと」

「治った」

治るかー!

でも私が近付いて見ると、顔色も普通に戻っている。

「トモのお陰だな」

そんな、真顔でそんな事言われると舞い上がっちゃうよ？

「――なぁボッシュ殴ってもえぇ？いや、むしろ殴らせろ」

いつの間にやら背後にどんよりしたマイヤーさんが立って、半目でこっちを見ていた。コワっ！

「その顔が…憎いねん」

恐ろしいことを呟くね。
よく解らないのでボッシュさんを見ると、やっぱり解らない、という顔をしていた。
過労でおかしくなったんだろうか。

「あの人と同じ顔やん、代わりに殴らせて！」

「ブライアンの事か？でもおとなしくて皆から好かれてるし、いい奴だろ？」

それを聞いたマイヤーさんは目と口を開いて一瞬固まった後、うなだれて長椅子に戻って行った。

もう1人のお兄さんのことだよね。何があったんだろう?

それから私は台所に行ってお手伝いをした。
この家は朝ご飯が軽いものだからお皿出すとかかわいいもんだけどねっ。

平たい丸パンと薄いハム?ピクルスにお茶、ミルク。
ミルクは山羊っぽい動物ので、ちょっと癖があるけどお茶によくあう。

たまに和食が食べたくなるんだけど、そもそも出汁が作れないので諦めた。
乳製品と肉の加工食品は充実してるんだけどね。

朝ご飯を食べる時間には、マイヤーさんの機嫌も直っていた。良かった。
ボッシュさんに詰め寄る姿はかなり本気っぽかった。
食事中にマルキンさんやロデリックさんに、ブライアンさんの性格について聞いて、やっぱりさっきみたいな顔で固まってたのが気になるけど。

話をまとめると、ブライアンさんは1番小柄で、兄弟と比べてそんなに剣が好きじゃないけどそこそこの腕で、人当たりがよくて、地

元の人に愛されてて、家族を大事にしているらしい。
いい人だよね？
他の２人より社交的っぽいんだ。
ん？社交的なボッシュさんだったらきっともてるだろうなぁ。

「なんで俺だけ…」

やさぐれたマイヤーさんは午前中それしか言わなかった。
なにがあったんだろ？

○　○　○　○

城から戻ってから、マーシャル君の部屋で絵本を読みながら、字の勉強をしました。
本を渡して、音読させて、字を目で追うという方法です。文法が日本語と似ているようです。
子供の相手ができて僕も助かるという、実に合理的な方法です。

難点は意味が解っても発音が解らないことです。
耳からは翻訳されて聞こえるし。不思議なことに固有名詞は近いものに自動で変換されます。無かったらお互いそのままですけど。ポンプやサンドイッチが、この国の共通語になるかもです。
僕の言葉は基本的に英語でも日本語でも通じていますが。
俗語や省略語、和製英語は意味が通じないですね。

「リョータ達…帰るんですか？」

暫らく楽しそうにしていたマーシャル君が、小さな声で呟きました。

「うん。ボッシュさんの傷が良くなったら、だと思うけど」

「ずっと居たらいいのに。この家の子になったら？楽しいよ、きっと！」

マーシャル君は大きな目をきらきらさせて言います。

「でもね、僕達帰らなきゃいけない。待ってくれてる人がいるし。家族になってくれた人がいるんだよ」

「家族…」

「お父さんになってくれたんだ。マーシャル君のお父さんみたいに強くて格好良いんだよ」

マーシャル君はちょっと考えてから、にへらっと笑いました。

「じゃあ帰らないと、とっても心配しますね！」

うーむ、マーシャル君。とても幼児とは思えない、聞き分けの良さですね。

「トモだけ残って、僕のお嫁さんになったらどう？」

「ハハ、どうかな～」

叔父さんに容赦なく絞められると思いますよ！

その後、夕飯を頂いて、覚えた単語をメモする作業に没頭しました。

ボッシュさんを看病していたトモは、夜には部屋に戻ったようです。

何事もけじめは必要ですからね。

それにしてもマイヤーさんはどんな任務に就いてるんでしょう？

ここにはちゃんと防衛騎士とか近衛騎士とかうじゃうじゃいるのに。

わざわざよそ者のマイヤーさんが出張してまで。

聞いたら教えてくれるでしょうかね。

それと、ちゃんとご飯食べてるのかなぁ？

翌朝の朝食時には、マイヤーさんは帰っていました。かなり疲れているから、きっと大変な仕事だったんでしょう。
何故だかこの家の次男さんについてしつこく聞いていました。仕事中喧嘩でもしたんでしょうか？

「アンタが居てくれたらよかったのにさぁ。危なかったんだよ。アタシもまだまだ修業が足りないわ」

この前から沈んだままのアガサさんも加わって、淀んだ空気を製造し始めます。

「いや、あれは仕方がなかった」

「アンタに言われると余計に…」

フォローに入ったボッシュさんを見て、余計凹んだようでした。
マイヤーさんは長椅子に寝転がって、クッションに顔を埋めて呻いているし。
他人の家なのに、よくここまでできますねぇ。フリーダム。

「情けないぞ、お前達！子供の前で弱さを見せるでないわ！」

嘆く2人と困るボッシュさんと傍観している僕と姉の中に、雷が落ちたような一喝。

居間の入り口に、マルキンさんが立っていました。

心臓止まるかと思った！

姉も驚きで硬直していたので、過保護な人が、でかい声をだすな、とマルキンさんに文句を言っています。

「ちっと若いのと混じって訓練していくか？」

いつもの楽しげな雰囲気に戻って言うと、マイヤーさんは苦笑して、アガサさんは背筋を伸ばして返事をしました。

「「遠慮します！」」

「ふん、だったらさっさと帰るがいい。そろそろ雪が降り始める」

そう言われて、皆なんとなく外を眺めました。

晴れているけど薄暗い、そんな天気でした。

４４・ある寒い日（後書き）

ブライアンさんは家ではいい子です。お兄さんが厳しいので、ボッシュを結構甘やかしてました。

なぜだか昔からマイヤーさんイジリが楽しい、ブラさんとハリーさん（砦の副隊長）。ラーソン隊長は知ってるけど、無口だから誰にも広まらない。
マイヤーさん日頃の行いが悪いから…。

番外編で若い頃の話書くかも。

４５・あ、明日帰りますんで（前書き）

ボッシュ　姉

４５・あ、明日帰りますんで

俺の回復を待って、２日休養して戻ることになった。
その間、マイヤーがふて寝していたのでアガサに旅の支度をさせてしまった。

来た時よりも明らかに荷物が増えているのはルシンダの仕業だ。俺達の服を子供達用に仕立て直して詰め込んでいた。トモの、城で用意されたものなど女物も入れてあったので、楽しみができたな。他の連中に見せたくない・・・特にレオ。

「ボッシュ～こっち来い」

手持ち無沙汰で部屋で本をめくっていると、ジジィがやって来た。
周りを気にしながら、小さな布の袋を手渡してくる。触ってみると中身は小さな硬いものの様だった。

「なんだこれ」

「こ・ん・や・く・ゆ・び・わ」

得意げに囁く顔を凝視してしまった。
いつの間に。
手のひらにそれを転がすと小さな石が柔らかく光っている。
透き通る金色。
男の家から贈る婚約指輪にのみ使われる石らしい。

「いやぁ、この指輪を頼むのはいつも心が踊るわ。
言っておくが、トモ以外は認めんからな?ラーソンはお前がどうにかせぃ。あ奴は苦手だからな!」

言い捨てて、さっと身を翻して出て行った。
了解を貰ってから、両家が用意するものじゃなかったか?
手の上の華奢な指輪を見ていると、ふと口元が緩む気がする。
きっとトモの指に似合うだろう。

指輪を袋に入れて落とさないようにしまっていると、今度はリョータが入って来た。いつも扉を叩いて、返事をしてからでないと入ってこない。どこかのじいさんとは大違いだ。

「すみません、ボッシュさん。簡単な本を貸してもらえませんか」

「ああ、好きに見ていけ」

棚の前であれこれ手にとって吟味するリョータの背中に向かって声をかける。

「リョータ、トモを貰っていいか」

振り返ったリョータは無表情で、何も言わない。

「今すぐどうこうって訳じゃない。ただ…」

「僕に聞いてどうするんですか。相手はトモですよ」

唐突に口を開いたが、相変わらず表情は冷たく、口調は事務的だ。
これが素か？

「俺だけが幸せになりたいんじゃない。トモもお前も幸せになって欲しい」

今だに実家と折り合いが悪いルシンダを見ていると、心からそう思う。

暫らく何かを考えていたリョータは、不意に吹き出した。
どう受け取ったらいいのかよく解らないので、落ち着くまで待ってみる。

「ぷふっ、はぁー。やばいつぼにはいった」

・・・泣くほど笑われるとは。論外ということだろうか?

「そうですね、僕はあなたならいいと思いますよ。トモの中身を知ってて嫁に欲しがる物好きはボッシュさんくらいでしょうね。トモはあなたのことを信用してるし。この前ハハのことも聞いたんでしょう?」

一転して穏やかに問い掛けてくるので、ただ頷いた。誉められてるのか貶されてるのかよく解らんが。

「まぁ、ボッシュさんは過去も綺麗なもんだから合格かな?条件的にも末っ子で将来は安定してるし問題ないか」

「な、なんの話だ?」

ぶつぶつと己に言い聞かすように呟く姿に恐ろしいものを感じた。

リョータの笑顔に、どこかのジジィの胡散臭い笑顔が重なった。

「事前に情報収集はしていますよ？女性遍歴とか？」

――末恐ろしい。

○　○　○　○

いよいよ明日の朝出発だ。

大変なこともあったけど、この家の人とお別れするのは悲しいな。

まるでホームドラマみたいな、３世代家族。

嘘みたいに大事にされて、悶絶しそうになった！

好きな人の家族だし。

血の繋がりがあっても愛されなかったのに。

血の繋がりが無い人が、命懸けで守ってくれた。

たまたま出会っただけの人なのに、まだ半年ちょっとしか経ってないのに、どんどん好きになっていく。

ボッシュさん無しでは居られなくなったらどうしようか？ヤンデレ？まぁそれはないか。

たまにベタベタするけど、基本的にはボッシュさんは傍に寄り添い、私を見てくれている。

その距離感が心地いい。
私が暴走してもついて来てくれる、そんな感じ。

この世界に来て大事なものを手に入れられた私は幸せだ。
ただの偶然でも。
不幸な子供にどこかの神がサービスしてくれたんだとしても。

『全ての事柄に満足できる理由があると思うな』と祖父が言っていた。

アメリカ人にしては珍しくどの神も信じてなかった。定年まで軍にいたらしいから何かあったのかもしれない。

ちなみに慰めの言葉として与えられた。解りにくい爺ちゃんだったな。

元気かな。
きっとラーソン隊長とは気が合うに違いない。

砦に戻って報告しなきゃ。砦より王様のいるお城の警備のほうがザルでしたよ、と。

45・あ、明日帰りますんで（後書き）

いい具合にひねくれている姉弟と比べると、ボッシュさんは意外に素直で、真面目なキャラになってきました。
なぜだ。

番外編・ハリーとブライアンの往復書簡 - 抜粋

先日、ハウィット・レヴァインが使用した品について調べましたが、都で購入したということは突き止めましたが、そこから先にすすみません。父親が裏から捜査妨害をしている節があります。なんとかそちらでも調べて頂けませんか？

ハリー

最近の噂で、得体の知れない品物を売り付ける闇商人がいると聞いているよ。
調べてはいるけど、正面からはなかなか・・・。
裏通りは騎士がいるだけで人通りがなくなるからね。手は尽くしてみるよ。

ブライアン

ちょうど、例の子供達が呼び出されて王都へ上がることになりました。
護衛の騎士にフェルゼンフェルトを入れてもらいますので使って下さい。
彼ならば少々の危険はなんとかするでしょう。
ボッシュも選ばれると思いますので、久しぶりに会えるとよいですね。

ハリー

久しぶりにマイヤー君で遊んだよ。

捕らえた男は他国から流れてきた魔導士の成りそこないで、自分で道具を作って金持ち連中に売り込んでいたらしい。単独で、仲間もいないし国との繋がりも切れているのでよかったよ。
顧客名簿も作ってない間抜けだからあっさりマイヤー君に捕まるんだよね。もう少し粘ってくれてもよかったのに。

帰り際に、ボッシュ達が会いに来てくれたよ。城で色々あって怪我したらしいんだけど！休暇あげてよね。
例の2人は大人しくてすごく可愛かった。父がボッシュの婚約者だと言ってたけど、本当なのかな。
楽しみだよ。

奥方が、うちのと一緒に義母上連れて湯治に行くと言ってたよ。
平和だよね。

ブライアン

番外編・ハリーとブライアンの往復書簡 - 抜粋（後書き）

ちなみに伝書鳩的な何かでお便りのやり取りをしています。

片道一日かかりません。

４６・行きはよいよい　帰りは…？（前書き）

弟　姉視点です

46・行きはよいよい　帰りは…？

来た時と違って、まだ怪我の治らないボッシュさんが御する馬車は順調に帰路を進んでいます。
意外にマイヤーさんの方が丁寧でした・・・。
ブライアンさんに挨拶してから昼頃都を発ったので、街に着いたら前と同じ宿に泊まるでしょう。僕と姉は料理がすごく気に入ったので嬉しい限りです。

それにしてもブライアンさんはよく似ていました。
優しく微笑むボッシュさんと同じ顔には違和感ありまくりでしたが、姉は見惚れてました。
後ろで苦い顔をしていたのは笑えましたね。

§§§§§§§§

「あら、また来て下さったんですね！」

2回目なのに覚えてた！さすが客商売の方は凄いですね。ちゃんと見てるんですね！

「あ～うまそ～。お前等は俺の居ない時にこぉんなえぇモン食っとったわけね」

「これすごく食べ易かったよ。沢山食べられるよ」

「任務終了したんだろ、旨い酒飲みなって！」

まだテンション低いままのマイヤーさんが言うので、左右から姉とアガサさんがお酒を注いだり料理を勧めたりして機嫌をとっています。姉のは何かが違うと思いますが。

そういえば、ここでは女性がお酌をする文化がないです。女性が客としてお店にいるのは滅多にないようだし、子供の飲酒を厳しく取り締まっているそうです。
アガサさんは溶け込んでますけどね！

「アガサ、あんまり飲ませて潰すなよ？」

ボッシュさんが苦笑混じりに言いました。
アガサさん強いんだ～。

「お前は飲むなよ？」

一転して姉には強く言い聞かせるボッシュさん。そう言えば食堂で飲んだか飲まされたかで、部屋まで運んでもらってましたね。

「明日は早いんでしょう？お腹いっぱいになったからもう戻ろうか」

姉の手を取って言うと、素直に頷きました。
やっぱりちょっと、疲れがたまってるんですよね。

「ボッシュさんもちゃんと休んで下さいよ」

それから簡易式お風呂に入って寝ました。

木の風呂桶に入った水に焼けた石を放り込んで、随時水を足したり替えたりして提供されています。
キャンプ料理にこんなのありましたね。

○　○　○　○

帰り道も、街の同じ宿に泊まった。やっぱり暖かい笑顔でそっくり家族が迎えてくれた。

今度は皆一緒に食事ができて嬉しい。

結局は飲み会みたいになってったけど。
逃げ時が解らなかったら弟が一緒に出てくれた。
よくできた弟ね！

アガサさんとマイヤーさんは閉店まで飲んでいたらしい。体力あるな。

朝、ちょっと酒臭かったけど、いつもと変わらない2人だった。

宿の人にお昼用のパンとかハムとか詰めてもらって出発。

今度こそ、やりたいことがあるんだよね。
フフフ。

ガタガタガッタン。

「揺れるね…」

弟が虚ろな目で呟く。

確かにね。でもこれでこそ野望への道。
耐えた後のお楽しみが！

窓から外を見ると、丁度いい場所だった。よし。

「ボッシュさーん、そろそろ休憩しましょ。私、体が痛くなって、リョータも疲れてるみたいなの」

「そうだな。――アガサ、マイヤー！一息いれるぞ」

馬車がゆっくり道の端に寄って行く。

窓からアレを見ながら、どう攻略しようかと考えていると、弟が小さくあっ、と叫んだ。

「あそこに行く気？危ないってば！」

「うるさいな。ストレス解消も必要でしょ」

言い合いをしていると扉が開いてボッシュさんが覗いた。
降りようとすると、ひょいっと抱き抱えられて、そのまま地面にゆっくり降ろされる。

わ、脇腹つかまれた・・・恥ずかしいよ。

「大丈夫か？」

大丈夫？いや大丈夫じゃないよ。手がね、そのままなんだけど。
ドキドキする。

あ、今のうちにお願いしとこう。

「ボッシュさん、あそこでお昼ご飯食べようよ」

アレを指差して言うと、ボッシュさんも見ながらちょっと考える。

「風も防げるし、きっと楽しいよ」

「…行きたいんだな」

ため息混じりに言って少し笑った顔は、とても優しくて好きだ。
いつも笑顔のブライアンさんも素敵だったけど、たまに、自分にだけ笑ってくれる方が貴重で、幸せ感が大きい気がする。

「いつまでやってんの。邪魔なんだけど?」

お昼のお弁当が入った籠を抱えた弟が、馬車の中から文句を言ってきた。

ちっ。

ちょっと道の脇にどいてると、馬車を移動させて廃墟に近いところへ向かった。

「あそこ見に行くんだね。実はあたしも興味あったんだよね!」

アガサさんが馬から降りながら言う。

やはり。

姐さんなら、解ってくれると思ったよ!

弟は嫌そうだけど。

廃墟探険なんて、普通できないじゃない!

廃墟が無いとさ。

４６・行きはよいよい　帰りは…？（後書き）

急に寒くなりましたね

皆様体調に気を付けて下さいね

47・でかっ（前書き）

ボッシュ　姉視点

47・でかっ

来る時に教えてやった廃城に、トモが興味を示していたのは知っていた。

だから、こんな風にねだられたら断れるわけが無い。

馬車から抱き降ろして、まだこの腕の中。真っすぐ見上げているその瞳は、年相応の好奇心と喜びに輝いている。

これを断れる男が居たら会ってみたい。

了承すると途端に綻びるその顔に口付けしたくなったが、リョータの冷たい視線が刺さる様だったので諦めた。

なんとか草木の生い茂るなか馬車の置いておける場所を確保して、丈夫そうな木に馬を繋いだ。

アガサとマイヤーも、それぞれ木に繋いで合流した。街道からは木々で隠れているし、昼食の間くらいならば盗まれることもないだろう。

城と言ってもたいした部分は残っていない。

崩れた城壁の一部、残った建物の木の扉はとっくに腐り果てている。

円柱型の本棟部分だけはしっかり残っていて、異様な雰囲気だ。

姉弟は興味深そうに辺りを見回しながら、なにやら楽しげに会話している。

「この辺で食べませんか」

歩き回った挙げ句、気に入った場所を見つけたリョータが声をかけた。
そこは半分崩れた部屋で、残った壁が冷たい風を遮り平らな床は食事をするのに最適だ。そこに毛布を敷いてトモとアガサを座らせ、籠の中から食べ物を出して並べていく。
気のきくことだ。

「たまには、こんなんもえぇなぁ」

薫製肉の薄切りを片手に、マイヤーが目を細めた。
やっと元の調子が戻って来たようだ。

「あっ？」

不意にアガサが声をあげて立ち上がり、鋭い表情で一点を見つめている。
なんだ？

「今、あそこの茂みに人がいたよ」

「確認する。マイヤーそこを頼む」

柄に手をやり、アガサと2人でゆっくり近づく。
確かに誰かが居る様で、俺の胸の高さまである茂みは揺れている。

「そこで何をしている」

声をかけると、一際大きく草が揺れた後、子供が出てきた。

姉弟と同年代の少女。
やや赤みがかった肌はレオと同じ南方の民の特徴で、波打つ長い黒髪を頭の後ろで束ねている。ただ目の色は珍しく淡い緑色。

服装は特徴の無い、男ものの茶色い上下に冬用の外套を羽織り、膝までの長靴。旅人のようだ。

「すみません、特に隠れていた訳じゃないんです！」

開いた両手を突き出して、近づいて来る。見る限りではただの少女だが、1人でいることは怪しい。

「こんなとこで、1人で何やってんのさ。あたしらの馬でも狙ってたのかい」

アガサは尋問向きではないと思う。だから内騎士なんだな。

「違います！父と、あそこで休憩してたんだけど、お腹が、空いたから。食べられる実でもないか探してたんです」

少女は赤面して俯きながらそう呟いた。

途端に同情したアガサが少女の手を取り、強引に昼食に誘う。まぁ、ただの旅人とは思うが。目を離さなければ大丈夫だろう。

少女を伴って3人の待つ場所へ戻ると、当然視線は少女に集中している。

そういえば、名前をまだ聞いていなかった。

改めて尋ねようと思って横を見ると、突然アガサと少女の体が影で覆われた。

「「でかーっ！」」

姉弟が揃って叫ぶ。

俺達の頭上では、かなり大型の翼獣が羽撃いていた。
位置的にまずい。
マイヤーとトモは建物部分で、なぜかリョータは少し離れた位置に立っている。そこから距離を置いて俺達がいる。
翼獣は中間で見下ろしている。

「リョータ、草の間を通って、木に近い所で伏せろ」

声をかけると、強ばった顔で頷き、なんとか移動を開始する。
広い翼が邪魔になるので少しは安全だろう。
次にマイヤー達に声をかけようとしたら、彼らを目掛けて翼獣が急降下した。

「トモっ！」

思わず剣を抜いて、走り寄る。

巨大な鉤爪の犠牲になったのは、昼飯の入っていた籠だった。残っていた食料が飛び散る。

トモはマイヤーに抱えられて無事だったが、顔が引きつっている。
無理もない。
翼獣は部屋いっぱいに翼を広げ、大口を開けて威嚇していた。

翼に斬り付けると、身体を捩って避けやがる。
飛ぼうとしたのかこちらを襲おうとしたのか、暴れた身体が壁にぶち当たり、残っている壁や天井部分からぱらぱらと欠片が落ちる。
崩れたら、奥の2人が危険だ。今も危険極まりない事態だが。

「マイヤー、奥へ行け！中を通って離れたとこから出ろ」

「ん～解った。任すわ」

声をかけると即移動を開始した。
トモは奴に任せておけば安全だ。

戻って来る前に、翼獣を片付けたいところだ。

○　○　○　○

楽しく廃墟でピクニック。
ちょっと寒いけど、遠足みたいですごい面白い。

半分ごっそりない部屋とか崩れた井戸とか。
それでも塔みたいな部分はしっかり残っていて、手入れをしたら展望台とか憩いの場として使えそう。
もったいないな。

せっかくだからと、弟が吟味した場所でお昼を食べることになった。
いい具合に寂れた草木や崩れた壁、見上げれば塔が目に入る、ベストスポット。

しばらくすると、アガサさんとボッシュさんが何かを見に行って、戻ってきたら女の子を連れていた。
なんで？

「あれどっから拾って来たんやろね」

マイヤーさんが不思議そうに呟いた。

ほんとにねー？

近付いて来る。こっちに来る。なんかヤだな？

突然、見ている3人が暗くなった。

それで、上を見ると――。

「「でかーっ！」」

弟とハモった。

だってびっくり。

プテラノドンだっけ？

あんな形で、もっさり派手な赤い毛が生えてて、５メートルくらいの何かが飛んでいた。

誰だって驚くでしょ？！

食われるって！

大口開けてギザギザした牙が見えてるし！

プチ・パニックを起こして頭が真っ白。

何がどうなってるか認識する前に、いつのまにか移動していた。

マイヤーさんに抱っこされて。

はれ？

取り敢えずぺちぺち腕を叩いて、復活をアピールしてみた。

「帰って来た？大丈夫なんか？」

足を止めて、床に私を降ろしながら聞いてくる。

「ここどこ？さっきの何？皆は？」

「ここはホレ、城ん中。さっきのはぁ、翼獣言うて大体は山に居るらしいわ。皆は外」

私が頭に浮かんだまま口に出したことに、答えてくれるマイヤーさん。

淡々としたその様子に、こっちも落ち着く。うぅ。多分。

外にいるって、大丈夫なんだろうか。いかにも肉食です、て顔をしてたんだけどな。

さっさと歩きだしたマイヤーさんを追い掛けて、戻らないのか聞こうとして迷ってしまう。

ちょっと苛苛して見える、横顔。顎の辺りが張ってて歯を食い縛っているのが解った。手は剣に。

私より付き合いが長いんだから、心配しないわけがないんだ。

壊れた城の中は暗くて、場所によっては手探り状態だった。電灯ってやっぱすごいものだったんだな。

少し前の方から、変な音が聞こえてくる。

「何、この音」

「トモちゃんも聞こえてるか」

床や地面に響く、低い音。また何かでるのか？

少し歩くと、右手に扉のない部屋がある。そっちのほうが少し明るいから、窓があるか、壁が壊れてるかのどっちかだろう。

マイヤーさんがゆっくり剣を抜いて入っていく。

置いて行かれるのも怖いので、後ろからそっと部屋に入った。

赤ちゃん鯨がいた。

セイウチかも？

「なんやのこれ」

剣をだらん、と下げてマイヤーさんが呟く。

少し近付くと、ソレは人類だった。

丸々としたその人?は床に敷いたボロ布の上に転がって眠っているようだった。一番丸い部分が上下するのに合わせて、響く重低音。

鼾か!これが。初めて聞いた。すごいんだ。

音を立てないように近付いて観察したけど、その人は性別がよく解らなかった。ドレスかローブみたいな裾の長い黒っぽい服で、黒髪は編んで垂らしている。

血色のいい顔は、唇が赤いから、女?

「トモちゃんあんまり…」

マイヤーさんが言った瞬間丸い人の目が開いた。

目、合っちゃったよ。

「あんた何なのよ、トリガラ娘」

はぁ?何か言いやがりましたか。

丸い人はゆっくり起き上がって、立ち上がった。

でかい、丸い。

ハスキーな声はどちらか解らない。前後左右に丸い胴体も、区別がつかない。

「なんなのよ、って聞いてるでしょぉ？」

ぷん、と口を尖らせて言ってくる。上から。背が、多分ボッシュさん並みに高いから見下ろすのはしょうがない。
けど。
なんかムカつく。

「あ～、あんた何？俺らは通りすがりでな、外に翼獣がおって、逃げ込んだんやけど」

マイヤーさん頑張れ。腰が引けてるぞ！

「翼獣ですって？外には娘がいるのよっ」

慌てて飛び出そうとして、戸口に走って来た。
そこには私が立っていて、避け切れずに跳ね飛ばされた。

「邪魔よっ！ぼさっとしてんじゃないわよ、トリガラ娘っ」

また言った！

「だ、大丈夫か、トモちゃん」

座り込んだ私を引き起こして、小さい子にするみたいに汚れを払う。
私はその腕を掴んだ。

「マイヤーさん、アレは敵認定」

追い掛けて、後ろから蹴りをいれてやる。

47・でかっ（後書き）

探険はまだ続くよ

４８・嫉妬の炎は何色？（前書き）

姉　弟視点です

48・嫉妬の炎は何色？

目が合った途端、お互い相容れないと感じた。

簡単に言うとムカついた。

「待ってぇな、あんなん相手にせんで。な？まだ出たら危ないし」

追い掛けようとしたら、マイヤーさんに捕まった。

プテラノドンもどきのことを忘れてたわ。

でも弟も外に居るんだし、ボッシュさんは怪我人だ。

変な女の子も居たし。

ん？娘って言ったな。あれは親子なのかな。似てなかったけど。

やっぱり早く行った方がいいんじゃないかな、と思ってマイヤーさんを見ると、首を横に振った。

なんで言う前に断るかな。

ゆっくり進むマイヤーさんに手を取られているので仕方なく、一緒に進む。逆らうと怖い気がするから。

やっと、廊下がぱっかり割れたような場所に出たのでそこから皆の所へ戻ることにした。

「心配せんでも、翼獣相手にはアガサがおるから大丈夫やで」

無言で歩いていると、マイヤーさんが振り返ってそう言った。
なんでアガサさんだと大丈夫なんだろ？

「あの子は弓が得意やからなぁ。あれだけ的がでかいんや、無敵やな」

あぁ～そうなんだ。
動いてたら難しそうに思えるけどなぁ。エルフ族の美形戦士みたいに百発百中なんだろうか。

「あんなぁ、トモちゃん。喋ってくれへん？」

急に頭をぐしゃぐしゃしながら、そんなことを言うのでびっくりした。

「言う前にマイヤーさんが答える」

ありのままに答えたのに、なんか不服そう。

ボッシュさんより年上なのに、弟が拗ねた時の顔みたいで、思わず笑ってしまった。

「…もぅえぇわ～」

マイヤーさんの左手と私の右手。幼稚園児みたいにブンブン振って歩いた。

「見てみぃ、見事に仕留めとんで」

「うわ…グロ…」

やっと辿り着くと、まず目に入ったのは引っ繰り返ったプテラノドンもどき。

斬られてもげそうな翼が変な方向をむいて、大きな口からはデロンと舌が飛び出ている。

身体と翼には何本も矢が突き刺さっていた。

当然、辺りは流れた血で水溜まりのよう。うぇ。
傍でしゃがんで観察している我が弟と、得意げなアガサさん。
気持ち悪くないのかなぁ。
近付くのをためらっていると、アレの声がした。

「素ん晴らしいですわぁ！流石は騎士様、よくぞワタクシの愛する娘をお救い下さいました」

ボッシュさんに縋りつくようにして立っている謎の少女Aと正体不明生物B。

・・・・・・。

「トモちゃん、怖いやんか喋って！あれ放っといてえぇのん？」

繋いだままの手を引いて、マイヤーさんが小声で言ってくる。
何を言えって？
そう思って顔を見ると、マイヤーさんはちょっと眉をひそめた。
それから死体を避けるように遠回りしながら皆の方へ近付いていく。

「お疲れさーん」

今の流れを断ち切るような声をかけると、弟が立ち上がって走り寄って来た。

「トモ！大丈夫だった？すごかったんだよ、アガサさん」

弟に手を取られて、いつのまにかマイヤーさんが離れていたことに気が付いた。

「平気。あんたは怪我ないの？」

見た感じ大丈夫そう。
やたらテンション高いし。

「トモ！」

ボッシュさんの声。
そっちを向くと、少女Aは相変わらず張り付いて、ウルウルした綺麗な目でボッシュさんを見上げていた。
綺麗な女の子。健康的で、華やかで、美人。

「あらぁ？アンタさっきの貧相なトリガラ娘じゃなぁい？何やってんのさ」

珍獣Ｂが、目を細めて私に言う。

「…変わった生物がいるのね。樽人間なんて初めて見たわ。リョータ解剖してみたら？」

弟は無言で私の手を放し、じりじりと後退りしていった。

「樽ですってぇ？このぉ小娘、煮込んでやろうか！」

「樽じゃなかったら球？長い坂の天辺から転がしてやろうか、隣の国まで行けるんじゃない？」

「トモ、何を言ってる。あまり失礼なことを言うな」

「父さん、やめて！騎士様のお連れの方よ」

ボッシュさんと少女Ａがそれぞれ止めに来た。

私は、急に喋れなくなる。

「ごめんなさい、父が失礼なことを。疲れていて気が立ってるの」

少女Aが私の前に来て、にっこり微笑んだ。

「私はオルガです。仲良くしてね?」

首を傾げて、またにっこり微笑んだ。

無理です。

私がじっーと見ていると、困った様にもじもじし始めて、大人達にその視線を向けた。

「あの、私なにか嫌われるようなことしてしまったかな…」

何だこの展開。

少女漫画の健気主人公的な台詞。

私は、純真無垢で無邪気で健気な少女の存在を否定する。

今までそんなの見たことないし。

生きてる人間で、欲の無いヒトなんて気持ち悪い存在があるわけが無い。

特に、女は生まれながらにして女優だっての。

好きな人は独り占めしたいし、女の子でもオカマさんでもベタベタされると、むかつく。

あ、これってヤンデレ？やばいのかな。我儘言うと嫌われるかも？

なんかもう面倒になってきた。

「トモちゃん気分悪そうやったんで、先に馬車に連れてっとくわぁ。リョータもおいで」

ため息ついて俯くと、突然マイヤーさんに抱き上げられた。

「だから喋りぃって言うたのに。それにしても、あの人お父さんなんやなぁ。変わった人やなぁ」

こそっと耳元で言うその声は、半分笑ってるみたいでマイヤーさんにしては優しかった。

○　○　○　○

初めは巨大な鳥だと思いました。

ボッシュさん達が言うには『翼獣』と総称して言われる生きものの一種で、赤い毛のアレは最大サイズらしいです。

もふもふと言うには、豪毛すぎますね。

ボッシュさんが囮になってアガサさんが弓で遠距離攻撃。合理的なペアですね。

ふらふらしながらもしつこく舞い降りてきたヤツの翼を、ボッシュさんが切断する勢いで斬り付けたのが最後の一撃でした。

怪我人・・・あんなに動いてよかったんでしょうか。

伏せた草から立ち上がって声をかけようとしたら、さっき2人が連れて来た女の子がボッシュさんに飛び付いた。

そう言えばこの子はどこから来たんでしょう？

「オォルゥガァァ！」

雄叫びが聞こえたかと思うと、近くの壁の穴から巨大な黒い物体が走り出て来ました。

僕は熊かと思いました。

「オルガ！翼獣が出たってホント？」

「父さん、大丈夫よ。こちらの騎士様が救けて下さったの」

あれ？あ～、お父さん？こっちにもそういう人いるんですねぇ。

感動の親子対面。

騎士に救われた美少女とその父の、有りがちな話。

つまらないので、折角だから珍しい生きものの観察でもしましょうかねぇ。

「お疲れさーん」

マイヤーさんの気の抜けたような声がしたのでそっちを見ると、姉と手を繋いで帰ってきました。

珍しい生きものと間近で見た戦闘に、柄にも無く興奮していた僕は、姉の無表情の原因を勘違いしました。

翼獣の死体が気持ち悪いんだと。

建物内で出会っていたらしく、何故か女装のオジサンと口喧嘩を始め――気温が下がったような気がしてきたと思ったら、ボッシュさんとオルガさんが仲裁して更に冷え込みました！

ボッシュさんに叱られて姉が凍り付いた女王様みたいになっているのに、オルガさんは気付かないのか話し掛けて、玉砕して涙ぐんでいます。

う〜ん。
空気読みませんか。

わざと・・・じゃないですよねぇ。

ジルさんの例があるからなぁ。

ボッシュさん馬鹿ですね。さっさとフォローしたらいいのに、女装オジサンと何やら話して。
大人はそうするのが当たり前だろうけど、こっちは子供なのになぁ。
我儘な女の子なのに。

知ーらない。

「トモちゃん気分悪そうやったんで、先に馬車に連れてっとくわぁ。リョータもおいで」

マイヤーさんが軽がると姉を抱き上げて、返事を待たずに歩きだします。

流石最年長ですね！
見事な空気読みです。

意外とこういう時にはアガサさんは普段の強引さが隠れてるんですよね。

マイヤーさんは停めていた馬車まで早歩きで行くと、姉を降ろしました。

姉はさっきから黙ったままです。

大丈夫かなぁ。

変な事考えませんように。

オルガさんのせいで、盛大にヤキモチ焼いてるんでしょうけど。

たまに想像の斜め上にかっ飛ばす人だから、心配なんです。

「トモちゃん、ボッシュは隙が無い様でぼーっとした奴やからな、思ったことは言ったらないかんで？」

馬車に乗り込む姉に、マイヤーさんが言い聞かせましたが、どうでしょうね。

素直じゃないところが可愛いところだと思うんですけどね。

あそこまで解りやすく嫉妬してるのに放置するだなんていい度胸ですよね。

考え直すべきでしょうか。っていうかもう死ねばいいのに。

「おいおい、リョータ？顔怖いで？なんなん、もぅ。お前等姉弟はぁ～」

おっと、口には出してないですよね？

マイヤーさんはため息をついて、馬車の近くにしゃがんでしまいました。
傍若無人に見えて、意外に気を遣ってくれてるのがわかります。いい人。

「おーい、待たせたね」

手を振るアガサさん。その後ろにボッシュさん。その横に例の親子。
なんでかなぁ？

「馬車にこの2人も同乗させることになった」

決定ですか。そうですか。

「よろしくねぇ、坊や。ワタクシはコンスタンスよ」

「オルガよ。よろしくね」

「…リョータです。さっきのは姉のトモです。体調が思わしくないようなので話し掛けないで下さい。命が惜しかったら」

「マイヤーです、さっきはどぉも」

あ〜あ。胃に穴が開くんじゃないかな。

アガサさんとマイヤーさんはさっさと自分達の馬まで避難してしまいました。

ボッシュさんはいつもと変わらない様子で、親子の荷物を馬車の屋根へ括り付けていきます。

う〜ん。
チャンスをあげた方がいいんでしょうか。

「ボッシュさん？どうしてあの人達も一緒になるんですか？」

「方向が同じだからな。食料を盗まれて、大変な旅だったらしい。父親…？は足を痛めているそうだ」

それにしては元気いっぱいに走ってましたけどね。

「トモがどうしておかしいか、自覚あります？今回に限り、無償で助言しますけど。女の子に嫉妬してるんですよ。あと、痩せてるのを言われるのが嫌いなんです。
姉の性格上ですね、このままいくと逃げられますよ」

「逃げるって、どういう意味だ？」

「苦しいのはボッシュさんが大事だからです。だから大事じゃ無くなれば、怒られても盗られても苦しくないでしょ」

自己防衛本能ってやつですかね？
まぁ、ここまで言われて何もしないならどうしようもないですよね。

ボッシュさんは少し考えて深いため息をつきました。

「悪い」

ぼそっと言って僕の頭を叩いて、馬車の扉を開きました。

「トモ、おいで」

今まで聞いたことのない甘い声で姉を呼ぶと、そのまま抱き締めてキスをしました。

おいオッサン。

姉を抱き上げて馬車から降ろし、目を丸くしている親子の前に立たせると、ブライアンさんのような優しい笑顔で姉を見つめます。

「この子は私の婚約者でトモといいます。道中よろしく」

親子は毒気を抜かれたような表情でコクコクと頷きました。
姉は何が起きたか解らないようで、茫然とボッシュさんを見ています。そんな姉の頭を撫でて、ボッシュさんは馬車の前の方へ行ってしまいました。

やりっ放しか！

思考停止中の3人は、大人しく馬車に乗り込み、成功なんでしょうけど。

これはこれでむかつきますね。

48・嫉妬の炎は何色？（後書き）

コンスタンスさん
本名コンスタンティン

勢いで出してしまった新キャラです。父であり母でもある。娘のために頑張ります。
足を痛めたのは、体重のせいかもしれません。

番外編・ｅｍｐｔｙ（前書き）

仕置き執行

番外編・ｅｍｐｔｙ

ここはどこだ？

なぜこの私がこんな目に合わねばならないのだ。

なんの価値もない小娘のために息子を幽閉され

いくらでも取り替えのきく騎士のために私はこのような辱めをうけている。

「では、どうぞ森の奥へお進み下さい。森にはまだ食料になるものは残っていますし、水筒には水を満たしてありますので」

忌々しい官吏共め！

つい先日まで、私には目を合わせられないほど頭を下げて歩いていた癖に。

「このような森、すぐに抜けてくれるわ」

その辺の腰抜け貴族とは私は違う。侮っているようだが、１人で森

で過ごすなど容易い。
すぐに脱出して、今度こそ復讐してくれる。愚かにも奴らの住まうみすぼらしい砦までわざわざ運んでくれたのだ、感謝せねばな。

この時期森の中には、殻に覆われた栄養価の高い木の実が転がっている。
集めて備えるとしよう。

一晩、何事もなかったな。森も特に変わったところは見当たらない。
はて、森が異世界に繋がっているというのは偽りであったか。
ガルニエが王家に取り入るためにでも考えだしたのであろうか。

おかしい。

やはりどこかおかしい。

この森には、生きて動くものがおらぬ。
獣はともかく、虫や鳥すらおらぬというのは、どうしたことか。

森を早急に抜けるべきであろう、もう奴らも見張ってはおるまい。
戻るほうが早かろう。

木々の隙間から一際明るい光が見えてきた。
抜ければ道か。

これは、どういうことだ?
街道はむき出しの土であったはず。
なぜこのように白く輝く石が敷いてあるのか。
どこぞの屋敷でも建っていたのか?しかしこのような石を使える家は・・・。

美しい敷石に気を取られていた。
後ろに誰かがいる。硬い足音。

振り向いた私の目には

奇妙なヒトが

ゴツゴツとした表皮は蛇の　ようで　土よりも濃い茶色

老人のように曲がった背は低く

体格の割に

手は大きく　鋭利な爪

細かい歯の並んだ

口が開いた

「……何者だ?奇妙な奴、不様な形をしているな」

これは　言葉を解するのか

なんということだ、なんという・・・。

「聞いているのか、まったく、何というイキモノか?知性はあるのだろうな…」

手が伸びてくる、曲がった爪で　私を引き裂こうというのかっ？

「わ、私は、ワタシは…」

縦に長い血色の虹彩が動いて　口元が歪んだ

「面白い、素晴らしいぞ！珍しいイキモノだ。ワタシが飼ってやろう。皆が羨ましがるであろうな、少しずつ分けてもよいかな？」

あぁ、ワタシはワタシは

こんなところで

　こんな目に合っていいわけがない

ワタシハ

番外編・　ｅｍｐｔｙ（後書き）

知性のある爬虫類系は
可愛い気がしなくもない
しませんか？そうですか。
私にとっては知性のある虫が発狂モノです。
考えただけでも　ぞわぞわします。

４９・俺の話を聞け（前書き）

弟　ボッシュ視点です

４９・俺の話を聞け

狭い密室で、自分以外のメンバーの仲が悪い。

拷問じゃないですか。

姉は窓枠に頬杖をついて外を眺め、無言です。これはまぁ、普通ですね。

お客さん？のコンスタンスさんとオルガさん親子も無言です。この人達は本来はお喋りの様でしたから、出発前のアレコレで疲れているのか呆れているのでしょう。

居心地が悪そうに、コンスタンスさんがもぞっと動きました。馬車も傾いたような気がします。多分座席の幅が狭いんでしょう。あの体格は１５０キロはありそうに見えますね――髷が似合いそうです。

オルガさんは、なんというか、発育がよろしいと思います。とても健康的で、まぶしい感じです。変な意味じゃなくて！姉と比べると、です。太陽と月のように。まぁ内面は解りませんけど。この辺も姉の対抗意識を掻き立てる一因になってるんだと思います。

馬車の中に不思議な音が響いて、ぼんやりしていた姉も現実に引き戻されてきました。今のは？

コンスタンスさんが大きな手をお腹にあてて、深いため息をつきました。

お腹が鳴ったんですね！どこの獣かと思いましたよ。

「……どうぞ？」

そんな様子を見ていた姉が、紙包みを出して差し出しました。それはルシンダさん特製の、焼き菓子。マドレーヌほどしっとりしてないけど、外がカリッとして中がふんわりしている絶品です。

コンスタンスさんは何とも言えない表情で紙包みを見つめて、すぐには受け取りません。姉がもうちょっと上手く勧めてあげればいいんでしょうけど、まぁあの姉ですからね？無理。

「これは知り合いが作ってくれたお菓子なんですよ。まだ次の街までありますから、食べませんか？」

「そ、そう…じゃあ遠慮なく戴くわぁ。ね、オルガ」

「はい」

オルガさんはどうにも元気がありませんね。俯いてもそもそ食べてます。まさかボッシュさんに本気で一目惚れしたんじゃないでしょうねぇ。気持ちは解らなくもないですが。

アガサさんの方が活躍したと思うんですけど。女の子は派手な方に目が行くんですねぇ。

「ねぇ、アンタ達何者？どこかの貴族様なの？」

お腹がおさまったのか、さっきよりは柔らかい表情になったコンスタンスさんが聞いてきました。何者かと聞かれると、困ります。

「ガルニエ砦警備隊隊長の養子です」

てのが、正しいかな？

「へぇー！さっきの騎士はボッシュ様よねぇ。他の方はなんとおっしゃるの？」

「マイヤーさんと、女性がアガサさんです」

ボッシュさんの話題になると、オルガさんがバッと顔を上げて、父親の横顔を――睨んでる？何ですかその反応。

「あなた方は、どうして旅をしてるんですか？」

僕が話し掛けると、オルガさんが怖い目のままこっちを向いたので、少しぎょっとしました。ただの社交辞令じゃないですか！何ですかその変態を見つけたような目は。

「人に言えないような理由で旅をしてるのに、どうして一緒に来るわけ？」

うわぁ、絶賛喧嘩買い取り中のようですね、姉よ。ただ表情と声が平淡なので迫力には欠けますが。

「父が足を痛めているからと、ボッシュ様が、わざわざ誘って下さったんです。翼獣からも私のことを守って下さったし、こんなによくして戴いて、私…」

んんん～？もしかして、さっきの婚約者云々はスルー決定ですか。都合の悪いことは無視するタイプなのかな？面倒臭いですけど、相手しなくちゃいけませんかね。

ボッシュさんの味方をする気はありませんけど、僕は姉の、味方ですからね。

「いい男を見つける旅？」

見も蓋も無さすぎです、姉よ！窓から遠くを見つめてアンニュイな雰囲気で言うことじゃないでしょう？コンスタンスさんは金剛力士像みたいな顔になってきたし、オルガさんはまた目がギラリと光りました！

「アンタぁさっきからなんなのさ！うちの子は嘘は言ってないわよ！押し掛けたわけじゃないんだからね」

ちょっとオッサン化したコンスタンスさんが、オルガさんの肩を抱き寄せる様にして言いました。

親馬鹿？

オカマで親馬鹿な巨漢。濃ゆい人ですねぇ。でも。

「いいなぁ」

姉が、隣にいる僕にだけ聞こえるくらいの小さな声で言いました。その声は僕の心の中での呟きと重なって、どこか見えないところにコツン、と落ちたような気がします。

○　○　○

「ボッシュー。この朴念仁めぇ」

馬車を操る俺に、馬を寄せてきたマイヤーが声をかけてきた。

「いきなり何を言うかと思えば…何なんだ」

「なんで親子拾うたん？俺等の任務は姉弟の護衛やったと思うけど？」

「それはそうだが、怪我人を見捨てるのか？お前は話してないだろうが、オルガは空腹で食べ物を探しに出ていたんだ」

トモと変わらない年の少女が木の実を探して地面を這っていたという。あまりに気の毒で、声をかけずにいられなかった。

「お前さぁ…トモがなんも言わんからって、なんも考えてないわけやないんで？解っとる？１０言いたいことがあっても、１言うか言わんかやで」

解っている、と言いたいが、リョータにも同じ様なことを言われた。わざわざ言うということは、俺は多分解った気になっていただけなんだろう。

「…お前は、トモの気持ちがよく解るんだな」

言わなくていいことだったかもしれない。一瞬で、マイヤーの顔から表情が消えた。

「――そやな、リヴァン副隊長さんのお墨付きやし？トモちゃんも俺にしたらええのになぁ？」

いつもの、真意の見えない笑いを張りつかせたマイヤーがとんでもない事を言った。お墨付きって、どういうことだ。

「おい…」

「俺達みたいな異邦人は我儘言える立場じゃないて、解っとりますう」

冗談めかしたその言葉は正しく彼らの状況を表している。

異邦人。

移住してきたマイヤーも知らぬ世界から来たトモ達も。心のままに生きる事など出来ないのだろうか？

「あんなぁ、トモちゃんにも言ったんやけど、お前等ちゃんと話をせぇよ。あの親子のことやって話さんから拗れてんやんか。お前がな、『トモのことだけ大好きですぅ、あの2人は拾ってやっただけやから安心してぇな』って言ってやったら済むことや」

内容はもっともだが。俺にそれを言えと？

「好いた女を安心さしてやれんのは、男の風上にも置けんで。あんまり泣かしとったら本気で貰うで？」

マイヤーはそれだけ言うと、馬の腹を軽く蹴って馬車から離れていった。

別に、トモを放っていたわけではない。あの時、マイヤーと手を繋いでいたトモがあまりに自然で、目に焼き付いた。

すぐにでもその手を奪い返したかった。いい大人が嫉妬など、みっともない。そう思って見て見ぬ振りをしたんだが、間違いだったらしい。

オルガと話していたことに嫉妬していたとリョータに聞いて、正直なところ嬉しかった。誰も居なかったらあのまま馬車に閉じ込めて、押し倒したいとさえ思った。

そこまでは言わない方がいいか。

４９・俺の話を聞け（後書き）

言わぬが花　という言葉もありますが、ちゃんと口に出さないと伝わらない事のほうが多いですね

今回　一マスあけてみました。　今更ですが。
なんか　めんど…ぐふ

気が向いたら過去のも変えるかも知れませんが、句読点の位置がずれるのが嫌なのでやらないかもしれません。

50話・知らないこと知ってること（前書き）

姉　弟視点

50話・知らないこと知ってること

外はすっかり暗くなった。まだ馬車の中。
私はなんかもう疲れてうとうとしている。

たまに、弟とオルガさんが喋ったり、親子で喋ったりしていたみたい。

「…トモ…着いたよ、起きられる？」

肩を叩いて私を呼ぶ声で、目を開けると弟が心配そうに見ていた。
もう着いたのか～。なんかもうこのまま寝たいなぁ。だるいんだけど。

馬車から降りると、目の前が真っ白になった。起きてすぐ立つんじゃなかった。私を呼ぶ声がすごく遠くで聞こえてくる。

なんだか弾力のあるぼよんぼよんしたものに寄り掛かっている？

ん？

「ちょっとぉ、気がついたんならアンタ自分で立ちなさいよ」

耳元で、野太い声。これが地声か。
口調はあれだけど、意外に優しく支えて立たせてくれた。

「顔色悪いね、横になったほうが良さそうだ」

アガサさんが、私の顔に手をあてて、心配そうに見ている。
私は『大丈夫』って言いたいけど、立っているのがやっと。貧血なんだか単に眠いんだか、よく解らない。

「トモ」

ぼわぼわした耳に、ボッシュさんの声が飛び込んできた。なんとか頑張って目を開けると、びっくりするくらい近くに顔が来ている。
でも何も言わずにすぐに離れた。

「宿に連れて行って寝かせてくる。アガサ、皆をこの前の店に案内してくれ」

またあそこ行くんだ。オネーサン喜んじゃうね。
馬車はどうするのか、と思ったら、もうなかった。
あれ、もしかして結構意識が飛んでた?

「トモ、こっち」

ボッシュさんの方へちょっと寄ると、一瞬ぎゅっと抱き締められて、膝の力が抜けた。不意打ちだ。こんなの反則だ。

地面にへたる前に、持ち上げられた。

お姫様抱っこだ。

嬉しいのとラクチンなのと暖かいので、目が閉じていく。寸前、オルガさんと目が合った。

うぅ。渡さん。

力が入らない手で、ボッシュさんの上着をぎゅーっと握り締めた。

気が付いたら、ほかほか布団の中だった。うぅ。幸せだ。でもちょっと重い。

羽布団がないからなぁ。

寝返りができないのはなぜでしょう?

目の前に誰かさんがいて、私を抱き枕にしているからです。

「ボ、ボッシュさん~?何してるのかな?」

声が擦れて思いっきり裏返った。しょうがないよね！

「トモが服を離さないからな。一緒に居たかったんだろう？」

ほとんどくっついたまま至近距離で囁かれると、脳みそがヤヴァイ。溶ける。
いや、嬉しいけど。
まだその先の展開は早いってゆーか・・・。

「トモ、具合はまだ悪いのか？医者を呼ぶか？」

ボッシュさんは、私の腰に回してた手を布団から出して、頭を撫でる。大きな手は暖まっててほっとする。

「寝れば治るよ、多分」

一緒に居てくれたら。

「あの2人を誘ったのは、職務上というか、成り行きというかだな…」

真剣に言うボッシュさんの口に、手で蓋をする。これを謝らせちゃ

駄目だ。筋が違うというやつだ。

「解ってるよ。私が嫌なだけ。ボッシュさんの優しいところが好きなのに、見てたら苛苛して。みっともないね」

まったく、冷静になると恥ずかしい。ボッシュさんがあの親子を見捨ててたら、ひどいとか思っちゃうくせに。
オルガさんにとられたらどうしようとか、貧相な自分の体と見比べて凹むとか。
不安でたまらなくなる。

「……俺も」

ぼそっと呟いたボッシュさんが、撫でるのを止めたと思ったら、その手に力が入って更に抱き寄せられた。

そ、それから、何というか激しいキスを。ベロちゅー経験の少ない私には、激しすぎぃ・・・。
またボッシュさんがエロい目になってるし！
目が逸らせなくなる。

「俺も、トモがマイヤーと居たのが気に食わない。何を話してた？」

はぁっと、ため息をついて私の顔を両手で挟んだ。あれ、いつのま

に私の上に居るの。重くないけど。

体勢に気を取られているとぺろっと唇を舐められた。舐めたよこの人！

「答えられないようなことしてたのか？」

それってどんなことですかせんせい！

いつものかったるい感じがなくなって、なんかこう、ぎらぎらしてる？

「話してないよ、そんな。マイヤーさんが喋れって言ったんだけど、私が言う前に解っちゃうかぁ…んぅ」

話してる途中だよ？！

よく解んないけど、なんか地雷踏んだみたい。

気が遠くなるまでちゅーされた。

「トモ、誰にも渡さないから。俺も、トモだけのものだ」

それから、ぼーっとしてる私の襟元を下げて、ささやかな胸の上に吸い付いた。これってあれか、キスマーク？

「……俺の印」

真顔で言うな！
鼻血がでる！
ぐわぁもう顔か見られないじゃないか！

ボッシュさんの首にしがみついて視線を逸らす作戦は結果的に失敗だった。
顎髭がくすぐったくて逃げようとしたのがばれて、最大の弱点である首にもちゅーされた。というか舐められた。

そしてこの辺で、とうとう私の意識がとぎれた。

○　○　○　○

行きにも入ったキャバクラ的食堂に来ました。

オルガさんは慣れてないのかキョロキョロしてますがコンスタンスさんはどっしりと馴染んでいます。
声を出さなきゃ大柄なマダムですからねぇ。

前回と同じく、豪快な肉料理がでてきてテーブルの上がどんどん狭くなります。

「おぉ、今度は大胆な料理やなぁ。酒が進みそうや」

マイヤーさんは酒で酒を飲んでるような気がしなくもないですけどね。

「あんた達も、遠慮せずにお食べよ」

アガサさんが、いくつか綺麗に取り分けて、コンスタンスさんとオルガさんの前に置きました。肉と付け合わせを彩りよく並べていますね。意外に繊細。

「あのぉ、待たなくていいんですか？」

オルガさんがフォークを手に、迷いながら小さな声で言いました。

「トモは多分ここの料理は食べられないですから」

前もそうだったし。一応ハーブも使ってるけど、肉の主張が強いので苦手みたいです。何肉か解らないし。

「あれは朝まで放っておいたらええんちゃう？」

マイヤーさんの言葉に、オルガさん以外が吹き出しました。

「あ、あのねぇ、子供の前で何言ってんのさ！」

初めに復活したアガサさんが真っ赤になって言いました。全くですよ。

僕はあまりに咳が続き、苦しくて涙が出るほどです。

「なぁにぃ、婚約って言ってたけどそこまで進んでるわけ？」

コンスタンスさんが話題に乗っかってきました。

「あんな痩せっぽち、抱き心地いいとも思えないけどぉ」

オイオイコンスタンスさんたらオッサン化してませんか？
というかお前等姉をネタに猥談しないでもらえませんかね。

釘をさそうとしたら。

オルガさんがフォークを持ったままの手を、思いっ切りテーブルに叩きつけました。皿が浮き、中身の減っていたグラスが転がる勢いで。

そのまま無言で立ち上がったオルガさんに、マイヤーさんが声をかけました。

「どこ行くん?さっきのはまぁ冗談やけど、あいつらの邪魔せんとってな?ボッシュにその気ぃ無いんは解っとるやろ?」

マイヤーさんにしては、ストレートな言い方。こういう時はどちらかというと傍観するかと思いましたけどね。

オルガさんは、マイヤーさんを涙目で見つめました。僕の時と態度違う・・・。

「私は、別に……ただお礼を言いたくて」

そのタイミングは違うでしょうよ。大体、今からどこか襲撃に行くみたいな勢いだったじゃないですか!この人って、徹底的に空気読まないんですかね?

「オルガ、まぁ今はあの小娘が具合悪そうだし?あなたも疲れたでしょう。明日にすれば?」

コンスタンスさんに宥められて、ようやくオルガさんは諦めたようです。

やっぱ親馬鹿か。

そもそも今日会ったばかりのボッシュさんに、何でこんなに執着するんでしょうか？
救けられたから？
ハリウッド映画じゃあるまいし、危ないところを救われて一目惚れだなんて。ボッシュさんの性格からしてほとんど話してないだろうし。

キャラも一定してないしなぁ。時々見せる、迫力ある目付きのほうが素っぽいんですよね。

うわ、また睨まれた。

女の人って怖いです。意味解りません。

「どこまであの人達一緒に来るんですか？」

こっそりマイヤーさんに聞いてみても、肩をすくめて知らん、と一言。

「トモちゃんはぁ、なんであんま喋らんの？はっきり言うたったらええのに」

「それは…人見知りですからね。昔から、僕以外にはあんな感じです」

どちらかというと改善されたほうなんですけどね。コンスタンスさんとあんな風に口喧嘩してるのなんて驚きですよ。気に入らなかったら一言も口をきかないのに。

「難儀な性格やなぁ」

呆れたように言われたのにちょっとむっとして。
反論しようとした言葉を飲み込みました。

聞く人がいないから喋らなくなったなんて、自分から言うのもなんだか同情を買おうとしているみたいで不愉快です。

「リョータはもうちょっと子供らしゅうしてもえぇと思うよ？気持ちは解るけどな。まわりが腑甲斐ないんは勘弁してな」

ぐしぐしと頭をかき乱されて、思わず笑いがこぼれました。

「無理ですよ。ボッシュさんチョー鈍いから、トモが泣かないように見張ってないと」

「それについては異論ないわぁ。協力すんで？」

異世界生活の基本。
楽しく暮らすには、自分で環境を良くしていきましょう。

50話・知らないこと知ってること（後書き）

一マス開けるのやっぱり止めました。

なぜか違和感が…。

オルガちゃんはどうでしょう。皆嫌いですか。

知り合いの後輩をモデルにしています。女性に総スカンらしいですが、スタンスを変えないそうです。

いっそ天晴れで、私は結構好きかもしれません。

51話・しつこいやつは嫌われる（前書き）

弟　姉　ボッシュ視点

51話・しつこいやつは嫌われる

食堂に入って、2時間も経たないうちに、ボッシュさんと姉がやってきました。さっきよりも随分、顔色が戻っています。
それは良かったんですけどねー来ないほうが良かったですねー。

コンスタンスさんはいい具合に出来上がってるし、オルガさんが明らかに復活しました。

「トモ！寝てなくて大丈夫なのね？」

アガサさんは、何かに安心したように出迎えました。多分マイヤーさんの言ったことが引っ掛かってたんでしょう。

「うん。一眠りしたら、結構楽になった」

愛想笑いをする余裕はないみたいだけど、この店に入っただけでも進歩ですね。ボッシュさんが隣に居るからでしょうか。

「ごめんなさい、先に戴いてました。来ないだろうっておっしゃったから…」

オルガさんが申し訳なさそうな顔で言いました。
悪いのは僕ですか。そうですね。

「構わない、来るつもりはなかったから」

ボッシュさんはあっさりと答えて腰掛けました。
オルガさんの隣に。

うはぁ。

横長のテーブルにそれぞれ別れて座っていたから、向こうが余ってたんですね。コンスタンスさん、オルガさん、ボッシュさん、姉。
両手に花ですね、なんて口が裂けても言えません。

「トモちゃん何か食える？汁物でも頼もか」

マイヤーさんは優しく声をかけました。が、フォローと言うよりボッシュさんへの嫌がらせに思えるんですが～。

すぐに店のお姉さんが呼ばれて、姉とボッシュさんの為に新しい料理が注文されました。
あ、この前のお姉さんが手を振っていました。寄って来なかったのは、なんとなく気を利かせたのかもしれませんね。

「これ美味しかったです、どうぞ」

オルガさんは料理が来ると残っていたものや新しいものをちょこちょこ取り分けて、ボッシュさんの前に置いていきます。
姉にも取り分けたのが、戦略的な感じ。
お礼を言うしかないですよね。

父親にもそんなサービスしてなかったのに。

「俺達はいいから、お父さんとゆっくりしなさい」

ボッシュさんがやんわり拒絶すると、オルガさんは嬉しそうに頷きました。
何で？

「私達のこと、そんなにお気遣い下さって…。救けて戴いたお礼もまだなのに」

すごい、政治家のようですね！どんな台詞も肯定的に解釈をして会話を進める！
姉は知らんぷりしてスープを飲んでますけど。いいんでしょうか。

まあ、ボッシュさんが相手にしなかったらいい話ですからね。
僕がじっと見ていると、一瞬目が合って手がピクッと震えました。
そしてその手をゆっくりずらして、ちょっと固めのパンを取り、小

さく千切って姉に差し出しました。

よろしい。

姉は不思議そうにパンとボッシュさんを見て、スープ皿とスプーンを持ったまま口を開けました。

姉よ、それはちょっとはしたない気がします。

皆びっくりしてるし――あれ、わざとなんですか？

視線を横に動かすと、オルガさんは目を細めてもごもごしている姉を悔しそうに見ていました。

ボッシュさんは何だか嬉しそうです。餌付けに成功した時の学校の先生を思い出しましたけど！

「まったくもぅ、いちゃつかないでよねぇ。独り者には目に毒だわぁ」

酒の影響で更に巻き舌がひどくなったコンスタンスさんが、ため息混じりに言いました。すごい、毒のブレス。こっちまで酔いそうですよ。だいたい子持ちのくせに何言ってんですかね。

オルガさんもいい加減諦めたらいいのに。２人が店に来てから、ボッシュさんは全く目を向けていません。それはもう徹底的に無視。気の毒なくらいです。

こういうの、なんだったかな。横槍？横恋慕？

テレビではよくありますけどねぇ。

何とも言えない空気の中、ほとんど皿が空になり、宿へ移動することになりました。

○　○　○　○

「んんん～っ！寒いねぇ」

立ち上がったセイウチみたいに体を震わせて、ワンピースを着た体を伸ばす。
あんただけコートも着てないじゃない。

「オルガ…気も…変わらないの？…よ？」

「…決めた…手配は…」

親子の会話が、途切れ途切れに聞こえてくる。
盗み聞きは悪いと知ってるけど、気になるからね！つい聞いちゃったんだよね。

気が変わらない？
ボッシュさんラブの事？

「トモ、足元気を付けて」

考え込んで無意識に歩いていた私を、弟が腕を掴んで進路を調整してくれた。

昔からこういう時電柱にぶつかったり自転車に突っ込んだりして怪我をしていたから、歩く私から目が離せないと呆れていた。

今も、やれやれ、みたいな顔をしている。

宿が見えてきた時、地面が揺れた気がした。

「今の地震？」

「ちょっとだけど揺れたよね。震度1くらいかなぁ」

この世界にも地震があるのか。そういえば温泉もあったし、結構共通点あるんだな。

立ち止まった私と弟に気付いて、前に居たボッシュさんとマイヤーさんが振り返った。

次の瞬間。

「逃げろっ！」

２人の顔が強ばって、叫んで。
見えなくなった。

「ぎっ」

全身鳥肌。
獣の臭い。
顔を隠す、ごわごわした毛と硬い爪。
背中に感じる大きな体。
荒い息遣いは、走り回った後の犬より強風を起こしている。

後ろになんか居る。でっかいのが。

目だけを動かすと、隣に弟は立ったままだ。
片手でそれぞれ捕まっている？

毛が当たって気持ち悪い。生臭い息が気持ち悪い。

「クソッ、何やこいつ！」

マイヤーさんが珍しく焦った声を出す。
剣を抜く音がした。

ハヤク、タスケテ。

「獣人族…？2人を離せ！何のつもりだ！」

ボッシュさんが怖い声で威嚇する。

これは人なの？言葉が通じるの？

獣は何も言わずに、手を動かした。

私の顔から首へ。

不快感ＭＡＸ。

訳が分からなくなって、悲鳴をあげた。

誰かが何か言ってる気がしたけど、脳まで到達しなかった。

手を払い除けたいけど触れない。ちびっ子みたいに泣き喚くしかできない。

ジタバタしているうちに、首を押さえる手が強くなって、苦しくなって、声も出せなくなった。

「トモ！離せよコイツ！トモっ、落ち着いて！」

「動かないでねぇ？この子達の命が惜しければ」

弟の悲鳴みたいな声が聞こえた後、やけに嬉しそうなアイツの声が聞こえた。

そうか、人間離れしてると思ったら変なイキモノの仲間だったんだ。

そうか。

やっぱ敵じゃん。

○　○　○　○

なんとか穏便に食事を済ませて宿に向かっていると、マイヤーが低い声で話し掛けてきた。

「あのオルガっての、どうする。こっちの話全然聞かんし、やたら姉弟を気にしとって…」

何か重いものが落ちたような振動を感じた。

同じ様に感じたらしくマイヤーの話が途切れ、その気配を探ってほぼ同時に後ろを振り向く。

暗がりから走り出てきた巨大な獣が、姉弟のすぐ後ろに迫っていた。

「逃げろっ！」

咄嗟に叫ぶが遅すぎた。

獣は両腕で2人を抱え込み嘲るように口を歪めた。

半獣化した獣人。全身を毛で覆われ、顔も鼻面が突き出てほぼ獣に近いが、二足歩行で会話が可能だ。

マイヤーは初めて会ったらしく、柄にもなく狼狽している。

「……何のつもりだ！」

獣人族に襲われる覚えはないし、姉弟もそうだろう。

獣人は答えず、腕を動かし姉弟を抱え直した。

その途端、硬直していたトモが悲鳴をあげた。

「トモ、落ち着け！」

声を掛けるが届かない。

軽い錯乱状態に陥っているようだ。隣のリョータも身をよじって腕

を伸ばすが、獣人が引き離す。

そして、トモの首を押さえる腕に力を入れた。

体が半ば浮きかけ、仰け反りながら空気を求めて必死に息を吸うトモの姿を見せられ、血が逆流するような感覚を覚えた。

「ボッシュ、あたし裏に回ろうか？」

アガサが低く聞いてくる。それに答えようとした時、離れていたコンスタンスが獣人の横に立った。

「動かないでねぇ？この子達の命が惜しければ」

場違いなほど明るい声が、耳を通り抜ける。

殺意を込めて睨むと、奴は獣人の肩を叩いた。

トモを苦しめていた手が緩み、咳き込みながら呼吸を整えるが、ぐったりと俯いて顔が見えない。

「お前、何がしたいんや」

マイヤーが抜き身の剣を手にしたまま、唸るように声をかけた。

「まぁ色々なのよ。予定外の事態で複雑でねぇ」

「要求は何だ」

俺が声を掛けると、奴の巨体に隠れていたオルガが飛び出した。

「ごめんなさい、ボッシュさん。でもあなたはいいんです、私を救けて下さったから。だから、こっちへ来て下さい」

涙を浮かべて、要領の得ないことを言ってくる。

「全員殺す気やけど、ボッシュは惚れたから見逃すゆぅ事？お前等、何モンや」

「私はレヴァイン様の娘です」

マイヤーに殺意の籠もった目を向けてから、オルガはきっぱりと答えた。

レヴァインの名を聞いた途端、肩の傷口が疼いたような気がした。

家族総出で復讐する気か。

「お前と獣人は雇われたのか」

コンスタンスに目を向けると、肩をすくめて笑う。

「私はオルガの伯父よぉ。育ての親。こっちは弟。アタクシ達は情に厚いの」

「家族ならこんなこと止めさせるべきだろう！」

アガサが叫んでも、彼らには届かない。

「お前等のやっとることは国への反逆や。解ってやっとんのか」

マイヤーが一歩近づくと、コンスタンスが顔を引きつらせた。

「こっちには人質がいるのよ?動くな！」

「目的が僕達の殺害なら、言うこと聞く意味ないじゃないですか」

冷え冷えとしたリョータの声がそれに答えた。

全員の視線がリョータに集中した瞬間、走った。

剣を抜き、下から上へ。

姉弟を抱えて自分で防御を放棄した獣人の顔が、縦に裂けた。
悲鳴をあげながら姉弟を突き飛ばし、暴れる巨体に矢が刺さる。動きの鈍ったところで足をかけ、地面に倒して押さえ付ける。獣人はこのくらいでは致命傷にならないので、安心はできない。

転がった姉弟は、たいした怪我はしていないようだ。よろよろと立ち上がり、獣人から距離を取る姿にホッとする。

俺とほぼ同時に動いたマイヤーは、コンスタンスの右腕を斬り落とし、その太い首に剣を突き付け、跪かせていた。

この頃に、ようやく騒ぎを聞き付けた騎士が駆け付けた。

彼女のことは全く頭になかった。

「全部アンタのせいよっ」

泣き声の様な絶叫が響き、オルガがトモに掴み掛かった。

伸ばされた右手を、懐に飛び込んだトモの右手が掴んで更に引く。
加速して前のめりになったオルガの鳩尾へ、回転を加えてトモの左

の肘が叩き込まれた。

戦いを美しいと感じる時が来るとは、思ってもみなかった。

獣人を取り押さえに来た騎士から感嘆の声がもれる。

彼らに任せてトモの傍へ行くと、腹を抱えて咳き込むオルガを見下ろし、震える声で呟くのが聞こえた。

「しつこいのよあんた等」

まったくだ。

声が擦れて痛々しいトモの体をそっと抱き寄せて、きつく腕の中へ閉じ込めた。震えが止まるように。

見せ付けるように。

51話・しつこいやつは嫌われる（後書き）

ほのぼの　を返上すべきでしょうかね。

もふ成分とオルガさんの痛い愛を絡めたら、なぜかこんなん出来ました。

あれ？

52・虫歯もカビも根元から（前書き）

姉　ボッシュ視点です

52・虫歯もカビも根元から

体の震えが止まらない。
獣に捕まった。
首を触られてしまった。
殺されかけた。弟まで。

あ、あの子は大丈夫だったんだろうか！

ボッシュさんから離れたくないけど、顔だけ浮かせて確認する。
ちょっと離れた所で、騎士達の間に立っているのが見えた。
ふ、とこっちを向いた顔を見て、頭が沸騰しそうになった。

「リョータ！顔が、顔に傷が！」

ボッシュさんを突き飛ばす勢いで走り寄る。

右耳に近いほっぺたの辺りがざっくり切れて、顔が血で染まっていた！
あの爪でやられたんだ！

「うわぁどうしよ血がいっぱい出てる～」

顔に傷が残っちゃう。
まだ彼女もいないのに。

あんな爪で引っ掛かれたらバイキンもあるんじゃないの？

「大丈夫だよ、トモ。顔とかって派手に血が出るけどそんなに痛くないし。そっちはどうなの。声ガラガラで喉痛いんじゃない」

弟はそう言って、袖で私の顔をごしごし拭いた。
こいつはもう、たまには自分のことを心配したらいいのに！

「バカリョータ！消毒しなきゃ！もう、たまには甘えなさいっ我慢するなっ！あんたはおとなしすぎる！」

「「え？」」

弟に逆切れ気味の説教をしていると、傍に来ていたボッシュさんとマイヤーさんがハモった。

え？て何が。

「……宿に入ろう。手当てをして、休むといい。ここには詰め所が

ないからあいつらも一緒になるが」

ちょっとマイヤーさんと無言でお見合いしてからそう言って、私の手を取った。

私は空いたほうの手で弟を引っ張って、遅れないようについて行く。

連行されるあいつ等の声がする。痛がる声。抵抗する声。

あんな奴等は物置にでも閉じ込めときゃいいんだ。

他人の命を狙っといて、丁重に扱われるとは思ってないよね？

道徳的によくないだろうけど、私の『家族』と比べたらゴミレベルだよ。

ロボとかモップとか馬よりも当然下。

あの子がどれだけ純粋にボッシュさんを好きだろうと動機が家族愛だろうと関係ない。

『家族』以外に何も持たない私からそれを奪おうだなんてね。

宿は目の前だったから、騒ぎを聞き付けてご主人や他のお客さんも、ロビーみたいな所で集まっていた。

ご主人は私達が戻ると安心したような顔をして、怪我をした弟を見て目をカッと見開き、あとから騎士がどやどや入ってくると口も開いた。

あの3人は宿の裏にある馬小屋に監禁することになって、桶や布を沢山持った騎士が行ったり来たりしていた。捕まえる時に結構な怪我をしたらしい。
あの子は鳩尾にいいのが入ったけど、咳き込む程度だった。見た目まったく人間なのになぁ。

改めて異世界なんだなぁと認識する。

「ぼんやりしとらんで、部屋に行って手当てしとき」

マイヤーさんに声を掛けられて、正気に戻った。
考えながら立ったまま寝そうだったわ。

治療道具らしきものと、お湯の入った片手鍋を持ったボッシュさんに促されて、私達は2階の部屋へ上がった。

弟の傷は、爪2本で引っ掛かれていた。
水で洗い流し、多分、強いお酒でちょちょっと消毒。それから、お湯で溶いた薬を塗って、布をあてる。

テープって偉大な発明だったんだ！
向こうなら、あの白いテープで貼って終わりなのに。
微妙な位置だから、包帯を斜めにしたり横にしたり。

「中途半端なミイラ男ね」

弟は大袈裟だと言うけど。まだ痛いに違いない。手当ての間中、手を固く握っていた。

「トモ、その首…」

包帯をずらして目が出るようにしていると、弟が声をあげた。

死ぬほど絞め上げられたから、痣にはなってるだろうなぁ。

そっと触ると、首の後ろ側に傷があったみたいでぴりっとした。

「ボッシュさん、トモの手当てもお願いします」

弟が言うと、かなりびっくりした顔で寄って来た。

髪の毛をどけて首を見る顔が険しくなる。恥ずかしいのと怖いのとで息が詰まりそうになった。傷を深刻な顔で見られるとひどいのかと思っちゃうでしょ。

首に手が伸びると、ただでさえ苦手だったのに、さっきの所為で余計ダメになったみたい。悲鳴が出そうになって、歯を食い縛った。

あぁ軍曹。私に強い心を下さい。でも罵倒されるのは嫌だな。

取り留めのないことを考えて現実逃避している間に、ボッシュさんが出来るだけ触らないようにしながら手当てをして、自分が痛いみたいな顔で包帯を巻いてくれた。

「今日は2人で休め。あとからアガサも寄越すから」

ここに居て欲しいけど、これから後始末があるんだろう。
私達はベッドに座ったまま部屋を出て行く背中を見送った。

○　○　○　○

痛々しい2人の姿に、なんと声を掛けたらいいか解らない。
守ると言った傍からこのザマだ。

「ここの奴に、城と砦に報告に行ってもろた。2人はどないや」

声を掛けてくるマイヤーもいつもの余裕がない。

「…手当てはしてきた」

「他に仲間がおらんか、とりあえず先に聞かなあかんけど。お前あの子のとこ行ってこい」

マイヤーの言葉に、思わず睨んでしまう。あの話の通じない娘の所へ行けと言うのか。

「甘えんなや。獣人とこ行ったら自分何するか解らんやろ。小娘の機嫌でもとって調べ進めとけや」

殺意すら感じさせる声に、一瞬店内が静まったが、騎士たちは何事もなかったように動きだす。

マイヤーの指摘は不愉快だが否定できない。

トモの首を見た時、奴を生かしておくのではなかったと心の底から思ったから。

「…ボッシュさん」

馬小屋の隅にある小さな作業部屋に、オルガを閉じ込めていた。

後ろ手に縛られ椅子に座っている状態で、やや顔色が悪い。

「今回の件について聞きたいんだが。レヴァインの指示だったのか？」

「…そうです。自分が捕らえられたら、代わりに復讐をするようにと！私達の獣人族の力を高く評価して下さったんです」

オルガは嬉しそうに言う。父親が何をしたか、自分が何故捕まって、これからどうなるのか、想像もしないのか。

「あの廃城で我々が出会ったのは偶然か？」

「いえ、あぁでも半分は。王都で父から手紙を受け取って、それから先回りをして街か街道で襲うつもりでした。あそこで、出会ってしまったのは偶然です」

何故この少女の目は輝いているのか？殺人の企てを白状する顔じゃない。

野盗や獣と対峙した時でさえ感じなかった、妙な感覚を少女に覚える。

「あの騎士達がいなければあの場で姉弟を始末できたんですけど…
…アレク叔父が合流してなかったので」

淡い緑の瞳は、熱に浮かされたような表情で俺を見つめ、そこには憮然とした自分の間抜け面が映っているのが見えた。

「レヴァインはもう追放刑が執行された。報復などせずコンスタンスと暮らしていればよかったんじゃないか」

ふざけたナリと態度だが、心情からオルガを気遣って接していた。だからこんな何の得にもならない復讐にも付き合ったんだろう。貴族至上主義のレヴァインが彼以上の愛情を注いでいたとは到底思えない。

「レヴァイン様は…他の子より、私が頼りになるっておっしゃったんです！
でも…あの姉弟を見てると…復讐よりも、もっと。皆に大事にされて、ただ守られて…あなたはあの子しか見ない！」

突然、激情にかられて叫ぶ少女に、少しの哀れみと苛立ちを感じる。

「そもそも、レヴァインがあの2人に何をしたのか知らないのか？」

言わずにはおれない。
互いしか持たない姉弟を引き離そうとしたのは異母兄で、命を狙って王城で襲ったのは父親だと。

オルガは何も言わずに、唇を噛んでいる。

「知っていたら教えて欲しい。今回加担したのは3人だけか？他に狙っている奴はいるのか？……頼むから教えてくれ。あれ以上傷つける訳にはいかないんだ」

オルガは項垂れ、暫らく迷っていたが、そのままの姿勢で口を開いた。

「……私達だけです。でも他の兄弟は解りません。ハウィット様を取り戻す計画があるとは聞いています」

碌でもない一家だが、義理とはいえ兄弟仲は良いらしい。ハウィットに従っていた異母兄を考えると、関係性はまるっきり主従のようだったが。

「解った。後で暖かいものでも届けさせよう」

小屋をでる背中に、小さな声で言われた言葉には答えられなかった。

『本当にあなたが好きなんです』

小屋を出て宿に向かう裏口で、なぜかリョータに会った。薄い寝巻代わりのままで、ぼんやり立っている。

「何してるんだ、風邪引くぞ」

反応がないので腕を引いて中の暖かい場所へ連れて行く。

ちょうど、捕虜にした2人の手当てに来ていた町医者が、熱い茶を啜っていた。

「こいつにも茶をもらえるか」

宿の主に声を掛けると、すぐに持って来た。慰めの言葉と共に、小さな菓子を握らせた。

この辺りで我に返り、リョータは菓子をこちらに見せて苦笑した。

「あそこで何をしていたんだ?」

「ちょっと気になっただけです。気が立って眠れないし。あ、トモは寝てます。あれは寝てるというより失神したのかな?アガサさん

が見てくれてますよ」

淡々と呟く姿は、いつもの可愛げがない。たまに垣間見える素の姿だった。取り繕う元気がないんだろう。

「オルガさんはあの家の人だったんですね。道理で睨まれると思った」

ため息をついて、両手で抱えた茶の表面を揺らす。

「だからあの家燃やそうって言ったのに」

言葉から本気を感じ取って青白い顔を見た。包帯の巻かれた顔は、初めて出会った頃より丸みがとれ、甘さがない。トモによく似ていた。

「そういやそんな事も言ってたな。レヴァイン家の処理は都の連中だったから。色々思惑があったようだしな」

「目に見えるところだけ綺麗にしても、根深く残るんですよ。掃除するなら徹底的にやらないと。元気に走り回ってるのを見つけたら巣にもうじゃうじゃいると思わなきゃ」

リョータが言っているのはレヴァイン家の事なのに、なぜか暗喩がなされているような気がして落ち着かない。
リョータは厳しい視線を店内の床に向けて見渡してから、小さく頷いた。

「あぁそれにしても。獣人って！せっかく会ったのにあんなんじゃぁ……ネコミミ～！」

いつも通りの、どこか柔らかな雰囲気に戻ったリョータは机に伏して訳の解らないことを叫んだ。

よく解らないが、とりあえず頭を撫でてやった。

52・虫歯もカビも根元から（後書き）

オルガさんのラブ・ビームはボッシュさんには全く届きません。

基本的にトモちゃん以外はどうでもいいと思ってますので。

パイクさんなら、オルガさんに悪いなぁとか思うところですね。

53話・雪降る朝（前書き）

弟　ボッシュ視点です

53話・雪降る朝

結局、僕は一晩中眠れなくて、ずっと宿のロビーに居ました。
ファンタジーには付き物の獣人…ケモ耳に尻尾な可愛らしいビジュアル。こんな世界に来て、期待しなかったと言えば嘘になります。
それが。あんな、熊と狼を合わせたような…。
人種？差別かもしれませんが、全力でＯＵＴ判定です。
オルガさんも、あんななんでしょうかね…これ以上夢を壊さないために、詳しく聞かないことにしました。

ボッシュさんは心配してくれましたが、マイヤーさんや他の騎士、役人らしき人達と相談するのに忙しそうです。自分も怪我人なのに大丈夫でしょうか。

テーブルの端で大人しくしていると、宿の人が医者だと紹介してくれた男の人が話し掛けてきました。
結構なお年で、シワシワ加減は７、８０代でしょうか。実は痩せてるだけで、もっと若いのかもしれません。

「君があの獣人族に襲われたんだって？それで済んだのは、運がいい」

大きな水色の目がギョロリと動きました。ちょっと不気味です。失礼だけど。
残り少ない白髪が乱れていて、タイムスリップする車を造った科学者に似ています。

「患部は清潔に保つのだ。そうさな、近所の温泉に行くのもよかろうな。傷が早く癒える」

「温泉ですか…」

トモが聞いたら喜びそうです。僕も好きですけど、今の状況で温泉行きたいとか言えないですねぇ。

皆殺気立ってる。

「おはようございます」

遠慮がちに、宿の人が話し掛けてきました。
この人も夜からの騒ぎで徹夜をしたんじゃないでしょうか？お気の毒です。

「朝食用意したから、お姉さんに持って行ってあげて下さい。アダー先生も、お帰りの前に食ってって下さいよ」

僕には優しく、お医者さんには気やすく話し掛けながら、食事の載ったトレーを持って来ました。

小さなパン、ホットミルクに野菜スープ、それからオムレツみたいなもの。

美味しそうです！

「ありがとうございます」

冷めない内に持って行きましょう。姉は昨日碌に食べてないから、お腹空いてるはず。

「失礼します…」

ノックして、アガサさんの返事を待って入ります。

姉は意外にももう起きていて、窓の外をぼんやり眺めていました。

「トモ、朝ご飯」

振り返った顔は血の気が無く、表情も暗いです。

「ん…」

トレーをベッドの上に置くと、もぞもぞ動いて食べに来ました。よかった。食欲はあるようです。
そんな様子を見て、アガサさんは力強く伸びをして、明るく笑いました。

「ちゃんと全部食べるんだよ！アタシは下行ってくるからね」

あんまり寝てないはずなのに、いつもと変わらず颯爽としています。殺気立っていた男性陣とは違いますね。
姉はまだ目が覚めないらしく、半目でホットミルクをすすっています。甘くて、フルーツのような香りで正直僕はお茶のほうが良かったですけど。
そういえばお菓子をくれたし、小さい子供扱いされてるようです。

「あのね、近くに傷に効く温泉があるんだって。お医者さんに勧められたよ」

姉が、パチパチと強く瞬きをしました。
やはり温泉に反応していますね。

「トモがボッシュさんにオネダリしたら、多分すぐ連れて行ってもらえるよ。あの人も怪我人なわけだし」

姉はフォークでオムレツを突き刺しながら、心ここに在らずといった様子でニヤリと笑いました。

「温泉…混浴…？」

ちょっとなんの妄想してんの？！

○　○　○　○

リョータとしばらく話した後、馬小屋から戻ったマイヤーに報告をいれる。

「マイヤー。彼女が言うには、今回は3人だけで実行したらしい。それより、ハウィットを逃がす計画があると言っていた」

「フ…ン何考えとんのやろなぁ？逃げたかて行くとこないやろ」

相変わらず不機嫌極まりない。こいつがここまで態度を変えたことなどなかったんだが。

あの姉弟に、それだけ心を砕いているということか。

「あの獣人はどうだ」

「手当てが早かったから、大したことないで。喋るの問題なかったわ。初めて見たけど頑丈やな。切れ目は残るやろぅけど」

恐らく、奴らの行く末には傷の有無など問題ないだろうが。
殺意を以て騎士が護衛する人物を襲い、捕われた。しかも罪人の家族であり、その指示で同じ人物を襲ったので再犯とされるだろう。極刑か、よくて強制労働だろう。見せしめの為に、重い刑を科するのは、よくあることだ。
今回は全く心が痛まない。

「君達、私は失礼するよ。患者は毎日いるもんでね。何かあったら呼んでくれたまえ」

「ああ、世話になった。報酬は後で届けさせる」

一晩付き合ってくれた医者は、年齢を感じさせない動きで、さっさと帰っていった。

見送りに出てみると、雪が降り始めていた。

空を見上げて雪を見ていると、上下が逆転したような奇妙な錯覚に陥る。

頭を振っていると、2階の開いた窓からトモが顔を出しているのが見えた。
ぼんやりと白い顔で灰色の空を見つめ、沈んだ表情をしている。首の包帯が痛々しかった。

「あ」

じっと見ていると、視線に気付いたのか偶然か、下を向いたトモと目が合う。

不思議そうな顔をして、それから微笑んだ。
ひどく無防備な顔に、目が離せない。すぐにでも飛んで行って、抱き締めたい。

こんなにも他人を切望したのは初めてだ。

トモは手を振って中に引っ込み、静かに窓を閉めた。

俺が戻ると、姉弟が降りてきたところだった。

「おはようございます。ボッシュさん、顔色悪いですよ?朝食とりました?」

リョータが聞いてくるが、2人して青白い顔だ。鍛えている自分より、よほど堪えただろう。

「そうだよ。無理しちゃだめだよ」

トモがそう言って肩へ手を伸ばし、触れない辺りで止めた。
その手を取って冷たい指先に口付けると、トモの頬に少しだけ赤みがさした。

流石にここでは唇は奪えない。その代わり、手を繋いだままにした。

「あの、ボッシュさん。お医者さんが言ってたらしいんだけど。近くに傷にいい温泉があるんだって。
温泉行きたいなぁ～って。ボッシュさんも怪我治ってないし」

上目遣いのトモの言葉に、リョータも期待に満ちた目で見つめてくる。

何か、自分の中で、この目には逆らえない、逆らいたくない、という声がする。

「すぐには無理だ。…そんな目で見るな！引継ぎをして、夕方には連れて行くから！それまでちゃんと食って、リョータは寝ろ」

俺の言葉に、トモはいつものようにへにゃりと目を細めた。
抱き締めて撫で回したい。
疲れているのか、そんな衝動に駆られた。

53話・雪降る朝（後書き）

ちょっとだけ、日常が戻ってきました。

ボッシュさんは萌え死にそうです。

５４話・星降る夜（前書き）

弟　姉　視点です

54話・星降る夜

温泉温泉♪

思わず鼻歌がでてしまいます。

露天風呂でしょうか、それともローマ風？
硫黄の臭いは苦手なので、無臭のお湯がいいですね。

僕が部屋に戻って温泉を思い浮べてうっとりしていると、下から聞き覚えのある声がしてきました。

徹夜明けなのに眠たくならないので、下に行ってみることにします。

「パイクさ～ん！クルトも会いたかったよ！」

僕が目にしたのは、珍しく嬉しそうな姉が、背の高い騎士に抱きつく様にして出迎えている姿でした。
それに応えるパイクさんはいつものように柔らかく、クルトはふざけた感じで。

でも2人共、抱き返しはしませんでした。彼らの正面からは恐ろしい先輩が、表面上はいつもと変わらず見つめていたからです。

「早かったな？」

早かったのは誉めてあげるべきじゃないのかなぁ？
まるで邪魔者を見るような目ですね！

「先輩怪我したって聞いて――トモも大丈夫？」

まず心配するのはボッシュさんなんですね。僕が近寄っていくと、
一番に気付いたクルトが両手を広げて寄って来ました。

「おぉっ、リョータ！お前も大丈夫かっ？皆心配してたぜー」

大げさに言いながら、僕の頭をワシワシします。

「誤魔化したって無駄ですよ、睨まれてますよ」

「俺から抱きついたんじゃないのに～」

「言っときますけど、機嫌悪いのボッシュさんだけじゃなくて、マイヤーさんもですからね」

ひそひそと会話をしていると、パイクさんも寄って来て、腰に提げた袋を外して中身をそっと取り出しました。

「……あ」

「心配してたからね。ロボは大きいから、流石に街には連れて来られなくて」

優しく僕に渡されたのは、モップ。
狭苦しかったのか、短い四肢を伸ばしてくねくねしています。体操のつもりでしょうか？
思わず、顔がにやけるのが解りますが、止めようがありません。

「やっぱりリョータにはこの子が効くでしょう？」

得意げに言うパイクさん。さすが同志！
僕は何度も頷いて、感謝を表しました。

ふわふわもふもふ。
あったかい。
知的な瞳でじっと見て、抱き上げている僕を長い尻尾で包むように巻き付きました。
心配、されているようで。

僕がほのぼのしている横では、姉がボッシュさんにとっ捕まって何か言われてました。

後ろから女の子を抱き締めるのっていいなぁ～。

「さて、急いで済ませないと先輩達が休めないね。マイヤーさんどこかな」

仕事モードに切り替わったパイクさんがそう言うと、だらけてモップを突いたり姉の方を半笑いで見ていたクルトも背筋を伸ばしました。

「じゃ、俺は事務方と話してから行きます」

真面目なクルトって初めて見ました。

それから、地元の騎士を帰すために引継ぎをして、都から来る役人や兵士を待つということになりました。

砦からはすぐに来たのに、都からはまだ来ないようです。パイクさんに聞いたところ、手続きが無駄に複雑なので時間がかかるそうです。

温泉大丈夫でしょうか。

２人が来たってことは、ボッシュさんがフリーになったってことですよね。

○　○　○　○

朝ご飯を食べて休憩しているボッシュさんの傍に、なんとなく座っている。
マイヤーさんは尋問した結果を報告書にまとめる為に部屋に引っ込み、アガサさんは馬の様子を見に行っている。

ボッシュさんは字を書くのが辛いみたい。やっぱり傷が痛むんだ。
聞いても大丈夫だ、と言うけど。やせ我慢というか、心配させたくないってところが弟とよく似てる。

ちょっと2人でぼーっとしていると、馬の走る音が聞こえてきて、宿の前で停まった。

慌てたように入って来た人達を見て、久々にテンションがあがった。
パイクさんとクルト。
なんだかほっとする。思わず駆け寄って、勢いのまま腕とか掴んだ。
パイクさんは相変わらず優しく、天気が悪いのに輝いて見える。キラキラだね！
クルトは子供みたいに笑ってて、いつもの2人が居ないせいか、お

馬鹿発言はなかった。先輩ばっかりだから遠慮してるのかな？

寝に行ってたはずの弟の方へ２人が行くと、後ろから腕がのびてきた。

なにかな？

「なんであいつ等が来てそんなに喜ぶんだ」

う、後ろからお腹に腕が回されている！

その姿勢で耳元で囁かれると、なんかすごい恥ずかしくないか、な？

イチャこいてるバカップルじゃない？

「２人共、お兄さんみたいで安心するんです」

クルトは自分から立候補したし。

「兄に抱きつくのか？」

ん？こっちでは普通じゃないのかなぁ。家族でキスとかハグとか。

あ、男兄弟だから？

そう思って聞いてみると、ものっそい微妙な顔をされた。

文化の違いは注意してないといけないね。これまでもおかしな事してなきゃいいんだけど。

「あ～つっかれたぁ、て、俺に書類丸投げして何和んでんねん」

欠伸をしながら、パイクさんを従えたマイヤーさんが戻ってきた。
ちょっとは機嫌が直った気がする。
そして何故か手を伸ばして私のほっぺをぐにーっと摘んだ。痛くないけど、周りの視線が痛い。

「伸びるだろう、放せ」

お腹に回った腕に力が入って、持ち上げられて後ろに下がった。
伸びはしないと思うな。
たまにボッシュさん天然？て思う発言がある。

マイヤーさんはケケケ、みたいに笑って、モップと遊ぶ弟の方へ行った。いつものマイヤーさんだ。

ボッシュさんは私の向きをぐるりと回転させて、摘まれたほっぺを優しくさすってくれた。
伸びてないか確認してるんだろうか。

「温泉いけるよね？皆で行くの？」

「アガサは武器屋に行くと言ってた。マイヤーは嫌いらしい」

温泉嫌いなんだ～。珍しいな。

伸びてないのを確認して安心したらしく、クルトが戻ったところで皆してどこかの部屋に入ってしまった。

外を見ると、まだ陽は高かった。

温泉・・・。

壁際の木のベンチでモップを撫でる弟の横に座って、大人しく待つことにした。

「……モ、トモ」

「リョータ、ほら起きて」

「まだ寝かしといたらぁ？この子等あんま寝てないんやろ」

「かっわいいっすよね～…ていやなんでもないです」

夢現つで楽しそうな声がする。

仕事終わったのかな？

「温泉は無理か」

苦笑混じりの声に、目が開いた！

「「温泉！」」

どうもあのままベンチで寝ちゃったみたいで、弟と並んで毛布に包まれていた。
いきなり起きた私達に皆の視線が集中する。

あれ？

「誰か温泉って言いませんでした？」

夢だったのかな？

ぼーっとしてる弟と顔を見合わせると、マイヤーさんが笑いだした。

「大丈夫そうやな、飯の前に行ってきぃ」

外は暗くなってて、ランプに火が入れられていた。結構な時間、眠っていたらしい。
こんな、人がいっぱいいる中で、皆が仕事をしてるのに、思いっき

り熟睡。

駄目すぎる。

「ご、ごめんなさい」

「皆が居て安心できたんだねぇ」

赤くなって謝る私達に、パイクさんがにっこり笑って言ってくれた。

こういう言い方だと、なんだか良い事に聞こえる。やっぱお人好しなんだなぁ。

§§§§§§§

私達が起きてすぐ行けるように用意をしてくれていたので、馬車に乗って温泉へ急いだ。

歩いて行ける距離らしいんだけど、皆に大反対されて弟も歩きたくない、と主張したので馬車になった。

体が鈍ると思うんだけど。

温泉は、日本の秘湯みたいのかな～と思っていたんだけど、意外に

整備されて男女の区切りがきっちりしてあった。
半露天みたいになってて、療養に来る人向けとかで男湯が圧倒的に広かった。

「混浴じゃないんだ」

ザンネン。

別に、見たかったとかじゃなくて！1人はちょっと怖いってゆーか！

「気を付けろよ、何かあったら呼べ」

ボッシュさんは入り口で真面目に言ったけど、本当に来たら捕まるんじゃないだろうか？

店番？のおばさんに説明を受けて、恐る恐る中に入った。
日本の温泉施設みたいに、籠が置いてあって脱いだ服を入れる。

温泉には先客がいた。

目が釘づけになる。

サルマ・ハエックとＧＡＧＡが居た。ぷるぷるばいーん、な音が聞こえてくる気がする。

なんかもう居たたまれなくて、隅っこで、お湯に漬けると泡立つ謎のふわふわ物質で体を洗い、首の薬も洗い流した。

「し、失礼します…」

先客に声をかけて浸かるとちょっと熱めのお湯が懐かしい。思わずため息がでてしまう。

「あらぁ？あなた、この前の子じゃない～。昨日も来てくれたわねぇ」

ザバザバとお湯を掻き分け近付いて来たオネーサンは酒場の店員さん達だった。化粧無いほうが美人！

「まっ、どうしたのそれ！ひどいわねぇ」

両横に陣取って、喉にお湯をかけたり肩を揉んでくれる、のはいいけど。

「ものすごい圧迫感が…」

むにむに当たるんだけど！男の人が胸触る気持ちが解っちゃったんだけど！

「あぁ、アナタはまぁ、細すぎねぇ」

哀れみの視線が痛い。

「あの方に協力してもらいなさいよぉ」

「協力って？」

私が首を傾げると、サルマ似のオネーサンは両手をわきわきさせて、にっと笑った。凄絶に色っぽい。

「揉んでもらったら大きくなるわよぉ～」

誰が何を揉むって？

時間差で脳みそにその意味が到達して、私はフリーズした。

いや、よく聞くけどさ！

生々しいのよっ！

散々からかわれて、私は逆上せる寸前。その丁度良い時に、飲料水のサービスがあった。

「こっち来なさいよ」

ＧＡＧＡ風オネーサンに手を引かれて屋根の無い所へ進むと、雪がちらちら降っていて気持ちが良い。

「アナタこの前と雰囲気違うわよねぇ」

サルマ似の方に言われて、自分でも今更だけど気付いた。
多分、香水も酒も匂わないからだ。

「この前ちょっと調子悪くて…ごめんなさい」

「別にぃ、いいのよ。救けてもらったんだしぃ」

あっけらかんと笑う姿に、はっとする。
こっちの方が絶対良い。

「お詫びに、都で流行の格好を伝授します、オネーサマ方」

胸は出さずに隠してもエロいし、元が良いからドギツイ化粧も勿体ない。

胸元ふんわりハイウエストで強調して、髪をアップにして細い首を強調。

「香水はつけすぎない！ああいう店だと匂いが麻痺して解らなくなるとは思うけど。体じゃなくて服に香らすくらいで」

お風呂のないところで発達したんだから、ここではあんまり用は無いはず。

「やっぱり都は随分違うのね。香水は皆つけると思ってた！」

ＧＡＧＡネーサンが目を丸くして言った。
情報が伝わるのが遅いからかな。きっと昔はこうだったんだね。

「どちらかと言うと、服も化粧もあっさり、清潔感があるのがもてるみたいでしたよ」

まぁこの人達なら何着てももてるんだろうけど。

「いいこと聞いちゃったわね～。寒いけど来てよかった」

「ホントねぇ。若い子と喋るの楽しいわぁ」

3人で並んで空を見上げると、びっくりするくらいの星空が見えた。
思わず口が開きっぱなしになるくらい。

夜は早く寝かされてたから知らなかった。

見ていると、星が動いた。
流れ星?!

願い事3回言えない、と焦っていたら別の所でもつつーっと流れた。
いくつも。

何この大盤振舞。
なんとか流星群?

結局、見るのに忙しくて願い事を言えなかった。

温泉を心行くまで堪能した私が、オネーサンと別れて待合室に出ると、ボッシュさんが1人で座っていた。
弟は?

私の視線に気付いて手招きするので、横に座った。

「リョータももう来る。モップを拭いていた」

連れて来てたのか!

ボッシュさんは私の髪を引っ張り、濡れてる、と言って布で拭きは

じめた。

手、大きいな。

……だめだやばい！

変な事言うから意識しちゃうじゃないか！

「顔赤いぞ、逆上せたか」

顔を覗き込まれて、またフリーズした。

再起動中。

ボッシュさんから目が放せないのが困るんだけど。

ふ、とその顔が和んで近付いて来て、ちゅっと音がしたと思ったら離れていた。

再起動に失敗しました。

俯いた私の頭を、再びワシワシするボッシュさん。

犬じゃないんだから。

2回しか言えてないけど、願い事が叶ったよ。

こっちの流れ星は気前が良い。

５４話・星降る夜（後書き）

ちょっとはトモちゃんも強くなりました。

番外編・むかしむかしのはなし（前書き）

突然ですが番外編

番外編・むかしむかしのはなし

幼年学校の帰り、この辺りでは見かけない子を見た。
髪も目も真っ黒で、肌は抜けるように白い。自分より幾つか年下の少年だった。
塀にもたれる様にして立っていて、自分が前を通り過ぎる時は目だけで追っているのがわかった。

次の日も少年は立っていたが、やはり一言も喋らなかった。

そしてまた次の日。

学校が休みの日に、朝から来客があった。

「遠い異国から、移住してきたのですって。三つ年下の男の子がいるから、気を付けて見てあげてね。明日から学校へ通うそうよ」

母の言葉に、それはきっとあの少年だと思った。

通り過ぎる自分との間合いをはかるあの目を思い出して、久しぶりに心が踊るような気持ちを感じた。

編入学後、相変わらず必要以上に近寄らず、こちらの動きを見つめている少年。
学校までの道程は、自分の後からついてくる。
言葉の訛りは強いが、授業ではとても優秀だと評判になっていた。

距離はあるものの、いつも一緒にいるので必然的に打ち解けて、放課後には訓練をしたり、宿題を見てやるようになっていた。

「あ、誰か来る」

そう呟いたかと思うと、走り寄って来て自分の影に隠れるように背後に立つ。
何事かと思えば、学校でよく目立っている最上級生の二人組だった。

「やーぁ、ちびっこ。今日は兄貴分と一緒なんだね」

金髪の、優しげな上級生が自分越しに声を掛けると、不服そうに挨拶を返す声がする。
服の背中部分を掴まれているので、動くに動けない。

「君達はなぜここに…」

もう一人の、焦茶の髪でひょろ長い印象の上級生が、顎に手を当てて言った。

今は放課後、さっさと帰る者もいれば自分達のように運動場で自主訓練をする者もいる。

訓練をするつもりだった、と伝えようとしたら。

「ごめんねぇ。巻き込んじゃって」

金髪の方が、ちっとも悪怯れずに謝罪の言葉を口にした。

彼の指差す方を見れば、１０人程の集団がこちらへ向かって来るところだった。体格からして明らかに上級生で、とても――怒っているように見える。

背後にいた少年も横に出て彼らを見て、自分と顔を見合わせた。

「今から逃げられる？」

独特の訛りで問い掛けられたので、首を振って否定する。

少年はため息をついて、両手に木剣を構えた。

「お、いぃねえ！」

金髪が楽しげに笑い、焦茶の方は淡々と、上着を脱いで近くの木に引っ掛けてながら言う。

「そちらで三、四人、やってくれませんかね」

「多いやろ！」

「僕達あんまり強くないんだよね～。頭脳派なの」

もしかして、この二人はわざと自分達に声を掛けたんではないだろうか、という考えが頭をよぎる。

「半分引き受けますよ」

自分が声を掛けると、二人の策士はにんまりとする。

「俺かて、あんなんチョロイわ！」

不貞腐れたように少年が呟き、その変声期前の高い声が運動場に響いた。

こちらの二人を睨んでいた目が、自分や少年に向けられる。
火に油を注いだ様だ。
彼らの顔は真っ赤になっていた。

「下級生の助っ人とは、たいした人望だな！」
「今日は逃がさないぞ」

いったい何をしたらこんなに怒らせることができるんだろうか？
そう思わないでもないが、上級生と剣を交える機会を逃す手はない。
向こうが多数を頼みに囲もうとして動くと、ゆらりと金髪と焦茶が離れた。
二人はそれぞれ両端へ。
自分達は正面へ。

騒ぎを聞き付けた教師が駆け付ける頃には、乱闘は終息していた。

「いやぁ、本当に君って強いねぇ。うちの兄より強いんじゃないの」
「四人、ですね」

「アンタ等が元やのに、俺と同じ数てどないやねん」

勝負が付いた瞬間にその場から逃走し、教師の叱責は免れた。彼らも、下級生に負けた事は恥になるので言い付けないだろう。

砂や土にまみれた自分と少年の服を叩きながら、心のこもっていない称賛を聞き流し、汚れの言い訳に頭を悩ましていた。

「じゃあね、助かったよ」

「早く帰らないと、家の方に心配されますよ」

どの口が言うのかと思わないでもないが、基本的には争いを好まない質である。素直に別れて、帰路に着いた。

「あぁ、アイツ等の名前聞いてないわぁ」

帰り道は、少年は自分の横を歩いている。

「カール、アイツ等知っとる？」

見上げて聞いてくるので、首を横に振る。姿はよく見かけるが、名前までは知らなかった。

彼らはすぐ卒業するだろうし、騎士学校に入れば成績次第で自分が入る前に卒業することも有り得る。

「変な奴らやし、仲良うしとぅないなぁ…苦手や」

二人の雰囲気を思い出す。楽しい玩具を見つけたような、そんな目をしていた。

「最上級生だから、そうそう接点はないだろう」

自分の言葉に、少年も安心したように頷いた。

しかし自分達は思いつかなかった。

騎士となった後は、年齢に関係なく様々な部隊へ配属されるということを。

番外編・むかしむかしのはなし（後書き）

マイヤーさんとラーソン隊長の出会い
ハリーとブライアンの初巻き添え編でした

マイヤーさんはこの時の二人を誰か覚えていません。二人はこの時からロックオン状態です、活きの良い玩具兼舎弟として。

55話・幸せなひととき（前書き）

姉　ボッシュです

55話・幸せなひととき

「これ美味しいよ、はい、あーん？」

温泉でさっぱりして、宿に戻って手当てをして。
今度は皆で夕飯を食べに来た。

早速お色直しをしたオネーサンズに男共は釘づけ。してやったり、
ていうのとボッシュさんまで見てたのでジェラシー！

よく解らないけど、パテみたいな柔らかいのをフォークでちょっと
とって差し出すと、ボッシュさんは困った様にフォークの先を見て
動かない。

恥ずかしいのかな？
自分はやったくせに。
あ。これが嫌いなのかな。

諦めて自分で食べようと思ったら。
わし、と私の手ごとフォークを掴んで口に運んだ。

おぉ、素直でよろしい！

「まぁうまいな」

よかった。肉っぽいから食べてなかったんだよね。

「そういうのは二人きりの時にやってくれないかな」

「なんやすっかり元通り？これはこれで欝陶しい」

「ああぁ羨ましい～！ズルいっすよ」

「トモ、こっちも美味しいよ」

「ゴホン、見て見ぬ振りをするもんだよ、全く気の利かない連中だね」

外野がうるさいな。

皆はオネーサマ方を見てりゃいいのに。看病の時は弱ってたからボッシュさんの反応が鈍かったんだよね。

ちょっと照れたり手を握られたり、色々あるほうが楽しい。

私きっとにやけてるだろうな。ここんとこ落ち込みが激しかった気分が急上昇してて、やばいくらい。

私も少しパテをとって、食べてみた。うん、まぁうまい、という感

想に納得した。不味くないしすごく美味しいわけでもない。
微妙？

「そんな事より、いつ帰れるんですか？」

そんな事ってどの事よ、弟め。最近反抗期かな。
場を和ますというのは大事な事なんだよ？さんざん心配かけた私が、
今更だけどさ。

「囚人護送の役人と騎士が着かない限り、ここから動けない」

苛立って顔の包帯を引っ張る弟に、ボッシュさんが淡々と答える。
そういえば砦で囚人に逃げられたのもその役人だったな。

「今日は昼寝した程度やんか、体調整えな馬車は辛いで」

酒瓶片手に、マイヤーさんが静かに言った。
酒瓶はリターナブルで、空になったら酒屋に戻して使い回し。だから食堂なんかで割ったら罰金とられることもあるらしく、客が飲んだらすぐ回収に来る。
今みたいに。

「お代わりいかが？もっと強いの、有りましてよ？」

GAGA風おねーさんは、何だか話し方まで変わってる。にっこり笑ったのを見て、クルトが赤くなった。年上好きなのかな？

「酒はもういい」

ボッシュさんは、ちらっとマイヤーさんが頷くのを見て答えた。
今夜は皆控えるらしい。

そもそもボッシュさんは怪我人だしね！

パイクさんは弟と一緒になって、モップに食べものをやってるし、アガサさんは自分が食べるのに忙しい。

お腹が満たされて、暖かくて、ざわざわと音に包まれているうちに、視界がぐらっとした。
いつの間にかうとうとしてたみたい。
座り直して目をパチパチさせても、目蓋が重くて開けていられなくなってきた。

「トモ、大丈夫か？」

肩に手を置かれたので、その重みで私の狭い視界が斜めになっていく。

ちょうどいいクッションに到達したので、そのまま気持ち良く枕に

して、しっかり目を閉じた。木のベンチだったけど、いつのまにクッション置いてくれたのかな？

おやすみなさい。歯磨きしてないけど。もう無理。

誰かに優しく呼ばれた気がして、幸せな気分で夢に入り込んだ。

○　○　○　○

姉弟を連れて、温泉に行った。この街のは初めてだったが、清潔で広々としていて、彼らも気に入ったらしい。

トモを1人にするのはかなり不本意だったが。

出てきたトモは、来た時より見違えるほど機嫌が良くなっていた。暖まって血色がよくなり、楽しいことでもあったのか、目が輝いている。

そのせいで首の傷と痣がひどく目立っていて、やたらと扇情的で、周囲の視線が気になった。

周囲の危険な男共から隠すために、頭から布を被せて髪を拭く作業に没頭した。

ふと俯くトモを見れば、顔が赤い。

「逆上せたのか」

水でも飲まそうか、と思って見ていれば、どうもこれは照れているらしい。
愛しさが込み上げ、そっと口付けした。

そして今は、俺に手ずから料理を食べさそうと、真剣な顔でこちらを見ている。

他の客はともかく、マイヤーやらリョータやらが見ているんだが・・・。
躊躇っている間にトモの顔が曇り、肩が下がったので慌てて細い手を掴み、そのまま食べた。

うん、何か解らん。

ただ、それだけのことなのにトモはとても嬉しそうだった。

反対にリョータは機嫌が悪く、早く砦に帰りたがっている。気持ちは解るが、引継ぎ無しに当事者が全員帰る訳にはいかない。

まったく今回の旅は碌でもない。

酒食がすすみ、気が付くとトモが揺れていた。どうやら半分寝かかっていて、本人は必死に姿勢を保とうとしている。見ていて面白い

が、傾き加減によっては机で顔面を打ち付けるかもしれない。
それは避けねばならない。

そっと肩に手を置き、揺すって起こそうとしたら、体の力が抜けたようにこちらへ凭れ掛かってきた。
そのまま頭を俺の腿にのせて、目を閉じている。

「トモ？」

頬を撫でると、ふにゃりと微笑んだ。
久しぶりに見る、安心しきった顔。

寝顔を他の男に見せないために、外套で顔まで覆ってやった。

「嫉妬深い夫は、嫌がられるで～」

「え？夫って、えぇ？」

マイヤーの揶揄にクルトが過剰に反応したので、睨むと同時にパイクが肉の塊を口に突っ込んだ。

「起こしたら可哀相でしょう」

情けない顔で咀嚼するクルトに、リョータが酒の器を手渡した。

「寝たら、滅多なことじゃ起きませんから。普通に話してて大丈夫ですよ」

そういうリョータも、眠たそうな顔になっている。

ようやく、いつも通りに戻れるのだろうか？

今夜は、子供達が安心して眠れるんであればいいんだが。

55話・幸せなひととき（後書き）

ただ惚気てるだけの回でした～。

56話・なに王子？（前書き）

弟　ボッシュ視点です

56話・なに王子？

久しぶりに、穏やかな夕食を楽しみました。

温泉で体も楽になって食欲も出たし、姉も機嫌がすごく良かったし、なぜか食堂のキャバ嬢が王城の侍女にジョブチェンジしてて視覚的にも楽しめました。顔の傷がかゆいのが気になりましたけど。

どうやら温泉で姉と交流を深めたらしいです。

初めて会った時は気が合わなさそうだったのに、女子はよく解らないですね。

ただ、元気になったらなったで、人前でいちゃつくのはどうかと思いました。

しかもこっちは全員独り身なのに。

まぁ僕には可愛いモップがいるからいいですけど！

温泉効果か、毛がぽわっぽわです。意外に泳げるのも解って、帰ってからパイクさんに即報告しました。

腹八分目まで食べて、ぼんやりしていると姉がうとうとしていました。ガクってなるのが面白くて見ていると、本格的に寝入ってボッシュさんの膝枕です。

マイヤーさんがからかってクルトが面白いくらい焦って、パイクさんが無理矢理黙らせました。どこまでボッシュさん好きなの、この

人。

ジルさんとどうなったんだか聞きたいんですけど、本人がいなかったら鉄壁なんですよね～。まぁそんなに急には変わらないかなぁ。

「あ～ぁ、いいなぁ」

店の外は相変わらず雪が降っていて、うっすら積もっていました。
僕が足跡をつけて遊んでいると、後ろから僕の肩に肘を乗せて、クルトがため息をつきます。
いつものメンバーが居ない上に怖い先輩ばっかりだから、調子が出ないみたいですね。

「トモちゃんを応援してるんだけどさ、あっさりべたべたされるとつまらないというか、羨ましいというかねぇ？ふくざつー」

「気持ちは解りますけど、命が惜しかったら邪魔しない方がいいですよ？」

「しないけど。なんかさ、妹を嫁に出す気分？」

いつあんたの妹になったんですか。

平均寿命が短いと、結婚も早いですよね。そうですよね。

眠ってる姉を大事そうに抱えてゆっくり歩くボッシュさん。

体を張って守るし、美少女にもお色気美女にもなびかないし、基本的に溺愛っぽいし。
まぁちょっとおじさんだけど僕から見ても格好良い事は認めますよ！

合格。

合格なんですけど。

「複雑ですよね」

「弟よ！」

クルトに頭をぐりぐりされて転びそうになっている僕を見て、アガサさんが呆れ顔になります。

「リョータに妙なこと吹き込むんじゃないよ？」

クルトって信用無いですねぇ～。

そんな会話も楽しかった夜が明けて、更に冷え込んだ朝。やっとお城から人員が到着しました。

なぜか全員整列でお出迎えですよ。雪が１０センチくらい積もって現在進行形で高くなってるんですけど？

「出迎えご苦労」

えらっそーな上から目線で声を掛けたのは、僕より少し背の低い、同年代の奴。茶色の髪に、年の割に落ち着き払ったモスグリーンの目。

誰？

僕の疑問は即解消されました。近衛騎士がくっついていたから。つまり、王族。

人が良さそうな顔してえげつない策を採る王様の息子ってことですね！

何しに来たんだよ？また帰りが遅くなる。

○　○　○　○

朝は更に雪が積もり、吐く息が白い。

本格的になる前に、帰らなければ。

見回りをして戻ると、宿に都からの要員がようやく到着していた。

安心したのも束の間。

「遅れて、第2王子が来ます」

騎士が声を低めて言うので思わず見返した。
何をしに来るというんだ？だいたい、まだガキじゃないのか？

「研修だとか…で」

諦めたような、何とも言えない表情で言う彼を責めても意味が無い。
名前はなんだったかな。
変り者だと聞いた覚えがあるが。

「ロタール殿下、ご到着です！」

眠たそうな顔を隠そうともしない面々で出迎える。ぎりぎりまで寝かせておいた姉弟は、雰囲気で察したのか静かに状況を受け入れていた。

ロタール王子は粗末な宿にも文句を言うことも無く、淡々としてい

る。確か騎士学校に入学した辺り、リョータと同年か。

「まずは、2人に陛下から直接見舞いに行けぬがよく養生するように、とのことだ」

挨拶も抜きで話し掛けられ困ったような表情になったが、姉弟は会釈して口々に感謝の意を陳べる。王子は特に興味をひかれた様子もなく、部屋で休むようにと返した。

少しは世間話などしないもんだろうか？

変わっているという噂は本当だったらしい。一瞬、トモ達の迷い、問い掛けるような視線がこちらへ向いたが、何も言わずに客室へ戻って行った。

「捕らえた獣人族と話がしたいのだが」

「聴取は都に戻られてからでも宜しいのではございませんか？」

王子の発言に、パイクが遠慮がちに返答する。アガサとクルトは緊張で固まっているし、俺とマイヤーは王子から出来るだけ遠ざかっている。

身分からも性格からも、パイクが応対するのが最適だろう。

怪我を理由に下がれないもんだろうか。

「いや、出来る限り時をあけずに話をしたいのだ。他の獣人族への配慮もそうだが……道中何が起こるともわかるまい」

眉間に皺を寄せ、王子は重々しく言う。
お前は本当に１０代なのか？

「近衛の方と、パイクが供をすればよいでしょう。拘束してありますので安全に問題はありません」

パイクの縋るような視線を受けて答えると、王子は大きく頷いた。
約１名喋れないかもしれんが、何とかなるだろう。

陛下はこの王子にレヴァイン家残党の処断を任せたようだ。確かに、宮廷に巣食う老獪なあれやこれやと渡り合う為には良い経験となるかもしれないが。
王位の継承権が一段下がっただけで汚れ仕事とは、気の毒なことだ。

56話・なに王子？（後書き）

リョータの「誰？」に
「カナダだよ！」と答えたあなたはお友達です。

次回はちょっと長く、というかダラダラ視点を変えて書く予定です。

が、身内に不幸があったので数日先に更新します。
話の筋として主人公のテンションあがってきた所なんで、自分も気分が良くなってから書こうと思います。

では、寒いので皆様お体に気を付けて！

57話・振り回されて（前書き）

パイク　弟　姉　です

57話・振り回されて

王都からやって来たロタール王子が獣人族の虜囚と接見するのでお供をすることに。
どうしてかな、当事者であるところの先輩達が目を逸らすのは。
ボッシュ先輩は怪我人だからいいとしても――元気が有り余って見えるアガサさんやマイヤーさん、事情を知っているどちらかが殿下を案内するのが筋なんじゃないかな。
怖いから言えないけど！

殿下は見た目は年相応だけど、妙に落ち着いていて、『子供らしくない』ように思える。面倒な仕事を嫌がる様子もないけど、やる気があるようにも見えない。この年代ならどうやって学校を抜け出そうかとか、好きな子の気を引くにはどうしたらいいかとか、色んな事に興味を持っていい筈なのに。
なんだか中年の官吏が立っているような。

「では、案内を頼む」

真面目な顔で言われて、変な錯覚をしてしまう。
畏れながら、殿下の将来に不安を覚えてしまった。陛下よりつまら

ないオジサンになりそうだ。

「虜囚は3名で、主犯がオルガという少女です。レヴァイン…と獣人族の女性との間にできた子で、母親は死亡しています。その女性の兄弟に育てられ、今回の件にも手を貸しています」

「レヴァイン家は確か、獣人族の保護と支援を代々続けていたな」

「はい」

予習はきちんとして来ているようだ。えらいなぁ。

宿の裏手に廻ると、警備中の騎士が殿下の姿を、というより近衛騎士を見て姿勢を正した。肩に雪が積もってる～。

殿下は彼に労りの声をかけてから、無造作に扉を開けようとするので、僕が慌てて代わった。

無駄を省くのは良い事だけど、安全を気にして欲しいな！近衛の人の視線が痛いよ。

部屋の中は冷えていて、殿下が風邪引いたら誰が責任を取らされるのかと、ちょっと不安。

オルガという少女に会うのは実は僕も初めてで、想像と違っていて驚いた。

僕が会った伯父？はなぜか女性的な身なりだったけど体格はしっかりしていて、いかにもな獣人だった。

この子は、言われなければ獣人の血が入っているとは思えない。混血が進んでいて珍しくもないけど、こんなに綺麗な子は初めて見たな、うん。

もったいないなぁ。

豊かな波打つ黒髪は乱れていて、健康的な日焼けした肌だけど流石にやつれて見える。淡い緑の目は涙を湛えて僕達を見つめていた。

何も知らない人が見たら、僕達が罪の無い美少女を監禁しているように思われるだろうね！

部屋の隅にあった小さな木の椅子を手で払って殿下に勧めると、少女の正面に据えて座った。

何となく、戸惑っているように見える。まぁ、自分と同じくらいの美少女だもんね。罪状だけだと極悪人なんだけど。

「……お前がオルガ、か。レヴァインの刑を不服として、獣人族の伯父等と共にラーソン家の養子である姉弟と、護衛中の騎士達を襲撃したことに間違いはないか」

相変わらず単刀直入に聞くなぁ。

「はい、あのでも、騎士様を傷つける気はありませんでした。私はただ、父の命に従ったのです。最後に頂いた手紙に、自分の無念を晴らすようにと…それで」

大きな目から涙を零しながら、殿下に訴えるオルガ。ちょっとグッと来るよね？でも僕が見た聴取の資料と違う事言ってるみたい。

「…動機はいいんだが。私が聞きたいのは、獣人族の意志だ。一族として、レヴァイン家の復讐に加担しているのか？彼ら親子は罪を犯して裁かれたのだ。お前達は国家の裁定に異を唱えるというのか」

うわぁ。この子、いや殿下は思ったよりずっと厳しいなぁ。女の子はすっかり怯えちゃってる。
まぁ、自分がどれだけの事をやったか自覚してなかったのかなぁ。

「ち、違います！私の、レヴァイン様の子としての問題です、これは」

「ではあの2名はお前に依頼されて個人的に協力したということだな」

焦る少女に言い聞かせるように言葉を重ねる殿下。

あの獣人達の刑を軽くするって事かな。やっぱり。
一族の結びつきが強い彼らだから、下手に刑を重くすると反感を買う。特に、レヴァイン家は昔から支援をしていた一族で、恩があるし。
だとすると、主犯のこの子も刑が軽くなる可能性があるな？
ああぁ、政治的には仕方がない事だけど。

誰が先輩達に言うの？
僕が？まだ死にたくないんだけどなぁ。

ジルさんに良い返事も貰ってないのに。

「あの、私本当に、馬鹿な事をしたと思ってます。あの子達は怖い思いをしたのに、ひどい事を…」

涙ながらに言うオルガの顔を見ていた殿下が、居心地悪そうに身じろぎした。
ちょっと絆されたのかな？加害者に同情するのはよくないよ？

「謝罪の気持ちはあの2人に伝えておこう」

えっ？

「申し訳、ありません…」

俯いて涙を流す少女を見る顔は変わらないけど、少し耳が赤くなっている。
まぁ殿下も男の子だし。解るけど。

今後の展開が怖い。

○　○　○　○

「ナマ王子様って初めてだね。想像と違ったけど」

まぁ少女漫画に出てくるような王子様はどこを探しても居ないでしょうね。

普通に学校行ったり酒呑んで騒いだりドラッグやったり不倫したり訴えられたりしたような王子様達が、向こうの世界には居たけど。

夢も希望もないですね！

王子様だって普通の人間ですもんね。さっきの人はちょっと解り難かったけど。

「何、王子様に見初められて逆ハーレム的な展開を狙ってたの？」

「みそめられ…？リョータって時々年寄りみたいな喋り方するよね。…そうじゃなくて、やっぱり興味あるじゃない。あの、獣人？とかもさ。どうなってるのかしらね」

姉は首を傾げて、「内臓とか骨とかね？」と続けました。気にならないことはないけど、これ以上夢を壊したくないのでそこはスルーです。

「オルガさん達は、どうなるのかな」

姉は窓辺に立って、外を見ながら呟きました。どんな顔をしているのか見えませんが、声は沈んでいるようです。

王子様が見舞いの為だけに来たとは思えませんから、今回の問題は僕達が思っているよりずっと大事なんでしょう。

ただ、それはあの3人に悪い方向に働く事では無いような気がします。だって王子が来たし。

「トモは、オルガさん達を許せない？」

僕は許す気は更々ありませんけど。

「ん～。やったことは許さないよ。気持ち悪かったし怖かったし。それと別に会ってたら、ライバル？全力で排除するけど。どっちにしても邪魔か」

段々言う事が怪しくなってきました。いつもながら正直者ですね！ボッシュさんに言えばいいのに。

「でも、まぁ、死刑とまではいかないよね。結局未遂だったし。…諦めてくれたら良いのに」

逆恨みを？ボッシュさん？どっちもですかね。
それに、これであの人達が死刑にでもなったら、きっと必要ないのに罪悪感を抱いてしまうでしょう。
口ではあんな事を言ってるけど、１００％向こうが悪くても、姉は自分も悪いと思ってしまう。

それは避けなきゃいけませんね。
こっちでも被害者の嘆願は有利になるんでしょうか？

何となくため息をついて、窓辺に並んで立っていると部屋の戸が叩かれました。

「入るぞ」

ボッシュさんが色んな物を抱えて入ってきました。匂いからして傷薬のようで、手当てに来てくれたみたいですね。

「王子様はなにやってるんですか？」

姉の問い掛けに、ちょっと顔をしかめました。なんだろう、ヤキモチですか？
ボッシュさんは無言で用意をして、無言で姉の包帯を外していきます。

じっと見つめる姉。
目を逸らして手を動かすボッシュさん。

この人達面白すぎです。笑いを堪えるのが苦しくて、僕はまた窓の外に注意を向けました。

「…あいつ等の刑は、多分すごく軽いものになる。獣人族への配慮と、オルガは情報を提供したから…」

深いため息の後、苦しげに言うのが聞こえたので、僕はまた後ろを向きました。珍しく不快感を表情に出して、姉の傷をぼんやりと見つめています。

「あぁ…そっか、まぁそうですね」

対して姉は軽く答えます。それにボッシュさんは驚いたみたいで、姉の肩に手を置いて言いました。

「お前…お前達がこんな目にあったんだぞ？いいのかそれで」

「元居た所でも、大した罪にならないし、情報と引き替えに刑を軽くするってやってたし。こっちは裁判って一方的でしょ…あんまり重い刑だとやだなってリョータと言ってた。ねぇ？」

こういう時に話を振らないで貰いたいですね。

ボッシュさんの目が、何かよく解らないものを見ちゃった、みたい

になって面白いですけど。

「あのですね、まだオルガさん子供だし？あの２人は僕達よりひどい怪我してましたし。未遂だったからあんまり重い罰を与えられても、こっちが後味悪いんですよね」

姉の怪我がもっとひどかったら話は別ですが！
ボッシュさんはまたため息をついて、姉の肩におでこをつけました。
まぁ、なんでか弱ってるから見逃してあげますよ。

「お前達はいつも自分を軽く見過ぎだ。俺は許せん」

ちょっと姉と顔を見合わせました。
本当に、このオッサンは。

にやにやしている姉と一緒に、ボッシュさんの頭を撫でてあげました。

「ボッシュさんはやっぱり優しいですね」

優しい人は、他人の痛みが解る人。他人の為に怒れる人。強いだけじゃないボッシュさんは、本当に格好良い大人です。

「ボッシュさん、私だってあの人達許す気は全く無いよ？刑を軽くするのはいいけど。出来るだけひどい目にあってから、地獄に堕ちればいいね。おっさんは特に、ボッシュさんに怪我させたし」

笑顔で恋人の頭を撫でながら毒をはく姉。
ボッシュさんに感心した後だと、鬼畜に思えますね！

○　○　○　○

私達の手当てをしに来たボッシュさんが、なぜだか元気がなかった。
というか、不機嫌だった。
それは、私達を襲った犯人の刑が軽くされるから。
この国の法律がどんなのかわからないし、前の例からも平等じゃないってことは知ってたから。
あの人達が貴族じゃないからあっさり殺されるんじゃないかと、ちょっと憂鬱になってて、逆に私は安心した。

逆恨みはきつい。
私の所為であの人達が死んだら、また別の人に恨まれて、同じ事が繰り返されるかもしれない。
罪を罰するのは当然な事だけど。

『ＳＴＯＰ　ＴＨＥ　ＢＬＯＯＤ　ＣＨＡＩＮ』

目には目を、よりこっちがいい。
心情的にはぜったい、許さないけどね！

「そうだ、ボッシュさんも手当てした方がいいんじゃない？」

なんか疲れたような顔してる。

「いや、手当てはまぁ……包帯だけ替えてくれるか」

遠慮しようとしたけど、私と弟がにじり寄ったので諦めた。よしよし。やっぱり弱ってると可愛くなる。
弟も珍しく他人の頭を撫でていたので、私の気持ちが解るのかもしれない。

可愛いよね？
弟が居なかったらもう、ぎゅーっとハグしまくりたいんだけど。
ん。
弟にボッシュさんの弱っている所を見せるべきじゃなかったかな。
まぁ、優しいから他人に言い触らすような事はしないだろうけど。

私と弟の事でこんなに頭を悩ます人は、今まで居なかったから、だからきっとこんなに嬉しいんだ。
心配されてる。多分、自分が思う以上に。

あ、あぁ愛されてると言うべきかっ？もしかして。

「トモ、なにぼへ～っとしてるの？手伝ってよ」

弟の冷静な声で我に返ると上半身裸のボッシュさんが不思議そうにこっちを見ていた。
うわ！
素敵な筋肉！
でもちょっと。

「古い傷もあるんだね。ひどい怪我したんだ」

弟が肩の包帯を解いてガーゼを外すと、まだ痛々しい傷が見えた。
こんな怪我なのにどうして平気な顔してるんだろ。

「薬はいいから、布替えてあててくれるか」

「…ボッシュさんもさぁ、同じだよ」

「ん？」

全然解ってない顔。さっきの、ボッシュさんの気持ちが解るような気がする。

「自分を大事にしろって。そんな治ってないんだから休んでよ」

私が言うと、ボッシュさんの後ろで弟もうんうんと頷く。

「あぁ、まぁ、痛みには鈍いんだ。それに俺は男で大人だからな、コレくらい何ともない」

それはつまりあんまり感じないだけで、大丈夫ってことではないじゃない。

「私も大人なんだけど。１８になったし」

私がぼそっと言うと、ボッシュさんが目を丸くした。

「誕生日が来たのか。いつだったんだ？１８で成人なのか？」

「お城で寝てる間ですよ。もしかしたらずれてるかもしれませんけど。僕達の州は１８で成人扱いで、飲酒年齢は２１だったかな」

「ふん、遅いんだな。この国では１６だ」

ちょっと早くないかな。
寿命が短いのか。むぅ。年が離れてると残り時間が少ない…？
食生活を改善して日本人並の長寿を目指せばいいか。

「じゃあ戻ったら、何か好きなものを贈ろう。考えておけ。リョータは？」

「僕は多分あと４０日くらい先に１５になると思います」

「まだそんなか。もっと上かと思えるな、お前は」

ほのぼのとした会話を聞きながら、私は色々考える。食堂のメニューも全面的に見直そう。カロリーを減らして、もっと野菜を食べさせるべきだね。
運動は足りてるから、医療が充実したらいいけどこればっかりはなぁ。

「じゃなくて！もう怪我しないでね！」

話がずれちゃってたよ。
肩の傷には弟によって綺麗に包帯が巻かれていた。器用な子。私には無理だ。

ボッシュさんはすぐに服を着てしまった。うん、寒いもんね。ザンネン。

ぼんやりしてたお返しに私が後片付けをしていると、またドアがノックされた。今度は誰だろう。アガサさんかな？

私が返事してドアを開けると、愛想の悪い王子様と目が合った。なんと言ったら良いか咄嗟に思いつかなくて固まっていると、王子様は無表情のままで口を開いた。

「……入っても？」

「あ、はい、どうぞ」

大きくドアを開いて立つと王子様が入って、後ろから来た近衛騎士の人がドアを閉めてくれた。

今度は何かな。

どこに居たらいいか迷ったから、ボッシュさんの傍に戻った。上座とか下座とかあるんだろうか？そもそも椅子がないから関係ないかも？

「ボッシュから聞いているかもしれないが、君達を襲撃した獣人達の処分は極めて軽いものとなる。正式には都へ護送後、裁定が下るわけだが…」

「別にいいですよ」

王子様は今まで会った人の中で一番話が難しい。
だから私は簡潔に答えた。簡潔すぎたみたいで今度は王子様が固まってしまったけど。そうすると、ちょっと表情が柔らかくなって子供っぽい。

「殿下、2人共状況を理解した上で、彼等に寛大な処置をと申し出ております」

ボッシュさんが説明をいれてくれたので、王子様はやっと解凍されて頷いた。
モノは言い様だね！

王子様は私達を、初めて真直ぐちゃんと見た。
何か言いたそうに口をちょっと開いたけど、またぎゅっと顎に力を入れて閉じてしまった。

「……良い心掛けだ。戻ったら陛下にお伝えしよう。それから…オルガから、君達に謝罪の言葉を預かっている。反省していると言っていた」

王子様はまた無表情に戻ってしまった。それはとっても不自然で、きっと王子様だからそれらしくなきゃいけないんだろうな。
ちょっと可哀相。

それより。

オルガが謝罪？今更何について謝るっていうの？
今イチあの子もよく解らないな。失敗して捕まったからする反省と謝罪なんて欲しくないけどな。それともボッシュさんにちょっかい掛けた事？世の中には取り返しのつかない事がいっぱいあるんだよね。

「ありがとうございます、殿下」

弟が私の腕を掴んで、当たり障りのない返事をした。正直に言うと、オルガには謝罪の言葉なんて突っ返したいんだけど。
愛想の無い王子様がわざわざ伝言してくれたから悪いかな、とも思う。

「次は無いって伝えてくれますか？」

だから、出来るだけ優しい笑顔で可愛く首を傾げてお願いしておいた。
あの家系はしつこそうだからね。私の幸せな将来の為にきっちり諦めてもらわないと。

何故か隣と後ろからため息が聞こえて、王子様と今度は近衛の人まで目を丸くした。

57話・振り回されて（後書き）

お久しぶりです。
復活しました。

オルガちゃんのラブ☆ビームは人生経験の少ない真面目王子には有効だったようです。

もうそろそろ、砦に帰る頃です。皆が首を長くして待ってますからねぇ。

では、今回も読んで下さってありがとうございます。
お暇な方は感想・一言でもお願いいたします。

番外編・女心と職人気質（前書き）

影の薄いアガサ姐さん

番外編・女心と職人気質

ああ、これは修理に出さなくちゃいけない。
父から贈られた弓――翼獣を仕留めきれなかったのが悔しい。弦が弛んできているのか、もしかして本体が寿命なのか。

時間ができたら武器屋に寄らせてもらわなきゃ。

廃城で同行する事になった親子と食事をしていて思ったけど、娘のほうがボッシュに気があるみたいだ。
彼はトモと相思相愛で、他は目に入らないって様子だけど。現に今も、具合を悪くしたトモの看病で宿に行っている――あの子は体が弱いからそれはもう心配だろうね。

この子がどのくらい本気か知らないけど、あんなに想い合ってる2人の仲を裂くような真似はして欲しくないな。マイヤーみたいに軽い気持ちでからかって遊ぶのもね！

後から合流したボッシュとトモも一緒に、おいしい食事を終えて。
宿に向かう途中にそれは起こってしまった。

トモの悲鳴。流れる血。

復讐だか何だか知らないけど、弱い存在を狙うだなんて反吐が出そうだ。

逆らえない子を道具に使うのも。許せない。

今回、あのオルガって子に同情してるのはアタシくらいかもしれない。

的外れな逆恨みの復讐は勿論とんでもない。ボッシュやマイヤーは、父親の言いなりで何も考えずに実行したオルガや、それを止めずに手を貸した獣人兄弟に怒りを募らせている。

でも、あの子には多分選択の余地が無かったんだ。貴族の庶子として、父親に逆らうなんて事は頭の隅にも浮かばなかったろう。それにきっと、ボッシュに惚れたのは演技もあったみたいだけど――半分以上は本気を感じたんだ。

だからまぁ、止めなかった獣人には文句を言ったんだけど、社会性の違いか、理解されなかった。

これぱっかりはどうしようもないね。

早く砦に帰りたいのに。

ボッシュは怪我しているし姉弟は王城での騒ぎから、まだ本調子ではない。

今回の襲撃で怪我をしてしまって、もっと悪い状況になってしまった。

トモは夜うなされるし、リョータは眠れないと言って一晩中宿をうろうろしていた。事件の所為で煩かったというのもあるだろうか。可哀相に。

「温泉にトモ達を連れて行くんだが、どうする？」

寝不足とその他諸々でひどい顔のボッシュが言った。こいつがこんな顔してたらトモが心配するだろうに。

「いや、アタシはちょっと武器屋に行かせてもらう。弓の調子が悪くてね。マイヤー誘えば？」

「いや、俺はいい。何で知らん野郎共と一緒に風呂入らなあかんねん」

丁度後ろを通りながら欠伸混じりに言うので、結局行くのはボッシュと姉弟ということになった。その方があの子達も寛げるだろう。

暫らくして砦からパイクとクルトが到着して、書類は彼らに任せた。

これでようやく、武器屋に行ける！

街の入り口に近い、一軒の武器屋。外から見た品揃えからは、かなりまともな部類に入るだろう。

「…いらっしゃい」

壁や棚に展示された武具類に目を奪われていると、低い声がかかった。

すらりとして背はアタシと同じくらい、だけどずっと細い。もしかして――。

「あなたが、店主？」

恐る恐る声を掛けると、微笑んで頷いた。

若い。パイクと同じくらいか、とても武器屋の主人には見えない、こんな優男。

「騎士さんですね、何をお探しですか？」

「あ、あぁ、違うんだ。弓の修理を頼めないかと思って…これを」

気を取り直して、弓を預けると、隅々まで、傾けたり引っ張ったりして調べ始めた。なぜだかそれが気恥ずかしい。

店主は柔らかそうな砂色の髪がちょっと寝癖で乱れていて、真剣に弓を見る目は明るい青色。
こんなに綺麗な顔の男にはケラーさん以外で初めて見たかもしれない。
は、見惚れている場合じゃない！

「ちょっと威力が落ちてきたような気がするんだ」

店主の顔から視線をずらして、彼の持つ弓を見ると、その状態を確かめる手は大きくて傷だらけ。働いてる手だ。

「そうですね、補強すれば問題ありませんよ」

何度か頷きながら言う店主と目が合った。その美しい青色に目が離せない。
青が一番好きな色なんだよねぇ、制服は緑だけど！

「……あの？」

「はっ、うん、頼むよ！ただ時間が無くてね。一時凌ぎでいいんだ」

アタシが慌てて答えると、店主の顔が不意に険しくなった。

「何を言うんです！貴女にとって武器は命を預ける大切なものでしょう?常に完璧な状態でないと、もしもの時どうするんです！」

うわ、怒られたっ！
しかも至近距離で。

綺麗な顔をあんまり近付けないで欲しい。腰が抜けそうだよ。
迫力に飲まれて後退りながら無言で首を縦に振ると、我に返った店主も一歩後退した。少し赤くなって、可愛い。

「し、失礼しました」

「イヤ、うん、心配してくれてありがとう」

こんな時うまく喋れないアタシは自分がイヤになる。ジルのように、皆から好かれる子が羨ましい。

「出来る限り急ぎますからどうぞ私に任せて下さい。代わりの弓も好きなのをお持ちになって下さい」

そんな真剣な目で言われると断れないよ。
見た目と違って頑固で融通が利かないみたいだけど、武器屋だからこれくらいでいいのかね。

「まだ何日かは居ると思うから、お願いするよ。アタシはアガサ」

またこの人に堂々と会えるわけだ。
久しぶりに心が踊る。

色んな話をして、彼に見送られて店を出たらもうすっかり日が暮れていた。あの3人も温泉から戻っているかもしれない。

「じゃあ、メルローズ、さん。お願いね」

ぎこちなくなった挨拶に、顔に血が昇るのを感じた。次にはもうちょっとまともな会話ができますように。

番外編・女心と職人気質（後書き）

意外に落ち着いて思慮深い一面もあるアガサさん。

見た目のイメージで頼りにされてるので、アネゴキャラを崩せなくなっているのです。

そういう事ってありますよね。

58・湯けむりに潜む影頑なな心を解すのは酒か温泉か小さな武器屋で見つけた

姉　アガサ視点

58・湯けむりに潜む影頑なな心を解すのは酒か温泉か小さな武器屋で見つけた

昨日は王子様と対面した。すごく真面目な子だった。
今日も朝から忙しそうに、お役人やパイクさん、マイヤーさん達と話して書類を作ったり、伝書鳩（推定）を飛ばしたりしている。

「お嬢さん、アダー先生が来ましたよ」

宿のオジサンが声を掛けてくれたので、弟とボッシュさんを呼んで診察してもらいに行く。
昨日、王子様に傷を医者に診てもらってないと知られて物凄く、怒られた。ボッシュさんも一緒に。
怒ってたけど、なんというかすごく心配してるのが伝わってきて嬉しかった。お城の人達は騎士が怪我して当たり前でしょ？みたいな反応だったけど。
この王子様は、騎士は宝だと言った。
言われた本人より、私と弟の方が喜んでたのは謎だったけどね。素直じゃないなあ。

「温泉には行ったかね？」

見た感じ、毎晩怪しい実験をして不気味に笑ってそうなお医者さんが、弟をみるなり言った。

「出来るだけ毎日行くといい。さ、診せなさい」

言うだけ言って、さっさと包帯を外しにかかる。マイペースだな、おじーさん！やっぱり触られるのは怖かったけど、ボッシュさんが弟に睨まれながら手を握っててくれたので、我慢できた。ドキドキして、首より手に集中したいたからだと思う。新たな発見。

私の傷は首の後ろだからいいんだけど、弟の顔に傷が残ったらイヤだな。でもお医者さんが言うには凹むような跡になるらしい。せっかく可愛いのに。

まぁ、実行犯はもっとひどい事になったわけだけど。

「今度はアガサさんも来るといいなぁ」

「誘ってみたら？トモが1人になるもんね」

弟の返事は微妙だ。小さい子供を心配するみたいな言い方をする。

「確かに。モップを連れて行くか？」

ボッシュさんまで・・・。

「アガサさん誘うよ」

この2人が一緒だと普段より過保護な気がする。足すじゃなくて、掛けるな感じで。

「と言う訳で、アガサさん一緒に温泉行こう」

クルトと一緒に休憩をしているアガサさんを見つけたので突撃した。お茶の入った木のカップを両手で抱えて、ぼんやり見つめている。私が話し掛けても反応しないので、隣のクルトを見る。

「なんか、変だよなぁ？」

隣にいるのにはっきり言うクルト。お兄さん、どつかれても知らないよ？

「トモ、どうしたんだい」

アガサさん、それはこっちの台詞だよ！

「ぼーっとしてたね、珍しい。温泉行くから、一緒に来てくれないかと思って誘いに来たの」

結局、行ってくれる事になったけど、なんかヘン。これは問い詰めなくては！
過労とか病気じゃなきゃいいけどな。

今日はまだ明るいうちに温泉に行く。すごい贅沢。だってまだ皆働いてる時間だよ？って言ったら、不思議な顔をされた。
療養目的だから、逆に昼間の方が多いらしい。

でもやっぱり女湯は空いていた。いるのはお年寄り。お湯の中で膝の曲げ伸ばしを一生懸命やっていた。

例の濡らすと泡立つ物質でやわやわと体を洗って、早速お湯に。
ふはーっ、とため息。
温泉最高！

「機嫌いいねぇ。傷にはしみないかい？」

隣に来たアガサさんが、腕を伸ばしつつ言う。
いつも束ねてるだけの髪をアップにしてて、それだけで全然雰囲気が違う。
しっかり筋肉がついた体は『健康美』と言う言葉がぴったりだ。だ

から余計に、元気の無さが気になる。
どう言うんだっけ、心ここにあらず？
うーむ。王子様に嫌味でも言われた？武器屋でぼられた？

「アガサさん、外も気持ちがいいよ？」

そうだね～と、やる気のない返事をしながらもちゃんと来てくれた。
やれやれ。

外は寒さで湯気が真っ白になってしまって、視界が悪い。霧の中みたいに、明るいのに見えないという不思議な空間ができていた。

「アガサさん元気ないけど何かあったの？」

「えっ？そんな事ないよ」

慌てて言うのが明らかにおかしい。もうちょっと突いてみようと思った時、湯気の向こうで何かが動いた。

白い何か。
まだ消えていない恐怖が蘇りかけて、温泉の中なのに鳥肌がたつ。

それはゆっくり近づいて来て、輪郭がはっきりしてきた。なんだろう、三角形？水面から上、三角の白っぽいもの。
カレンダーとかで見たことのない、床までの真っ白い毛の、小型犬。

チーズ…なんとかみたい。

いやいやいや、待て私！

水面からこれだけ出てたら超大型犬だよ！

逃げようとしたら足が滑って、後向きに水没した。

○　○　○　○

今日は姉弟とボッシュの湯治に付き合って、宿に近い施設に来ている。

なんだか気を遣われているようなんだけど、ぼんやりしてしまう。

気付くと考えているのはあの人の事。

どうしたものか、こんな事は初めてで戸惑って、でも同時に楽しくて嬉しいとも感じている。

「このお湯は傷に効くし、お肌も綺麗になるんだってアダー先生が言ってたよ」

まだまだ肌のことなんか気にしなくても大丈夫なトモが言う。

故郷にも温泉があったけど滅多にいけなくて、憧れていたらしい。

最近では一番の上機嫌で、見ていて思わず顔が綻ぶ。

それにしても。随分痩せている。一時期、ジルの努力で少し肉がつ

いてきたと安心していたのに、初めて会った時に戻ったか、それより細いかもしれない。血色も悪くて、いまにも消えて無くなりそうに儚い。

ボッシュが片時も目を離さなくなったのも頷ける。

怪我の事といい、戻ったらジルが怒りそう。姉弟揃って肉攻めだね。

トモに誘われて、屋根の無い所へ出てみた。施設の案内板では木々や花を設えた庭園が見渡せるらしいが、今はうっすら雪を被り、水面からの湯気で視界が悪くなっている。

顔は寒いけど、体は熱く暖められているので苦にならない。うん、温泉っていいものだ。

「こっち来た……うわっ」

ぼんやりしていると、いきなり立ち上がったトモが後退り、そのまま引っ繰り返った！

「ちょっ……何やってんのよ！」

湯に沈んだ体を慌てて引き上げると、可哀相にむせて縋りついて来て、震える手である方向を指し示した。

「小娘ぇ！温泉で暴れるでない！」

それは小さな老婆だった。長い白髪を垂らし、頭頂部だけを小さく結って飾りをつけている。

まだ咳き込んでいるトモは老婆に気付くと、擦れた声で謝った。

老婆はオノリアといって、この街の小間物屋の隠居だった。彼女の、街のことならなんでも知っている、と言う言葉に思わず反応してしまった。

「アガサさん、怪しい。なあに、何を聞くの」

なぜかオノリアに肩を揉まされながら、トモが首を傾げた。
ここは聞いておくべきだろうか?次に会う時に、話の種になってくれるかもしれない。でも、そうしたら私が気にしてるとこの老婆から広まって迷惑が・・・?

「あんた、まぁ飲んで」

オノリアから差し出されたものを、なにも考えずに飲んでしまってむせた。
かなり強い、酒だ!

「悩みがある時ゃ、温泉とこいつで大抵治るさ！」

勧められるまま飲んでしまい、なんだか気分が大きくなる。

「この街の…武器屋のメルローズさんって、奥さんはいらっしゃるんですか？」

勢いにまかせて聞くと、老婆はにやりと笑う。あ、前歯が1本ない。

「あの小僧かい？あいつは店か工房に籠もりっきりだからね、全く。あの顔は宝の持ち腐れだよ」

そうか、独り身なんだぁ。

「え、何、アガサさん。武器屋さん？」

トモが困惑顔で言ってくるけど、要領を得ない。

「すごくね、素敵だったんだ。仕事に真剣で」

「へぇ～そうだったんだ。よかった。ちょっと心配したんだよ？仲良くなれたらいいね！」

可愛らしく微笑んでくれるトモに、胸が熱くなる。
やっぱりこの子はいい子！

「お前さんもお飲み、ワシの特製果実酒」

あ、と思ったけど、遅かった。トモは素直に返事をして飲んでしまった。以前飲ませたものより、かなり強いんだけど。

後でボッシュに殺されるかもしれない。

腰砕けでふにゃふにゃになったトモの体を拭いて何とか服を着せて連れ出すと、案の定凄い目で睨まれた。リョータには何があったか問い詰められるし。

あんまり過保護な男は嫌だなぁ。

トモは猫のように目を細めて、ボッシュに擦り寄っていく。胸元を掴んで赤い顔で見上げて、可愛い。それを飼い主は怒っているのか照れているのか微妙な顔で両腕に抱き込んでなにやら言い聞かせている。

きっと弓はまだ出来てないだろうけど、時間が空いたら行ってみよう。オノリアから色々聞けたことだし。

58・湯けむりに潜む影頑なな心を解すのは酒か温泉か小さな武器屋で見つけた

題名に全てが記される

内容は薄かったですね…。

59話・まわる世界の中で（前書き）

ボッシュ　姉　視点です

59話・まわる世界の中で

王子に強く言われて、今日も温泉に行く事になった。傷ぐらい放っておけば治るんだが、トモ達はそういうわけにはいかない。
今度はアガサもいるから、安心していられるな。

そう思って、前よりかなりゆっくりして待合所に来てみれば、まだ2人は出ていなかった。

「今日は随分遅いな」

「女性は髪が長いし、支度に時間かかりますよ」

思わずこぼれた呟きにリョータがしたり顔で答え、膝の上のモップを撫でた。

しばらくそうして待っていたが、出てくる気配が無いので誰かに様子を見てきて貰おうか、と2人で話していると。

「遅くなった！ちょっと…色々ごめんよ」

途方に暮れたような、引きつった笑いを張りつかせたアガサが、ト

モを半ば抱えるようにしてやって来た。
一体、何が。

近寄ると、トモが腕を伸ばして擦り寄ってくる。
まさか、酒を飲んでいるのか？

「アガサさん、なんでトモが酔っ払ってるんです？」

リョータが目を吊り上げて問い質しているのが聞こえるが、こっちはそれどころではなかった。

前よりも酔いが回っているのか、ゆるんだ顔を俺の胸元につけ、しっかりと服を掴んでいる。目元まで赤く火照らせ、潤んだ目で見つめられ――これは何の拷問だ？
理性を掻き集め、咳払いをしてからトモの両肩に手を置くと、柔らかく暖かい猫はさらにうっとりと微笑んだ。

「トモ？どうして酒を飲んでるんだ？」

「お風呂に、チーズのおばあちゃんがいたの。あがしゃしゃんが武器屋の子とらぶらぶなんだって言ったらくれたの。おばあちゃんが作ったんだって～」

一応説明する気はあるらしいが、言ってることの半分も意味が解らん。

「人前で酒を飲むなって言っただろう？」

「飲んでないよ～」

ダメだ。色々と。

ふにゃふにゃ言いながら顔というか、体全体を押しつけてくるので、服の上からでも熱いくらいの体温が伝わってくる。

恐ろしく軽い体を抱き上げて、リョータ達を促した。これ以上他の男の目に曝してたまるか。

馬車に乗り込む頃には、トモは半分以上眠りかかっていた。このまま大人しく眠ってくれたらいいんだが。戻ればパイクはいいがマイヤーやらクルトがいるし、年頃の王子もいる。

こんなに無防備な状態のトモを奴らの前に出すわけにはいかない。

「トモ、このまま寝ろ。夕飯には起こしてやるから」

優しく撫でてやると、素直に頷いて目を閉じた。髪がまだ湿っているから拭いてやらないと風邪を引くかもしれない。

「い～ぃにおいする」

胸元でもごもごと、トモが呟くので思わずこちらも頬がゆるむ。
いい香りなのはそっちなんだが。

冷ややかなリョータの気配がなければもっと近くに抱き寄せて、色々堪能したいんだがな。

「トモは酒に弱いんだな」

「そうみたいですね。そんなトモは初めて見ました」

何故か不貞腐れたようにリョータは言って、デレが何とかと呟いた。
時々この姉弟は意味の解らない言葉を使う。故郷の言葉なんだろう。
ただ、今回は何となく意味を聞かないほうがいいような気がする。

○　○　○　○

お風呂でおばあさんに貰ったのを飲んでから、世界がブレて見える。

なんだか楽しいし。

アガサさんが体を拭いて、服まで着せてくれた。もぅ小さい子じゃないから自分で出来るのに。

待合室で立っているボッシュさんは、そこだけはっきり見えた。

砦にはでっかい人ばっかりだからあんまり思わなかったけど、今日は特に目立っているよ！周りの男の人とは格が違う格好良さ。

うん、やっぱ大好き。

逃げないように服を掴むと安心する。

ちょっと怒った顔はなんでかな？遅かったからかな？そんな顔も、心配顔も、優しい顔も見てて幸せ。

ひたすらくっつきたくて、胸元にふにふにする。

あったか～い。

アガサさんも、好きな人と上手く行けばいいな。

取り留めなく考えながらボッシュさんにしがみ付いていると、いつの間にか宿に戻っていたみたい。

「うわ、どしたんそれ。羨ましい」

「どうして温泉行って酔うんですか？」

「わ～かわ…いえ見てません！」

「ん～？」

聞き慣れた声に、目が開きそうになる。ご飯かな？もう夜？

「起こしたら気の毒だ」

静かな声がした。
誰だっけ?王子様かな。

声のした方に顔を向けようとすると、大きな暖かい手に頭を固定された。そのまま撫でてくれて気持ちがいい。

それから暫らくしてベッドに寝かされて、耳元で声がした。

「トモ?服を放してくれないか」

いやです。

もっと強くにぎにぎする。離れたら寒い。

「隣にどうぞ」

「……は?」

珍しくびっくりした声に、薄目で観察。

おぉっと、近い。

「しゃむいので、隣に来てくだしゃい。だいじょぶ、変な事はしないよ」

片方外して、ベッドをばしばし叩く。
それでも動かないので、ちょっと悲しくなってきた。

「嫌ならいいでしゅ。じゃあリョータか…クルト呼んでくだしゃい」

クルトはテンション高いからあったかそう。
諦めて服を放した途端、唸り声が聞こえて、がっしり手を掴まれた。

「ふぇ？」

半分も開かない目で見るとボッシュさんは真っ赤になっていた。
なんか怒ってるみたいだから、謝ったほうがいいのかも？

「ご…」

なんで怒ってちゅーするのか解らない。
でも嬉しいからまた目を閉じると、となりに大きな暖かい物体が来

て、ぎゅーっと抱き寄せられた。

「…隣にいるから、寝ろ。いいか、動くなよ?」

ボッシュさんに抱えられてると、保温状態がいい。
でも動くなって。
ちょっとだけもぞもぞして安定する位置に到着して、しっかり目を閉じた。

眠り込む寸前、ボッシュさんのため息と独り言が聞こえた。

59話・まわる世界の中で（後書き）

生殺し！

ちなみにトモちゃんは正気ではありません。

６０話・酒は飲んでも…（前書き）

弟　姉視点

６０話・酒は飲んでも…

酔っ払った姉を部屋に連れて行って、暫らくするとボッシュさんは降りてきました。僕の感覚だと、３０分くらいでしょうか？
当然、皆が興味津々の視線で出迎えます。

一応、アガサさんから説明は受けたんですけど。

でも、皆が何か言う前に、ボッシュさんはぐるりと見回して口を開きました。

「今後、トモに酒を飲ませた奴は息の根を止める」

ゆっくり、じっくり言い聞かせるような台詞が怖いですけど。
ていうか王子様も居るんですけど脅迫して大丈夫なんでしょうか？
見れば、びっくりして固まっています。あ～ぁ、後で怒られないかな？

その後は、ボッシュさんはため息をついてテーブルに突っ伏してしまい、マイヤーさんのおちょくりにも無反応でした。

僕はと言えば、ちゃんと部屋から出てきたことを安心する気持ちと、何だか気の毒に思う気持ちとで半々です。

酒を飲まさない、というのは激しく同意しますけど！

固まったままのボッシュさんをからかうのに飽きたマイヤーさんが席を立ったところで、皆がそれぞれの仕事へと戻りました。

僕はすることもないので離れて窓辺のベンチでモップと遊んでいると何となく視線を感じて、顔を上げると珍しく王子様と目が合いました。

「……それは、何という生きものだ？」

ちょっとだけ躊躇った後、席をたって僕の方へ来て、そう聞いてきました。

聞かれても解らないんだけど。この人は事情をどこまで知っているのか、聞いとけばよかったです。

「種類は知りません。パイクさんに頼まれて世話をしているんですよ。名前はモップとつけました」

当たり障りの無い返事をすると、王子様はちょっとびびりながら手を伸ばして、モップを指先でちょんと撫でました。

後ろで近衛の人が止めるかどうしようか無言の葛藤をするのが見えたので、取り敢えず無難な愛想笑いで不安を取りのぞきます。

大丈夫ですよ～。噛まないし毒もないし。ほわほわですよ～。

そう心を込めて笑顔を送っていると、王子様の呟きが聞こえました。

「なんだ、可愛いな」

今僕に犬耳があったなら、ぴこーん！と立っていたでしょう！

「解ってくれますか、この可愛さを！」

思わず王子様の手を取りたい気になりましたが、流石に自制しました。

「良かったら、抱っこしてみませんか？意外にあったかくて気持ちいいですよ」

王子様は頷いて、僕の隣に座るとそっとモップを受け取りました。
見た感じ爬虫類なのに、触ると体温が感じられて抱き心地がいいんですよ～。

それから暫らく、僕は夢中でパイクさんとの研究成果を語りました。
語っちゃいました。

気付くと王子様は無言で僕を見ていて、近衛の人は若干引き気味で

した。

「あの、すみません。僕ばっかり喋りまくって」

恥ずかしい！

「いや、興味深い話だ。私はあまり…同年代の友人がいないので、話せて嬉しいよ」

あんまり、普通の同年代の会話じゃないと思うんですけど！！

「騎士学校？では、ご学友がいらっしゃるんじゃないですか？」

「まだ入ったばかりだからな…」

そう言って苦笑する姿はやっぱり子供らしくなくて。王子様は大変そうです。怖い近衛の人がくっついてたら、ふざけるのも命懸けな気がしますねぇ。

「城で、何があったかは聞いているが……この国を嫌いにならないで欲しい。今回の事も。獣人の問題は難しいんだ」

真剣に、王子様は僕の目を見て言いました。

「問題の無い国なんて、ないですよ。僕の国だって問題だらけでした」

こんな事、なんの慰めにもならないけど、この人が罪悪感を覚えるのはなんか間違ってる気がしました。
苦労性とか器用貧乏などというあだ名がつきそうな王子様は。

モップを撫でて、今度は普通に笑いました。

何だか友情のようなものを感じて、僕は日本の城について語ったり、王子様は学校の授業や嫌な教官について愚痴をこぼしたりして、それは内容はともかく、僕が失っていた『日常』を感じさせるものでした。
放課後に、友達と話しているような。

「りょーたー」

時間を忘れて話していた僕達の所へ、よたよたと姉がやってきました。

顔に血の気がなく、非常に不機嫌な様子です。怖い。

「私、どうして寝てたの？あと、頭痛いし……気持ち悪い」

「二日酔いじゃないかな」

一晩経ってないですけど。

「なんで？」

きょとん、として言う姉は可愛いですけど。
覚えてないとは凶悪。
あれだけボッシュさんを苦悩させておいて。

「水を飲めばいいのではないか？」

王子様は心配そうに姉を見ています。その彼と僕を不思議そうに見て、首を傾げましたが、王子様がモップを抱いてるのに気付いて後退りました。

「類友…」

近衛の人に怒られるんじゃないかと思いましたが、意味が解らなかったみたいで無反応でした。よかった！

「ボッシュさんに謝っといた方がいいよ。連れて帰って介抱してくれたんだよ、酔っ払ったトモを」

「えぇっ？知らない。…そうなの？」

本気で驚いて目を丸くするトモに、王子様と近衛が重々しく頷きました。

往生際が悪く、覚えてないと呟きながらもボッシュさんが居るほうへふらふら歩いていく姉を見て、王子様が吹き出しました。

「私の姉とは随分違うな。面白い」

そりゃあ、お姫様とは違うでしょうよ。

「それに、あの騎士も。噂とは違っていた。お前達のお陰なのかな」

どんな噂なのか非常に気になるところですが。

クルト達若い騎士の態度から考えて、知らない方がいいような気がします。

それから僕達は、説教してるんだか、いちゃついてるんだか解らないバカップルを生暖かい目で観察しました。

○　○　○　○

目が覚めたら、猛烈に喉が渇いていた。張りついてる感じ？
ベッドから起き上がると、サイドボードに水差しとコップが置いてあったので有り難くいただく。

う～ん、今は朝？夜？この暗さは夜かなぁ。
私は温泉に行ったはずなんだけど、どうして寝てるんだろう。
それにこの気持ち悪さは？

客室から降りていくと、ベンチで仲良くお喋りしている弟とロタール王子が見えた。
いつの間に。

近づくと、皆から心配そうな微妙な顔をされた。

「私、どうして寝てたの？あと、頭痛いし……気持ち悪い」

聞いてみると、弟は生意気にもため息をついて、私が二日酔いだと言う。

しかも、酔っ払った挙げ句ボッシュさんに世話を焼かせたって？

真面目な顔でモップを撫でる王子様も、微妙な顔で私を見ている。

このコンビ、なんか嫌だわ。年下なのにおっさんくさい。

「…そうなの？」

念のため確認すると、王子様も、おつきの騎士も頷いた。

ええぇ。全然知らない。

あっちに居るよ、と言われてロビーの方へ行くと。

テーブルで寝てる？ボッシュさんを発見した。

「ボッシュさ…」

擦れた声で声を掛けると、すごい勢いで立ち上がる。

「トモ！起きたのか。ひどい顔色だな、大丈夫か？」

ホッペを触ったり、頭を撫でたりするボッシュさん。この慌て様は、

もしかしてひどい酔い方だったのだろうか？

まったく覚えてないけど！

「うん、ちょっと頭が痛くて、気持ち悪い…かな…」

「座ってろ。置いてた水は飲んだか？」

向かい合うように椅子に座らされて、背中をさすってくれる。
何だかその暖かさは記憶にあるような・・・？

首を傾げてぼーっとボッシュさんの顔を見ていると、また、大丈夫か聞かれた。

「私、どうして酔ってたのかな」

ボッシュさんがぴくり、として動きを止めた。
私の顔をまじまじと見つめるので、心の声が口から出ていたことに気が付いた。
なんかやばい？

「お前…トモ…まさか、覚えていないのか？」

地を這うような低い声に、状況を忘れてドキドキしてしまう。

「ボッシュさんが介抱してくれたんだよねっ？私、何か変な事したかな？」

ボッシュさんは口を何度かぱくぱくさせて、結局黙ってしまった。
それから私の肩を掴んで、がっくりと項垂れる。

どうしよう。
怒っているのか嘆いているのか解らない。
取り敢えず、目の前にある頭を撫でてみる。

「全部忘れるなら…」

ボッシュさんはそのままの姿勢でぼそっと呟いて、急に力を入れて私を抱き寄せた。

「襲っとけば、よかったな？」

耳元でさっきの声で言うから、ぶっ倒れそうになったよ！

「そそそれは、あの冗談だよねっ？」

もがきながら言うと、深い深いため息をついて、おでこをくっつけて来た。
うきゃー近すぎ！

「もう、絶対、人前で酒を飲むなよ？……まったく、いつもはこの距離でも嫌がるくせに…」

何だか色々ご不満ね？
でもガチで記憶にございません。

何言って何やったんだ私。

60話・酒は飲んでも…（後書き）

トモちゃんの酔っ払いぶりは、私の同性の友人を参考にしました。
まだあんまり仲がよくなってない頃、酒に酔って
「ねむーい」
などと言って擦り寄ってきて、喫茶店で居眠りなどして大変でした。
異性なら大変ですね！
後日まったく覚えてなかったので、一発どついとけば良かったと思ったものですよ。

そんな思い出から今回の話はできています。
忘年会シーズンですから気を付けましょう！
未成年は飲んじゃダメですよ！

番外編・ねらいうち（前書き）

アガサ姐さん頑張ってます

番外編・ねらいうち

あぁ怖かった。
ボッシュはトモの事となると、人が変わるような気がする。いや、あれが本性なのかも?思わず逃げ出してしまったけど、あの子は大丈夫だったろうか。
気の利かない男ばかりだけど、宿にはおかみさんも居たし、まぁ心配することもないか。

それより、この際だからちょっと武器屋を覗いてみよう。弓がどうなっているか気になるし。
顔も見たいし。

「こんにちは…」

緊張して、何だか細い声になってしまった。平常心平常心・・・。

「アガサさん!ようこそいらっしゃいました」

奥から、穏やかな顔のメルローズさんが出て来て、それだけなのに暖かい気持ちになる。

「や、やぁ。夜まで時間が空いてるから、作業はどうかな、と思って。邪魔しちゃったかな？」

「いえ、そんな事は。休憩しようとしていたんです。お茶でもいかがですか？」

もちろんご一緒します。
何だか緊張して言葉に詰まって、頷くことしか出来なかった。
せめて笑顔が引きつっていませんように。

店の奥は工房になっていてこちらの方が遥かに広かった。作業台には様々な工具や武器が置いてあって、勧められた椅子に座って見ているだけで楽しい。

「お待たせしました！すみません、ちらかっていて」

いい香りのするお茶を運んできたメルローズさんが、申し訳なさそうな顔になった。オノリアによると酒は全然飲まないらしい。

飲んだくれより、よっぽどいいじゃないか？

「こういう所は好きだから見られて嬉しい。砦にもあるんだけどね。あなただけでやってるの？」

「はい。この街は旅の途中で寄る方がほとんどですから、修理が主で、売れるのは料理用くらいなんです。私だけで間に合っちゃうんですよ」

困ったように眉を下げて苦笑する顔が可愛い。

さりげなく混ぜた『好き』には反応してくれなかったなぁ。どうしよう。

「このお茶、美味しい。上手に煎れるんだねぇ」

「ありがとうございます。独り身ですからね、なんでも自分でやるんですよ」

ご両親も早くに亡くして、ずっと独りなんだってね。この温厚な彼を見ているといいご両親だったんだろうと思われる。

「……寂しくない？」

思わず口をついて出て来てしまった言葉に、一瞬メルローズさんが驚いた顔をして、私を見た。

「店をしていると、色んな方がいらっしゃって退屈しないし、おせっかいな街の人も居るんですよ？」

謝ろうとした私を遮って、安心させるように、優しく笑ってくれた。

「温泉でオノリア婆さんが会ったって、言いに来たんです」

「……え？」

続けられた言葉に、お茶を吹き出しそうになった。

まさか、まさか。

「何か…言ってた？」

「は、はい。色々話をしたそうですね…」

オノリア！彼に何を言ったの！

何で目を逸らして赤くなってるのっ？

迷惑、だったんだろうか？

「なんか、ごめんね？勝手に」

単なる客が色々聞いてたらそりゃ嫌だろう。
あぁ。せめて修理代を割り増しで払おう。

「いえ、違うんです。アガサさんは……」

名前を呼ばれたので、沈んだ思考からふと浮上した。綺麗な青い目に、吸い込まれそうになる。

「私の事を聞かれたということは、私個人に、興味がお有りということでしょうか？」

赤い顔のまま、一気に喋ってアタシの顔を見た。

返事をしなくては、と思うけどいい言葉が思い付かない。仕方がない。

「勝手に、探るような真似をして申し訳ない。けど、アタシはメルローズさんの事が知りたかったの。本当にごめんなさい」

偽らずに白状したものの、怖くなって床に付いた自分の足を見つめることしか出来ない。

修理も断られたらどうしよう。自業自得だけど帰りが不安だ。

無言の時間がとても長く感じられて、流石にそっと顔をあげて彼を見ると、さっきよりも赤い顔――耳まで赤くなっていた。

すごく怒ってる？

苦情を申し立てられたら、今なら殿下がいらっしゃるから下手したら騎士団を解雇されるかもしれない。

「私は女性から好意を示されたことがなくて、うまく言えないんですが……お気持ちは大変嬉しいです」

ゆっくり言われた言葉に、耳を疑った。

好意を持たれた事がないというのは多分気付いてなかっただけだろう。

「どうして私なんかに興味があるんです？」

照れたように、不思議そうに聞かれて合点した。

顔が赤いのは怒ってるんじゃなくて、恥ずかしがってるんだ？

「そういう所。気取ってなくて、仕事に熱心で、初対面の客の心配してくれた」

ちゃんと言えたけど、顔が熱いので負けず劣らずの赤い顔になっているだろう。

アタシ達は暫らく赤い顔のまま無言で顔を見合わせていたけど、同時に吹き出して、緊張が解れた。

美味しいお茶をおかわりして、それから今度は色んな話をした。
ほとんどは弓の事だったけど。

青い目が好きだと、言ってみた。

アタシは砦切っての射手。狙った獲物は逃がさない！

番外編・ねらいうち（後書き）

アガサ番外編は完

61・レベル1で倒せたはず（前書き）

姉　弟視点です

61・レベル1で倒せたはず

ほどよく積もった雪が、明かりに照らされてぼんやり光って見える。
ちょっとだけ、気味が悪いと思ったのは秘密。

馬車の車輪？や内装を冬用に変える作業の音と、声――主にクルトの悲鳴――が聞こえてきて、皆が笑う。

ちょっと離れたら、きょろきょろしている近衛の人にぶつかりそうになった。
この人が1人でいる所を初めて見たような気がする。

「失礼！殿下を見かけなかったか？」

ぶつかる寸前肩をつかんで勢いを殺して、そのままの姿勢で問い掛けられた。
王子様、迷子か。

「いーえ。会ってませんけど。裏にも来てなかったですよ？」

クルトとパイクさんとボッシュさんとお役人だった。宿にはマイヤーさんと他の騎士が居るはずだけど、王子様が近付くとは思えないなぁ。

残るは。

「弟がいないから、一緒にどこかで遊んでるんじゃないですか？」

心当たりを教えてあげたのに、近衛さんは絶句して間抜け面で私を見た。口を半開きにするとイケメン台無し。女の子だと可愛いのにネ！

「一緒に探してくれ……」

ため息混じりに言われたので、了解してあげた。よく考えたら、四六時中付きっきりでガキのお守りは大変だろうな。逆に王子様も、息が詰まって逃げ出したくなるだろうし。

気の毒～。

近衛の人は、宿の周りをぐるっと回って、何となく近くの細い道、というか建物の隙間を覗き込んでいた。猫じゃないんだから、店とか街中を見たらいいんじゃないだろうか？

私の不審な視線を感じたのか、肩をすくめた。

「こういう時は、狭いところに隠れる事が多いんだ」

慣れてるなぁ。というか、あの真面目そうな王子様は脱走癖がある

のか？ちょっと意外だ。

この機会に、近衛の人をじっくり観察する。
身長は多分１８０以上で、ボッシュさんよりは少し低いかな。短めの髪は焦茶で癖があって、のばしたらもじゃもじゃになりそう。
しっかりした眉は上がり気味で、表情の変わらない灰色の目と合わさってちょっと怖そう。爪の飛び出るミュータント役の俳優に似たワイルドなイケメンだな。この国でもてる系だ。

しばらくうろうろしてても見つからなくて、近衛さんの眉間には山脈のような皺が寄ってきた。
きっと王子様は見つかったら物凄く怒られるに違いない。ふふ、叱られる王子様なんて滅多に見られるもんじゃないよね。

口元がにやけたのを見られないように、顔を反対側に向けたら見慣れた後ろ姿が目に入った。
見つけちゃったよ！

近衛の人の袖を引っ張って合図すると、鼻息荒くずんずんと進んでいった。
頑張れ、名前知らないけどさ。

○　○　○　○

今日は、出発も近いので馬車を整備したり増えてしまった荷物を詰

めたりと朝から大忙しです。

馬車の整備は珍しいので、姉は寒い中面白そうに見ていました。見ているのはもしかしたらやる気なさそうにクルトに指示をしているボッシュさん限定かもしれませんが。

僕も近くへ見に行こうとしてコートなどを着込んでいると、窓越しに歩くロタール殿下が見えました。
こっそり、１人で。

何故だか、面白くなるという予感が止められません。ここは尾行してみるべきでしょう・・・！

「身を低くしろ」

こっそり尾行をする筈が、新雪を踏みしめる音であっさりばれてしまいました。王子様は物凄く不本意そうでしたが、『散歩』に同行する事を許可してくれたので遠慮なく観察できます。

さっきは窓から見えていたので、宿の室内から見えないように、身を潜めてそっと進みます。
あ、これがＳＮＥＡＫＩＮＧというやつですかね。何だか楽しいです。

でも、隠れて散歩は無いですよね。抜け出してどこかに用事でもあるんでしょうか？

「どこに行くんですか？」

「歩くだけだ」

ええぇ～？
ほんとに散歩だけ？

僕の心の声が聞こえるわけはないんですが、王子様の目は『なんか文句あんのかゴラァ』と語っていましたので、そっと目線を外しました。きっと来てから続く激務で気が立っているんでしょう！

ただの散歩なら、こんなに寒い中出て来なかったのになぁ。後の祭りですね。

「おい」

しかし微妙に帰り道が解らないという情けなさ。どうして変な小道ばっかり入るんでしょうか？人気の無い死角の多い細道は行ってはいけないと習ったんですけどね・・・。

「おい、止まれ」

呼び止められて僕が振り返ると、立ち止まっていた王子様が地面を睨んでいるような、険しい表情をしています。
もしかして、道間違えた？

僕が戻ると、やっぱり地面を見ながらそこを指差しています。
変な奴、と思いつつ指の先を辿ってみれば、そこには何かがありました。
または、居ました、と言うべきでしょうか？

大きな葛餅だ、と思いました。背筋がぞっとします。アレ系は駄目なんです、飲み込めないんです！
ぷるぷるっとして、やたら弾力があって・・・？

あれ、ぷるぷるっと動いてますよ？

「…ちょ、あれ、王子！動いてますよ？何ですかあれはっ」

「何だろうな？私も初めて見た」

うわぁやたら冷静なのがむかつく！

「自分とこの国民…？でしょうが、このナマモノっ」

「それはそうだな。不勉強だった、すまない」

もうこの王子を囮にして逃げましょうか？

「見つけましたよ」

恐慌の余りちょっと危険な発想にとりつかれた時、後ろから聞き覚えの無い声がしました。

振り向くと派手なシマシマが目に入って、ほっとします。
そこには王子を探しに来たらしい近衛騎士と、何故かにやにやしている姉がいました。

「コレを知っているか」

王子様は慣れているみたいで、お小言を貰う前に質問して機先を制しました。近衛騎士は殿下のご下問を後回しにするような人ではなかったようで、コレ、を確認しに来ました。

「なぁに、スライム？」

明らかに騎士を盾にしながら見に来た姉が呟きます。

「何でしょうか、初めて見ましたが…」

スライムでも流動体生物でも餅でも何でもいいですから帰りたいで

す。
さっきより近付いてきているような気がしなくもないですし。

「ぶよぶよねぇ…どこが前だろ」

フサフサが駄目でツルツルが平気な姉は王子と一緒になってそいつを突き回しています。冷静に見るとかなり大きい事が解ります。６０×４０×３０くらいでしょうか、うわぁ気持ち悪い。

「えい！」

気付いた時にはもう遅く、姉がどこからか拾ってきた木の枝を、思いっきり突き立てていました。

「おい、あまり乱暴は…」

「見てたなら止めて下さいよぉっ！」

思わず王子様に突っ込んでしまって、近衛騎士に怒られるかとヒヤっとしたけどそれどころじゃありませんでした。

一撃を食らったソレは、ぷるぷるより更に激しく震え始め、明らかに危険。感情があるなら、怒り狂っている、と見た人皆が思うでしょう。

「「うはぁ…」」

震えていたソレは一気に伸び上がって、僕達の頭上より遥か高くまで形を変え、津波のように、並んで立っていた姉と王子に襲い掛かりました。

びたっというかびちょっというか、とにかく不快な音が響いたのは何もない地面の上。

間一髪、近衛騎士に抱えられて2人は無事で、そのまま離れて行きます。

あれ？

「あのぉ…」

「下ろせ、自分で歩く」

騎士は王子様だけ下ろして姉は抱え直しました。

「あなたはじっとしていてくれ」

気持ちは解りますけど。
退治しなくていいんでしょうか？

「あのぉ…」

再び僕が声を掛けると、騎士はきっぱり言いました。

「私の任務は殿下の警護。あれは緊急性はないようだから、後からでも間に合うだろう」

少し不貞腐れたような顔の王子様は、部屋で待っているように言われて素直に引っ込み、近衛騎士は相変わらず姉を抱えたまま移動しました。

「何やってるんだ？」

「この人から目を離さないでいただきたい」

探していたのは保護者でしたか。

驚いて反応に困っているボッシュさんに姉を押しつけると、ほっとした顔になって、今度はクルトやマイヤーさんにさっきの事を説明しはじめました。

「何やってたんだ?」

事情の解らないボッシュさんは、姉を持ち上げて目線を合わせて聞いています。流石、隠れマッチョ。

「一緒に、逃げた王子様を探してあげたの!そこで変な生きものを見つけて、いじってただけ」

結果を省いて報告するのはどうかと思うけど。
まぁ、ボッシュさんはそれより近衛騎士が姉を抱き抱えてたのが引っ掛かるみたいで、あの人が触っていたお腹周りを不満そうに撫でてます。
なんだか馬鹿らしい。

目を逸らすと、クルト達がなぜか嬉しそうに、剣や松明やらを持って出て行くところでした。
正体不明の軟体生物は、あの怖いお兄さんたちに狩られるのでしょう。

どうか恨まないで下さい。一生、ぷるぷるしたものはたべません。

61・レベル1で倒せたはず（後書き）

葛餅の量り売りは、ちょっとグロかったです。

たらいにみっしり詰まって黄粉をまとった姿は、何かの生物のようでした。

まぁ私は好きなんですが。

62話・さぁ帰ろう（前書き）

弟　姉視点です

62話・さぁ帰ろう

弾力のある未知との遭遇の後、王子様は近衛騎士にがっつりお説教を食らっていました。
僕は心の底から怖い思いをしました。お陰でぷるぷるしたものに囲まれて逃げ場が無いという悪夢を見ました。

誰かさんだけ、楽しい思いをしたのは気のせいでしょうか？

服従から点々をとったら復讐になるんですよ・・・。

それはそうと、今日は砦に帰る日です。出発は昼前、暖かくなってからですが。

早く目が覚めてしまった僕は荷造りもさっさと終えて仕込みも完璧。
清々しい気分で、朝食をいただいています。
宿のおじさんが出してくれる不思議に甘いホットミルクも今日でお別れだと思うと、感慨深いですね。

テーブルに着いているのはクルトとパイクさん、ボッシュさん。マイヤーさんはぎりぎりまで起きてこないし、王子様は部屋で食事です。アガサさんと姉はまだ寝ているか、身仕度中でしょうかね。

多分、そろそろ。

二階で大きな声と音がしたかと思うと、すごい勢いで誰かが階段を駆けおりて来ました。

「こ、これっ、こいつが寝てたっ私のベッドに！」

じたばた藻掻くモップを鷲掴みにして、こちらに突き出したのは怒り狂った姉。

クルトはお茶を吹き出し、パイクさんはパンを喉に詰めて咳き込み、ボッシュさんは石になりました。

寝起き姿のままで、ちょっと刺激が強すぎたでしょうか。

この国は寝るときの格好が適当で、だいたい男性はジャージみたいな簡単な上下で、女性はシャツワンピースのようなゆったりしたものを着ています。

お城では流石にちゃんとしてて姉は普段着にしたいと言って周りを困らせていましたが。

今、姉が着ているのは砦から持って来ていたジルさんのお下がり。

微妙にサイズが合っていないので、長さは膝までで、首周りが大きいらしくて半分肩が出ています。

「おはよう、トモ。寒くないの？」

姉は僕を睨むと、裸足で何度か足踏みをしました。

「足が冷たいよっ。そうじゃなくて、あんたでしょ、これ、仕込んだわね？」

ぺちぺちと足を鳴らしながら、手に持ったモップを上下に振ります。あぁごめんね。頼んで協力してもらったけど、姉は意外に怪力なのを忘れていました。

「居ないから探してたんだよ、本当に。寒いから、暖かいところに逃げ込んでたんだね！ありがとうね、トモ」

にこにこして言うと、怒るに怒れないという表情になった姉はモップを振るのを止めました。そのすきに、いち早く立ち直っていたパイクさんが救出します。

「トモ！もう、こんな格好で男どもの前に出るんじゃないよ！」

ようやく部屋からアガサさんが追い掛けてきて、持って来た毛布で後ろから包み込みました。逃げた猫を捕獲する図みたいです。

「あのぉ、着替えて来たほうがいいんじゃ…」

赤い顔のクルトが、顔ごと逸らしたまま遠慮がちに言いましたが、いつもと違って消え入りそうな声です。

「何の騒ぎだ……うわっ」

別室の王子様と近衛騎士までやって来ましたが、多分見る前に、騎士が目を塞ぎました。警護は完璧です。変態を見たかのような反応なのが気になりますけど。

姉は毛布に包まれて回収されていきました。アガサさんも力持ち。
それにしても。
下着姿で出て来たわけでもないのに、なんでこんなに過敏に反応するんでしょうかね?
クルトなんかだったら照れるより冷やかすかと予想してたんですが。
まぁパイクさんは予想通り、姉よりモップに釘づけでした!

「ちょっと大げさじゃないですか?」

「おま…だってな、あんな首とか足とか…」

クルトが真っ赤になって言うのを聞いていると、いきなり頭を鷲掴みにされました！

「うぎゃ、痛い痛い！割れる、傷が開くっ」

「首とか足とか何だって」

あぁ、平和なトリップだと思ったのに、魔王はここにいました。

「見てません、なんにも見てませんっ」

僕とクルトの頭を、ギリギリと握り潰す勢いで嫉妬深い魔王は絞め、それは見兼ねた王子様と近衛騎士に止められるまで続きました。

○　○　○　○

今日の目覚めは最悪。
この世界での初めての朝を思い出す。

顔の辺りでもふっとしてくすぐったくて、自分のくしゃみで頭がはっきりした。目を開けると視界が黄色でいっぱいになってて、これはまだ夢なのかと思った。

それが動いて、ぎざぎざの牙を見せ付けながら欠伸をするまでは。

多分、ぎゃーとかぎえーとか、実に女らしくない悲鳴をあげたと思う。
起き上がって立ちくらんで真っ白になりつつ、モップを捕まえて下の食堂へ駆け降りた。飼い主の責任を追求するために。

なんか弟に言い包められたような気がするけど、裸足だったし寒くてたまらないことに気付いて、アガサさんに部屋に戻されて。

着替えている間中、説教された。

「結婚前の娘が、みだりに肌を見せるんじゃないよ、まったく！ああいうのは大事な人の前だけでいいの」

そういえばボッシュさんもそんな事を言っていたような？でもこれは別にスケスケネグリジェでもないし、膝丈でたいして足も見えな

いと思うけど。
着替え終わって、改めて体にあてて考えているとアガサさんに横から奪われた。綺麗に畳んで荷物に詰めながら、片手で右肩を突く。

「こっちの肩が全部出てたの」

あ～それはちょっと色っぽいかも？

「…ボッシュさんどんな顔してた？」

その他大勢はいいんだけど反応知りたい人は決まっているとも！アガサさんの言う通り、大事な人だけ。

「怖くて見てない」

姐さんは案外ボッシュさんには遠慮するよね。

細々したモノを全部荷造りして、忘れ物が無いか確認した。予定外に長く泊まったこのお宿は、とても居心地がよかった。
色々あって、店的には大変だっただろうけど。怪我した囚人を預かったり、王子様がいきなり来たり。

ちょっと思い出にひたってから、朝ご飯を食べに行った。今日はいつもより食欲があるぞ。最後くらいは残さず食べよう。

食堂にはマイヤーさんしか居なかった。
あれ？
さっきのは夢だったんだろうか。

「おはよう～今日も可愛いなぁ」

ちょっとおっさんくさい、マイヤーさん。
3人で並んで、しっかり食べた。甘いフルーツ牛乳ともお別れ。牛じゃないみたいだけど。

「リョータとクルトは、世話になった礼に宿の周りを掃除するんやって。若いやつは偉いなぁ」

おっさん以下略。

「殿下も、もう戻られるんでしょうかね」

ちょっと浮かない顔のアガサさん。

「あぁ、護送馬車の警備実習も兼ねてなぁ。あっちのが先に発つらしいで」

大変だな、王子。
ちょっと弟と仲良く？なってきたのにザンネン。
お見送りはちゃんとしなきゃね。

お見送りは、また皆で。お出迎えの時よりずっと柔らかい雰囲気だった。
護送車に乗り込む3人は、なぜか堂々としていてちょっとむかついたけど、すごくらしいと思った。
オルガさんはもうボッシュさんを見なくて、こっちの方に曖昧に会釈して、どちらかというと王子様ばっかり見ていた。あれあれ？

王子様は皆それぞれに声を掛けて、弟とは文通するらしい。携帯あれば簡単なのにね。
私には「あなたはもう少し女性らしく落ち着かれたほうがよい。周りの身がもたない」と言って、後ろの騎士もわざとらしく何度も頷いた。嫌味な奴だ。

彼らが出発してから、アガサさんの落ち着きが更になくなってきた。
お別れだもんね～。

「アガサさん、お客さんですよ」

パイクさんの呼ぶ声に、姐さんは飛び上がるようにして入り口へ向かった。

「もしかして～」

「男か？」

こっそり窓から見ようとすると、マイヤーさんが寄って来て、気配に気付くと全員後ろに居るし。

「アガサさんいつの間に」

クルトの台詞が、全員の気持ちを代弁してると思う。
窓からはアガサさんは後ろ姿だけど、例の武器屋さんはしっかり見えた。
うわ、アイドル系イケメンだ。アガサさんたら。
2人共もじもじどきどきしてる感じで、見てるほうも恥ずかしい。

他の皆もそう思ったみたいで、なんとなく窓から離れた。
アガサさんが幸せそうな顔で弓を抱えて入ってきたのを生暖かい視線で迎えて、あのマイヤーさんでさえからかわなかった。

やっと、今度こそ、ついに砦に『帰る』。
帰りの馬車は、パイクさんの強い勧めでボッシュさんも中で一緒。
上手なマイヤーさんが運転?することになった。

「帰ったら驚くよ～」
「イアン達が待ち構えてるからな!」

パイクさんとクルトが、顔を見合わせて笑った。
あんまりいい想像ができないんだけどな、あのお兄さん達だと。

それなりに期待に胸を膨らませて、馬車に揺られていると眠くなってくる。
弟は、最初から寝不足だと言ってモップを抱いて寝てしまった。頭ぶつけても起きないから、熟睡してるらしい。器用な子。

「トモのお仕置きがまだだったな」

うとうとしていると、頭を撫でながらボッシュさんがぼそっと呟いた。

なんで、お仕置きするのですか？

聞こうとしたら、口を塞がれた。

・・・・

死ぬ死ぬ死ぬっ！！

ギブです、3回叩いても通じないしっ！

気が遠くなったらやっと離れてくれた・・・。

「あんな格好を他の男に見せるなんて…」

やっぱそれか！

夢じゃなかったんだね！

ぺろりと舌で唇を舐めるのがやたらセクシーで、そう言えば顔とか首とか舐められた事を思い出す。
鼻血出そう。
なんかもうくたくたになったので、私はそのままボッシュさんにもたれて丸くなった。
膝を借りてこのまま寝てしまおう。
砦に着く頃には恥ずかしさも消えるはず。煩悩退散。

「おやすみ、トモ」

優しく撫でてくれる手のひらが嬉しくて、落ちないように支えてくれてる腕に安心して、目を閉じた。

62話・さぁ帰ろう（後書き）

次でやっと帰還です。

年内は切りがよいのでそこで終わりにしようと思います。

63話・おかえり、こどもたち（前書き）

弟　姉視点です

63話・おかえり、こどもたち

目が覚めるとまだ馬車の中で、外はすっかり暗くなっていました。光源が馬車の外に付けられているランプだけなので室内はぼんやり人の顔が見える程度。表情までは解りません。

どうやら、姉は座席の上で丸くなって、隣のボッシュさんの膝枕で眠っているようです。電車の座席より狭いのに、器用ですね。まぁ落ちないように腰に回している誰かさんの手のお陰かもしれませんけど。

砦に辿り着く前に、僕は顔の包帯を外しておきます。包帯って、必要以上に心配されそうでイヤなんですよね。どんだけ鈍臭い姉弟かと思われるのも癪だし。

「まだ覆っといたほうがいいんじゃないか」

寝てると思っていた人に、突然話し掛けられて飛び上がりそうになりました。
声は出さなかったはず。

「痛みはないのか？」

「これ巻いてると顔が痒くなるんですよ。それに、僕だって男ですから、これくらい」

当然こんな世界に、お肌に優しい伸縮性包帯があるわけもないのです。

いつかの誰かさんの台詞を真似ると、軽く吹き出す音が聞こえました。思い出し笑い？何でしょうか。

待っていても、特に何も言わないので流すことにします。

ボッシュさんは膝の上にある姉の頭を、ゆっくり撫でていて、その様子は。

恋人同士というより、猫と飼い主のようで、ほのぼのして見えます。

それもべたべたに甘くて「うちのこが1番！」という種類の。

あんまり見るのも悪いような気がして、曇って見えにくい窓を擦って目を凝らすと、見覚えのあるような、無いような。

「もうすぐだ」

僕と同じように外を見たらしく、ボッシュさんが言いました。その声は珍しく、ほっと安心したような響きで、この人も怪我人だし、疲れてたんだな、と思わされました。

実家よりも何もない砦のほうが安心するってちょっとどうかと思いますけど。

「トモ？そろそろ起きられるか？」

優しく姉の名を呼びながら背中を叩くボッシュさん。欝陶しそうに唸って、さらに丸くなっていく姉。本人に言うと怒るけど、やっぱり猫みたいです。
何度かめげずに声を掛けていると、やっと体を起こした姉。なぜか座席に正座して、ぼーっとボッシュさんを見つめています。

「水飲むか？」

皮の水筒を渡して、姉の乱れた髪を整えて、甲斐甲斐しく世話を焼くその姿は、あんまり後輩達に見せない方が良さそうです。
チョコレートより甘い溺愛っぷりに、大混乱が起きる気がしますよ。

○
○
○
○

寒くて退屈な馬車の旅だけど、今回は違った。
まぁ、ずっと寝てただけなんだけど。

眠る前に、ナニか、恥ずかしい事があったような気がするけど。

目が覚めた時はもう日が暮れていて、馬車の中も暗かった。ぼんやり窓の外から入る光に照らされたボッシュさんは、何と言うんだろう、すごく綺麗だった。ずっと見ていたい感じ。
夢かなぁ、と思ってると動きだして、水くれたから自分が起きてると解った。
髪を撫でてくれて、最後にやっぱりちょっと引っ張った。

「あ、明かりが多い」

うっとりしてると、弟が窓の外を指して言うので中断して私も見る。
砦の正面出入口、いつもは必要最低限の明かりしかつけていないのに、今日はとっても明るい。

帰る家に明かりが灯っている安心。
まぁ、なんというか、明かりというか、油を染み込ませた木が燃えてるわけなんだけど。

「かっせん…」

弟から不思議な呟きが聞こえたけど、よく意味が解らないのでそっとしておこうと思う。

大門をくぐると、馬車が停まる前からもう人が寄って来て、先に馬で着いてたアガサさん達と話すのが聞こえてきた。

テンション高いね、ジルさん。雪が降ってこんなに寒い夜に、待っ

ててくれたんだ。

寝起きで動きづらいけど、早く顔が見たくて気が急いた。

「あ、こら！」

思い切り扉を開けて、その勢いで飛び降りる。

後ろからボッシュさん達の慌てる声がしたけど、ほとんど停まってたので転びもしなかった。うん、2階から飛び降りたこともあったし、全然平気。

少し離れた所できゃあきゃあ喜んでいるジルさん達を発見して、私は走る。

にこにこして幸せそうなパイクさんもいるし、クルトを出迎えにセオも来て頭をくっつけて話している。

「ジルさん！」

私が呼ぶと、満面の笑顔でぶんぶん両手を振って、答えてくれた。

子供みてぇ。ジルさん可愛い。

「おっかえりー！……痩せたわねっちゃんと食べてたの？」

抱き締められて、第一声がそれって。

ジルさんはそのまま、背中とか腰辺りをさわさわしている。
なんかこれって、家畜の肉付きをチェックしてるおじさんの手つきに似てるんだけど。
それから私の首の包帯に目を止めて、触る寸前まで手を伸ばして、泣き笑いの顔になった。
おっと。

「これ、大袈裟だけど心配しなくていいから」

私は慌てて言ったけど、ジルさんの目にはみるみるうちに涙が溜まって、瞬きすると雫が跳ねた。

「トモ、リョータ」

ジルさんが何か言おうとした時、好き勝手に喋ってる皆の声を抜けて、低い渋い声が聞こえてきた。
大声を出したわけではないのに響いて、皆は口を閉じてその人を迎える。

ラーソン隊長。

群れを率いるライオンのように、どこからどう見ても強そう。ボッシュさんでさえ、横に並ぶとひょろく見える。ボッシュさんはあれかな、ジャガーかな。

ちょっとアホなことを考えていると、呼ばれた弟が隣に来て、隊長

は私達の前に軽くしゃがんだ。
グローブみたいな手を伸ばして、私の首と弟の顔をそっと撫でる。
あ、嫌じゃないや。ぞわぞわしない。

「よく戻った。おかえり、こどもたち」

ゆっくり、一言ずつ言われて、思わず目を見開く。
弟が息をのんだ音が聞こえた。

仕事で長期間家を空けることが多かった父上は、休みの日は朝から私達の相手をしてくれた。学校のある日でも、ただいまを言うのがいつもより嬉しかった。

『おかえり、こどもたち』

普段は恥ずかしくて一緒に下校なんてしないけど、駅で待ち合わせてまで揃って帰っていた。

こんな所で。
こんな訳のわからない世界で、同じ言葉で迎えて貰えるなんて、思わなかった。

「ただいま帰りました」

喋ると泣きそうだったから衝動のままにしっかりした首に抱きつい

て、何とかそれだけは言えた！ラーソンパパは頷くと、優しく背中を叩いてくれる。それから私達の頭をがしがし撫でてから、立ち上がった。

「冷えてしまったな、部屋に戻れ。……イアン、パイク」

む？なぜその2人を呼ぶのかな？

隊長が呼ぶと、さっきまでは居なかったイアンが走ってきて、パイクさんもジルさんから名残惜しそうに離れた。

それを見た隊長は、私達の後ろにいるボッシュさん達に「報告」とだけ声を掛けて、砦内に戻って行ってしまった。

ボッシュさんとマイヤーさん、アガサさんはそれぞれ私達に声を掛けて着いて行ってしまった。ボッシュさんはおまけでほっぺを触って、髪を引っ張ってからだったけど。おとうさんへのハグですよ？

「荷物を運ぶよ」

パイクさんが言うと3人組が馬車に飛び付いて私と弟の荷物を外してくれる。

それから部屋まで、主にクルトが王子様の話をしていた。

「第2王子見たんだけど、ちょっと副隊長っぽかった！リョータと仲良かったよな」

「「すげー！」」

相変わらず軽い。このノリはほっとするよ。

部屋に着くとパイクさんが戸を開けてくれて、中に入ると違和感を感じた。相変わらずもふもふしているロボが真ん中に居座っているのはいいとして。

「ベッドがいっこ無い？」

そして本棚が増えている。弟と顔を見合わせて、パイクさんに視線を移す。

にっこりと爽やかな笑顔で見返して、パイクさんは言った。

「今日からここはリョータの部屋だよ」

もうちょっと説明を聞こうと思ったら、弟の荷物を置いたイアンに腕を引っ張られた。

「はいはい、じゃあ次！」

何故かイアンと腕を組んで廊下を歩いて、2階に上がった。

「ここは隣が文官のおばさんで、反対が外騎士のお姉さん」

その紹介は本人が聞いたら怒ると思う。

戸を開けて私を部屋に入れたイアンは、誉められるのを待つ犬みたいな目で私をじっと見ている。

私の部屋は、暖色系でまとめられている。カーテンのワインレッドが特に綺麗で気に入った。

置いてある椅子なんかも、背もたれに模様を掘ってあって、全体的に女の子らしくて可愛い。

「トモが履いてた靴、こんな色だったろ」

「椅子はイアンが造ったんだぜ」

「すごいですよ、イアン！売り物みたい」

見に来ていた弟も、興奮して色々見て回っている。小さな机には、この世界では高級品の手鏡もあった。

私はなんかもうさっきから涙腺がゆるくて、鼻水まで出そうだった。

「ありがと！」

ぎゅっとイアンにハグすると、俺も俺もと寄って来て皆にした。

感謝してもし足りない。

おとうさんを手に入れて、おにいちゃん達を手に入れて、恋人を手に入れて、自分の部屋も手に入れた。

部屋に独りでも、寂しくなんかないよ。

父上や爺ちゃん婆ちゃんは元気かな。少しでも、笑えてたらいいんだけど。

「よかったね、トモ」

弟の目も、少し赤くなっている。

3人組とパイクさんは、悪戯大成功の時より嬉しそうに笑い合っている。

笑顔が絶えない家って、理想的じゃない？

63話・おかえり、こどもたち（後書き）

今年ラスト投稿でございます。

読んで下さった皆さん、ありがとうございました。

来年も、トモとリョータの行き当たりばったりな異世界生活をよろしくお願いいたします。

よいお年を。

６４話・休みの日はなにしよう（前書き）

ボッシュの独り言です

64話・休みの日はなにしよう

砦に戻ったがすぐには復帰させてもらえず、医者が許可するまで休暇ということになった。
休まされても、やることがないんだが。
取り敢えず、留守にした間埃のたまった部屋を掃除してみたが、半日もかからなかった。

何となく窓を開けて雪景色を眺めていると、ロボを伴ってどこかへ行くリョータの姿が見えた。

暇つぶしにいいかもしれない。

外套を羽織って外に出ると思いの外空気が冷たく乾いていて、思わず咳が出る。
体に変に力が入ると傷が痛み、呻き声が出てしまい、辺りを見回した。

よし、誰も居ない。
トモかパイクにでも聞かれていたら、大騒ぎされるところだった。

脛の半ばまで積もった雪を掻き分け出来た道を歩いて行くと、しゃがんで雪を捏ねているリョータを見つけた。

「……何をやってるんだ？冷たくないか？」

暫らく後ろから見ていても意味が解らなかったので声を掛けると、やたら大袈裟に驚いて飛び退いた。
しかし、リョータが跳ねた先は積み上げられた雪。
後向きに、面白い具合にめり込んだ。

「うわっ！もぅ、何なんだよ！？」

起きようとしても動くたびに深く埋もれていき、それにつれて不機嫌さを増す。
離れた雪の深い場所で遊んでいたロボが慌てて戻って来たが、おろおろとリョータの周りを行ったり来たりするばかりで、どうしようもない。仕舞いにはこちらを見上げて哀れっぽく鼻を鳴らし始めた。

リョータに手を貸して起こしてやると、憤然として体を叩き、細かい雪を払い除ける。

「うあ、背中に入った～」

悲鳴をあげて悶えるのが、リョータには珍しく子供っぽい仕草で面白い。

「ここの新雪ってさらさらですよねぇ。折角積もったのに雪ダルマ

が作れないなんて」

ユキダルマとは何だろう？

「リョータ、何が作れないって言った？」

俺が問い掛けると、リョータは目を丸くした。
無言だったがその表情からは、『信じられない』『この人は何を言ってるのだろう』というような事を考えているのが読み取れた。

「やらないんですか？こんなに雪が降るのに？信じられない！」

あ、言ったな。
気を遣った発言をするリョータには珍しい。

その後はリョータによるユキダルマの講義が行われ、作ってみることになった。

流石に、寒いんだが。

細かい雪はリョータの説明通りに丸めようが転がそうが、手で包める以上の大きさにはならなかった。

話し合った結果、水を少しだけ混ぜるといい具合に固まり、繰り返すと次第に大きな雪玉が出来上がっていった。

「うーん、今回は2段でいくしかないなぁ」

リョータによれば、彼が子供の頃住んでいた地域では雪玉2個、ここに来る寸前まで住んでいた地域では3個重ねて作るという。

今も子供だろう、と思わず言ってしまったが、黙殺された。

時間を忘れて作り続けた結果、その雪ダルマはマーシャルくらいの大きさにまで成長した。

ロボがどこからかくわえて運んできた枝や丸い石などを使って飾り付けすると、人の顔に見えてくる。

「これは人なのか？」

「うー、説明は難しいんですが、簡単に言うと、手足を簡略化してある人形でダルマというのがあって、これは雪で作ったダルマってわけですよ…」

どこか言いにくそうに、首を傾げながら説明してくれてたので、頷いておいた。

奇妙な達成感を覚えながら雪だるまを見ていると、後ろから誰かが歩いてくる音がした。

「何やってるの？」
「これは何ですか？」

連れ立ってやって来たのは珍しい組み合わせで、トモとケラーだった。

どこか女性的な美形のケラーは、宮廷で宰相配下の書記官として働き始めたものの、どこかの貴族の奥方に見初められ、逃げ回った挙げ句に自らこの辺境の砦へやって来たらしい。

トモと並んでいると、兄妹のように似ている。
顔も、どこか他人を寄せ付けない雰囲気も。

面白くなくて、トモを抱き寄せようとして手を伸ばすと、少女は奇声を発して飛び上がった。

「何この手っ、つめたっ！素手で雪だるま？！」

一瞬触れたトモの手を、これ以上冷やさないようにと慌てて離れる。
言われてみれば、指先が、というより手が全体的に鈍く痛むような気がする。

「血行が阻害されているようだな」

ケラーが、俺の手とリョータの手を交互に見ながら言った。

「夢中になってた」

手のひらを擦り合わせながらリョータが呟き、身を震わせる。

「食堂行って、お茶にしよう。パイクさんの家族が来て、おいしいお茶とかお菓子を持って来てくれたんだよ」

さっき放した手は、今度は向こうから伸ばされ、俺の冷えきった指先を包む。ゆっくりと撫で、何度も優しく揉み解される。

優しい手つきとは逆に、トモの顔には呆れて、怒っているような表情が浮かんでいる。初めて会った頃に比べて、とても表情が豊かになった。

ずっと手を握っていてほしかったが、このままではトモの体が冷えてしまう。

同じように冷えたはずのリョータは、ロボの毛に手を突っ込んで暖をとっているが。

ケラーの珍しく笑みを含んだ視線も気になってきたので、食堂へ移

動することにする。

たまには、こんな日もいいもんだ。

６４話・休みの日はなにしよう（後書き）

久々のほのぼの～

６５話・思えば遠くへ来たもんだ（前書き）

姉　ボッシュ　弟視点です

65話・思えば遠くへ来たもんだ

暖められた部屋に、ちょっと上等な丸いテーブルと椅子。床には全面ふかふか絨毯。
テーブルは輪切りの大木で出来ていて、表面はツヤツヤで、支える部分はツタがからまったような浮き彫りがされている。椅子には柔らかい布が貼られていて、ちょっとクッションぽい弾力もある。

この部屋は、砦の中の貴賓室。初めて入ったけど、隊長室よりかなり豪華。ラーソンパパが質素すぎるのかも？

私と弟は、テーブルを挟んでにっこりと微笑むオジサマと向かい合ってる。

「さぁ、まだあるよ。こっちは西から来た商人から買ったお菓子。木の実を蜜で固めてるんだって」

あ～すんごい美味しい。甘いけど。マカダミアナッツとアーモンドをさらっとした黒蜜で固めたみたい。
日本で似たようなのを見たことがあるなぁ……。

「トモ、ぼんやりしてどうしたの？無理に食べなくていいんだからね？」

オジサマの横に立っていたパイクさんが、心配そうに言った。
いけないいけない。
最近、ちょっと変だ。

「すいません。向こうの世界にも、似たようなお菓子がありましたので」

ぼんやりしてたのを皆にじっと見られてた！
恥ずかしさを誤魔化すために私が言うと、オジサマ――パイクさんのお父さん、つまりここの領主様は目を輝かせてメモをとる。

「君達の世界とは多くの共通点があるのだねぇ！」

ものすごく嬉しそう。
漫画なら、鼻から鼻息が出てるのを描かれるね。

色々教えて上げたいけど、弟と違ってあんまり勉強好きじゃないし、弟にしたって深く狭い知識なので、簡単な事を知らない。

だから、食べ物とか植物とか、当たり障りのない話をしている。
それでも喜んでもらえたんで良かったけど。

改めて考えると、なんかこう……。

「トモ、もしかしてホームシック？」

お茶会が終わって部屋に戻る途中、４階の窓からは外が遠くまで見えた。

自分の部屋からは塀のせいで見えない、あの森まで。

だから、弟に言われてちょっとびっくりした。

やっぱホームシックなのかなぁ？今頃。

もう半年以上なのに。

「ボッシュさんは訓練場に行ってるらしいから、遊びに行けば？」

にこっとして、そんな事を言う弟。自分は大丈夫なのか？

あんたはどうなの、て言おうとして、やめた。

不毛すぎるから。

気が抜けたから、今だけだこんなのは。

弟がせっかく教えてくれたから、ボッシュさんに会いに行く事にした。

中に入らなくても聞こえてくる、気合いの入った掛け声、木剣の打ち込みの音。立て付けの悪い窓や扉が震えてる。

はっきり言って怖いけど、ドキドキもする。

いつもは騎士らしさのかけらもない人達が、訓練の時は別人だから。

やっぱり邪魔すると悪いから、音を立てないように扉を開けて、壁際を通って近くに寄ってみた。

ちょうど、セオと知らない人が打ち合っていて、傍には肩に剣を担いで立っているボッシュさんがいた。周りをぐるっと１０人くらいが取り囲んでいる。

多分指導してるんだと思うけど、怪我して休暇中の人が何やってんだ？

セオが気合いと同時に踏み込んだけど、相手は下から剣を跳ね上げて、がら空きになった脇腹を打った。

めっちゃ痛そう。骨大丈夫か、セオお兄ちゃん。

「セオ、癖が直らないな。右肩が上がってる」

ボッシュさんが、セオの肩を突きながら言っている。いじめっこみたいだよ…。

「う～、よく解んないっす自分では」

お腹を擦りながら首を傾げてる、セオは意外と丈夫みたい。

ぼーっと見てると、次々人が入れ替わっていく。的確に、厳しく指導するボッシュさんはいつもと違う。

男は仕事中は変わるってやつだね。

うんうん、かっこいいよボッシュさん、気付いてくれないのは寂しいけど。

何だか疎外感を感じてきたので、気付かれないままそっと出ることにした。

○　○　○　○

今日も、する事がない。

何もしないと体が鈍るので訓練場に行くと、朝番だった奴がそのまま来ていた。さっさと休めばいいものを若い奴は無茶をする。

「ん、傷はどうだ」

「もうほとんどいいんだがな」

木剣を振っていた後ろ姿に近付くと、碌に振り返りもせずに声を掛けてくる。

喋り始めに一音挟む癖のあるこの男、ウェインは静かな男だ。背は俺と同じくらいで、短い赤茶色の毛に薄青の目という派手な外見ながら、女に騒がれようが喧嘩に巻き込まれようが動じない。必要な事しか喋らないので本人については名前しか知らない。

「指導お願いします！」

珍しく1人のセオが声を掛けてきた。若い連中の中ではクルトに次いで腕が立つが、構えに癖があるのと基本に忠実すぎるところがあって、今一歩踏み出せないでいる。

経験を積めば解消される問題ではあるが、普段の様子と大違いなのが不思議だ。

「ウェイン、セオの相手を頼む」

声を掛けると無言で頷き、2人は対峙する。
マイヤーがやる方がためになるんだが、何かと理由を付けて指導を逃げる。まぁ奴が来ると順番待ちの列が出来るから、気持ちは解らなくもない……。

「ボッシュ！そこでお前の姫さんにあったぞ？」

場内に入るなり、レオがそう言って出入口を示した。

トモが居たのか？

「俺の雄姿を見て貰い損ねたな。ウェイン、俺とやろうぜ」

「ずるいですよ！」

「私とやりましょう」

何やかやと煩く順番を争い出したので、この場は放っておいて、トモを探しに出ることにする。

トモはどこだろうか？
今日はガルニエ卿と会談した筈だ。終わってから来てくれたんだろうか？

歩く道には、雪ダルマとやらが増えていた。
体力の有り余った若い連中が、大人ほどの大きさのものを作り上げている。

足腰の鍛練にもいいかもしれないな。

トモお気に入りの切り株が雪に埋もれて姿を消している今、一体どこにいるのだろうか？

砦に戻ってから、ぼんやりしている事が多い。前からその兆候はあったが、聞いてみれば食堂の献立だのジルの相手だの、他愛のない内容だった。

しかし、最近は。
勝手に自分が不安になっているのだと、自覚はある。だが、いつか消えてしまうのではないかと、考えずにいられない。

広い敷地の中、トモが立ち寄るのは限られた区域だ。リョータと違って、厩舎や工房には行かない。

食堂などを覗いた後、ようやく彼女を見かけた者に出会った。砦に戻り、一番『森』に近い物見に出る。

４階から出る物見台は、遮るものが無いので寒風がかなりの強さで襲ってきた。

トモは、そんな中で『森』を眺めていた。

「トモ？」

恐る恐る声を掛けると、驚いて振り返り、風に煽られてよろけた。慌てて近寄り支えると、目を瞬いて何も言わない。

「トモ、体に悪いからこっちにおいで」

「訓練してたのに、いつの間に来たの？」

腕をとると抵抗はしなかったが、いささかずれた答えが帰って来た。何となく不安だったので、その手を放さずに、取り敢えず近い方の自分の部屋へ連れて帰った。

冷たくなった外套の上から毛布で包み、両手を擦って暖める。

「この前と逆だね」

何でも無かったように言うので、ため息が漏れた。

「どうしてあんな所に？」

余裕が無い自分を歯痒く思いながら、問い掛けずにはいられなかった。

「……ちょっと、考えてただけ。思い出してた？来てすぐはそんな暇なかったんだけど。ちょっと、今頃」

ぽつぽつと言う言葉に、更に不安が掻き立てられる。

毛布ごと、強く抱き寄せ、トモの耳に口を近付ける。

「頼むから、居なくならないでくれ。ずっとここに、俺の傍に居てくれ」

心から欲しいと思ったのは生まれて初めてなんだ。

涙を浮かべた透き通る飴色の目を見ながら、小声で付け足した。

○　○　○　○

何だか風邪っぽいです。
ロボが運動不足にならないように、外で遊ばせていたんですけど。
雪だるまを知らないボッシュさんに驚いて、ムキになって実演してしまって。
ソリや雪合戦はやるらしいですけど。

ボッシュさんと並んで、塩とハーブ入りの手湯?をする羽目になりました。お陰で霜焼けにならないでよかったです。

今朝はパイクさんと、父親のアルバン・ガルニエさんとの面談がありました。
各地のお土産――主に菓子類を持って来たアルバンさんは、いかにもパイクさんの親、という感じの陽気で優しく、知的好奇心に溢れた人でした。
レヴァイン家の人に舐められてたのが納得。

僕達が話す地球の生活に、子供のように喜んでくれました。
まぁ、あんまり役に立たないような事ばっかりでしたけど。

姉は帰って来てからホッとして気が抜けてしまったのか、ホームシックに取りつかれてしまったみたいで、ちょっと心配です。
アルバンさん達と話している時も、ちょっとやばいなぁとは思ったんですが。

気分転換にボッシュさん達の訓練を見に行く事を勧めたんですが、どうでしょうか。

僕は続いてラーソン隊長に呼ばれているのです。

「リョータです、失礼します」

今日の当番の内騎士さんはすらっとした女性でした。ちょっと性格がきつそうです。一応挨拶をしてから、入りました。

「そこに座りなさい」

相変わらず前置き無しで、いきなり椅子を勧められました。
僕が机を挟んで向かいに座ると、少し頷いてから、机の上に置いてあった布包みを手に取ります。
シルクのハンカチみたいなそれをごっつい指でそっと開くと、中に

は指輪が。

あ。

何となく予想がついたので隊長の顔を見ると、目が合って、また頷きました。

「今は、お前達の義父として話すのだが。ボッシュとトモの事だ。フォザーギル家からは正式に、婚姻の申し込みがされている。受けるのならば、この指輪を渡すようになる。本来ならば家長が渡すのだが、今回はお前が代行するのが相応しいように思う」

あ～やっぱり。婚約指輪でした。こっちも指輪するんだ。綺麗な銀色で、表面にうねうねした溝みたいな模様が彫っています。

「僕達の世界も、婚姻には指輪を交換するんですよ。左手の薬指にするんです」

「そうか。ではトモにも受け入れ易いな。女にはなぜか決まった石の入った指輪なんだが、指は決まっていないな。男には指輪でなくてもいいんだが…輪になっているものなら」

へぇ、それはちょっと面白いです。

この世界の正式な結婚は、男から指輪を贈って申し込み、女性は返して断っても構わない、が、受け入れたら死別以外に離婚は認められないとか。

指輪に使う石は決まっていて、『約定の石』と呼ばれてて、見た感

じイエローダイヤモンドみたい…！心変わりすると色が濁るという言い伝えがあるそうです。怖っ。
高価なので平民や外国人はある程度自由にやってるらしいですけど。準貴族として扱われる三代以上続く騎士の家系や裕福な家は拘るそうです。

「マルキン先生はとても乗り気だったからな」

珍しく、冗談めかした口調です。こんな風に雑談するのも初めてだし。
何だか醸し出す雰囲気も、いつもより柔らかく感じられました。

姉とボッシュさんの事はお城に行った時に言われたから、覚悟していました。

あとは、姉の気持ちだけです。

受け入れるなら、ボッシュさんが持って来た指輪はお義父さんから姉へ、僕がこの指輪をボッシュさんへ。

僕が思うに姉は貰う指輪は直接の方がいいと言うに違いないですが、郷に入っては郷に従え。

せめてこれは、自分でボッシュさんに渡して返事をするようにさせてあげようと思います。

この世界、結婚式ってやるんでしょうか？
ちょっとドキドキします。

65話・思えば遠くへ来たもんだ（後書き）

気付けば前の更新からずいぶん経ってしまいました。

寒くて指が動かないのですよ。
お待たせした割に…なんっすが。

申し訳ありませんが、しばらく更新はこんな感じかと思います。
気長に、お待ち下さいませ

66話・実は、やっぱり好きなんです（前書き）

姉　ボッシュ　弟

66話・実は、やっぱり好きなんです

ここに来た最初のうちは、現実じゃないと思った。夢を見てるか、実は事故かなんかで病院で意識不明とかね。いや、これは流石に弟には言わなかったけど。

映画化された児童文学では異世界に行った兄弟は大活躍するらしいけど、私達はする事がなかった。

そもそも、何で異世界トリップしたんだか今だに解らないしね！

この世界、がどうも変らしい。

色んな世界と通じてる？森があって、そこからたまに異世界生物や品物が出てくるらしい——調査しろよって思うけど、こっちからも行っちゃうので危なくて立入禁止。

近くに砦を建てて、出入りを毎日見張っていたら私達が出て来た、と。

初めから受け入れ態勢バッチリの場所で拾われた私達はすごく運がいいと思う。しかも、相手はお人好しのイケメンだったし。

そう言えば初めはパイクさんの方が印象が強かった。この国の事情なんて知らなかったから、あからさまに怪しい私達を優しく保護してくれたこの人は、お人好し過ぎるんじゃない？大丈夫？なんて失

礼な事を思っていた。
逆に、一緒にいたボッシュさんは興味なさそうだったし、ちょっと意地悪そうに見えたよ。うん、まぁ今でも解りにくい。
取り敢えず、最初に会ったこの二人とはどうにかして仲良くなっておこうと、弟と話し合って、何かと相談したりお手伝いしたり、兎に角頑張った。主に弟が。

私はひねくれているから、素直に他人の好意に甘えるのが苦手だ。
優しくされても、捨てられたらどうしようって思う。手に入らないなら初めから望まなければいい。

ずっと、そう思っていた。

だから、だからきっと、微妙な距離感のあるボッシュさんはとても安心できた。

なんて言うか、斜め後ろから見守られている感じ？
普段は気付かないけど、怖くて一歩下がったらそこにいる、そんな安心感。

嫌いなヤツならストーカーだけどさ。

好きだって自覚すると、ちょっと世界が広がった。
いや、元々広くてそれを見てなかっただけなんだろうけど！

そうすると、今度は逆に苦しくて、辛くなってきた。

結局、失うのが怖いんだ。

自分の意志でここに来た訳じゃないから、また、って事もあるかもしれない。

珍しいから相手をしてくれてただけで、やっぱり地元の人がいいと思うかもしれない。

「お前なぁ……俺の言った事、聞いてなかったのか」

べしょべしょ泣きながら、途切れ途切れに頭に浮かんだどうしようもない色々を訴えると、ボッシュさんはため息をついた。

気付いたら、ベッドに座ったボッシュさんの膝の間に抱え込まれてた。

前にもこんな事があったような？

こんな風に子供っぽいのはうざくないかな。

あ、子供が泣いてたら大抵の人は優しくするよな。これはやっぱり同情？この際それでもいいか？

「……トモ？」

ツン、と髪を引っ張られて顔をあげると、怒った様な顔と真正面からぶつかる。

私はひどい顔に違いない。見ないで欲しい。

「逃げるな、もう。逃がさない。お前が帰りたいと言っても帰さない」

耳に響く、低い声以外は何も聞こえなくなった。

「お前は俺のもので、俺はお前のものだ。誰にも譲らない。リョータだろうが、王だろうが」

「あの、それっ、て」

しゃっくりで上手く喋れません！

目を細めて、首を少し傾けてこっちを見て。

「愛してる」

何か返事をしなきゃいけないのにしゃっくりは止まらないし何言っていいか解らないし頭に血が昇ってクラクラしてきたしまた涙がで

てきてどうしようありがとう？って違うよね鼻血出そうだ変態っぽいよね嬉しいっていうのは返事と違うかも？

「ああぁのっ、ボッシュ、さんっ、結婚、してくださいっ」

テンパった。

わたわたしながら、どう言おうか考える。

そんな私をボッシュさんは黙って見つめて、優しく背中を撫でてくれた。

お陰で落ち着いたけど、何で無言なんでしょ？

「訂正はきかないぞ」

誤魔化そうかと思い始めた時、ボッシュさんがゆっくり口を開いた。

？　？　？　？

小さな子供が胸の内をさらけ出すように、トモは泣きながら色々な事を語った。

表面上は落ち着いて見えても、溜め込んでいた不安は膨れ上がっていたらしい。

いかに辛い過去であろうと家族や故郷は忘れ得るものではない。解ってはいたが、自分の傍に居て欲しいと思うばかりで気付かない振りをしていた。

ここで幸せになり、帰りたいと思わないようにしたかった。

ここまで他人に執着を覚えたことはない。

『自分にとっての唯一つ』

長くかかってやっと出会えたんだ。トモには悪いが、手放す気は毛頭ない。

「愛している」

心からの、ただそれだけを伝えた。

繊細で、怖がりな癖に大胆で強い。

細い野花が強風に耐えるような、そんな印象の少女。

いつからか自覚がない程、自然と目が離せなくなっていた。

顔を真っ赤にして、涙を拭いもせずに腕の中で慌てふためくトモ。
呼吸が怪しくなってきたので背中を撫でていると、漸く落ち着いてきた。

ゆっくりと深呼吸をして、真面目くさった顔でこちらを見上げている。涙を湛えた上目使いに心を揺さぶられるが、ここは耐えて話を聞かなくては。
聞き違いでなければ、トモは俺との結婚を望んでくれているようだ。
混乱の余りに口をついたようだが。
宣言したらそれはもう撤回できないぞ？

「ほんとはね、お父さんの夢みて、すごく会いたくなったの。オルガさん達の事もあったし。でもね、帰りたくないって思ったんだ。思っちゃったんだ。だからさっき反省してたの」

やや要領を得ない言葉に、問おうと口を開くと冷たい手のひらで塞がれた。

「本当に、私も、ボッシュさん好きなの。ずっと一緒にいたいの。でも、正体不明だし、色気無いし、後悔しない？私でいいの？弟つきで面倒な子だよ？」

なんだ、そんなことか。今だってどれだけ我慢していることか。

口にあてられていた、震える手をとって改めて口づけするとトモの肩がビクリと揺れた。涙を浮かべた目を見つめたまま、もう片方の手もとって同じく口づけをする。

「あ、あの、聞いてる？」

「勿論。聞き逃す訳がないだろう？お前からこんな情熱的な言葉を聞けるとは。悪いが帰す気は毛頭無い。さっきも言ったが、俺が欲しいのはお前だけだ。そろそろ覚悟してもらおう」

腕の中で震えていたトモは猫のような呻き声をだしてこちらの胸に顔を埋めてきた。

「妻として、ずっと傍に居てくれ。傍らでただ幸せで居て欲しい」

そっと両手で顔を包み、許しを請う。

トモはまた涙を溢したが、満面の笑みで頷いた。

○　○　？　○

義父から託された指輪を持って、しばし悩みました。様子がおかしかったから姉を焚き付けたものの、そのまま勢いに任せて……というのは十分に考えられますから、やっぱり邪魔してやりたいのですが。
たまに出る肉食ボッシュさん怖いんですよね。

「あ、リョータ！ちょっと手伝ってくれ」

悩みながら砦内を歩いていると、内騎士のレオさんに声をかけられました。南の出身だからか、他人より一枚多く着込んでいて少しカッコ悪いですね。言いませんけど。

「どうしたんですか」

「迷子かなんからしいぜ。暇潰しに一緒に探そうぜ」

どうして、砦に迷子が発生するんでしょうね？
職員の家族なら慣れてるでしょうから、近所の子供か収容した旅人というところでしょうか？
まぁレオさんが乗り気ということは女性ですね。九割がた。

「そう言えば、あいつらいつ結婚するんだ?」

唐突な台詞に吹きそうになりましたよ。
横目で見ると、レオさんは興味津々といった顔でこっちを見てます。
すっごい見てる。

「都の実家に連れて帰って顔見せ済んだろ?実はもう結婚成立したのか」

あれ、情報が錯綜してる?結婚の挨拶に行ったと思われてませんか?
まぁ今思えば間違ってはいない気がしますが。
マルキンさん強引だったしなぁ。

「お前も寂しくなるよな。いつでも相談にのるぜぇ」

ばし、と背中を叩かれて雪道で滑りそうになりましたが。
いつもは男には冷たい、というか女の人しか相手にしないレオさんが気をつかってくれるのが新鮮です。

「さっさと美人をさがしに行こうぜ」

結局それですか。

でも迷子になる美人って、いくつなんでしょうかね？

66話・実は、やっぱり好きなんです（後書き）

お久しぶりの投稿です。

だらだら書いていたものの気に入らず、結局こんな感じに落ち着きました。

67話・将来が楽しみだ（前書き）

ずっと弟

67話・将来が楽しみだ

寒いです。ああ寒い。

迷子の推定美人さんを探して、僕とレオさんは砦の敷地内を歩き回ってます。

どうもレオさんは飽きっぽいのか、こっちにいなければあっち、と行ったり来たりです。

普段は用の無い所には、怒られないかもしれないけどなるべく近付かないようにしていたので、探検してるみたいで楽しいです。人を探している事を忘れてしまいそうなくらい。

「っかー、さみぃなぁ。固まってきたぜ」

顔をバシバシ叩きながらレオさんが叫んで、冷えた顔には刺激が強すぎたみたいで顔を押さえてしゃがんでしまいました。

「大丈夫ですか？一旦戻って暖まりませんか」

笑いそうになるのを我慢しながら声をかけます。

レオさんはボッシュさんとタメはるくらい強いらしいけど、何とい

うか、いたずら三兄弟レベルというか、子供っぽい所があります。強くて陽気で格好よくて、少年ぽさが残っているのが素敵、というのが女性陣からの評価です。
ケラーさんやボッシュさんは隙の無さが逆にポイントを下げてるらしいですが、玄人（何の？）にもてるそうです。

「あれあれ、見てみろ。あそこ動いてるよな」

しゃがんだままのレオさんが指差す方向を見ると、単なる雪道にしか見えませんでした。
首を傾げる僕を見て立ち上がると、レオさんはずんずん道から外れて雪の深い方へ進んで行き、しばらくしてひっくり返ったような声をあげました。

慌てて僕もレオさんが開いた道を辿って追い付くと、雪に埋もれていた何かを引っ張り出した所でした。

「レオさん…まさかとは思いますが、迷子の美人さんですか？この幼気な、鼻水垂らした少女が？」

全年齢対象ですか？そうですか。

「お？おぅ。あ、いや何その目。リョータよ、変な勘違いをしてないか？」

こんなに小さいとは思わなかった、とぶつぶつ言ってるのは置いといて、胸辺りまで雪に埋まっていたこの子が心配です。
震えてるし、垂れた涙と鼻水が凍りかけだし。

「ほれ、これ着ときな。すぐ暖かいとこに連れて行ってやるからな？」

おぉ、さすが。
自分も寒いでしょうに、レオさんはにっこり笑って重ね着していた防寒着で女の子をくるみました。

女の子は鼻をすすりながらレオさんと僕の事を交互に眺めて、毛皮に埋もれるようにしています。
意外と冷静？
迷子のわりには泣き喚きもしてないし、ただ寒さに参ってるような。

「そういえば、この子なんでこんな所にいるんでしょうね？何もないのに」

「ん～？迷子だからだろ」

レオさん適当すぎます。ざかざか雪を蹴りながら肩をすくめました。
女の子を抱えてるのに、器用ですね？僕を追い越してさっさと帰ろうとしています。

ここは砦の本棟からも離れていて、あの森があるのと反対側、岩山の斜面と塀が合体している端も端、こんな子供が来て楽しいような場所じゃありません。

「ねぇ、こんな所で何していたの？」

後でいいじゃねぇか、という面倒くさそうに呟く人の肩越しに、ひょこ、と女の子が顔の上半分を覗かせました。

「でっかい、のが、いたから～っクシュ、おとさんよりでっかいの」

くしゃみしながらも、答えてくれましたね！イイ子だなぁ。何言ったかわからなかったですけどね。

「ほらな、さっさと……」

言いながら振り返ったレオさんが、僕を見て、それからその後ろを見て言葉を途切れさせました。
いつもと違う鋭い視線は初めて見る騎士としての顔。
無言のまま僕に向かって女の子を押し付けてきたので慌てて受け止めましたが、不安定な足場のせいで落とさないようにするのがやっとです。

「先、行け。な〜んか、ちょっと」

え、ちょっとってナンデスか？

雪が積もって真っ白な空間を見ていると、どこに視点を合わせたらいいか分からなくて、不安になってしまいます。

女の子がまたくしゃみをして、反動でずり落ちかけたので慌てました。知的好奇心を満たすより先に、人助けを優先するべきでした。

重いですがなんとか落とさずに雪深い場所を抜けて、ちゃんと雪掻きされた道に出ました。

「リョータ、食堂で何か食わせといて。救護班と親連れて行くから」

相変わらず辺りを気にしながらもレオさんは行ってしまいました。

重いんですけど。

女の子に失礼かもしれませんが。

腕がぷるぷるしてきましたが、どうしましょう？

食堂に辿り着いた時には、腕はつる寸前。筋肉痛決定です。だって

女の子を下ろした後も力が入らなくて固まったままでしたから。
こっちに来て、結構鍛えたつもりだったんですけど。

「これ、おいしーねー。でっかいおにいちゃんも食べる？いる？」

女の子は、あつあつのポタージュのような料理を出してもらってご満悦です。
涙と鼻水を拭いて、髪をとかしてもらって漸く人類に見えてきました。

こうして見ると、背中までの赤みがかった金髪、しっかりした眉、くりくりした暗緑色の目で美人の予感はしますね。まぁ見た感じ5歳以下っぽいのでわかりませんが。

しかし、僕の事をでかいと言うのは解せません。
同じテーブルにはもっとごつい騎士達がいて、興味深そうにこちらを見ているのに。彼らの事はどう表現するんでしょう？

「アーニャ！」

僕の子供観察は、食堂に泣きながら駆け込んできた女性によって中断させられました。
きっとこの子の母親。

走ってきた勢いのまま、アーニャちゃんを抱き上げました。
周りが見えない程取り乱して、泣きはらした顔は母娘そっくりです。
アーニャちゃんの将来は美人確定です。

遅れて来た救護担当の女性騎士が手早く診察すると特に怪我もなくて、食堂にほっとした空気がながれました。まぁ、少しシモヤケになりかけらしいですが、命に関わる事ではないでしょう。

「ありがとう、ございました。広くって、中々見つけられなくて」

まだちょっとしゃっくりのような声を出しながらも、お母さんは皆に礼を言うとへばりつくアーニャちゃんを連れて帰りました。

アーニャちゃんの捨て台詞「おにいちゃんもらってあげる」を残して。

夜、疲れてさっさとベッドに入った僕は、ロボを撫でながら、色々忘れていた事を思い出しました。

姉への指輪の話、戻って来なかったレオさんの様子がおかしかった事。

まぁ、人助けができたことだし、欲張るのはいけないですね。

67話・将来が楽しみだ（後書き）

お久しぶりです！

だらだらしすぎですね…

68話・雪のように白い人なんて居ないと思う（前書き）

姉　弟　視点です

68話・雪のように白い人なんて居ないと思う

あれ以来、自分に余裕がでてきたと思う。ただ皆のなま暖かい視線が気になると言うか、恥ずかしい。

食堂の勤務の時、ボッシュさんが声をかけてくれたりちょっと撫でてくれたりすると、それはもう顔から火が出そうなんだけど！

若い騎士なんかはあからさまに冷やかしてくるし。

ううぅ。慣れない。

結婚の誓約？をラーソンパパとケラーさんの前でしなきゃならないのに。

「結婚式は、ないんだ。意外に事務的ですね」

ボッシュさんの実家、フォザーギル家から預かっていたという指輪を持ってきた弟が、あんまり残念そうでもなく言う。
何日か前に渡されてたのに忘れていたらしい。

いい度胸だ弟よ。

その間、ボッシュさんとラーソンパパは物凄く心配したらしいのに。

二人とも見た目からじゃわからなかったけどね？

「普通は、本人とその家の家長が、役人の立ち会いの元誓約書を交わす。今回はうちのアレは来ないがな。隊長がいるから問題ない」

なぜだかボッシュさんは、してやったり、みたいな顔で言った。
こんなどか雪じゃなきゃ、マルキンさんは絶対来ただろうなぁ。なんか、ボッシュさんが嫌がるのを解ってて色々やってるような、そんな気がする。基本的に仲の良い親子なんだよね。
ボッシュさんのお母さんにも会ってみたかったな。

うぅむ。しかし、結婚。まさか十代で結婚するとは思わなかった。
破綻した結婚生活を間近で見てたから、無理かもと思ってたし、こんな世界だし。
父上やジジババには報告できないけど、弟が認めてくれてるのが救いかな？

「じゃあ、また後でな」

任務に復帰したボッシュさんは、夜の巡回に出掛けていく。本人よりもパイクさんの方が喜んでるのが相変わらずで笑えた。
でも、最近の噂で、砦に怪しい人物が出没しているらしくて巡回の人数や回数が少し増えてるみたいだ。

「トモは食堂行くでしょ。ロボと送ってくよ」

せいぜい五分くらいの距離なんだけど。拒否したらお小言をくらいそうだから好きにさせよう。

そうして部屋を出て、ざくざく雪を踏みながら食堂へ向かう途中。女の人が中間地点で仁王立ちしていた。

暗いから微妙だけど、明るめの巻き毛をバンダナっぽいのでまとめて、この辺りの冬の定番、ワンピースとエプロンドレスの重ね着にショールを羽織っている。

騎士ではないし、文官にもこんな人はいなかった。

割りと美人だから会ったら覚えてると思うんだけど、まぁ私だからな。

「あなたよね、トモって」

『トミョ』って聞こえたんですけど。発音しづらいのは解るけど、険しい顔とのギャップが笑える。横に居る弟はツボに入ったらしくて、吹き出すのを我慢して小刻みに震えてる。

「はぁ、ハジメマシテ？私がトモですけど、何の用ですか」

多分知らない人だから、十分な距離をとった。私だって学習したんだ。

「あなた……あなたみたいな、余所者の小便臭い小娘が！あの人に相応しいとでも思ってるの！？お優しいから同情されているのよ、勘違いしないことね！」

おぉぉぉ。

早口で聞き取りにくかったけど、悪口を言われたのは解った。これはあれだな、いじめ？ちょっと違うか。でも、よくあるパターンだ。

きっとこの人はボッシュさんが好きなんだ。この流れでそれ以外はないだろう。

オルガは例外だったとしても、パイクさん達若い騎士以外にモテないから安心してたんですけど。

隠れファンがいたんだろうか？

元カノ、とか？

○　○　○　○

ボッシュさんの女性関係、綿密な聞き取り調査の結果障害はないハズだったんですが。

寒い中わざわざ待ち伏せする程気合いの入ったライバルが出現するとは予想外です。

良い家柄の出身にしては婚約者もいなかったし、本気でお付き合いしたような相手はパイクさんやマイヤーさんも知らなかったので、この女の人はまぁ、その他大勢の中の一人、水商売の人、ストーカー……何にせよ失礼な想像しか浮かびませんが。

喧嘩売ってきたのは向こうが先ですからね。

姉はちょっと驚いた顔になって、そのまま悩み始めたようです。

「どこのどなたか存じませんが、うちの姉を侮辱するのはやめてください。それと、ボッシュ・フォザーギルとは正式に、是非にと望まれて結婚するんです。勿論僕達の養父カール・ラーソンとあちらの家長とも合意の上で。異議を唱えるなら、正式に訴え出てはいか

がですか？――トモ、仕事に遅れるよ？行こう」

「うぇ？あ、うん。それじゃあ」

姉が呑気にぴょこ、と会釈するのを引っ張って、暖かい食堂へと急ぎます。こんな所で立ち話してたら、軽く凍傷になる気がします。まったく。

女の人は、僕達が通るのを無言で見詰め、何も言い返してはきませんでした。ちょっと情報を集めるべきですかね。ジルさん達なら何か知ってるかなぁ？

せっかく姉の機嫌が上向きになってきてたのに、面倒ですねぇ、あの野郎。

ソープオペラ的展開はごめんですから、早めに潰しておかなきゃですね。

68話・雪のように白い人なんて居ないと思う（後書き）

ああああ何かすいませんごめんなさい！

更新のない間も見てくれていた皆様ありがとうございます！

少しずつですが進めてまいります。

69話・好物は独り占めしたいのが人の子ってもんでしょう（前書き）

パイク　姉　視点です

69話・好物は独り占めしたいのが人の子ってもんでしょう

久しぶりに、ほんっとうに久しぶりにボッシュ先輩と巡回！

怪我も心配だったけど、今は何よりトモとのことを聞き出さないとね。食事時や休憩時間の話題はその事ばかりで、分かってないのは本人達くらい。

「もう、誓約は済ませたんですか？」

遠回しに聞いたらはぐらかされそうなので、疑問をそのままぶつけてみる。毎回失敗してるからね。

何日か前、トモが部屋に戻らなかったという噂があって、あの娘を狙ってた若い奴等からはそれも調べて来いって言われたけど。

無理だよ。無理無理。

「まだだが？」

片方の眉をあげて答える先輩からは、夜の冷たい空気より更に凍てつく何か、または夜の闇より黒い何かが漂っているような気がするような気がする。

気のせいだよね？

好きな娘を手に入れられたんだから、今は何より幸せなはず。

僕と違ってね！

「あ、あの、広い部屋へはその後で移るんですか？家族用の宿舎は余ってるからいつでも大丈夫ですよ」

姉弟の部屋を分けてから、トモは部屋に戻る時に寂しそうだったから、喜ぶだろうな。家族でも例え小さな鳥でも、空っぽの部屋に帰るのとは大違い。ましてや大好きな人だったら。

考えると自然と胸が暖かくなってくる。

「トモの様子が変じゃなかったか？」

幸せな様子を想像しながら無言で進んでいると、ポツリと先輩が呟いた。

トモの様子はどうだったろう？

いつも通りに食堂で地道に働いて、リョータやイアン達とじゃれて——いつも通り過ぎるのが気になる、と言えば気になる。

強いて言えばにこやかに笑顔で接客。にこやかに？

嬉しいから笑顔が増えたかと思ったけど、あの娘だったらこういう時はあからさまに喜びを顔には出さないだろうなぁ。

「最近、やたら笑ってますね」

「あれは寧ろ機嫌が悪いような気がしてな……」

あ、ため息ついた。最近減ってたのに。

でも、どうしてだろう？

僕にとって食堂ではジルさんが優先で、二人を観察する輪から若干離れているから細かい様子まではわからない。

何となく考え込んでいたけど、先輩は肩をすくめてこの話題を打ち切った。

自分で何とかしなきゃな、と言って。

さすが！

今一歩踏み出せないでいる僕とは大違いだ。

だってジルさんに完全にふられたら、なんかもうこの砦に居られない気がする。それこそ『森』に突入しそうなくらいの事はやりそう

だ、我ながら。

「そう言えば、先日レオが進言して警戒を強化させてるようだが、何か聞いてるか」

「雪の間は避難してきたりで、かなり増えてますからね。新顔さんも多くて大変なんじゃないですか」

うちの領は大きな町が無くて、住民の家と家がすごく離れている。農民だけじゃなく猟師や森番は、雪が積もってしまうと行き来し難くなるので、家族を砦に避難させる事が多い。

人が増えるとそこは商売の機会ということで、小規模な隊商も長く滞在するし、少し離れた小さな町からも色々遠征してくる——雑貨屋やら、まぁ、色気ふりまく女性やら。

興味ないなんて事はないしお世話になった事もあるけど。

あからさま過ぎるのもね、なんと言うか女性陣の視線が気になるし、

何より本命の女性、ジルさんには、知られたくない。

恋人じゃなくても、不潔、とか言う人いるしなぁ。女の人って、難しい。

「レオが気にするくらいだからな、おかしなのが混じってるかもな」

対人関係におおらかなレオさんは、大抵の人と仲良くなってしまう。女性は特にね。

そういう事を鑑みて、思い付くのは間諜が入り込んでる、という事態。

他国で育った者は、どんなに溶け込もうとしてもちょっとした点で違和感を醸し出す。

レオさんは野性の勘で捉えたのかもしれない。

でも、この国の中でも、うちみたいな貧乏な領地に来たってしょうがないと思うのだけれど。

考えすぎかな？

○　○　○　○

うーん。
最近、悩んでいる。
ある意味贅沢な悩みなんだけど。

わざわざ嫌みを言いにお姉さんが来てから、視界にちらちら入ってきて、すごく気になる。

どうも近くの町から避難してきた中の一人らしいんだけど。
雪の間ずっと居るのかと思うと、胃が痛いよ。

ボッシュさんに確かめた訳じゃないけど、元カノなのかな、食堂で働いてる間は勤務態度をチェックされてるような気になるし、部屋は当然女性用の区画に振り分けられてるから廊下でばったり、もある。

「はぁ〜、もう殴っちゃおうかな。面倒くさい」

「はぇっ？俺何かした？」

おっと、心の声が駄々漏れだった！

晩御飯をガツガツ食べていたイアンが、口に入れようとした肉をフォークから落としてしまった。

三秒ルールだ、ちゃんと食べてね。

「ごめん、ちょっと苛々してて」

「あぁ、そういや時間が合わないよな、最近。すれ違いは寂しいよな」

隣のセオがわざとらしく腕を組んで頷く。

「お兄さん達に相談したまえよ」

微妙に違う気もするけど、誰かさん関係なのは間違いないか。

「別に、会えなくて寂しいって訳じゃ…ちっちゃい子でもないし」

最近弟にじゃれてる女の子を思い出した。お母さんが回収しようとすると半泣きになる、アーニャちゃん。

一桁の歳の子と同じレベルで見られるのは何だかとっても嫌だぞ！

「心配しなくても、大丈夫だよ」

「……笑顔なのが怖いのはどうしてなのかな」

「おかしいよな、可愛いのに背筋がぞくっとした」

男二人がおでこをくっつけて、ぼそぼそ喋るな。

「今日はもう終わりだろ、先輩が巡回終わるの、部屋で待ってたら？きっと喜ぶよ」

ひそひそ話が終わると、二人はすごい勢いで残りのご飯を詰め込んで、目をキラキラ輝かせながらそう言った。
また、イアンがピッキングするんだね？
喜ぶ前に怒ると思うけど。それかため息。

一応抵抗したけど、でかい男二人には敵いません。

なんてね。

会いたかったから、背中を押してもらって勇気がでたよ。

ちゃんと会って、話さなきゃ。

自分の気持ちを伝えなきゃね。

いくら言っても言い足りないくらい、大好き。

69話・好物は独り占めしたいのが人の子ってもんでしょう（後書き）

なんと申しますか、大変お待たせしたにも関わらず

こんだけかい?!

な進み具合で申し訳ありません。

待っててくださった方、初めましての方、どうもありがとうございます。

70話・ding_dong（前書き）

姉　ボッシュ　姉　で視点かわります

70話・ding-dong

仕事に疲れて帰ってきた旦那さんに、「おかえりなさいアナタ、お風呂にする、ご飯にする、それともワ・タ・シ？」というのを一度やってみたかった、というのはまぁ嘘だけど、お出迎えはしたかった。

難しい本の挿し絵を眺めたり、ストレッチをしたりして待ってたはずなんだけどね？

気づいたら暖かベッドで爆睡してたよ！台無し！

どうして起きたかというととんでもない騒音のせい。

今も続いてる、金属音。ここに来て初めて聞いた鐘の音。教会なんかにあるようなでっかい鐘を、短い間隔で鳴らしていて、もしかして火事？

このまま部屋にいていいんだろうか。

まだ夜は明けてなくて、部屋には私だけ。

何で帰って来ないのかな？何かあったのかな？

何かあったに違いない。

鐘の音の間に、人の声がする。

怒ったような声、走るブーツの音、ガチャガチャ鳴る剣。

とりあえず、ブーツを履き直して部屋の外に出てみよう。廊下は謎の床暖房がないからね。

廊下に出たら、ちょうど近くの部屋から上着を着ながら焦って出てきた外騎士のお兄さんがいた。寝癖がそのままだ。

「なんだよ、寝たばっかなのによ」

ぶつぶつ言いながら頭をがしがしかいて、目があっちゃったよ。

「あっ！あ～？君なんでこんなところに」

正面から聞かれると、ちょっと言いにくいな。

「なにがあったんですか」

寝起きだからかすれた声しか出なくて、びびってるみたいだわ。か弱い女子的。

「あぁこれな――うん、緊急事態、な。危ないから部屋戻った方が――」

「くっそ、誰だよ召集かけやがって！」

お兄さんが説明してるのにかぶせて、近くの部屋からまた別の人が出て来た。
お兄さんと私がそっちを見ると、部屋の中からもう一人出て来た。
出て、来たのは。

「いいじゃない、あなた一人くらい行かなくてもわからないわよ」

白い腕を伸ばして、引き留めるように首にからめて。

「んな事できるか、はぁ、続きはまた今度な」

何だかアレな会話。
私とお兄さんが半眼になって見ていると、あらあら。あんたボッシュさん好きなんじゃなかったっけ？

最近、散々引っ掻き回してくれてる、弟曰く年増のエロ姉さんが、若いワイルド系の騎士さんに絡み付いている。

「なにやってる」

後ろから、地獄の底からやって来た魔王みたいな声がして、この場にいた四人は飛び上がった。
特に、夢中でお別れのふかーいキスをしていた二人は高かった。

隣のお兄さんは目線だけで後ろを確認して、今度は私を見て、ものすごい勢いで私の肩をつかまえて、後ろの魔王様に突き出した。
完全に私を盾にしてるね？

「お疲れさまです！この子が鐘の意味を知らないようだから、部屋に避難するように言っていたところでした！では失礼します！」
息継ぎなかったよ～そしてすごい加速だね！

ぎぎぎ、と後ろを振り返ると、寒さで白くなった顔、雪のついた髪、それからどうやらお怒りらしい黒い目が見えた。
何でかな～？
お酒飲んだ時と同じような反応だ。
とてもじゃないけど、例の台詞は言えないね！

「おか……」

「あっ、これは違うの、私は、この人は」

「うるさい黙れ」

おかえりだけでも、言いたかったんだけど。

本気で怒ってる？

「すんません、すぐ行きます。ほら、お前も出ろよ。あっち送ってくから」

もう一人の騎士さんが、ばつが悪そうに言ってあの女の人も引っ張っていく。

違うんです、とか言い訳しながら連れて行かれるのをボッシュさんは気にも止めない。

それはそれでいいんだけどね、これってつまり、私にマジ切れってこと？

○　○　○　○

見回りから砦に戻ると、やたら焦って走り回る内騎士が目についた。

「何事ですかね」

「内の騎士が一人、見つかりません。文書庫番の奴です」

通りかかった奴が、強張った顔で告げてくる。

持ち場を離れていたとしても、これだけの騒ぎになるとは思えない。
他になにか無いか、問い質そうとした時。

鐘が鳴った。

「死者、一名、召集、ですよね」

特定の間隔で打ち鳴らされる鐘の音を読むパイクに頷き、思わず舌打ちをする。

トモとリョータはこの音の意味がわからない。
恐らく眠っているだろうから、この音で目が覚めたら確かめるため

に外へ出て来るだろう。

正体のみえない殺人者がうろついているというのに！

「パイク、リョータを保護しろ」

返事を待たず、トモの部屋へ向かった。

「ボッシュさん！あの子が部屋にいないんです！」

トモの部屋の近くには、半泣きの書記官補佐がいた。

思わず彼女を睨み付けてしまい、距離をとられた。

「夜は、食堂に居たか」

「え、はっはい、居たと思います」

本格的に泣き出したのをなだめ、部屋に戻って鍵をかけておくよう

に言い聞かせた。
トモはどこへ？

彼女が拐われたあの時の事が思い出され、吐き気すら感じる。

「ボッシュ！トモちゃんはお前の部屋やって」

食堂で誰かに話を聞こうと向かっていると、マイヤーがそちらから出て来た。

「確かか」

というか、なぜお前が知っている。

「イアンがな、言っとったんやけど。戻ってやり。リョータはどうやろ？」

「パイクを向かわせた」

とりあえず、イアンは埋める。どうせいつもの三人だろう。

巡回帰りで砦中を走り回るとは思わなかった。
流石に疲労を感じる。

それも、廊下で呑気に話している彼女を見つけるまでだったが。

○　○　○　○

何も言わないボッシュさんに部屋に入れられたけど。

この騒ぎはどうなってるのかな、とか、さっきのあの人とはどうなってるの、とか。
今日は遅かったね、とか。

何で何も言わないの？

なんか腹立ってきた。
怒られるような事、してないよね？

相変わらず、怖い顔でこっち見てる。

ふん。

「さっきのお兄さんに聞いたけど、緊急事態なんでしょう?召集なら、行かなきゃならないんでしょ?私はいいよ、部屋に戻るから」

「トモ」

「さっきの、元カノ?浮気じゃないか、別れてるんなら……でも、無視はちょっとどうかと思う」

「トモ!」

言いたい事を言う作戦は、魔王様には効かなかった。

余計怒らせたかも?

つかまれた両腕が痛い。

本気で、怖い。

怒った人は、いや。

いやだ。

「トモ、何で……」

目の前が真っ白に変わっていって、ただ見開いた目から涙が溢れているのだけがわかる。

あれだけうるさかった鐘の音が遠くなっていく。

気がつくと私は床にへたりこんでいて、そんな私を抱き締める大好きな手が、背中をゆっくり撫でているのに気付いた。

いつの間に？

「あの、ボッシュさん？」

「悪い、怖がらせた。お前は悪くないのに。ただ心配しすぎた反動で……そんな格好で外に出てるし、呑気に立ち話してるし」

そろそろと顔をあげると、今度は顔を撫でられた。

冷たい手がくすぐったい。

私が思ってたのと、論点がずれてるような気がする。

「あの、女の人は？」

「どの人だ？」

おや？

「あのちょっとカッコいい系の騎士さんと一緒にいたでしょ、あの人最近……」

この機会にはっきりさせようと思ったのに。
思ったならば。

いきなり噛みつかれた、ようなキス。
さっきの二人よりも濃厚なやつを、されちゃったよ。

「ちょ、はな…っ……」

話きけぇぇー！

魔王様は気が済むまで味見をして、私がふにゃんふにゃんのくたくたになったらやっと満足そうに笑って、ベッドに寝かしつけてくれた。

結局、あんなに怒ったのも理由はよくわからなかったけど。

事件が起きて、外に危ない人がいるという事と、私を保護するから召集には行かなくていいって事は何とか教えてくれて、ずっと頭を撫でてくれた。

リョータの方にはパイクさん達が行ってくれてるらしいし、大丈夫かな。

安心したらどんどん瞼が重くなってきて、こんな時に寝ちゃう自分ってどうよ、と突っ込みながら。

二度寝最高。

70話・ding_dong（後書き）

お久しぶりです！
心配とヤキモチで女子をびびらすおっさんの巻、いかがでしたでしょうか？

たいして話がすすんでませんね。

読んでいただいて、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2991n/

迷子なのに行き当たりばったり

2011年11月6日02時08分発行